

トヨタ財団 2012 年度アジア隣人プログラム

中国黄土高原における
草の根環境協力 22 年の歩み



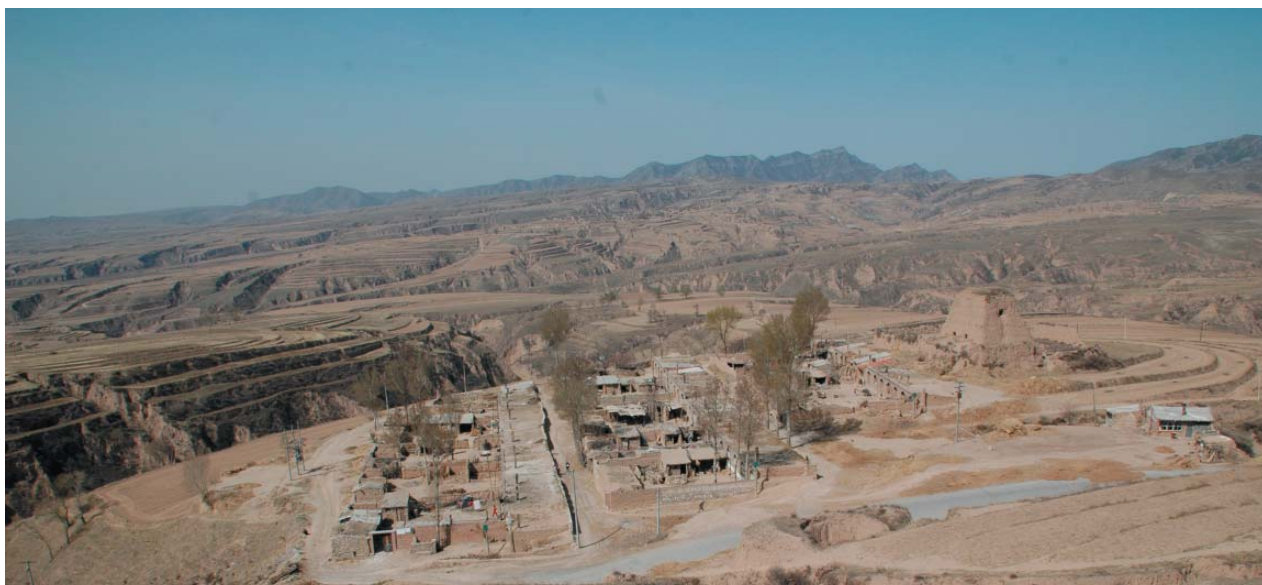
2013 年 10 月

認定特定非営利活動法人
緑の地球ネットワーク

砂漠化の状況



南郊区七峰山からの風景。耕して天に至る過剰な開墾は砂漠化の主要原因



渾源县三岭村。黄土高原の典型的風景。迂回道路ができたために現在はこの道を通らない



渾源县呉城村。黄土高原を刻む侵食谷



放牧のヒツジやヤギは草だけでなく、山に登り背のとどく範囲の木の葉まで食いつくす。最近放牧の規制が厳しくなり、無秩序な放牧はなくなった

大同とその周辺の歴史文化財



雲崗石窟第20窟。北魏時代には大同（平城）に都がおかれ（398～494）、人口は120万に達した



仏宮寺の釈迦塔（応県の木塔）



懸空寺（渾源県）



李二口村（天鎮県）の万里の長城

アンズ果樹園で村が豊かになった



小学校付属果樹園を建設し、アンズを植える



村中がアンズの花に（渾源县呉城村）



アンズが実る頃、国連環境計画（UNEP）親善大使の加藤登紀子さんが訪れた



アンズ畑の紅葉も美しい。アンズの落ち葉は家畜の飼料に、剪定枝は燃料になり、山の木を伐らなくてもよくなった

環境林センターと白登苗圃（大同市の都市改造により接収された）



旧環境林センターの管理棟中庭での食事風景。シダレニレがなつかしい



苗圃で養成中の果樹・アンス苗



コトカケヤナギ（胡楊）種子からの育苗も成功



環境林センターの管理棟正門で、ツアー参加者の記念撮影



白登苗圃でのマツの育苗

南天門自然植物園



マツ苗を植える（1999年）



管理棟（2000年）。周辺の植物はまだ小さい



各地から種子を集めて苗作り。スタッフが工夫をこらした



天然に回復してきたナラ林



落ち葉が堆積し土壌化が始まる



ナラが実をつける

采涼山プロジェクト



采涼山プロジェクト起工式（1999年）



整地作業



溝を掘った土で小さな壁を築いてその北側にマツを植える



大きくなれ、大きくなれ（2009年）



植えて13年、ここまで育った！（2013年）

実験林場カササギの森



カササギの森で谷を望む。谷の両側 600 ha がカササギの森の敷地



起工式（2001年）



マツの成長量測定の基本データを得るため、マツの木を数本伐採して、幹、枝、葉に分けて乾燥重量を量る



アスター、リンドウ、マツムシソウなど野生草花もふえた



移植後数年間成長しなかったナラも成長し始めた

緑の地球環境センター



大同市から提供された予定地は「小老樹」の林。しかし、土地引き渡しの混乱の中で木が切られてしまった。急いで土地造成する



井戸を掘る。深さ 140 m、水 40 m³ / 時



移転を迫られたアンズなどの移植を急ぐ



活動開始 20 周年記念式典



完成した管理棟と中庭



苗圃区画を望む

トヨタ財団 2012 年度アジア隣人プログラム

中国黄土高原における
草の根環境協力 22 年の歩み

2013 年 10 月

認定特定非営利活動法人
緑の地球ネットワーク

はじめに

緑の地球ネットワークは1992年から黄土高原に属する中国山西省大同市の農村で緑化協力を継続しているNPOである。地元の人びとと協力して植えた苗木はおよそ1880万本、5600haほどになる。初期には失敗が多かったが、その後、技術と経験を積み上げ、成功して地元のモデルとなるプロジェクトも数多くでてきた。

もともとは深刻な歴史問題をかかえる地方で、対日感情は最悪とっていいところだった。そこへ毎年150～250人のボランティアを派遣し、ともに汗を流すなかで、相互の理解が深まった。2011年4月には、東日本大震災・大津波の被災者への義捐金が寄せられるまでになっている。尖閣諸島をめぐる緊張した時期においてもカウンターパートとの関係に変化はないし、農村での歓迎ぶりは普段以上で、感動のあまり泣きだす日本人ボランティアがいたくらいである。

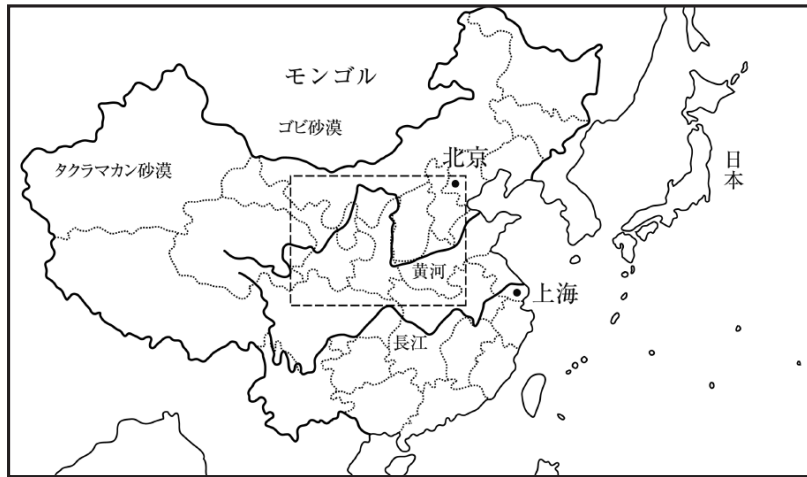
いっぽうで様々な課題を抱えている。日本の国内的には会員数の減少である。会員数は2007年には最大の660人／団体に達したがその後減少を続けている。新規参加者が少ないために会員の高齢化が同時に進行している。中国現地での活動においては、それ自体は歓迎すべきことであるが経済発展にともなうあまりにも急激な変化が種々の軋轢をもたらしている。長年営んできた緑化拠点の都市用地としての接収、資材費や人件費の高騰などである。さらに尖閣諸島をめぐる日本と中国の対立状況である。現地では双方の信頼のもとで活動が継続されているけれども、それとは無関係ないわば上位関係によって大きな影響を受ける。北京などの大気汚染とそれに起因する越境汚染問題、鳥インフルエンザなど、悪いものはみな中国からくるかのような雰囲気が出てきている。その結果が会員数の減少や活動原資である寄付金の減少をもたらす。

今後とも日本はアジア諸国との良好な関係のなかでしか生きていくことはできないと思う。相互理解を深め、発展させるには、共通の目標にむかって、共同の行動をとるのがいちばん確実だと思う。環境協力はそのために最適の分野だと考えられる。この報告はトヨタ財団2012年度アジア隣人プログラム、特別企画『未来への展望』において「環境協力を通じた相互理解の深化—中国黄土高原での緑化活動を通して」と題して行ったものである。これまでの経験を日本と中国の両方で振り返り、資料を整理記録するとともに今後の方向を探ったものである。われわれ自身多くの教訓を再確認して、今後とも活動を続ける自信を得ることができた。おなじような活動を目指す人々の参考になれば幸いである。

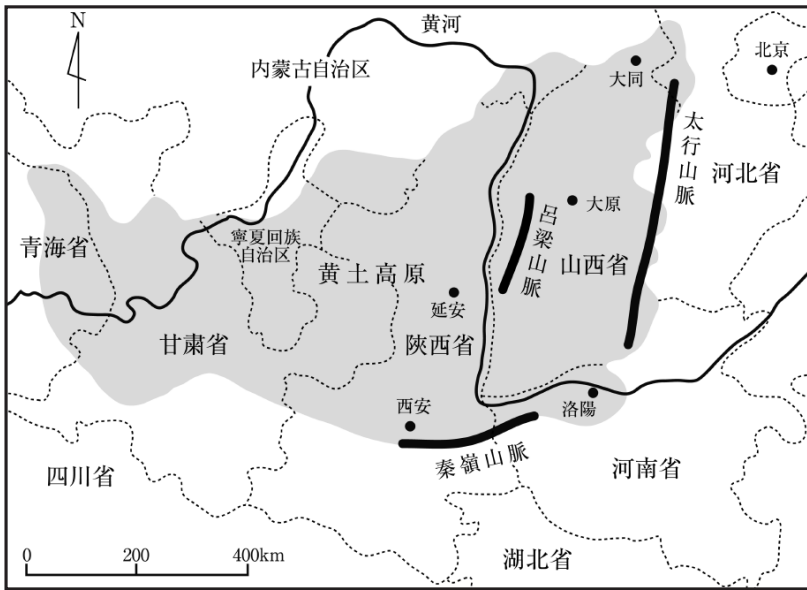
このような機会を与えていただいたトヨタ財団に心から感謝をもうしあげる。

認定NPO法人 緑の地球ネットワーク代表
前中 久行

2013年10月



中国および周辺図
(破線枠内が下図)



黄土高原および周辺図



大同市内の主なプロジェクト地

もくじ

はじめに 前中久行	3
中国黄土高原における草の根環境協力 22年の歩み	
(1) 「素人の勇敢さ」で始まった	7
環境に国境はないー始めるに当たっての確認／酒はうまいし、ねえちゃんはきれいだ ／ゼロどころかマイナスからのスタート／素人は勇敢だ！ 素人だから始めてしまっ た／成功例の背後に目に見えぬ多数の失敗例／現地を理解するため、担当者を派遣	
(2) 環境破壊と貧困の悪循環	12
山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし／水土流失が砂漠化を加速する／過剰 な耕作と放牧が山を裸に／環境破壊と貧困の悪循環／文明の前には森、文明の後には 砂漠	
(3) 悪い結果はすぐ出るが、いい結果は時間がかかる	18
学校に通えない子がたくさんいた／果樹園を建設し、その収入で教育支援／長期、中 期、短期の利益を結合する／背伸びして失敗した巨大プロジェクト／トップの交替で アンズが全滅／人材のいないところはやはり失敗／大きかった緑色地球ネットワーク 所の設立／悪いことはいいことに変えることができる	
(4) 無理解から出発して信頼関係を築く	28
ダ〜ダオ・リーベン、ダ〜ダオ・リーベン／「第2の満州国」が存在した／群衆に取り 囲まれたカメラマン／「根拠地」で旧知と再会した日本人／日本人と活動するのは いやだったけど／経済発展のためには汚染すらほしい／ワーキングツアーが現場と日 本をつなぐ／農家でホームステイを実現／労働組合や企業がツアーを派遣	
(5) 日本の専門家の参加と協力拠点	36
実現した日本の専門家の参加／環境林センターの設立／専門家の参加でツアーも活気 づく／阪神淡路大震災の直後に拠点建設に着手／根に酸素ー植え方の改善に取り組む ／実験を繰り返して理解を広げる／マツの育苗に菌根菌を活用／実用化し、100万本 の育苗を開始／松枯れをめぐる騒ぎを起こす／大同事務所にベテランの技術者が／ 省の党幹部がセンターを視察／協力拠点の規模が一気に拡大／土壌浄化で汚水処理に 取り組む	
(6) 成功例が注目を浴びる	50
大水害で環境政策が大きく変化／経済の大膨張が乱開発を招く／マツは小苗の方が活 着率がいい／雨期整地ー優れた草の根の技術／苗を土伏せして寒風から守る／北から 導入されたモンゴリマツ／過酷な条件でマツが大きく育つ／植林は1分、管理は9分 ／緑化の歴史のある村と協力／緑化の成功で大きく変貌した村／面積あたりの収入が 10倍にも／大学生を毎年送り出すようになった／開花前後の寒波で実が落ちる未解	

決の問題／成功のための3つの条件／農村で井戸掘りに協力／地震被災地の小学校建設に協力／数々の賞を両国で受賞

(7) 荒れ山に植物園をつくる	69
植物園－霊丘県南部に的を絞る／山の奥にあった広葉樹の自然林／最後に見つかった好条件の候補地／使用権を確保し建設にとりかかる／荒れ山に植物園と名づける／種子や小苗を集めて植物種を増やす／調査区を設定して生育調査を実施	
(8) 20年続いたのは奇跡のようなもの	77
共青团から総工会にパートナーを変更／新たな発展の条件を生み出す／3年で30年以上の変化／農村に大工業団地がやって来る／大同に青空が出てくるとは…／風力発電とメガソーラー／協力拠点が生態公園用地に収用される／市長の即断で代替地の提供を受ける／緑の地球環境センター建設に着手／いつもなぜ焼け太り？／20周年記念の盛大なイベント／大同事務所とそのメンバー／南天門自然植物園の発展の道／持続可能で多様性を備えた森林のモデル／終わりに	
(展望) 環境協力はこれからも欠かせない	94
山積する困難な課題／力のバランスが変わりつつあるときに／挑発的な言動が逆効果を招く／環境協力から相互理解と信頼を築こう	
付録1 ナラの生育がいいのは植物園の一带です	96
南天門自然植物園責任者 李向東のインタビュー	
付録2 出世もお金もほしいとは思わない	100
緑色地球ネットワーク大同事務所副所長 魏生学のインタビュー	
植林ツアー日誌に見る緑化活動20年	103
大同における緑化協力略年表	155

[表紙写真]

南天門自然植物園の起工式の後で、敷地内にアブラマツの苗木を植える(1999年4月 橋本紘二撮影)

[裏表紙写真]

南天門自然植物園では北向き斜面を中心に森林再生が急速に進んでいる(2013年8月撮影)

中国黄土高原における草の根環境協力 22 年の歩み

22 年と言えば、生まれたばかりの赤ん坊が成人に達するだけの時間だ。実際に、大同の農村に行けば、小学校付属果樹園の建設作業でバケツをさげて苗に水をかけてくれた子供が、成人して結婚し、子供を抱いていることもある。

その過程はまっ直ぐでなだらかなものではなかった。大失敗に泣いたこともあるし、育った木を見て感動したこともある。ああ、もうこれ以上は無理かな、と思ったことが何度もあったが、そのたびにどこからか助けが出てきて、困難を乗り越えることができた。

北京からきた中国の幹部が、「中国人と日本人とでどうしてこんな関係ができたのですか？」と言って不思議がる光景に何度も出合った。

植えた木が育ったのも成果だが、日本と中国とで、人と人がこのような関係を築き上げてきたことも、かけがえのない成果だと思う。

20 年の活動を振り返るに当たって、事務局長の高見邦雄が原案を書き、新旧の役員と協力者の検討を経てこれをまとめた。文中の敬称を略したことをお断りしておきたい。

(1) 「素人の勇敢さ」で始まった

【環境に国境はないー始めるに当たっての確認】

緑の地球ネットワークが中国山西省大同市の農村で緑化協力を開始したのは 1992 年 1 月だったので、まもなく満 22 年になる。その年の 6 月にはブラジルのリオデジャネイロで地球サミットが開かれることになっており、地球環境問題への関心が深まりつつある時期だった。

そして、当時（現在もだが）の難題は、地球環境問題の重要性には誰もが同意しながら、各論では一致が難しく、効果的な対策に結びつかないことだった。その中でも最大のもは工業先進国と発展途上国との対立だった。二酸化炭素排出の問題をとっても、発展途上国も規制に参加することが重要だと主張する工業先進国に対して、発展途上国の側は問題を深刻化させたのは先進国だ、そちらが厳しい規制に取り組むべきで、途上国に対してはむしろ発展のための協力をすべきだ、と主張する。

私たちは、民間の立場で、この両者の対立をやわらげ、相互理解へ向かう道を探せないものかと考えた。対象としては、当時、途上国の代表のように振る舞っていた中国を考えた。中国の環境がさらに悪化すれば、日本も大きな影響を受ける、それを避けるためにも日本は中国の環境問題の解決に協力すべきだ、と考えたのだ。私たちは「環境に国境はない」というスローガンを掲げた。

当時、中国の環境問題が深刻だという認識は日本ではまだ一般的でなかった。計画経済を採用していた時代の中国は、「必要に応じて生産する」のが建前で、必要性が認識されてから生産が完了するまでには必ず時間差があり、物不足が常態で、「不足の経済」が続いていたから、大量生産、大量消費に付随する環境問題は目立たなかった。

しかし 1980 年前後から中国は国家目標を経済発展に絞り、改革開放が進められ、経済の規模も飛躍的に拡大し始めた。欧米や日本などが数世代をかけて実現した変革を、中国は一世代に満たない

期間に達成しようとしたのだ。あちこちに歪みが現れ、大気や水の汚染が急速かつ大規模に進んだ。しかし、日本の人々のそれに対する認識はずっと遅れたのである。

私たちは協力の課題を緑化・植林に置くことにした。水や大気汚染問題は、たちまち政治問題化し、さまざまな反対も出てくるので、外国人が取り組むのは難しい。その上、技術や資金も必要で、市民レベルの手には負えない。その点、砂漠化防止のために、緑化・植樹に取り組むことには、反対は出にくいだろうし、特別の技術や知識も必要ないだろうと考えた。それが大間違いであることには、たちまち気づかされるのだが。

【酒はうまいし、ねえちゃんはきれいだ】

1991年の秋、北京で事前調査をした。緑化関係のさまざまな機関や苗圃などを訪ね、最後に行ったのが中華全国青年連合会だった。その中核を担っているのが中国共産主義青年団（以下「共青团」）だが、その地方組織にとって緑化・植林は活動の中心課題だというのだ。中華全国青年連合会の曹衛洲副秘書長に会い、こちらの意図を説明し、適当な地方を紹介してほしいと頼み込んだ。

発起人の間の議論では、資金や物資を届けるだけでなく、そこに必ず人を派遣することを重視していた。地球環境問題をグローバルに理解するために、海外の事情を知ることが必要であり、さらに日本の環境問題は大量生産、大量消費、大量廃棄に起因することが多いが、それとは異なる世界を体験することを通じて、日本の社会と生活のあり方を見直すことが必要だと考えたのである。そのような観点から、国際空港から半日以内で行ける場所が望ましいことを、中国側にも伝えた。

まもなく返事が来て、候補地として紹介されたのが山西省雁北地区渾源县だった。雁北は雁門関の北の意味で、大同市を取り巻く農村部だったが、1993年に行政区画の変更がなされ、雁北地区に属した10県のうちの7県が大同市に合併され、新しい大同市になった。

1992年1月、慌ただしく緑の地球ネットワーク準備会を立ち上げ、佐野茂樹を団長に発起人5人で現地を訪れることとし、まずは北京の中華全国青年連合会を訪ねた。共青团中央青年農民部の韓長賦部長が曹衛洲とともに応対してくれ、「渾源县は緑化に大変熱心です。美人の産地として歴史的に有名で、いい酒もあります」とのことだった。韓長賦は幹部交流の一環としてそれより5年ほど前に渾源县に滞在したのだった。彼は現在、中国政府の農業部長（大臣）である。

その足で大同に向かった。共青团中央から青年農民部の謝徳新と国際部の万学軍が同行してくれた。午後11時過ぎに北京駅を出発する夜行列車に乗り、翌朝6時前に大同に着いた。共青团山西省委員会青年農民部のスタッフと合流し、渾源县に向かった。渾源县では県長、林業局長、共青团書記などと協議し、また3か所の緑化プロジェクトの現場を視察した。その結果、ここでの緑化協力を開始することで合意し、初年度の協力規模を10万元（当時は1元＝25円）に決めた。

現場をみたのは西留郷の龍首山プロジェクト、北岳恒山の参道付近のマツの植樹、そして銀屯梁のカラマツの造林プロジェクトだった。最後のプロジェクトを見送り、前の二つにそれぞれ5万元、4万元の苗木代を提供することにし、残りを連絡費その他に使うこととした。結果的には協力した二つのプロジェクトは見事に失敗し、見送ったカラマツのプロジェクトだけが、その後も順調に生育したのだった。

【ゼロどころかマイナスからのスタート】

現地の環境の厳しさに驚かされた。一番寒い1月のことだけに、最低気温は零下30℃近く、日中の気温も零下10℃前後だった。気温は低いが、雪はほとんど降らず、植物にとってはそのほうが厳しいことを知ったのは後になってからである。

この初訪問を通じて、この一帯が黄土高原の東北端にあることを知った。黄土高原の面積はおよそ52万km²もあり、日本の国土の1.4倍にもなる。



西域の砂漠地帯の土が偏西風に乗って 渾源の県城。日中でも零下10℃を上回らず、肉や野菜も凍っていた東へ東へと運ばれ、降り積もってできたのがこの黄土高原なのである。風に乗って飛ぶくらいだから、その粒子は小さく、平均で0.02 mmくらいしかない。畑は黄土色、土づくりの住居も黄土色、山は冬枯れで木も草もなく黄土色。まさに黄土色一色の世界だった。

協力事業を開始したと言っても、その当時、日本には組織もなければ、資金もなかった。帰国後、さっそく会報「緑の地球」を発刊して（1997年1月の第53号までは月刊、その後は隔月刊）、宣伝を始めるとともに、会員の募集、協力資金の募金などを始めた。1年間で250人以上の会員を獲得し、約束通り10万円の協力資金を中国側に手渡すことができたのである。

会員や協力者の獲得は容易ではなかった。今のような嫌中感情はなかったが、中国の実際の姿は知られていなかった。私たちが緑化協力を訴えると、返ってくる答えは「コンクリートジャングル、アスファルト砂漠の大阪から、どうして中国に協力するの。あっちのほうがずっと緑豊かじゃない」。確かに、北京空港から市内までの道路を初め、中国の都市とその周辺の緑化は進んでおり、日本よりずっと緑の濃い印象があった。多くの日本人にとって中国とはそのような都市であり、内陸の農村についての知識はなく関心もなかったのだ。

【素人は勇敢だ！ 素人だから始めてしまった】

緑の地球ネットワークが派遣する最初の緑化協力団は、1992年5月6日から18日にかけて、上海→太原→五台山→渾源县→大同→北京のコースで訪れた。団長は石原忠一（後に顧問）で、総勢9名だった。

団長の石原は、太原でも、渾源县でも、北京でも、挨拶のたびに「この協力は最低でも20年は継続します」と話した。マツの間伐材がお金に換わるのが20年後、植えた木の天然更新が始まるのが20年後、そこまで協力を継続しなければ意味がないというのが、その理由だった。

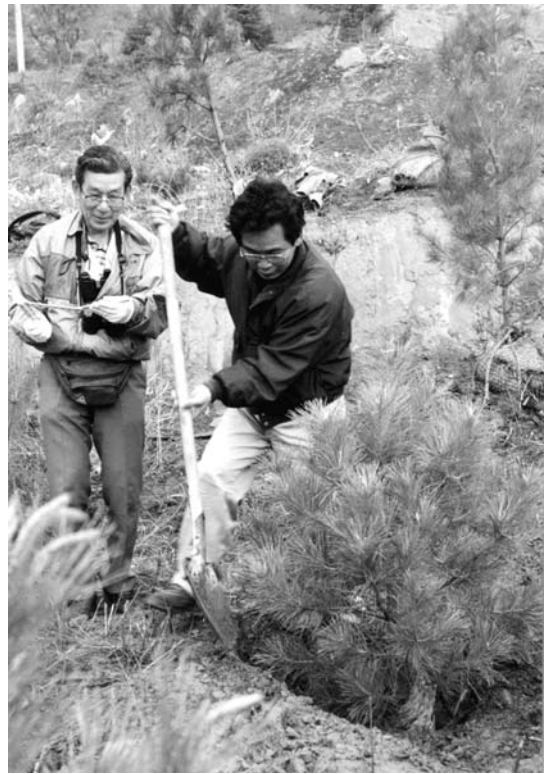
団員の募集には苦勞した。スタートしたばかりで会員も少ない。発起人が周囲の友人を誘うことに努めた。副団長の西山五郎は吹田郵便局貯金課に勤務していた。何回も何回も通って来る勧誘に観念したのだろう。「桜と梅の区別もつかない自分のような人間が参加して何ができるんだ」と言い

つつも、最終的に参加を決めた。そして、その後は長く緑の地球ネットワークの副代表を務めた。

そのことが象徴するように、発足時の緑の地球ネットワークのメンバーは素人が多かった。気持ちはあっても、植物のことがわかる人、中国の農村のことをよくわかっている人は、ほとんどいなかったのだ。

最初に協力したのは、雁北地区の一帯で構想されていた龍首山の緑化プロジェクトだった。総面積 13,000 ha、私たちが協力を始めた西留郷だけでも 1,700 ha という巨大な計画だった。植えるのは主としてモンゴリマツで、ムラサキモメンヅルなどが混植されることになっていた。ここに苗木代として 5 万元（当時は 1 元 = 26 円）を贈ることにし、最初の協力団は記念植樹を行った。

もう一つは北岳恒山の参道付近にアブラマツを植えるプロジェクトで、ここにも苗木代 4 万元を贈ることにした。恒山は中国五岳の一つで、道教の有名な聖山。山上にたくさんの廟が建っており、麓には懸空寺がある。私たちが恒山を訪れた前日（陰暦 4 月 8 日、この年は 5 月 10 日）は大きな廟会があり、海外を含め、6 万人の参拝客があったという。有名な観光地でもあるので、私たちの協力をアピールする狙いもあった。



最初の協力団の石原団長（左）。20 年継続するとどこでも約束した

【成功例の背後に目に見えぬ多数の失敗例】

この協力団には、共青团山西省委員会の幹部が同行し、さまざまなことを話し合ったが、すでにいくつかの不協和音があった。協力の計画がスタートしたばかりなのに、その幹部たちは陰に陽に別の場所での協力活動を勧めるのであった。共青团中央の重要な活動に「母なる河を守る行動」があり、共青团山西省委員会は黄河のほとりの緑化を最重点課題にしていたのである。雁北地区はごく一部を除いて黄河水系ではなく、桑干河・海河の水系に属していた。

5 月 29 日に第 1 回の協力団の報告会を大阪市内でもった。予告もなしに出席した鳥取大学名誉教授の遠山正瑛は、「素人は勇敢だ。自分は最初、黄土高原に来るよう誘われたが、あそこは難しいことを知っていたから、もっと西の砂漠に行った。もし君たちが成功するようなことがあれば、君たちが一番だ。しかし、あそこで木は育たないよ」と話した。



北岳恒山の山頂。北面には森林が成立するが南面は草も乏しい

私たちは素人ばかりだったから、勇敢にも黄土高原で緑化協力を始めたことになる。

1992年8月1日から12日の日程で第2次の緑化協力団を派遣した。参加者は12人だったが、平均年齢は34歳で、22歳以下の学生が5人いた。渾源県の西留郷、恒山、そして大同県徐疇郷などで植樹をし、地元の人たちの大歓迎を受けた。参加者の多くは初めて見る地平線に感動し、巨大な緑化プロジェクトに参加できることに新鮮な喜びを感じた。

だが、これら初期の協力事業の多くは失敗だった。春に植えて、夏に行ってみると、全滅していることもあった。1992年夏に植えたプロジェクトが、翌春にはまた枯れていたのである。そして、西留郷の植林地は数年後には農民が畑に戻ってしまった。

この地で緑化協力を開始するに当たって、私たちはいくつもの既存のプロジェクトを観察していた。マツを植えるプロジェクトでは、ちゃんと活着していることを確認したし、育っている様子も見た。地元にも緑化の技術と経験が蓄積されており、技術者もいる、と判断したのだった。

それなのに、特定の場所を決め、そこで実際に協力を開始すると、うまくいかない。後になってわかったことは、成功する一つのプロジェクトの背後に、たくさんの失敗のプロジェクトが存在することだった。失敗したプロジェクトでは、残るものは何もなく、目につかない。そして中国側が紹介するのは成功したプロジェクトだけである。私たちはそれを、どこでも成功しているかのよう
に錯覚したのである。

【現地を理解するため、担当者を派遣】

このような国際協力を成功させるには現地の様子を的確に把握することが不可欠だと考えた。そのために協力ツアーの派遣だけでなく、担当者の高見邦雄を2か月前後、現地に派遣した。県の招待所、郷政府の一室、そして農家などに寝泊まりして農村を巡った。

その当時は交通も通信も不便だった。北京までの国際便は遅れることが多く、翌日回しになることさえあった。北京-大同間は列車しかなく、3~4時間の遅れは珍しくなかった。道路の状態もきわめて悪く、雨の後はぬかるんで、大同から70 km 弱の渾源県に行くのに4時間くらいかかるのが普通だった。

通信となると日本を離れた瞬間に日本側からの連絡の手段はなくなる。中国の農村滞在中に日本



ぬかるみにタイヤを取られたバスを乗客が降りてひたすら押す

まで電話連絡をしようと思えば、県城（県政府の所在地）に宿を取り、口頭で国際電話を申し込み、2~3時間待たなければならなかった。一旦つながっても、回線事情が悪いことが多く、しばらく話すうちに通じなくなり、また最初からやり直すこともあった。原稿その他をファクスで送るには、大同市内に戻って、郵便局を訪れ、そこから送るしかなかった。A4版2枚の送信に200元もかかった。当時の県の招待所の女性服務員の賃金が1か月200



渾源県の温増玉林業局長。緑化に対してとても熱心だった

元前後であったことから、その高さがわかる。

現地では渾源県の温増玉林業局長と親しくなった。彼は赤い車体に「森林消防」と白抜きした軍用4輪車で、毎日のように農村を回っていた。それに同行してたくさんの村を回り、この地方の山をみた。また、通訳なしのたどたどしい会話や筆談だったが、この地方の農村がかかえる問題を聞かせてもらい、樹木の名前を中国語で覚えた。

この協力は渾源县だけで始めたつも

りだったが、対外活動をする資格は共青团雁北地区委員会より上にしかないという理由で、そこがカウンターパートになった。そのため事業を他の県にも広げざるをえなくなり、大同県、陽高県、靈丘県などへと関係が広がった。1993年夏には行政区画の変更があり、雁北地区はなくなり、そこに属していた10県のうちの7県が大同市に併合されたことにより、カウンターパートもより有力な共青团大同市委員会に移行した。

(2) 環境破壊と貧困の悪循環

【山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし】

陽高県に「高山高」という民謡があり、その歌の2番に次のような一節がある。「靠着山呀，没柴烧。十箇年頭，九年旱一年涝…」(山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十年を重ねれば、九年は旱(ひでり)で一年は大水…)。ここにはこの地方の環境と生活の厳しさが見事に歌い込まれている。この地方と20年以上付き合ってきた私たちのまさに実感である。

この歌の後段からみてみよう。黄土高原の降水量は少なく、西北部がもっとも少なくて年間平均160 mmほど。南が多いが、それでも600 mmほど。私たちが協力を開始した大同の一带は年間平均400 mmほどだった。400 mmでも、それがほどよく降ってくればいいのだが、問題が二つあった。

一つは年ごとの変動が大きいこと。多い年は650 mmほどになり、たとえば1995年はそれくらいの雨が降った。少ない年は200～250 mmほどに落ち込む。1999年がそのような年で、地元では「建国以来最悪の旱魃^{かんぼつ}」と呼ば



旱魃で育たなかったキビ。実が入っていないがかかしを立てる(1999年)

れた。建国とは1949年の中華人民共和国成立だから、50年に1度の旱魃だと言ってもいいだろう。2001年はそれに輪をかけた旱魃で、7～8月になっても茶色いままの山が見られ、耕作を諦めた土地が広がっていた。地元では「100年に1度の旱魃」と言われていた。50年に1度、100年に1度の旱魃がきびすを接してやってくるのだから、「10年のうち9年は旱魃」と言っても誇張ではない。

もう一つは季節的な偏りが大きいことだ。6月半ばからの3か月に年間降水量の3分の2以上が集中する。その他の季節にはほとんど降らない。4月後半から5月にかけては農業にとって最重要の季節である。半年続いた冬が終わり、気温が急に上昇する。眠っていた植物が芽生え、農民は春耕や種蒔きに忙しい時期である。しかし、雨が降らないと、種を蒔けないし、蒔いても発芽しなければ意味がない。

農民は「春の雨は油より貴重だ」と言って雨を待つが、雨は降ってくれない。この時期の雨がなかなか降らないことが、旱魃の被害が大きい原因になっている。

【水土流失が砂漠化を加速する】

雨は降れば降ったで問題を引き起こす。先述したように、雨の降るのは6月半ばからだが、暑い時期に降る雨は、狭い範囲にごく短時間、集中的な豪雨になることが多い。しばしば雷を伴う。私たちも1時間70mm以上の雨を何度も体験した。最近、日本で使われる「ゲリラ豪雨」という表現はこの雨にこそふさわしい。

私たちの協力プロジェクトでは、2003年7月23日にそのような雨を経験した。大同県聚楽郷に建設した実験林場「カササギの森」には、その中央部に南北に伸びる谷があり、底に小さな流れがある。この谷の上流で大雨が降り、土石流が発生し、一抱え以上もあるポプラを初め、ヤナギ、ヤナギハグミ、ギョリュウなどの植生を押し流してしまった。少し下流にある聚楽堡村では4人の犠牲者を出したのである。

1995年は年間降水量が650mmという記録的な数字になった。ただし、この年の雨は局地集中の雨ではなかった。春からずっと旱魃だったのに、7月下旬になって広い範囲に雨が降り出し、普段の年だと9月半ばには降りやむのに、この年は10月になってもやまなかった。静かな雨が長く降り続いたのである。その結果、農村の土づくり住居・窑洞（ヤオトン）の屋根と壁に雨水が浸透し、次々に倒壊したのである。大同の農村では6万世帯24万人が被災したと言われる。

そんな災害が10年に1度もあったらたまったものではないが、それほどではなくても、雨は被害をもたらすのである。中国で「水土流失」と呼ばれる問題がそれである。

黄土高原では植生が乏しい。その原因については後に触れるが、植生の乏しい大地に激しい雨が降ると、雨は大地を洗って、土を押し流す。黄土高原



長雨のため、屋根や壁に水がしみ通って倒壊した土造りの窑洞



夏の雨が深い侵食谷を作る。深さ 100 m に達するものもある

そこにわずかな水を加えると、とろとろに溶けてグリスのようになる。黄土が雨に侵食されやすいのはそのためだ。

侵食谷は人目を引きつけ、侵食のすさまじさを実感させる。しかしもっと重要なのは、畑の表土や山の土が侵食され、失われていることである。腐植を含んだ表土がなくなると、畑の土は作物を育てる力を失い、山では木や草が育たなくなる。雨が土を流し去り、水もそこに留まることがない。それが水土流失である。大同の農村では「水土流失防止」のスローガンを至るところで見ると、農民の会話の中にも自然に出てくる。

リオデジャネイロの地球サミットで採択された「アジェンダ 21」で、砂漠化が次のように再定義され、砂漠化対処条約においても踏襲された。砂漠化とは「乾燥地域、半乾燥地域、乾燥半湿潤地域における気候上の変動や人間活動を含む様々な要素に起因する土地の劣化」だというのである。黄土高原の場合は、皮肉なことに、雨によって砂漠化が加速されている。

20 年ほど前の発表では、黄河中流の水には 1 m^3 あたり 38 kg もの土が含まれ、河南省の三門峡ダムを通過する土の量は年間 16 億 t に達するということがあった。そしてその土の 80% 以上が黄土高原からのものだという。この土で、高さ、幅それぞれ 1 m の堤防をつくるとすると、その延長はどれほどになるだろうか。大同で実測した土の比重をもとに計算すると、実に 108 万 km にもなり、赤道を 27 周もすることになる。地球から月に飛ばせば、1.4 往復できるほどの長さである。最近では流域の緑化その他の措置で、この土の量は減っていると言われる。

【過剰な耕作と放牧が山を裸に】

民謡の前段に移ろう。「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし」というように、山という山に木がなく、草もまばらである。山や丘陵の急斜面

の特徴的な地形にガリ＝侵食谷があるが、それは雨によって刻まれたもので、深いものは 100 m を超すこともある。

それには水にもろい黄土の性質が関係している。黄土は粒子が小さく、乾燥状態では固く締まっていた、スコップの刃が立ちにくいほどである。ところがいったん耕され、砕かれると、粉状になって宙を舞う。黄土高原が黄砂の二次的な発生源になっているのはそのためである。そして、黄土は何よりも水にもろい。固まっている黄土でも、



山や丘陵の急斜面まで畑が耕されている。典型的な「三跑田」

まで畑が耕されている。畑の一枚一枚を水平になるように整地し、段々畑にしているのは、水土流失を少しでも軽減するための努力にほかならない。大同市南郊区の七峰山に登ると、目の届く限り段々畑が続く、壮大な光景が広がっている。どれほどの農民の血と汗が注がれたことであろうか。

一枚一枚の畑を水平に整地するためには、傾斜が緩く、土にある程度の厚みがなければならない。傾斜が急であったり、土層が薄い場合は、傾斜したままの畑になる。そのような畑は「三跑田」と呼ばれる。「跑」は逃げるの意味、田は畑のことで、雨のたびに、水が逃げ、土が逃げ、肥料分が逃げるといのである。

言うまでもなく、もとはここは山であり、場所によっては樹木が茂り、草が覆っていたであろう。それがすべてなくなり、段々畑に変えられてしまった。山から樹木や草をなくした最大の原因は過剰な耕作である。農民の努力の結晶は、自然の大破壊でもあった。

生活燃料の伐採もある。最近まで大同は中国一の石炭産地であり、農村でも石炭を焚くことが他地方に比べて多かったと思う。しかし、山奥の村では石炭の入手は難しいし、貧しい農村では石炭を買うことができない。大きな束にした樹木の枝などを担ぐ農民と、以前はよく出会ったものだ。尋ねると、120斤（60 kg）もあるのだという。灌木を根っこごと引き抜き、持ち帰る人に出会ったこともある。農家の庭や門前には、そのようなタキギの山が必ずあった。そうしたことが長く続いた結果、木も草もなくなってしまったのだ。

さらに、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマなど家畜の放牧の影響も少なくない。特に深刻なのは、春の芽生えが始まる直前の時期で、ヒツジは前足で草の根を掘り起こし、緑になる前の芽を食べている。ヤギはどんな急斜面や岩場にも登って、木の芽生えを食い尽くす。ある林業技術者は「100人が植えた木を100頭のヤギが台無しにする」と言っていたが、実際の負荷はそれ以上かもしれない。

2000年の私たちの調査によると、7つの県の21の村の平均で、農家1戸あたりの家畜数は1.7頭だった。放牧を専業にする人が毎朝集めて、50～100頭ほどの群れにし、エサが得られるところまで連れて行って放し、夕方、また各家に返している。標高の低いところの村が、主としてウマ、ウシ、ラバ、ロバなどの大家畜を飼い、役畜として使っているのに対し、山間や丘陵の貧しい村では、ヤギ、ヒツジなどになって、その多くは売って家計を補うためのものだった。



60 kg ものタキギを背負う。シラカンバ、ナラなどの枝が混じる。



放牧のヤギ。木々の若芽をかじり、植生をいっそう貧しくする

このような仕組みを「環境破壊と貧困の悪循環」と名づけ、チャートにしてみた。

このような悪循環が一旦成立すると、その内部の人間の努力だけでは簡単に脱けだせない。簡単に脱けだせるようなら、悪循環にはならない。たとえば、どこかの村の誰かが、貧困から脱けだそうと決意して、より条件の悪い傾斜地などを開墾する。一人だけならその目論見は成功するかもしれないが、みながそうしたらどうなるか。悪循環を強めるだけである。

あるいは別の村が豊かさを求めて、飼っているヤギの数を100頭から300頭に増やした。これは実際の例だが、それがもたらす結果も悪循環の強化である。

私たちは、中国で進む砂漠化の防止に協力できないかと考えて、この協力事業を開始した。木を植えることでこの問題を解決できると、単純に考えたのだ。

しかし、一言で砂漠化と言っても、それにはさまざまな形態があり、原因も異なる。もっと西のほうでは、流動砂丘の出現と東進が、砂漠化の一般的な形である。土地の表面に薄皮のような土の層があり、その下は砂である。耕作や過放牧によって、表面の草がなくなり、薄皮の表土がかき乱された結果、砂の層が表面に現れ、砂丘を形成する。それが西風にあおられて、東へ東へと進み、耕地も村も砂が埋めていくのだ。

黄土高原では、これまでみたように水土流失が砂漠化の原因になっており、その背後には環境破壊と貧困の悪循環が介在している。

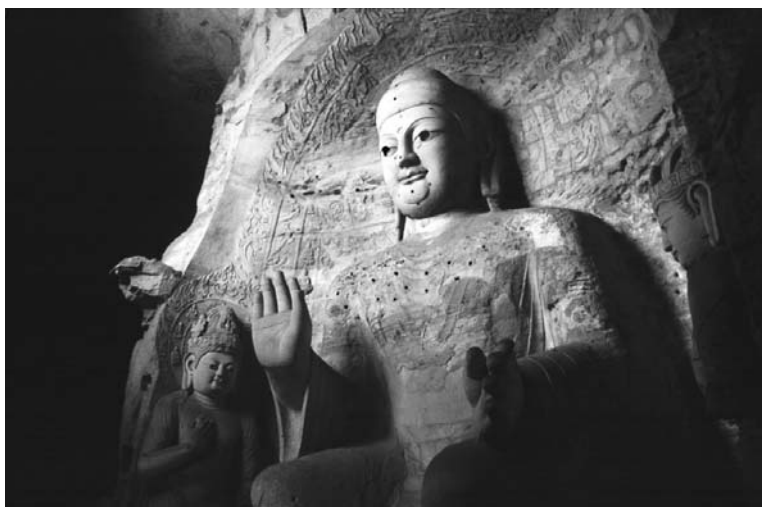
ここで注意すべきことは、本来の「砂漠」と「砂漠化」とは、厳格な区別が必要なことである。降雨量が極端に少ない本来の砂漠は、それ自体が自然であり、そこを緑化することには意味がない。地下水を汲み上げたり、よそから水を運んだりして木を育てても、無意味であり、かえって有害ですらある。

木を植えれば、砂漠が砂漠でなくなるわけではないし、砂漠化が止まるわけでもない。その砂漠化の原因を突き止め、その原因をなくすか、軽減する以外に方法はないのである。現地が悪戦苦闘する中で、だんだんそのようなことを考えるようになった。先ほどみたチャート図の矢印を断ち切るか、方向を逆転するような活動が必要なのである。

【文明の前には森、文明の後には砂漠】

黄河文明は言葉を換えれば黄土高原文明である。中国人が出自を誇って語る華夏文明は山西省南部の黄河のほとりで発展したし、古都の長安（西安）、洛陽などが存在するのも黄土高原である。宋（960～1127年）金（1115～1234年）以前の木造建造物が山西省には106か所現存するが、それは全国の70%以上を占める。その時代までは森林が存在したことを示している。

山西省の最北部に位置する大同にも輝いていた時代があった。4世紀末か



雲崗石窟第3窟の仏像。ユネスコの世界文化遺産に指定された

らほぼ一世紀、大同には北方の遊牧民族・鮮卑族の王朝、北魏の都が置かれたのである。平城京と呼ばれ、日本の黎明期に大きな影響を与えた。北魏は積極的な移民策をとって、各地から人を集め、5世紀中庸に平城の人口は120万人にも達し、中国最大であるばかりでなく、世界最大の都市であったと思われる。その時代の栄華を伝えるのが雲崗石窟であり、今も5万體を超える彫像が残っており、2001年にユネスコの世界文化遺産に登録された。

その後の遼（916～1125年、契丹族の王朝）、金（1115～1234年、女真族の王朝）の時代に、大同はその副都であった。大同とその周辺に残る仏宮寺釈迦塔（応県の木塔）、華嚴寺、善化寺などはこの時代の創建であり、巨大な堂宇が現在まで残っている。特に応県の木塔は、高さ67mの世界最大級の木造建造物であり、^{とぎょう}斗拱と梁



応県の木塔。鉄釘を使わず、木組みだけで建造されている

など木組み構造で建てられている。このような高度な技術は、その当時までは木造建築もたくさんあり、その技術の粋を集めたであろうことが容易に推察できる。

また、山西省の森林被覆率の推移について、次のような推定もなされている（『山西通志（第9巻）林業志』）。秦（前221～前206）以前：50%、唐（618～907）宋（960～1127）：40%、遼（916～1125）元（1271～1368）：30%、清（1616～1912）：10%未満、中華人民共和国成立時（1949）：2.4%。時代とともに急速に森林が失われたことを表している。（）内の年代は筆者が補足したものである。

（3）悪い結果はすぐ出るが、いい結果は時間がかかる

【学校に通えない子がたくさんいた】

緑の地球ネットワークの緑化協力の中で、独特の位置を占めるのが小学校付属果樹園の建設である。このプロジェクトは偶然のきっかけで始まった。1993年の秋、大同での緑化を担当する高見が靈丘県を訪れ、その年の春から始まった鍋帽山の植林プロジェクトを点検していた。すると、中国側のカウンターパート代表、共青团大同市委委員会の劉懷光副書記が「明日、自分は別の任務があるので、あなたは休んでいてもいいし、別の山を見てくれてもいい」と言い出した。別の任務というのは、希望工程を実施するため、貧しい農村の小学校を視察するのだという。希望工程は、都市住民が寄付金を寄せて、農



下寨北小学校の旧校舎。零下30℃になるのに窓は障子張り（1993年）

村の教育を支援するプロジェクトで、共青团が中心になって推進していたのである。せっかくの機会を逃すことはない。それに同行することにした。

訪れたのは上寨鎮下寨北村の小学校だった。冬は零下30℃近くまで下がるのに、校舎の窓は障子張り、しかも穴だらけだった。垂木が腐っているのか、瓦を葺いた屋根は波うっている。先生は一人きりで、1年生から3年生までが、一つの教室で勉強していた。裸電球が1個で教室は薄暗い。教壇の後ろの壁が墨で黒く塗られ、それが黒板替わりだった。「4年生以上はどこで勉強しているの？」ときくと、「高学年を教えられる先生はここにいないので、大きな村の学校で勉強している」とのことだった。どれだけの生徒がそこで勉強しているか知らないとその先生は話した。

村を回っていると、弟、妹の手を引いて子守をしている子、親の後について野良に出ている子、家畜の世話をしている子などがいる。「どうして学校に行かないの？ 行きたくないの？」と尋ねると、「行きたい！」とだけ叫んで走って逃げる子、黙ってうつむいて涙を流す子、反応はいろいろだが、どの子も学校に行きたいのである。

そして失学する子は女の子が多い。どの子も就学させられればいいが、それができない場合は男の子が優先される。結果として、女性の自立の機会が失われる。農家の土塀などに「生男孩女孩都一样！」（男の子も女の子も一緒だ！）、「女孩也是接班人」（女の子も後継ぎだ）といったスローガンに混じって、「不要娶文盲！」（文盲はめとるな！）といったスローガンがあるのはその事情を物語っている。女性差別だと叱られそうだが、女の子も勉強させないといけないということを、ちょっとひねって訴えているのである。

それまでも貧しい村は見てきたが、これほどのところは初めてだった。一人当たりの年収は170元ほどだという。当時のレートで6,000円に満たない。こんなところで、「地球環境のために木を植えましょう！」と言っても、それは空語だろう。私たちの主要な目的は緑化の協力だが、貧困地域の人々を助けることも目的の中にあっただけだ。それを一体として実現できないものだろうか。

【果樹園を建設し、その収入で教育支援】

思いついたのは、小学校付属果樹園を建設し、果樹を植えることである。主には農家が使っている畑に果樹を植え、それを農民が育てる。そして、将来、果樹が収入をもたらすようになったら、利益の7～8割を農家が受け取り、残りを小学校の取り分として、失学児童の就学保障を初め、教育支援に生かしてもらう。

翌朝、それを中国側に伝えると、「どうしてそんないい考えに自分たちで行き着かなかったんだ！」と言って、大賛成してくれた。小学校校舎を建て替えても、それだけではうまく行かない。その後の必要経費が続かないからだ。果樹園をつくって、毎年収入が上がるようになればこんないいことはない。

青年たちは即座に賛成してくれたが、村ではスムーズに進まなかった。その計画をもって下寨北村に行ったところ、村の長老たちの猛反対を受けたというのだ。この一帯の農村は日中戦争に際して、きわめて深刻な被害を受けている。焼き払われて消えてしまった村までであるという。老人たちの言い分は「いくら自分たちが貧乏だからといって、今さら日本人の施しを受けるわけにはいかない」というものだった。

靈丘県の青年団の幹部たちは、数人がこの村に泊まり込み、反対する老人を一人ずつ説得して回っ



村の子供たちが家から持ち寄った容器で苗木に水をかける

最終的にこの県を撤退しました。その記念すべき日に、正反対の目的をもってやって来たみなさんを迎えて、まことにうれしい。

その翌日、下寨北村で小学校付属果樹園の起工式が開催され、続いて果樹の植え付けが始まった。地元の農民が大きな穴を掘り、そこに日本人ボランティアが苗を植える。村の子供たちがバケツで水を運び、植えたばかりの苗にそれをかける。老人たちが座り込んで何かを語り合いながら、それを見守る。

そして、そのさらに外周をたくさんの人たちが取り囲んだ。日本人がやって来るときいて、一帯の村から見物に集まったのだという。

【長期、中期、短期の利益を結合する】

その年の秋、再びその村を訪れた私たちは、小学校に案内された。同じ場所ではあるが、校舎はまったく新しいものに建て替わっていた。小学校果樹園をつくる際に、苗木代のほかに、整地、植栽、管理などのための人件費を渡していた。それを、「各戸に分けて飲み食いに使ったらそれっきりだ。それを元手にして、ほかからも寄付を集めて、小学校を建て替えよう」ということになったのだという。

山にマツを植えて環境改善を進めるのは長期の利益。果樹を植えるとアンズだと4年目から収穫が始まるからそれは中期の利益。学校を建てるのはすぐに効果が見えるから短期の利益。この長期、中期、短期の利益を結びつけることで、農民の積極性を引き出すという手法を、私たちはこの村での実際活動から学んだ。同じように小学校果



労賃をプールし、ほかからも寄付を集めて校舎を建て替えた（1994年）

樹園をつくった近くの上寨南村は、賃金部分を積み立てて、村の給水設備をつくったのである。

一つのお金でも、村の中で循環させれば、二つ以上の効果を上げることも、私たちはここで学んだのだった。

小学校付属果樹園をつくることで、その農村と私たちの関係はずっと深まった。特に村の子供たちが、さまざまな作業に積極的に参加するようになり、日本からのボランティアも子供たちとの作業を楽しみにするようになった。ツアーに参加した人が、自分の家族や友人を誘って参加するようになり、ツアー参加者もどんどん増え、大同の現地では二つの班に分かれて、別々の県を訪れないといけない事態まで出てきたのである。



日本からのツアーと村の人とで小学校付属果樹園に苗を植える

だが、果樹を植えて育てることは、山にマツを植えるのとは比較にならないくらい難しかった。たとえばノウサギの食害がある。アブラムシ、バッタなどの虫害もしばしば発生した。それらのために、霊丘県下寨北村の小学校果樹園は、数年のうちに消えてしまったのである。別のプロジェクトを例に、その失敗の経験を別項で記したい。

1994年に4つもの小学校付属果樹園に取り組むことができたのは、環境事業団が新設した地球環境基金の助成を受けることができたからだ。小学校付属果樹園建設で助成を申請したところ、先方から「果樹園をつくってアンズを植えることがどうして環境保護ですか？」という質問が来た。この質問に答えるために整理したのが、あの「環境破壊と貧困の悪循環」論だった。この地方の砂漠化は水土流失によってもたらされる。それを防ぐためには緑化が必要だが、それは果樹であっても効果は同じである。早く収入をもたらす果樹のほうが、負のスパイラルを断ち切るために効果的でもある、と。

その年、地球環境基金部長の加藤久和が大同を訪れ、私たちのプロジェクトを視察して、非常に高い評価を残してくれた。追加の助成まで決まり、大同産の「雲崗」という乗用車を私たちは持つことができた。

【背伸びして失敗した巨大プロジェクト】

渾源县西留郷の龍首山プロジェクト、北岳恒山のプロジェクトは見事に失敗したが、私たちも出発したばかりで、失敗の事情もその原因も深くは理解できなかった。そのために失敗の衝撃もそれほど大きくなかった。

深刻だったのは、大同県徐疇郷における失敗である。徐疇郷での協力は1993年から始まった。大同県には桑干河の水を貯める冊田ダムがあるが、徐疇郷はこのダムの南側に位置し、背後には渾源县との境界をなす龍首山がある。郷全体が北向きのなだらかな斜面上にあり、そこには大小48本もの侵食谷があるとのことだった。龍首山の北斜面に降る雨は、侵食谷をさらに深いものにしながら、

冊田ダムに土を押し流すのである。

冊田ダムは、北京の水ガメである官庁ダムをバックアップするために1958年に着工し、1960年に完成した。大雨が降っても官庁ダムがあふれないように、その水を上流で受け止める。桑干河の水には1 m³あたり平均42 kgの土が含まれたが、その土が官庁ダムに流れるのを防ぐ。そして、官庁ダムの水が減ったときは、冊田ダムの水を送り出す。



徐疇郷の侵食谷。その向こうに見える冊田ダムは北京の水源

1993年春、侵食谷が刻まれた斜面にアブラマツを植えた。少しでも侵食をくい止めるのが目的である。ここで水土流失を止めれば、それは北京の水を守ることになるので、協力の意義はいっそう大きい。そう考えた。

この郷の幹部が、きわめて熱心で、反応が速い。農村の幹部とは思えないほどだった。1989年と1991年にこの郷は地震に襲われており、まだ警戒態勢を解いていないときで、有能な幹部が配置されていたのだ。

郷政府からは翌1994年から果樹園を建設することが提案された。80 ha、6万本のアンズを植える巨大プロジェクトだった。果樹を成功させれば、農民の生活はずっと向上する。人口5,000人ほどの小さな郷だから、小さな資金でも目に見える成果につなげることができるだろう。それが北京の水を守ることになれば、環境面の貢献も大きい。幹部は積極的だから、成功の見込みも高い。ここで成功モデルをつくることができれば、日本での宣伝効果も高いし、大同での事業展開も容易になる。そのような欲も出てきた。

1994年春のツアーが、この徐疇郷の果樹園づくりに参加した。真剣な作業がなされ、それほど丁寧な作業はそれ以後も経験がないほどだった。

植え穴は直径、深さとも60 cmほどの大きなものが掘ってあった。最初に堆肥を入れた後、根の長さにあわせて土を埋め戻すのだが、その土は腐植を含んだ畑の表土を使うよう求められた。そして、根の周囲を取り巻く土も表土を使うのだ。ある程度土を埋め戻したら、そこで水をやる。水が浸透するのを待って、また土をかける。そして乾燥防止と地温上昇を狙って、苗の周囲にポリマルチがかけられた。また地上から80 cmほどに切り揃えられた苗木の切り口には、乾燥防止のためにペンキが塗られた。



徐疇郷果樹園の起工式。80 ha、6万本の大事業だった

1995年夏に訪れると、予想以上に

育っていた。まだ2年目なのに2 mを超えるものがあり、かなりの数の苗が花を咲かせたのだという。郷の責任者から提案があった。「来年は少しだけ実をつけさせたい。ここの農民はアンズ栽培に経験がないので、まだ不安に思っている。実がなるところを実際に見れば、果樹栽培に自信が持て、もっと積極的になるだろう。たくさんならせると、苗が弱るから、少しだけだ」というのだ。即座に同意した。

【トップの交替でアンズが全滅】

そして1996年の夏、久しぶりに徐疇郷を訪れ、郷政府に到着する前に異常に気づいた。あんなにたくさん植えていたアンズがないのである。ところどころで目につくだけだ。いったいどうしたのだろうか？

郷政府では党書記と郷長が対応した。以前の幹部は異動しており、どちらも新任だった。党書記は「アンズの成績は良好なので、来年はさらに拡大したい」と話した。活着率はどれくらいかと尋ねる日本側に「1995年が異常気象だったので、枯れるものも出てきたが、それでも70%は下らない」と党書記は答えた。郷長は「70%は無理でも、65%は確実だ」と答えた。

激しいやり取りの後、現場で確認することにした。状態の一番いいところでも10%あるかないかだった。跡形もなくなっているところも多い。生き残っているものを1か所にまとめ、できるだけ面倒をみてほしい、と伝えるのが精一杯だった。

春先にノウサギの食害を受けた。日本のノウサギは、苗をただかみ切るだけで、苗の直径が1 cmを超えると被害はないと聞いたことがあるが、中国のノウサギはそんなに生易しいものではない。直径10 cmくらいまでの若木なら、樹皮をかじる。ぐるっと形成層をかじられたら、その木は枯れるしかない。半分でもかじられると、生育は大幅に遅れ、樹勢は弱る。

そうやって弱ったところに、夏になってアブラムシが大発生した。それによって翌春に伸びるはずの芽が形成されなかったのである。

ノウサギとアブラムシだけに責任を押しつけることはできない。より大きな問題は人事異動で幹部が交替したことである。十分な対策を準備する前に、ノウサギの食害が発生した。これほどの大面積でなかったら打つ手もあっただろうが、あまりにも面積は広く、苗木の数は多い。後手後手に回ってしまった。



ノウサギの食害。形成層をグルッとかがじると苗は枯れてしまう

それ以外にもニセ苗の問題があった。一般に果樹は接ぎ木苗を用いる。種から育った実生苗は、いい果実が実る可能性も皆無ではないが、商品にするには果実の品質がそろっている必要がある。そのために、実生苗を台木として、優良品種の枝を接ぎ木するのである。地下部は実生で、遺伝的に多様性があるが、地上部はすべてクローンにするのである。

よほどの名手であっても、接ぎ木の

成功率は100%にならない。普通には80%もあればよくて、下手をすると60%以下になる。ところが失敗したものも、台木の芽が伸びるので、葉のない状態では、未経験者にはその区別ができない。1994年の時点では大同ではアンズ苗は栽培されておらず、すべて隣の河北省の苗圃から購入していた。その中に接ぎ木に失敗し、台木の芽の伸びたニセ苗がかなりの割合で存在したのである。

植えるときにはわからなくても、葉が広がるとそのことがわかる。そのような苗を育てても、商品にならなかつたら収入にならない。農民は一挙に情熱を失い、自分で苗を抜いてしまうものもいたそうだ。ニセ苗であっても、現場で優良品種の枝を接ぎなおせば、問題は解決するのだが、当時はそのような知恵はなかった。

そのときには、この協力活動のための専門組織、緑色地球ネットワーク大同事務所も成立していたが、これはきわめて頭の痛い問題だった。それは日本側も同じ。これらの問題をどう考え、どのような対処策を生み出したかについては、項を改めよう。

【人材のいないところはやはり失敗】

大同の人たちは「大同では北のほうの人が性格がよくて、南に行くほど性格が悪くて人当たりがきつくなる」と話す。だとすると、一番北にある天鎮県が人はいいはずだ。それは私たちの見方とも一致する。日本から派遣するツアーは天鎮県で最高に盛り上がる。リピーターの中には「天鎮県に行くのなら参加するけど、そうでなければ参加しない」という人もいるくらいだ。大同の農村に通い続けた橋本紘二の写真集をみても、作品の半分以上が天鎮県の写真だ。単に風景だけでなく、人にひかれるところがあったのだと思う

天鎮県李二烟村は、私たちが強く引きつけられた村だった。交通は不便で、省道201号線から細い道を4km近く西に入らないと行けない。その道の両側に深い侵食谷があり、少しでも雨が降ると危なくて近寄ることができなかった。

村の人たちが「この村にはすばらしい泉があり、どんな旱魃の年にも涸れたことがない」と自慢した。連れられて行ってみると、深い侵食谷の底にある小さな水たまりで、石垣で囲み、上に1枚のコンクリート板が渡してあった。水は灰色に濁り、雑巾の搾り汁のような色をしていた。ボランティアでいつも通訳してくれていた王萍が、「こんな水を飲んでも大丈夫ですか?」と尋ねると、遠田宏が、「大丈夫ですよ。ボウフラが泳いでいますから毒はないでしょう」と答えた。

この村で緑化に協力することになったとき、ほかの村の人たちが「やめとけ、やめとけ。あの村は素寒貧だし、人はクズばかりしか残っていない」とアドバイスしてくれた。この人たちは表現が率直なのだ。そう言われると、こちらは意地でも協力して成功させてみたい。



李二烟村。何度も木を植えたが、活着することはなかった

最初に、マツを植える計画を立てた。しかし現場に行ってみると、アンズが植えられていた。アンズが育つ条件はないから、全滅するしかなかった。

翌年はマツが植えられていたが、どうしたのか、草も育ちにくい南面ばかり選んで植えてある。それも当時としては考えられもしない大苗だった。水をやる条件もないから、みな枯れていた。整地はきちんとしてあるから、村の人が手を抜いたわけではない。県の林業局から来ている技術者に聞くと、「マツは陽樹だし、小さい苗だとノウサギにやられるから大きい苗を植えたのだ」と言って平然としている。理屈の上ではそうなのだが、この地方でそういう植え方をしても活着するわけがない。

日本側が協力の打ち切りを示唆すると、通訳の王萍がささやいた。「みんな泣いていますよ」。その一言でさらに1年続けたが、成功することはなかった。

天鎮県には条件が両極端の農村がある。県城近くの低地の村は水条件にも比較的恵まれ、早くからビニール温室を使った野菜栽培などに取り組み、地元近くの消費だけでなく、北京に出荷してきた。この県は大同市の一番東にあり、北京まで遠くない。高速道路開通後はなおさら近くなった。早くから有機栽培に取り組み、天鎮の野菜といえば、北京の市場でも一般のものよりずっと高いのだという。

一方、山や丘陵にある村は、極端に貧しい。ちょっと北に上がれば万里の長城があり、その先は内蒙古自治区だ。村は小さく、人口も少ない。農家1戸あたりの耕地面積は広いが、土地はやせ、水条件が悪いので生産性は低い。大家畜を飼う余裕はなく、耕作はすべて人力に頼る。

そうなると、県の役人や技術者も有能な人は豊かな低地の村に集まり、貧しい農村にはそういう人はやってこない。悪条件がすべてそろっているのである。それでは成功できっこない。カウンターパートのほうで、そういうところは避けるようになった。

【大きかった緑色地球ネットワーク大同事務所の設定】

共青团の幹部たちは、党と政府の将来を囑望されているだけに、能力に恵まれた青年が多かった。親の七光に頼る幹部もいて、重要ポストを任されるのは却って気の毒な場合もあったが、それは少



広い畑を人力だけで耕す。長城の向こうは内蒙古自治区だ



厳しい労働がつくった老人の手。夜、お湯で温めたいと話す

数だった。

困ったのは人事異動が早すぎて、しかも引き継ぎが十分になされないことだった。半年くらい間を開けて大同に着くと、以前の間人がいなくなっている。1993年にはそれまでの雁北地区が大同市に併合されることになり、共青团も大同市委員会に一本化されることになったから、そのときの人事異動は特に大規模だった。

1994年春からこの協力事業を担当することになったのが、大同市委員会の祁学峰副書記だった。農村に行くのは初めてだという彼と一緒に、広霊県平城郷平城村を訪れた。この村で小学校付属果樹園を建設する計画が進んでいたのだ。

村の幹部から「この奥にずっと貧しい村がある。3年続きの旱魃で食糧も不足している」という話は何気なく出た。行ってみたいと思った。祁学峰もそう考えたようで、同行していた県の幹部にそのことを話した。県の幹部は私たちを行かせまいとした。そんな貧しい村を外国人に見せたくないからだった。祁学峰の粘り強い交渉によって、やっとOKが出たのは夕方になってからだった。

牛車に乗って、村へ向かった。途中から小雪がちらつき始め、村はいっそう寒々として見えた。ヒツジは毛の上からでも痩せているのがわかる。一軒のあばら家に入った。老夫婦と5歳くらいの男の子が夕食を食べているところだった。とろとろのおかゆを入れた洗面器がオンドルの上に直に置かれ、副食は唐がらし味噌の空きビンに入った漬物だけだった。政府から支給された救済食糧だというトウモロコシの麻袋が2袋、土間に置かれていた。



飛び込んだ老夫婦の家。翌年の雨で倒壊してしまった

ビデオを回そうとして、県から来た幹部に制止された。こんな村まで外国人を連れて来て、ビデオまで撮らせるわけにはいかないというのだ。間髪を入れず、祁学峰が「問題が起これば自分が責任をとる」と言った。その場では、彼が一番強い立場にあったのだろう。ほかの人たちもそれに同意して、ビデオの撮影は許された。

その後、長く付き合うことになる苑西庄村だった。

問題が起これば自分が責任を取る。こう言ってくれる人が一人いたら、仕事はどんなにやりやすいことか。それまで、相手方が次々に替わることに悩まされていたから、なおさら強く感じた。

緑化は息の長い仕事で、この協力事業を最低20年は続けたいと言っているのに、こんなに人事異動が激しかったら、落ち着いて仕事ができない。この協力事業のための専門の組織を立ち上げて、その責任者になってほしい。そう祁学峰に求めた。

即答はなかった。その間に関係方面と相談していたのだろう。やがて、日本側の考えに同意する、それを政府も認める見通しだ、という返答があり、組織の名称が「緑色地球ネットワーク大同事務所」に決まった。「緑色地球ネットワーク」を訳すと「緑の地球ネットワーク」だから、日本側の現地事務所と誤解されることが懸念されたが、先方が気に入ったものを、変えさせるわけにもいかない。しばらくして大同市政府から承認され、法人登記がなされた。

この大同事務所の設立が、その後の協力事業の発展に大きく貢献した。その後も失敗がなかったわけではないが、経験が引き継がれ、蓄積されることになった。他のメンバーは祁学峰が中心になって集めた。類は友を呼ぶというのはその通りで、信頼のできる人たちが集まり、しかもみな長期にわたってこの事業を担ってくれている。

【悪いことはいいことに変えることができる】

大同県徐疇郷のアンズの大失敗を、成立してまもない大同事務所と日本側とで真剣に総括した。植林は悪い結果はすぐ出るけれども、いい結果が出るまでには長い時間がかかる。『アンナ・カレーニナ』の冒頭でトルストイは「幸福な家庭は一様に幸福だけれども、不幸な家庭はそれぞれに不幸だ」と書いたけれども、緑化プロジェクトでは、成功するプロジェクトは基本をしっかり守ることで実現され、特別な秘策があるわけではないが、プロジェクトが失敗する原因は本当にそれぞれで、予め予想が立てられるものではなかった。

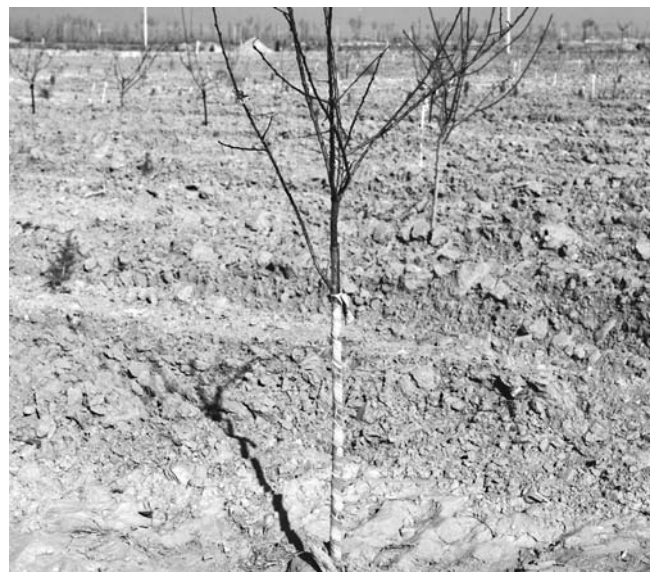
たとえばノウサギの食害はほかの村でも発生した。村の幹部たちに「被害が予想されるから早めに対策するように」と促しても、彼らは「ノウサギなんか見たこともない」と言って本気にしない。ところが果樹の苗木を植えると、どこからか集まって来て、苗木をかじるのである。

自然災害のひどさも私たちの予想をはるかに超えている。初期に私たちが大同を理解する上でとても役立ったのが『中国生活誌－黄土高原の衣食住』（大修館書店、1984年）という本で、雁北地区の生まれ育ちの羅漾明と竹内実の対談集だった。その中で、上流で雨が降ると、普段は道になっているところに2階建てほどの黄色い壁のような土石流が大きな音とともに押し寄せてくる、といったことが語られている。まさか、そんなことがあるはずがないと考えていたが、私たちの協力プロジェクトでも、深さ4.2mもの土石流が発生したことがある。何が起るかわからない。

そして、郷や村の幹部にも植樹の経験は少なく、彼らが考えるのは、村人を大動員し整地と植栽を行う、そこまでのことであり、問題の多くはその後に発生することが彼らの視野には入っていない。予め十分な対処法を求めても、それは無理である。仮に問題が発生しても、規模が小さければ何らかの対応ができるし、被害を受けても損失は小さくてすむ。つまり、地元の管理能力を超えたプロジェクトに取り組めば、それは必ず失敗に終わるとのことだ。

経験のない村で最初に取り組むときは、規模は小さい方がいい。そこで経験を積み、問題への対処法を知り、自信をつけてから徐々に拡大することにする。それが教訓の第1だった。

第2に、農民は自分の利益が侵されることに対してきわめて敏感である。将来の利益になると言われても、目の前の利益が損なわれることに、激しく抵抗する。それは歴史的に形成されてきたものであり、決して無視できない。果樹園を建設する場合も、農民が大切にしている畑はできるだけ避ける。耕作を放棄された畑、荒



古布を巻いて、ノウサギの食害から苗を守る

れ地などを新たに開墾して植えた方が問題が発生しなくてすむ。

このように厳しい環境の中で緑化を成功させるために最重要なのは良質の苗木の確保である。外部の、特に遠方の苗圃から苗を購入していたのでは、ニセ苗の問題や苗の傷みが避けられない。安心して緑化を進めるためには、独自の苗圃を持つしかない。それが協力拠点の環境林センターの建設になったのだが、それについては後に述べる。

(4) 無理解から出発して信頼関係を築く

【ダ～ダオ・リーベン、ダ～ダオ・リーベン】

「酒はうまいし、ねえちゃんはきれいだ」と言われて臨んだ大同だったが、天国のようなところではなかった。当初のプロジェクトが次々に失敗したのは、自然条件の厳しさや技術の不足といった問題もあるが、それ以外に歴史問題の存在をあげなければならない。

1992年の4月、日本側から当時の代表と担当者の二人が参加し、渾源县西留郷で龍首山プロジェクトの起工式が開催された。爆竹と銅鑼・太鼓の音が響く中、赤い布が除幕されると、高さ3m、幅5mもある巨大な記念碑が現れた。緑の地に、「中日友好交流青年友誼林」の黄色の文字が躍っていた。

その年の秋、緑の地球ネットワークのスタッフが記念碑に近づくと、同行していた共青团渾源县委員会の責任者が急に走り出し、自分の背中で記念碑の一部を隠しながら、服の袖で何かをこすっていた。そこには「打倒！日本帝国主義」と泥で書かれていたのだ。

それから何年も経ってから、親しくなった青年が話した。「村に最初にあんたが来たとき、村の子供たちが後をつけて、『ダ～ダオ・リ～ベン、ダ～ダオ・リ～ベン』（打倒日本、打倒日本）と節をつけて歌いながら、小石を拾っては投げるまねをしていたんだよ」。おそらくその青年もその中の一人だったのだろう。

大同事務所の武春珍所長は、木を植えて育てることをよく子育てに例える。小さいうちは育てるのが大変だが、大きくなっても心配や苦労はなくなる。そして、苦労ではあるけれども、育っていくのを見るのは本当にうれしい、とも。

それからすれば、日本側と中国側は植えた苗木の両親のようなものだろう。それがお互いに無理解で、いがみ合っていて、植えた木がうまく育つはずがない。

大同を初めて訪れたとき、ここが日中戦争で大きな被害を受けたところとして中国でも有名なことを、うかつなことに私たちは知らなかった。日中戦争についての一般的な知識がなかったが、大同がそれほど大きな被害を出したことについては知らなかった



西留郷の除幕式で記念植樹をする佐野茂樹代表（右2）

のだ。

【第2の満州国】が存在した】

1990年代半ばのこと。ワーキングツアー参加者と一緒に陽高県の致富山でマツを植え、その日の昼食を朱家窩頭村の農家でごちそうになった。オンドルの上で食事をしていると、10人近い年配の女性たちが集まってきた。日本人が変わったそうだけど、どう変わったか見たいというのが彼女たちの希望だった。箸を使ってくれ、酒を飲んで見せてくれと注文が続いた。



ラバ、ロバなど大家畜を使って耕すのは条件のいい平地の村

彼女たちが立ち去り、ツアーのメンバーと離れて高見が一人になるのを

待って、男の老人が近づいてきた。ポケットから一枚の紙片を取り出し、「あんたたちの国が作った紙幣なんだから、使えるお金に換えてくれ」というのだ。

1枚だけなら話の種にほしいと思ったが、たくさん集まっても困るし、何かの問題に発展しても厄介なので、断った。あとで調べると、日本の主導によって張家口を中心に「蒙古連合自治政府」が作られ、大同もその一部だった。言わば「第2の満州国」がここに存在したのだ。

まだ雁北地区と大同市の合併前のことだが、共青团懐仁県委員会の田東書記とは親しい付き合いが続き、彼の自宅を何度も訪れたことがある。あるとき彼が「自分たちの懐仁県は『模範県』だった。そのために、徹底抗戦した靈丘県や渾源県の人たちには、今でも頭が上がらない」と語ったことがある。「模範」とはこの一帯を支配した日本や「自治政府」から見て、模範的だったということだ。

それに対して靈丘県や渾源県では、主に山岳地帯の農村を拠り所にして、日本軍や「自治政府軍」に長期にわたって徹底抗戦した。それらの拠点は「老区」（根拠地）と呼ばれ、中華人民共和国の建国後も特別扱いされていた。その後、私たちが協力拠点を置くことになる靈丘県の南山区は、まさにその老区だったのである。

田東は「日本人は許せても、漢奸は許せないと思っている中国人は少なくない」とも話した。漢奸とは中国人でありながら日本に従った者のこと。戦争は、中国国内にも深い亀裂を残していたのである。

【群衆に取り囲まれたカメラマン】

2013年8月、カメラマンの橋本紘二が12年ぶりに大同を訪れた。彼は1995年から6年間、大同に繰り返し通い、農村で撮影した作品で写真集『中国黄土高原－砂漠化する大地と人びと』（東方書店、2001年）を出版し、同じころ緑の地球ネットワークは彼の作品によって、JRの京都駅、大阪駅、広島駅、岡山駅、名古屋駅、東京駅の構内を借りて、同じ題の写真展を開いた。

その彼が、以下のような体験をしたことがある。そのときの記録を引いてみよう。

大同市の天鎮県でのことです。昼休みに橋本さんは県城の町を歩いていました。肩からかけた何台ものカメラで日本人とわかったのでしょうか。一人の老人が彼を呼び止め、指をつきつけながら、激しく罵ってきたのだそうです。橋本さんは中国語がわかりませんが、日中戦争のことを言っているんだ



カメラマンの橋本紘二。この協力事業に果たした貢献は大きい

ろうな、とは見当がついたそうです。口のまわりをアワだらけにしなが、老人が怒りをぶつけるのにあわせて、取り囲んできた数十人もの中国人がしだいに興奮するのがわかったそうで、むしろそちらに恐怖を感じたそうです。

人だかりしているのをみて、同行していた通訳の張さんが、何かがあったと感じたようです。覗いて見ると、輪の中心に橋本さんがいました。

老人は、「自分が3歳のときに、親兄弟も親戚も日本軍に皆殺しにされた。自分は孤児になり、苦労苦労の連続で生きてきた。そういう事実があるのをおまえは知っているか!」とつめよっていたのです。

橋本さんは、すなおに謝りました。通訳の張さんが、「ここ数年、日本人が緑化の協力に来ているのを知っているか。この人はその一員だ」と言ったところ、その老人は「それは悪いことをした」と言って、橋本さんのカメラマンベストのポケットというポケットに、売り物のヒマワリなどの種を詰め込みました。

橋本さんは、その後、天鎮県に行くたびに、その老人が元気になっているかどうか探しにいきます。老人も、日本人が来ているときくと、橋本さんが混じっていないか、探しにきます。昨年(1998年)はその老人を橋本さんが夕食の席につれて来たので、ツアーのメンバー全員で乾杯しました。どこかで知らされないと、私たちは歴史に気づくことができません。そしてそれを克服するには、やはり過程が必要だと私は思っています。(高見記)

【「根拠地」で旧知と再会した日本人】

日中戦争より後のことだが、中国の歴史とこういう付き合い方をした日本人もいる。やはり、当時の記録から引いておこう。

2002年3月のワーキングツアーに、81歳の浦田勝美さんが参加しました。初めて知りあったのは1971年で、それからずっとお世話になってきました。当時の私の師匠は「浦田さんほど誠実な人はいない。人間はああでなければならない」といつも話してくれました。緑の地球ネットワークの最初からの会員です。

浦田さんは、1940年に召集兵として中国にきました。復員後、中華航空の整備士として北京で働いているときに、敗戦を迎えました。寮の先輩から、「日本に帰っても、食いのものもないぞうだ。自分たちの腕を生かして、食べていける仕事がある中国にある。一緒に行ってみないか」と誘われました。

着いたところは、張家口の八路軍部隊。まもなく共産党と国民党との内戦がはじまり、浦田さんは人民解放軍の一員として、河北省と山西省の境の太行山脈で活動しました。1947年ごろのことです。

1958年に帰国した浦田さんは、自動車修理の仕事をしながら、日中友好運動にとりくんでいました。車検のたびに訪ねると、浦田さんは当時の話を私にしてくれました。村の洞窟にディーゼルエンジンをすえて、発電していたというのです。長男はその近くで生まれたけれども、母親は乳がでなかったで、村の人に乳母になってもらって育てた、とも聞きました。幼い子どものために、タマゴを持って来てくれる人もいたそうです。そのときの体験が、浦田さんのその後を決めたようです。

私たちは1994年から、村の小学校に付属果樹園をつくることにしました。第1号となったのは、靈丘県上寨鎮下寨北村です。その話を私がすると、浦田さんは「上寨は私がいたところだ」と言いました。「ずいぶんと日本軍が荒し回ったところですよ。あんなに貧乏なところはみたことがない。着るものも、フトンもなかった。ああいうところに協力するのは、大変いいことですよ」と言ってくれました。

「もう一度、あそこの村に行ってみよう」と、浦田さんから相談を受けました。でも浦田さんは、上寨鎮までは憶えていても、村の名前は思いだせません。「上寨までいけば、思いだせると思います」と浦田さんは言います。「見つかるといいですね」と答えながらも、私は自信がありませんでした。上寨鎮には20以上の村があるんですから。

3月25日の夕方、靈丘に到着すると、県の青年団の幹部が私に耳打ちしました。「彼が住んでいた村が見つかった。彼のことを憶えている人も何人かいる。目の小さい男だった、と彼は言っているけど、本人とピッタリだ。まず間違いはない」。そういわれても、私は信じませんでした。

翌日、浦田さんはツアーのスケジュールを外れて、その村へ出かけました。私もお伴をしたかったんですけど、そうもいきません。青年団の幹部から、「やはりそうだった」という電話連絡がありました。同行した大同の新聞記者が帰って来て、「お互いに大感激の再会だった」と言いましたが、それでも私は信じません。

武春珍所長が「どうして高見は信じない、なんて言うんだ。一緒に行った人がそう言ってるじゃないか」と言っても、私はまだ「いや、信じない」と言い返しました。



この村に何が私たちを導いたのか、不思議に思えてならない

その翌々日、大同に帰って浦田さんに会い、「いかがでしたか？」と聞きました。「見つかりました。ディーゼルエンジンで発電した洞窟はつぶれて入れませんが、ほかのいくつかの洞窟は残っていました。86歳の老人を初め数人が私が行くのを待っていてくれました。私のことを憶えてくれたんですよ。その老人は『あんたの子どもはまだ小さかった。私の妻が帽子をつくってあげたのを憶えていないか?』と聞いたんですよ。その言葉でそのころのことが一斉によみがえってきたのです。ほんとに来てよかった。何年か後だったら、会えなかったかもしれない」。本人からそう言われたら、私も信じるしかありません。

でも、こんなことがあっていいのでしょうか。その村は下寨北村です。1993年の秋、初めて訪れ、あまりの貧しさに衝撃をうけた村です。そして第1号の小学校付属果樹園を建設しました。村の人は労賃をプールし、ほかからの支援も得て小学校を建て直しました。たんに木を植えるだけでなく、貧困問題の解決も同時に考えなければならぬことを、あの村を通じて学んだのです。

たんなる偶然とは思えません。霊丘にはたくさんの郷・鎮があります。その中で、どうして上寨鎮なんですか。上寨鎮の中にもたくさんの村があります。その中で、どうして下寨北村なんですか。こういうことに会うと、人間を超越した存在を考えたくくなります。神さまです。その神さまはイタズラがすきで、こういうことを仕組むんですかね。

なお、この再会の場面は、大同テレビで繰り返し放映され、大きな反響があったという。(高見記)

【日本人と活動するのはいやだったけど】

大同事務所の武春珍所長が一度だけ、こんな話をしたことがある。彼女は1963年の生まれだから、当然、戦争中のことなど体験しているはずがない。ところが子供のころから一つの話をもとに母親から繰り返し聞かされて育ったそうだ。母親の実家はかなり裕福で、大同の中心部に大きな家を構えていた。1930年代末の冬の日、大掃除をすませ、切り絵などを飾って、春節を迎える準備を整えていたところに、日本軍がやって来て、この家を接収するので、すぐに出て行け、と命令したのだという。厳冬の最中に家を失ってしまった。

彼女にとって、日本というのは憎らしい存在でしかなかった。それなのに、共青团大同市委員会で働く彼女に、日本との緑化協力を担当するように指示が来た。最初はとてもいやだったそうだ。実際に仕事をするようになってみると、日本からやって来る人たちは、みな気持ちのいい人ばかりだったそうだ。そこで日本への認識が少しずつ変わり始めたのだという。

大同事務所の仕事に就いて、各県の農村を回ったが、緑化の形跡はあっても、育っているところはほとんどなかった。自分たちが植える木も育つとは思えなかった。ところが育っていく。だんだん背が高くなり、緑が濃くなっていくのを見ると、うれしくてしかた



この協力事業を成功へと導いてきた武春珍所長。苗圃で

がない。これはたんなる仕事ではなく、自分を実現していくことなんだという誇りが生まれてきたというのである。

【経済発展のためには汚染すらほしい】

2013年4月、緑色地球ネットワーク大同事務所の初代所長だった祁学峰（現中国共産党大同市城区委員会書記）に、「この協力事業が20年以上も続き、発展してきた理由はなんだろう？」と尋ねると、彼は「それは環境問題を課題にしたからだだろう」と即答した。それには同意するが、中国側が最初から環境問題を重視していたわけではない。

1993年のことだった。当時、中国側の主要メンバーの一人だった常健民に、「このままいけば、中国の環境問題は大変なことになる。早く舵を切らないといけない」と話すと、彼の答えは「それは先に豊かになった日本人の勝手な議論だ」というものだった。

「中国は十数億人が食べていけないといけない。それが最優先で、そのためには経済発展が欠かせない。経済発展に環境破壊が付随するとしても、それは甘んじて受け入れる。自分たちには汚染すらほしいのだ」というものだった。

共青团は、その任務の中に緑化活動を含んでいた。将来の党と政府の幹部を輩出することが共青团には期待されており、共青团の活動はそのための訓練の場と考えられている。たくさんの青年を動員し、緑化を進めることは、格好の活動分野なのだろう。

ただし、最初のころ、青年たちが緑化活動を重視しているとは思えなかった。農村に行って植樹作業に取り組むと、子供たちは学校の先生の指導の下で、水運びなどにとっても熱心に働いた。農民たちも、平素、自分たちがやっていることに、きちんと取り組んでいた。

ところが共青团県委員会の幹部たちがだめなのである。現場に入りたくない。自分で汗を流したくない。日本からのボランティアと農村の大人や子供が一生懸命働いているのを横目で見ながら、立ち話をしている。疲れてくると、座り込む。退屈してくると、トランプまで始める始末だった。「こんなことでは、他に対する悪影響が大きいから、現場に来ないでくれ！」などと苦情を言うことさえあった。

それは、中国政府が緑化を大声で叫び、農村に過大な任務を負わせながら、予算措置をとって



厳しい自然災害の中でも、子供たちの笑顔は消えない

なかったのに対応している。苗木代程度の経費は出るが、それよりはるかに大きな賃金面の保障はなかったのである。多くのプロジェクトでは、整地や植栽の作業は義務労働で、農民がそれに参加すると労働点数として記録に残され、将来、用材などとなって販売され、収入が入ると、労働点数に応じて分配される、ということだった。

大同のような乾燥地では、植えさえすれば育つ、というわけにはいかない。実際に、植えても全滅するプロジェク

トも少なくなかったのである。労働は義務でありながら、それへの報酬はずっと先のことで、しかも確実に入る保障はないとなると、関係者の士気が上がらないのは当然である。

その後、環境問題に対する中国全体の考え方に巨大な変化が起こったが、それにはもう少し時間の経過が必要だったのである。

【ワーキングツアーが現場と日本をつなぐ】

緑化協力ツアーの派遣は、緑の地球ネットワークの活動にとって、大きな意味を持っている。「お互いに顔の見える協力関係をつくるために…」と言い続けてきたが、もっと実際的には、特別な背景も支持団体もない、生まれたばかりの小さなグループが、活動を開始し継続するためには、緑化の必要性を理解してもらい、それが成果を上げることを自分の目で確かめてもらうしかなかった。

最初のうちは、発起人が自分の友人たちを強引に誘って参加してもらった。そうやって現地を訪れた人が、次は自分の家族や友人を誘って参加してくれた。やがて、新聞やテレビがこの活動を取り上げるようになり、それをみて参加する人も出てきた。

緑の地球ネットワークが独自に派遣するワーキングツアーは3月末から4月上旬にかけての春と、7月、8月の夏である。8月は日本では盛夏だが、大同では8月10日前後の立秋を過ぎると急に気温が下がるのが普通で、それ以後のツアーは秋のツアーと言ってよかった。

参加者数が増えたのは、小学校付属果樹園のプロジェクトを開始してからだと言っていいだろう。それによって、村の人たちとの距離が縮まり、小中学生が作業に参加するようになったのが、参加者の楽しみを倍増してくれたのだ。

農村が活気づくのは、早朝と夕刻である。特に夏の暑い時期は、農家は朝の涼しいうちと、日が陰ってからの夕方に働き、昼間は休んでいるのが普通だ。大同市内や各県の県城のホテルに泊まって、そこから農村に出かけると、朝夕の一番いいときを体験することができない。少数のスタッフなら農家に泊まることもできたが、多人数のツアーでは実現が難しかった。

いっそのこと、農村に宿舎を建てればいいと考えて、1994年に渾源県西留郷の郷政府の敷地内に建てた。この地方の伝統的な様式がいいと考えて、レンガ建てのヤオトン（窑洞）にした。この宿舎は2度ほど使用したが、それ以後は使えなかった。ツアー参加者の数が増えて、収容できなくなったのが理由の一つ。二つ目には西留郷のプロジェクトが失敗し、この村を訪れることがなくなったためだ。



「あたしも植える」。子供たちとの作業が楽しみに

【農家でホームステイを実現】

それでも、農村に宿泊したいという強い希望は中国側に伝わった。1週間前後の大同滞在中に一晩は農家にホームステイすることが実現したのである。

受け入れる側の負担は軽くなかった。部屋数に余裕のある農家があるわけではなく、遠来の客を迎えるために、家族の何人かが親戚の家に泊まりに行く。何か問題が起きれば大事になるので、数名の公安が村に泊り込み、村の幹部が夜通しパトロールした。



ホームステイを終えて集合場所へ。ほかでは味わえない体験

ツアー参加者には大変好評だったが、決して快適だったわけではない。むしろ逆だった。農家には風呂はおろかシャワーもない。朝、顔を洗う水に困る村さえあったのである。

後で述べるように広霊県苑西庄村で私たちは井戸掘りに協力したが、あの村でもしばしばホームステイした。各家に水道が引かれ、水に困ることのない普通の村になっていたが、村の人たちの歓迎ぶりは普通ではなかった。よその村に嫁に行った女性たちも、その日は村に帰って来た。まるで村祭りに遠くの親戚を迎えるような歓迎ぶりだった。

2010年頃から事情が変わってきた。後で述べるような大同市の大膨張の波が私たちの協力プロジェクトを洗う中で、拠点の移転、新設が連続し、大同事務所があまりにも多忙になって、農村のホームステイを準備する余裕がなくなったのである。

【労働組合や企業がツアーを派遣】

緑の地球ネットワークが独自に派遣するもののほかに、他の団体が派遣するツアーも受け入れるようになった。最初に派遣してくれたのは全ジャスコ労働組合（現イオンリテールワーカーズユニオン）である。1995年はつらい年であった。1月早々に阪神淡路大震災が発生し、緑の地球ネットワークの事務局員の全員が被災した。春のツアー派遣の時期が迫っていたが、参加者が集まるかどうか分からない。そんなとき小さな新聞記事を見て、全ジャスコ労働組合の書記長が事務所を訪ねてくれたのである。次期の書記長に予定されている新妻健治が春のツアーに参加することが決まり、その翌年から労働組合として独自のツアーを派遣することになった。あの年にこの新たな協力がなかったら、難局を乗り越えることはできなかったと思う。

労働組合同士のつながりから、サントリー労働組合、OFS（オリエンタルランド労働組合）などの独自のツアー派遣が実現した。采涼山プロジェクトを初め、サントリー労働組合が最初に関わったプロジェクトはなぜか成功することが多い。ツアーの派遣は、東北電力総連、自治労大阪府本部など他の労働組合へも波及して行った。

さらに、リコー、富士ゼロックス端数クラブ、ローソン、東芝などの企業やそのサークルがCSR（企

業の社会的責任) 活動の一環として大同へ協力ツアーを派遣してくれた。

経団連自然保護基金を支える経団連自然保護協議会も、大久保尚武会長(当時積水化学工業社長)を団長とするミッションを大同に派遣して、協力プロジェクトをつぶさに視察し、高い評価を残してくれた。

私たちが派遣するツアーには、2004年から2013年までに19回も参加した石田和久のような人もいます。10回以上の参加者は10人に近い。これまでに大同を訪れた人たちの延べ人数は3,500人に達する。



全ジャスコ労働組合の最初のツアー。陽高県でアンズを植える

それだけのツアーを派遣しながら、大きな事故は起こっていない。それには北京の友人たちの助けが大きい。北京同心社文化有限公司(前身は東方之星総合企劃有限公司)の李建華社長は、この協力事業の計画段階から、的確なアドバイスを続けてくれた。そして、ワーキングツアーの実施に当たっては、毎回通訳を派遣し、北京空港到着から出発まで、安全だけでなくその快適さまで心を配ってくれたのである。

ツアーが継続してきたことは、この協力事業がたゆまず前進してきたことの何よりの証だと思う。失敗ばかりだったら、ツアーが続くこともなかった。毎年少しずつでも緑化面積が広がり、植えた木が生長していることを実感してもらえたから、ここまで来られたのだと思う。そして今は、ツアーを続けることができる間は、この協力事業も生命を保つことができると考えている。

(5) 日本の専門家の参加と協力拠点

【実現した日本の専門家の参加】

初期のプロジェクトで失敗が続くことを知って、1993年5月の緑化協力団の団長だった清田祐一郎が忠告してくれた。「信頼できる専門家を日本でも探したほうがいいよ。あなたたちが真剣に口説いたら、協力してくれる専門家が必ずいるはずだ」というのである。

そのころ渾源県では、北岳恒山の麓に国家級森林公園を建設する計画が進行していた。そして、親しくしていた渾源県林業局の温増玉局長が現地の責任者だった。その森林公園の一面に「引種園」を作り、ほかの地域から新しい植物種も導入する計画があった。その事情と協力の依頼をA4版1枚にまとめてもらい、100枚ほどを謄写版で印刷し、林業局長の印を押してもらった。

それに日本語訳をつけ、それまでにつかんだ現地の自然条件などをまとめたプリントを同封し、日本の100ほどの植物園の園長あてに郵送したのである。ほかの目的には使わないと約束して、植物園協会からリスト提供してもらったのだ。東北大学理学部附属植物園の遠田宏園長、環境庁新宿御苑管理事務所所長からは丁寧な返事があり、種子を送ってくれたところもあった。

スタート時から世話人だった川島和義(現副代表)から耳寄りの話があった。枚方市在住の立花

吉茂という植物の専門家と会うことができるというのだ。大阪の鶴見緑地にある大阪市立咲くやこの花館を川島と高見の二人で訪ねた。立花は、1990年の花と緑の万国博覧会で植物プロデューサーを担当し、その後は咲くやこの花館の技術顧問をしていた。

立花の最初の一言に驚かされた。「国際協力とか NGO とか言っても、知識も経験もないから、バカなことばかりやってる。大量の水を必要とするポプラを、乾燥地に植えるなんてことを

やってないでしょうな?」。「先生を訪ねて来たのはバカことをしないためです」とやっと答えた。

その後の立花の話がすごかった。「植物園の英語名は Botanical Garden で、直訳すると植物学・園。工業化以前の世界では植物園が最初で唯一の研究機関だった。植民地主義の時代に、イギリスはインドの港の近くに植物園を建設し、インド中の有用植物をそこに集めて栽培方法を確立し、それを植民地経営の基礎にした。しかし、そのときと今とは時代が違う。今は地球環境が問題になるときだから、黄土高原のような砂漠化地域に植物園を建設し、可能性のある植物を集めて、試験栽培と馴化を進め、有望なものを広めていくといったことが必要なのではないか。そこまで本気でやる気があるなら、自分も参加しよう」。その話を聞きながら、やるべき課題が見えてきたと思った。



北岳恒山に残るトウヒの森林。神様の力が守り抜いてきた

【環境林センターの設立】

立花は1994年8月に派遣した最初の専門家の調査団に団長として参加し、その後、緑の地球ネットワークの代表を引き受けた。1994年の調査団には、遠田宏、前中久行も参加した。

植物園のほかに立花の提案はもう一つあった。このような活動を海外で展開するにはパイロットファームのようなものが絶対に必要だ、というものだった。いろんな実験をしたり、技術者の研修をしたり、良質の苗木をつくったり、そのような場所が求められている、というのだ。

ちょうどそのころ、大同では緑色地球ネットワーク大同事務所が成立し、祁学峰が所長に就任して活動を強化しつつあった。それまでの活動を点検した彼は、次のような提案をしてきた。「いくつもの県に防護林や小学校付属果樹園をつくったのはいいが、これが散在しているだけでは管理ができない。協力の拠点になるものをつくり、そこが全体を有機的に結びつけ、牽引するようにはしないといけな



立花吉茂の参加の条件は植物園建設だった

い」と。

それは立花の提案するパイロットファームと一つのものとして実現できる。1994年の春先から郵便その他を通じて、その相談が進められ、8月の専門家調査団にはその拠点建設の場所を決める仕事もあった。

大同に着いた専門家は、協力拠点の候補地として、南郊区平旺郷平旺村の果樹園に案内された。事前の連絡では大同県倍加造鎮の名があがっていたが、どうして場所が変わったのか、その理由は示されなかった。

南郊区の平旺村は市街地に近い郊外にあり、市の中心部から車で30分ほどの交通の便のいいところだった。栽培されている果樹はリンゴナシで、見かけは皮の赤いリンゴ、実体はナシというものだった。品種が古くなり、価格も安いということで、あまり熱心には管理されていなかった。その中の一部、50ムー（およそ3.3 ha）を無償で提供するとのことだった。

大同の農村でそれまで見たことのない肥えた土地だった。果樹の合間に栽培されていたキャベツは直径40 cm以上に育っていた。ヒユやシロザなどの雑草も人の背丈ほどもある。とにかくひどい雑草だった。

こんな豊かな土地で育てた苗を荒れ山に植えたら、すぐにショック死しないかと疑問に思った。専門家の一人からは「いや、植える場所に近い条件を作ればいいのです。条件の不足するところで、それをプラスするのは容易ではないが、いい条件のところでは何かの条件を除いていくのは簡単です」という回答があり、その場所を使うことになった。名前は環境林センターにした。

そのときの活動で、いくつか印象に残ることを書いておこう。日程の最後のほうで、大同県の遇駕山を訪れることになった。中国側の説明によると、1985年に建設されたマツの造林地で、その面積は14,000ムー（933 ha）にもなる。専門家の中からは「まさか？」という疑問の声が出た。その後、車で現場を見学した。小さな苗を植えたのだろう、植栽後9年が経過しているのに、樹高は1 m余りだった。車は走り続けているのに、なかなか造林地が切れない。こんなところでも中国の広さを思い知らされた。

渾源県で県の国営苗圃を参観したとき、一つの教室で技術研修が実施されていた。講師は若い女性で、受講生は郷や鎮の林業ステーションの技術者たち。黒板に「菌根菌」の大きな文字が書かれ、その説明がなされていた。調査団の一人が「こんなところでも菌根菌のことを勉強しているんですね」という驚きの声をあげた。帰国後にそのことが話題になり、私たちも菌根菌の活用を真剣に検討するようになるのだが、それについては後で述べる。

【専門家の参加でツアーも活気づく】

調査団のメンバーの一人、遠田宏はそのとき東北大学理学部附属植物園の園長だったが、退職後の1996年以降は、毎年春と夏の2回、現地に来て活動した。最初の間は寡黙で、ずっと何かの調査を続けていた。ある年の春のツアーでは、アンズを植えるための植え穴に入っては、計器を押し当てて土の硬度を測定した。根が土の中に伸びて行けるかどうか、その調査だという。いくつも、いくつも測った後、「これはムダでした。黄土という土は、乾燥しているときと、水を含んだときとで、硬度が極端に違うのです。植物は雨が降った直後を利用して根を伸ばしているのでしょう」ということだった。



遠田宏顧問。最初の数年間は現地を理解することに専念したに走り回った。それもツアーの大きな魅力になっていた。

大同に通ってくれる専門家の多様さは、緑の地球ネットワークのプロジェクトが誇っていい大きな特長だと思う。逆説的ではあるが、それにはこのプロジェクトが当初、素人ばかりで出発したことがよかったのだと思う。もし、どなたか有力な専門家が始めたとしたら、その系列の外の人には気楽に参加できなかつただろう。

それからもう一つ、素人が始めたために、そのスタンスは最初から現地の活動を応援する、というものだった。もし日本の高名な専門家が始めていたら、現地の人たちは、そのプロジェクトを支える働き手ということになり、本末転倒になっていたかもしれない。そして、現地在失敗続きで困っているときに、日本の専門家が手を差し伸べたから、彼らも喜んでその助けを受け入れたのだ。後から考えると、理想的な形ではなかつたかと思う。負け惜しみではなく。

【阪神淡路大震災の直後に拠点建設に着手】

新しい協力拠点の建設は1995年4月から始まった。大同市の副市長の出席のもと、起工式をもつ



大同事務所と環境林センターのスタッフたち。管理棟の前で

た。遠田の興味は植物のことに止まらなかつた。歴史、地理、社会、あらゆる分野に及んでおり、現地で疑問に思ったことを帰国後に徹底的に調査し、日本で抱えた疑問を現地でしつこく調べた。

ワーキングツアーがやってくると、毎晩、有志が遠田の部屋に集まって、酒を酌みかわしながら、さまざまな問題について語り合った。リピーターの一人、藤原國雄はその優等生で、この集まりを遠田ゼミと呼び、ゼミ生募集

た。日本からは有元幹明副代表が参加し、「協力事業の新しい拠点を建設し、さらに事業を発展させる」という力強い挨拶を行った。レンガ建て平屋の四合院をまねた管理棟が建てられ、苗圃が一気に整備された。しかし、その内実はかなり厳しいスタートだった。

その年の1月17日、阪神淡路大震災が発生し、緑の地球ネットワークの専従事務局員の全員が震度7の地域に居住しており、被災者救援などの活動に奔走していた。それ以上に困難だったのは、事業開始から2～3年を経過

しているのに、目に見える成果をあげることができず、発起人の中からも離脱する人が出始めていたことだ。

だが、阪神淡路大震災は、その一方で数多くのボランティアの活躍の場となり、ボランティア元年といった表現さえ生まれた。緑の地球ネットワークの世話人や会員もその中で活躍し、活力を受け取ってもいたのだ。阪神淡路大震災をくぐり抜けることで、緑の地球ネットワークは体質を強化したのだと思う。

環境林センターは現地では恵まれたスタートを切った。前述したように3.3 haの土地は20年間の無償貸与を受け、燃料・運転手付きで村が派遣してくれたトラクターが苗圃を切り開いていった。その上、大きな声では言えないが、電気は盗電、水は盗水だった。電気はメーターを通さずに電線につながれ、水道は果樹園の中にある井戸から近くの炭砒職員住宅に送られる水道の幹線に直結されていたのだ。

センターの組織は、立花代表の提案に従い、育苗部、花卉部、研究部、管理部という4部構成を採用した。創設時から花卉部をおき、粗末ながらビニール温室などを作ったのは、「樹木の苗だけを作っていたら、サイクルが長すぎて、なかなか技術が向上しない。花や観葉植物を栽培することで、短期間に植物を理解できるようになり、技術の向上が進む」という立花の考えに基づいていた。

環境林センターの建設に当たっては、共青团南郊区委員会書記の徐尚紅が奮闘した。邢雁俐經理(所長)を初め有能なスタッフにも恵まれ、環境林センターは順調に成長した。やがて土地が手狭になり、村は新たな土地をやはり無償で提供してくれ、6 ha強にまで拡大した。

【根に酸素—植え方の改善に取り組む】

この段階で、植栽や育苗技術をめぐり、二つの大きな改善がなされた。一つは苗木を植える際に、土壌の通気性を改善することだった。

協力事業を開始したころのプロジェクトは失敗続きだった。植えても植えても苗が枯れ、全滅することすらあった。地元の技術者はその惨憺たる結果を前にしても、「ひどい早魃で雨が降らず、水不足のために枯れてしまった」と言うだけだった。

現場での作業をビデオに撮り、マツやアンズを植えるところを、立花に見てもらった。専門家調査団を派遣する前で、立花は現地を見たことはなかったが、ビデオを見るなり、「ああ、これでは枯れて当たり前です。水不足で枯れるのではなく、根が窒息して枯れているのです」と話した。

アンズの苗を植えるとき、丁寧なところでは次のように植えていた。直径60 cm、深さ60 cmほどの大きな穴を掘り、苗の根の状態にあわせていくらか土で埋め戻し、それから苗を置く。日本よりずっと深植えて、根の周囲は



立花吉茂の指導。実際の手腕でも現地の技術者を驚かせた

腐植を含んだ表土で覆い、ある程度まで土をかけた後、水をやり、さらに土をかけて、それを足で踏み固める。そうすることで根に土を密着させ、水の蒸発を防ぐ。それからもう一度水をやって、水が地中に浸透するのを待って、上にパラパラッと土をかける。最後にかける土は、水が蒸発しないよう、マルチ効果をねらうというのだ。

立花は、水をかけた後、足で踏み固めたら、土の中の空気を追い出してしまふ。黄土高原の土は世界でも稀な粒子の小さい土で、そんな土に水を混ぜてから足で踏み固めたら、それは日干しレンガに苗を突っ込むようなもので、根が窒息して枯れるのだという。人は誰も、根に水や肥料分が必要なことは知っているが、根は呼吸をしており、酸素が必要なことを忘れている人が多い、というのだ。そして彼は、逆に、目の粗い砂や礫、石炭の燃え殻などを加えて、通気性を改善するのがいい、絶対に足で踏んではいけないと言うのだった。

現場の技術者にそれを納得させるのは、とても困難なことだった。1996年の春、立花は、砂や礫、木炭屑などを加えて通気性を改善した土を用意し、環境林センターで栽培している花や観葉植物を自分で植え替えてみせた。そのとき一人の技術者が自分の大切にしている鉢物を物陰に隠した。それを引き出して、それも立花に植え替えてもらった。ところがその技術者は、日本人が帰った後、また元の土に植え替えたのである。

現地の技術者がサクラをほしがった。日本人にとって中国の象徴はパンダだろう、中国人にとっての日本は富士山と桜だというのである。寒いところでも可能性のあるオオヤマザクラ、チシマザクラの種子を用意し、自分で調合した土に立花がそれを蒔いた。その年の夏に行ってみると、サクラはとてもよく育っており、1本ずつポリポットに植え替えることになった。現地の技術者はその根の発育ぶりにとても驚いた。そしてサクラ苗の小さな根が、木炭クズに絡みついていることに気づいた。木炭にはたくさんの空隙があり、そこには酸素がある。サクラの苗は酸素を求めて木炭のところに根を伸ばしたのである。このような経験を経て、少しずつ理解が広がった。

【実験を繰り返して理解を広げる】

植林の現場でも比較実験をした。渾源県照壁村でアンズ苗を植えたとき、立花が畑のそばに積んである石炭の燃えカスに気づき、苗1本につきスコップ1杯ずつを入れ、そして絶対に足で踏まないように注意した。全体の半分をそのように植え、残りの半分は従来のやり方で植えた。

1年後にここを訪れ、その結果に驚くことになった。石炭の燃えかすを加えた方は活着率が90%以上で、生育もずっといい。残りの半分は活着率60%ほどで、生育ぶりもよくない。その意味を理解してもらうために、それぞれのグループから平均的なものを1本選び、根を掘り起こしてみた。石炭の燃えかすを入れたほうは、1本の太い根が燃えかすに向かってまっすぐ伸び、ほかの根の生育も良好である。大同事務所の武春珍所長は、その様子を見るなり、「結果は非常にはっきりしています。話は何度も聞いてきたけど、今日はその意味がわかりました。これからは全部のプロジェクトでこのように植えます」と言い出したのだった。

個々の技術者が、そのような植え方に固執しただけではない。それはマニュアルになっていたのだ。「七字の植林法」と呼ばれるものがあり、七字とは「選、細、深、緊、保、適、管」を指す。「選」は乾燥に強い樹種の選択、「細」は精緻な整地と丁寧な栽植、「深」は深植え、「緊」はしっかり踏み固めて根と土壌を密着させること、「保」は根を保護し水切れさせないこと、「適」は適期に植えること、

「管」はしっかり管護すること。もっともなところもあるけど、全体として、水、水、水…という強迫観念にとらわれていることがわかる。そして、一旦マニュアル化されると、そこから逸脱しにくい。

ちょうどそのころ大同事務所の技術顧問に就任した侯喜は、大同市林業局で40年間働いたベテランの技術者で、定年退職後に私たちの活動に参加することになった。彼はそれらの実験に繰り返し立ち会った後、通気性を改善し、足で踏まないことの重要性を確信し、それを四文字熟語にまとめて、古巣の林業局に伝えた。やがて大同の全体で深植えがなくなり（それでも日本よりは深い）、水をやった後、足で踏み固める、といった植え方が消えていった。

【マツの育苗に菌根菌を活用】

環境林センターが担ったもう一つの技術改善は、マツの育苗における菌根菌の活用だった。私たちがこの言葉を意識したのは、1994年の専門家調査団が渾源県の国営苗圃を訪ねたときのことだった。その後、顧問に就任した小川房人が大同に来たとき、その話をすると、「大学の後輩が菌根菌のことを研究しているよ。インドネシアでそのプロジェクトを見たが、いい効果を出しているようだった」ということだった。

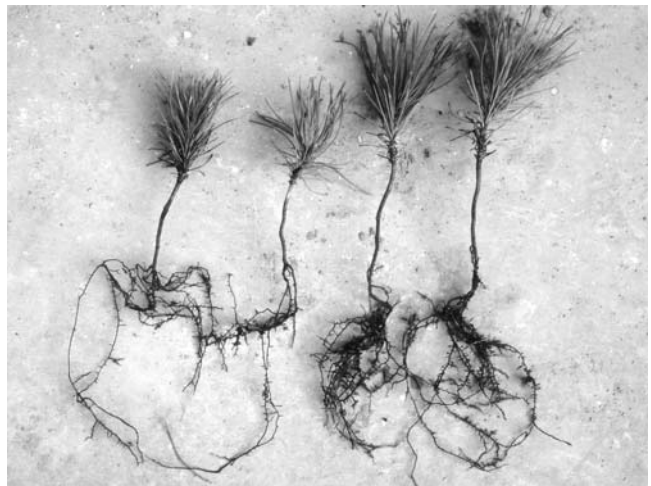
小川房人の紹介で、当時の勤務先の関西総合環境センター生物環境研究所に小川眞所長を訪ねた。二つ返事で協力を約束してもらうことができ、1997年4月に機会をとらえて大同を訪れ、現地で指導してもらうことになった。

このときやったのは、マツの育苗への利用だ。小川眞の指示で、前年の秋、地元の人と一緒に、松林でキノコを集めておいた。キノコのひだの部分の水の中でもみ洗いし、タオルなどの布で漉して、胞子液を作り、冷蔵庫などで翌春まで貯蔵しておく。

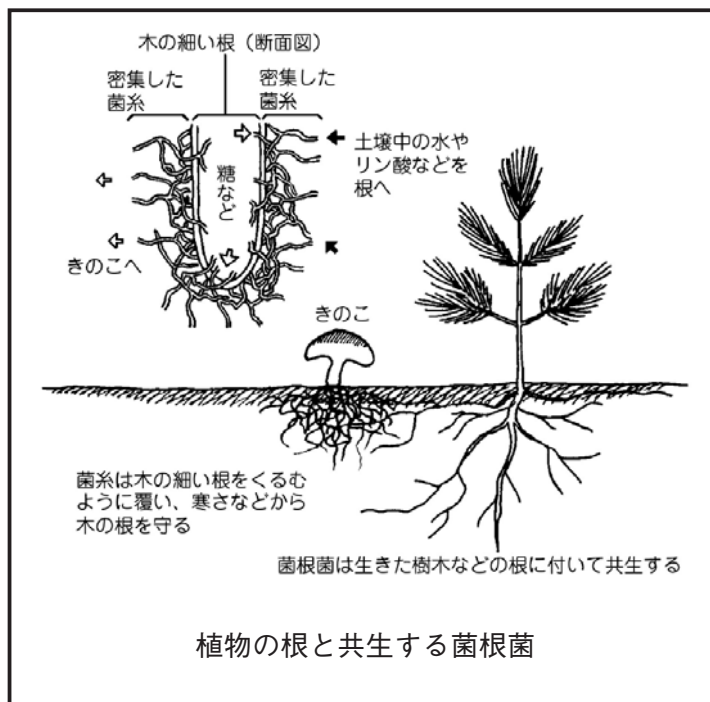
実験では、1年生のアブラマツの小さな苗をポットに植え、半分には胞子液を水で薄めたものをジョロでかけ、残りの半分にはただの水をかけた。4か月後の9月に、それぞれのグループから平均的な苗を選び、土を取り除いて、根を洗ってみた。生長の違いは一目でわかった。胞子液をかけたものは明らかに大きく、特に根がよく発達しており、根の先端はまだ白くて、さらに伸びる様相を見せていた。乾燥して重量を測ると、普通に育てた苗に比べ、ほぼ2倍であった。



小川眞が現地の幹部と技術者に菌根菌の活用を指導する



菌根菌を接種した苗（右）は4か月で2倍に生長した



菌根菌は植物と共生する土壤微生物で、キノコやカビの仲間。マツと共生するのは外生菌根菌と呼ばれるキノコの仲間、アマタケ、チチアワタケ、ヌメリイグチなどイグチ科のキノコが多い。

キノコは大きく腐生菌と菌根菌に大別される。どちらも自分で栄養をつくることはできず、腐生菌が動植物の遺骸を分解して栄養を得るのに対し、菌根菌は生きた植物と共生してそこから栄養をもらう。マツでみると、上述したようなキノコの仲間が、マツの根の細胞と細胞のすきまに菌糸を差し入れ、そこを通じて糖の形でマツから栄養を受け取る。その一方、菌根菌は広く土の中に菌糸を伸ばし、

その菌糸が根の延長のように働いて、植物が土中の水分やミネラルを吸収するのを助けるのである。

菌根菌の菌糸は肉眼でも見ることができる。マツの苗をポットから出してみると、根の周囲に白くカビのようなものが生えている。それが菌糸である。菌根菌が着いている苗は、現場に植えた後も活着率が高く、生育もいい。特に黄土高原のように水が不足し、土地のやせている極限的な場所では、菌根菌の有無が決定的とも言える違いを生み出す。

【実用化し、100万本の育苗を開始】

翌1998年春から実用化することにした。平旺村の環境林センターは、土の粒子が小さすぎる上に富栄養化しており、ポプラ、アンズなどの広葉樹の育苗には適しても、マツなどの針葉樹の育苗には不向きであることがわかってきた。そこで、大同県倍加造鎮の国営苗圃と交渉し、その一画で委託栽培してもらうことにした。当時は植栽の経費は安く、毎年、大面積の植栽を行っており、大量の苗が必要だったので、一気に1.5ha、100万本の育苗体制をとった。ちょうどこのころ、郵政省国際ボランティア貯金が発足し、幸い寄付金の配分を得ることができたため、毎年、大面積の協力が実現した。

大同県国営苗圃の技術者たちは菌根菌の名称は知っており、「なんだ、菌根菌というのはキノコのことか」と話した。接種方法などは知らなかったけれども、菌根菌の名前だけでも知っていたことは、その技術を導入してもら



大同県国営苗圃の一角でマツ苗の委託生産を始めた

う上で役立った。

その年の夏のワーキングツアーは、キノコ採りに熱中した。大同県では遇駕山、東山といった山で1980年代半ばに大面積の造林がなされており、雨の後、イグチ科のキノコが生えるようになっていた。そのキノコを苗圃に持ち帰って孢子液をつくり、春に播種したマツの小苗にかけるのである。

2年後の春、国営苗圃の技術者たちは驚いた。孢子液を撒布した苗の生育がいいことは、圃場に生えている状態でもよくわかった。根を掘り起こしてみると、根の発達がきわめて良好であることがわかる。技術者たちは、こんないい苗は作ったことはもちろん、見たこともないと話した。

大同県国営苗圃はマツの育苗では歴史が長く、近隣によく知られており、よその県から苗を求められることもしばしばだった。その人たちが菌根菌を接種した苗をみて、「高くてもいいから、こちらの苗がほしい」と言ったのである。

【松枯れをめぐる騒ぎを起こす】

小川眞に来てもらったことが、もう一つ大きな波紋を作り出した。大同県の遇駕山のマツの造林地に案内したところ、モンゴリマツに枯れているものが見つかった。病気や虫が蔓延するようでは怖い。「騒いだほうがいいよ」というのが小川のアドバイスだった。

二つの方向で騒いだ。一つは日本側で国際緑化推進センターなどに依頼し、専門家を派遣してもらうことだった。そのさいに北京の林業部などの同意を得るように求められた。

もう一つは北京の林業部に実情を報告し、対処を求めることにし、1997年6月に林業部に祝光耀副部長を訪ねた。環境問題が大きな課題になる中、なぜかその後、林業局に格下げされたが、当時はまだ林業部だった。副部長は日本でいえば副大臣または次官だから、外国の小さなNGOのメンバーが気軽に会える相手ではないが、友人が間に立ってくれた。多くの幹部も同席していた。

祝光耀は以前よく大同にも出張していたそうで、大同県あたりのことに詳しくあった。中国の国家プロジェクトの中でもっとも重要な三北防護林の重点地域であるのだから不思議はない。会見を申し入れた段階でマツの問題を提起していたから、山西省や大同市にもすでに問い合わせを入れ、専門家の派遣を検討しているとのことだった。素早い措置が取られていることに感心した。

在席の人たちは私たちの活動に感心してくれた。民間の小さな団体が、共青团との協力で、よくそこまでのことができたものだ、というのである。自分たちには想像もできない、ということだった。だが、今後は林業局との関係も考えたほうがいい、というアドバイスがあった。日本の専門家の調査受け入れについても快く同意してくれた。

その夜の列車で大同に向かい、早朝に到着した。駅には祁学峰が迎えに来ていた。そして、「北京でいったい何をやったのだ。自分たちは何度も林業局に呼び出され、叱られている。今後はこれま



遇駕山には1985年に933haものマツが植えられた

でのように自由に活動できなくなるかもしれない」というのだ。北京の林業部が、山西省林業庁を通して、大同市林業局に「大きな問題が発生しているのに、なぜ報告しなかったのか！」と叱責してきたのだという。

農林業担当の副市長の立ち会いのもと、山西省林業庁、大同市林業局と共青团大同市委員会、そして日本側との話し合いがもたれた。最初は緊張していたが、現場の話をしているうちに打ち解けてきて、今後は林業局とも密接に協力しあおうということで約束ができた。そして林業局は、ベテランの技術者を緑色地球ネットワーク大同事務所へ派遣してくれることになった。

日本の専門家も小林一三（元森林総合研究所所長）、鈴木和夫（東京大学教授）が、別々に大同に来て、マツの様子をみてくれた。問題となる病虫害はなく、おそらく生理障害だろうということだった。1995年が春は早魃で、8月中旬から長雨が続いたので、その影響が出たのだろう。枯れているのが劣勢木であることから、問題は大きくないと判断された。

大同市林業局もモンゴリマツの原生地まで調査団を派遣したところ、そこでも同じような状態が見られるとの報告があり、日本側の専門家の判断とも一致した。

【大同事務所にベテランの技術者が】

松枯れを巡る騒動は、どんな結果をもたらすのか、渦中ではとても心配したが、結果としてはこの協力事業に貴重な力をもたらした。大同市林業局で40年働き、退職したばかりのベテラン技術者の侯喜を大同事務所の技術顧問に迎えることができたのである。事務所の人たちも、プロジェクト現場の人たちも老侯ラオホウと呼んで親しんだ。

この地方の森林や林業についての生き字引と言っている人で、現場の隅々にまでよく通じていた。日本の専門家とも良好な関係ができ、深い信頼関係を築くことができた。

遠田宏が一時期、小老樹と呼ばれる伸び悩みのポプラについて、熱心に調査した。大同県の農村で、何本かの小老樹を伐って、年輪その他を調べていたところ、案の定、地元の農民に見咎められた。中国で木を伐ろうと思えば、たくさんの手続きが必要で、許可を得るのは簡単なことではない。

すると老侯はその農民に、「あんたは何という名前だ。じゃあ、あなたの父親は〇〇〇で、あなたの母親は△△村から嫁に来ただろう」それで農民は引き下がり、遠田は目的を果たすことができた。

日本の専門家との付き合いは、侯喜にも大きな刺激をもたらしたようだ。南天門自然植物園についてはこの後で述べるが、その建設が軌道に乗り始めたころ、大同市の北部に自前の林場をつくれないうらさるか、侯喜が言い出した。それまで各地の農村に緑化プロジェクトをつくってきたが、それらのプロジェクトでは将来の経済性が重視されている。そうでなければ、農民の積極性を引き出すことができない。生態系を重視し、その土地にもっとも適



ベテラン技術者・侯喜の参加で成功率が大幅に上がった



「カササギの森」は小鳥や小動物の集まる豊かな森を目指す

した樹種による緑化を、1か所くらいはやってみたいというのだ。

ツアー参加のリピーターは以前から一つの希望を出していた。あちこちのプロジェクトを回って行くのも悪くないのだが、それと同時に自分の植えた木のその後の生長ぶりを見たいというのだ。この二つは一つのこととして実現できる。

そこで生まれたのが実験林場「カササギの森」で、2001年4月のスタートだった。そのころ北京林業大学に留学

していた林野庁OBの相馬昭夫、その友人の藤沢孝夫の協力で、国土緑化推進機構・緑の募金の助成が得られることになり、管理棟、灌水設備、農用車などを出発の時点で整備することができた。

まだそのセメントが乾かないうちから、侯喜はスチールベッドを持ち込み、每晚そこに寝泊まりして、整地や植栽作業の陣頭指揮を取った。中国では責任者が先頭に立つかどうかで成否が決まることが多い。大同のような乾燥地では事前の整地の善し悪しが成否を決めることが多く、彼は作業員の手抜きを絶対に許さなかった。

すでに60歳を過ぎていたにもかかわらず、考え方は柔軟で、立花吉茂が示した植栽時の通気性改善も、いったん納得してからは、古巣の林業局などへの普及に努めた。地元の新聞は彼の特集記事を組み、「大同の緑化に40年貢献した老技術者は日本との協力で第2の青春を送っている」と書いた。

カササギの森の建設に当たっては、個人や企業その他から1haあたり5万円で寄付を募った。2001年から2011年までに37,134,131円(2,617,876元)を投じて、554haに、163万本の苗木を植えることができた。

ここで育っている樹木はアブラマツ、モンゴリマツ、トウヒ、トショウなど主として針葉樹だが、シラカンバ、ナラなどの広葉樹も実験的に植えている。ナラは10年近くもまったく伸びなかったが、2～3年前から急に伸びるものが出てきており、期待を持つことができる。

【省の党幹部がセンターを視察】

1998年4月、中国共産党山西省委員会組織部の支樹平部長が、私たちの協力拠点・環境林センターを視察した。省内の人事を司るトップの来訪に、大同市の共産党書記、市長、副市長初め幹部が勢ぞろいして同行した。センターを一通り視察した支樹平は「今日は高興(うれしい)、感謝、希望という3つのことを話したい」と言って挨拶した。少し長くなるが、当時のメモから引用したい。

「6年前にこの協力事業を始めるとき、私が中国側の責任者だった。そのときはこんなに短期間に、ここまで発展するとは思っていなかった。この協力活動がこのように発展しているのを見て、またその拠点に今やって来て、私はとてもうれしい。

今ここにいる高見はその間にとっても苦勞した。貧しい農家に泊まって、農村の実情を調査しながら、この活動を引っ張ってきた。自分たち中国人にもできないことを、彼はやってきた。また共青団大

同市委員会も懸命に努力したし、大同市の党と政府は高い見地からそれを支持してきた。それらに対して私は心から感謝する。

最後に希望について述べたい。大同市では改革開放が盛んに強調されているが、実はこのような活動こそ改革開放ではないのか。ここは外事とも関わっているし、緑化の仕事でもあるし、青年教育の場でもある。それらが一体になってやられている。このような基地を強化し、その経験を宣伝し、さらに発展させなければならない。みなさんがそのように努力してくれることを希望する」

地元紙「大同日報」はこの訪問を1面トップで報じた。

支樹平は緑の地球ネットワークが1992年に緑化協力を開始した当時、共青团山西省委員会の書記で、受け入れ側の責任者だった。日本からの最初の協力資金の贈呈に立ち会い、「金額は大きいとは言えないが、共青团山西省委員会が初めて手にした海外からの協力資金だ」と言って、感謝の意を表した。

支樹平は大同の育ちでもあった。大同の炭砒地区の中学の先生が最初の仕事で、その後、青年団の幹部になり、共青团山西省委員会の副書記、書記へと上った。私たちの協力相手・共青团大同市委員会のメンバーはみな支樹平の後輩・部下で、彼を尊敬し、親しみをもっていた。

市内で開催される歓迎宴に向かう車中で支樹平は、「ここは自分が育った村です。故郷の村の一つくらいはいいことをしたかった」と、ここに協力拠点を開設することにした理由を話したのだった。それによって、急に場所がここが変わった事情がわかった。

さらにセンターの開設に当たって奮闘した邢雁俐經理は支樹平の義妹で、それまで青年旅行社の副社長だったのを、ここに配置してくれたのだった。地元の村があればこの協力事業を重視し、親切にしてくれた理由がそれでやっとわかった。

支樹平は「出身の村のために一つくらいはいいことをしたかった」と言ったが、センターを開設したときの緑の地球ネットワークは、たくさんの困難を抱え、いつ消滅してもおかしくない状態だったのである。

支樹平は1998年10月から共產党河南省委員会の組織部長、副書記になり（当時の書記は李克強現総理）、現在は国家質量監督檢驗檢疫総局の局長（大臣）である。2011年3月に前中、高見が面

支樹平視察平旺環境林中心

対由团市委组织实施的地球环境林建设给予高度评价 市领导纪友伟新善忠赵仁家贺锐郭玉才陪同

本报讯 昨日下午，省委常委、省委组织部部长支树平深入中日合作平旺环境林中心视察工作。

市委书记纪友伟，市委副书记靳善忠、赵仁家，市委常委、副市长贺锐，市委常委、组织部长郭玉才等市领导陪同。

从1992年开始，团市委在团省委和市委、市政府的领导下，与日本绿色地球网络组织合作，以日方捐助资金，中方组织实施的方式，共同在我市营造“黄土高原地球环境林”及“秦晋青年工程林”。6年来，日方累计提供资金800万元人民币，我市植树造林4万亩，共600万株。此项活动的开展，成为全国共青团组织吸引外资的典范，我市因此被团中央确定为“国际青年志愿服务示范基地”。

平旺环境林中心为整个工程的一个组成部分。中心由日方提供资金200万元人民币，建设成了一个集育苗、试验、引种为一体的综合性基地。

地球环境林建设活动的开展，受到了支树平同志的高度重视和热心帮助。1992年，时任团省委书记、省青联主席的支树平积极牵线搭桥，成为活动的领导者和“红娘”。离开团省委领导岗位后，他还时常关注着活动的进展情况。

视察中，支树平亲切会见了长期在同工作的日本绿色网络组织事务局局长高见邦雄先生，对他的可贵精神给予了高度评价。他还认真听取了团市委书记郝向华的工作汇报，并兴致勃勃地参观了中心的基础设施建设和温室大棚。

望着遮风避雨的成行树林和规范洁净的中心大院，支树平非常高兴。他指出，6载辛勤耕耘，中日合作绿化活动日渐“枝繁叶茂”。这一活动的开展已成为青年创业创业的典范，它不仅为改善地球环境和促进大同发展做出了贡献，也为中日两国人民的友谊架起了一座绿色桥梁。6年来，大同市委、市

政府以特有的远见卓识，将这一融外事、绿化、教育为一体的工程紧紧抓在手上，给予了高度重视。全市各级团组织带领广大团员青年用青春的汗水浇灌了一座流芳百世的丰碑，为大同人民争了光。

支树平指出，为将这项活动持久地开展下去，要在巩

固基地、扩展活动、宣传典型上下功夫，使之成为教育、锻炼青少年及中日两国人民友好往来的基地，并以此为契机，把大同市的绿化、美化工程和改革开放事业全面推向前进。

纪友伟在陪同视察中代表市委、市政府对日本朋友的可贵精神表示了衷心感谢，并对团市委在绿化古城、促进全市改革开放中所做的工作给予了充分肯定。他表示，市委、市政府将一如既往地给中日合作绿化活动以大力支持，全力把这一“千秋工程”推向深入，把大同建设得更美好。

（解江平）

昨日下午，省委常委、组织部长支树平在市委书记纪友伟等陪同下来到平旺环境林中心视察。

（郭玉才）

（本版责任编辑 程晓天）



共產党山西省委員会組織部長の視察は、翌日の新聞で大きく報じられた

会したときには、当時、緑の地球ネットワークが抱えていた中国での大きな問題を、私たちの目の前で相手方の大臣に電話をかけ、直ちに解決してくれた。

【協力拠点の規模が一気に拡大】

2000年3月、緑の地球ネットワークの関係者が大同駅に着くと、そのまま環境林センターに急行させられ、「大変なことが起きている。至急に相談して結論をださないといけない」と言われた。

センターの周囲はもともと果樹園だったが、品種が古くなって利益は出ず、管理もおろそかになっていた。そこに目をつけられ、買収の話が持ち上がったというのだ。最初は環境保全施設が来るという話だったが、村が独自



20haに拡張され、立派な協力拠点となった環境林センター

に調べると、コークス工場であることがわかった。果樹園の周囲は典型的な近郊農業で、主に野菜が栽培されており、1990年代後半にはビニール温室が増えてきた。

そこにコークス工場がやって来たら、たまったものではない。その日の午前中に契約の運びで、村の幹部は太原に出かけている。もし日本側が代りに果樹園全体の使用权を買ってくれたら、万事が丸く収まる。安くてもいいから、そうしてもらえないか、というのが村からの要請だった。

国際電話をかけて、代表の立花吉茂に相談した。「そうするしかないでしょう。今は金利が安いから、自分が借金をしてもいいですよ」という返事だった。20年で26.5万元＝約350万円という破格の安さだったので、地代の心配をすることはなかったが、一挙に20haの土地を持つことになると、それまでのように盗電、盗水というわけにはいかず、いろいろと出費も増えてきた。

積極的な変化はここで働く人たちの意識に現れた。それまでは、借りていると言っても無償。日本側もいつ撤退するかわからない。「植物を育てることは土を作ることだ。しっかり堆肥を入れなければいけない」と言って、立花が実地に堆肥づくりを指導することもあった。センターのスタッフは立花の話を見敬しながら聞いたし、その前では堆肥づくりにも一生懸命取り組んだが、日本側が帰った後はそれ以上に拡大しようとはしなかった。

20haの土地の使用权が手に入り、そこを自分たちの生きる場にできるとなると、意欲が変わってきたのだ。「自己養護自己」（自分で自分を養う）といったスローガンが掲げられ、新しく拡張されたところに大量の牛糞、豚糞が運び込まれ、堆肥作りも進んだ。

【土壌浄化で汚水処理に取り組む】

汚水処理に取り組んだのもここでだった。1999年は建国以来最悪と言われる大旱魃、その翌々年の2001年が100年に1度と言われる大旱魃だった。雨期のはずの7、8月になっても雨は降らず、

センターの苗畑は乾ききった。ちょうどそのタイミングで水源の井戸の水に大腸菌が発見され、汲み上げ禁止の措置がとられた。拡大した敷地に深さ 80 m の井戸が付いていたが、30 分も汲むと水はなくなった。

センターの隣は砒区の苗圃で、その奥に大同炭砒の団地があり、台所の污水、シャワー、大小のトイレなどが、地下の沈澱槽に溜めて浮遊物を除いた後、オープン水路で流されていた。付近の農家はそれを畑に引き込み、灌漑用水として使っていたのだ。私たちがここを借りる以前から、その水路がセンターの敷地内を通過していた。萎れていく苗を前にして、この污水を灌漑に使ったところ、ポプラの挿し木苗を筆頭に、何種類もの苗木が枯れてしまった。

北京の日本大使館に申請して、草の根無償資金協力によって、まずは井戸を掘ることになった。新しく井戸を掘ることは厳しく制限されていたが、市長本人が許可を出してくれた。深さ 128 m ほど掘り進み、1 時間 25 m³ の水を得ることができた。ここでの生活と育苗には十分な量だったが、いくら環境のためとはいえ、貴重な水をむやみに使っていないはずがない。

そこで考えたのが、あの汚廃水を浄化して使うこと。できるだけ省エネルギーの最新技術を使いたいと考え、大阪産業大学人間環境学部の菅原正孝学部長に現場を見てもらった上で、土壌浸透浄化法による浄化設備を基本設計してもらい、詳細設計を大阪の環境技術研究所に委ねた。

土壌浄化は設備が簡単で、処理水の品質が高いことで知られている。欠点は普通のやり方では大きな面積を要すること。菅原が設計した土壌浄化法は、土壌ブロックを多段に積み重ねることで、面積を小さくしており、25 m プールを一回り小さくした大きさで、1 日あたり 250 m³ の処理能力があり、水質をいくらか犠牲にすれば、その倍量も可能なものだった。ほぼすべての材料を現地で調達することができ、安価に建設できて、運転資金も低くてすむ。コントロールシステムは会員の中村文生が自作してくれた。操作は簡単で、現地のスタッフが施設の立ち上げに取り組む過程で習得してしまった。



低コストでありながら高度処理が可能な土壌浸透浄化法

2003 年 4 月、日本大使館の目賀田周一郎公使の参加が決まったため、私たちとしては珍しく、思い切り盛大な通水式を提案した。この機会に水問題の重要性をアピールしたかったのだ。当日はブラスバンドの演奏がつき、副市長など市の幹部が出席し、地元のテレビ局や新聞社が集まった。爆竹と花火が鳴り響く中、流れ出してきた処理水は本当にきれいだった。



その水を大同市の水質検査に回したところ、COD-Cr は 6.8 mg/ℓ で、無味無臭。大同市の水道

有機的な汚染の 90% 以上を除去し、無色無臭の処理水

水基準が3 mg/ℓ、散水用の日本の基準が20 mg/ℓだから、灌水目的にはまったく問題がない。その後、運転を継続する中で、COD-Crは20 mg/ℓくらいで落ち着いた。原水のそれは230 mg/ℓほどだったから、有機物の90%以上が除去されたことになる。能力をアピールするために施設のそばに小さな池を作り、処理水を使って金魚を飼い始めた。やがてトンボやカエル、セキレイが集まり始め、夕方には涼を求める人が池の周りに集まった。



簡単な設備によって鉄とマンガンを取り除く炭砒水浄化装置

この汚水処理の成功を朝日新聞(大阪版)は、大学、NGO、ベンチャー企業による成功モデルとして、1面トップで大きく報じた。

この汚水処理施設は2年間は順調に作動した。しかし、その後は運転を諦めざるをえなかった。水不足はいつそう深刻化し、あの汚染水すら周囲の農家で奪い合いになってしまったのだ。雨が降らない日が続くと、下流の農家が、自分の畑まで水がこないのはセンターで使いすぎているからではないかと、見回りに来るのだ。このようなことで、トラブルを起こすわけにはいかなかった。

生活污水の浄化に成功した後、炭砒の坑道にたまる地下水の浄化実験に取りかかった。山西省にはたくさんの炭砒があり、石炭採掘と同時に地下水が失われた。地元の新聞は1tの石炭を掘り出すときに2tの地下水が失われると書いた。坑道の中にたまる地下水には鉄とマンガンが含まれ、そのままでは使用することができないので、無駄に捨てていたのだ。

この水を遠心ポンプを使って地上まで汲み上げ、鉄バクテリア、マンガンバクテリアの力で生物処理しようと考えた。雲崗石窟の近くの零細炭砒がこの実験に協力してくれた。設備は塩ビパイプを使ったごく簡単な構造のものだが、2か月もすると鉄、マンガンの含有量は低下し、あと1歩で実用化できるところまで近づいた。周囲には水不足に困る人がたくさん住んでおり、処理水を汲みにくる人が続いた。飲用以外の用途には問題なく使えるので、その点の注意をした上で持ち帰らせていた。

ところが石炭の在庫調整のため、中小零細炭砒の閉鎖が急に決まった。連絡のあった翌日には坑道の入口がレンガとコンクリートで封鎖されてしまった。残念だったが、この実験は中止せざるを得なかった。

(6) 成功例が注目を浴びる

【大水害で環境政策が大きく変化】

私たちが大同で緑化協力を開始したころ、中国では緑化の重要性が大声で語られても、その内実は寂しいものだった。それについてはすでに書いた。

大きな転機となったのは、1998年の大水害である。この年、南の珠江から北の松花江まで、全国

の河川が氾濫し、または氾濫の危機に直面した。特に中国最大の河川、長江の氾濫の危険は長期化し、最悪の事態を防ぐために大量の軍が投入され、「偉大な民族闘争」と称されるほどだった。そして、武漢などの都市を守るために反対側の堤防を意図的に切り、人口の少ない農村部へ水を流すといった最終的な手段すらとられた。

映像メディアが「解放軍の英雄的奮闘」や最高指導部の陣頭指揮を延々と放送し続ける一方、活字メディアでは「100年に1度の大雨が毎年のように繰り返されている」「これは天災とばかりは言えないのではないか。人災の側面も大きい」「黄河で2000年前に起こったことが、今長江で進んでいるのではないか」といった報道が続いた。

上流で森林破壊が進行し、水土流失がひどくなる。流されてきた土砂が中流域の湖沼を埋めて浅くなる。これ幸いと干拓して、畑や工場用地をつくる。洞庭湖や鄱陽湖は浅くなり、水面積も以前に比べずっと小さくなった。そうやって遊水池が失われると、水が出るとすぐに洪水の危険が高まる。河底にも土砂がたまって、天井川になっているところが多いので、氾濫するとその被害はあっという間に深く広がる。だから、これは人災にほかならない、というのだ。

中国政府は1999年、全国生態環境建設計画を策定し、公布した。その重点になっているのは、森林の再生と緑化である。その推進のために中央政府も予算措置をとるようになり、さまざまな緑化プロジェクトが予算つきで実施されるようになった。長江上流地域などでの森林伐採を防ぐために、軍が出て林道を爆破するといった強硬策まで報道された。

この1999年には退耕還林が試験的に開始され、2003年から全面的に実施されることになった。退耕還林とは、急傾斜地など条件の悪い畑の耕作をやめ、樹木苗を植えて森林に還す政策である。当然、農民にとっては収入の減少になるが、その分を現物の食糧や金銭で補償するのである。

黄土高原で進む水土流失と砂漠化の問題を考える中で、その構造を「環境破壊と貧困の悪循環」と名づけ、チャートをつくった。森林が消失した最大の原因として過剰な耕作をあげたのだが、その根本原因に手をつけるのが退耕還林だった。

ある意味で理想主義的な中央の政策が、現場に近づくとねじ曲げられるのはよくあることである。耕作をやめた代償として農民が受け取るはずの補償が途中で消えてしまうことを、農村の末端幹部から聞いたこともある。しかし、退耕還林の歴史的な意義はそれでなくなるわけではない。

中央政府がそのような政策を打ち出したことで、植林の現場にも大きな変化が現れた。一言でいえば、みな熱心になったのである。そして、それよりずっと早くから協力に取り組んできた緑の地球ネットワークの考え方や活動が、中国で高く評価されるようになった。2001年には外国人に対して与えられる最高の賞とされる国家友誼奨（中国政府）を受け、朱鎔基総理との会見があり、2002年には母なる河を守る行動国際協力奨（中国共産主義青年団等）を受け、胡錦涛国家副主席の会見があった。

この後に登場する渾源県の呉城村は、退耕還林のモデルとして、全国に宣伝された。黄土丘陵の生産性の低い畑での耕作をやめ、そこに果樹を植え、それを成功させたのだ。中央と地方とを問わず、政府はそのような成功例がほしかったのである。

私たちの協力プロジェクトが成功例を生み出し始めたのは、そのような全国的な流れと軌を一にしている。

【経済の大膨張が乱開発を招く】

環境への意識や取り組みがそれ以後も向上したかといえば、そう簡単にはいかない。後に述べる事情で、大同の協力相手は大同市青年連合会から大同市総工会に変わった。大同市総工会の全国組織は中華全国総工会だが、それをもじって当時の中国を「中華全国総工事現場」と揶揄した。都市も農村も工事だらけになったのである。特に目立ったのが交通と通信の優先だった。

通信では光ケーブルによる幹線の整備が進み、さらに携帯電話が農村まで

一気に普及した。固定電話の段階を持たずに、一挙に無線化が進んだのである。電波は日本よりずっと強いようで、山の中でもよく通じる。大手2社がシェアを競っており、電波の条件のいい村には携帯電話用のアンテナが2本セットで立っている。

インターネットの普及も速かった。この協力事業に取り組んだ当初は、日本との連絡で本当に苦労したが、そのような問題はなくなった。逆に、農村滞在中も担当者は報告書作成などに追われ、「不便な時代になった」とこぼしている。

道路建設も進んだ。以前は県城と県城とを結ぶ幹線道路であっても、舗装が壊れ、ぬかるみにタイヤを取られることが珍しくなかったが、工事中を除いて、そのようなことはなくなった。

県と県との境界は山であることが多く、そこを越える峠道はつづら折りの急な坂道。過積載の大型トラックが上りでエンジンを焼き、下りでブレーキを焼き、それを先頭に大渋滞がしばしば起こった。その道が付け替えられた。山を削り、谷を埋め、トンネルを掘って、距離も時間も短くなり、安全性が高まった。

道路工事中、その道路は全面通行禁止になる。日本のように、車を通しながら片面ずつ工事するような面倒な事はしない。霊丘へのアクセス道路がすべて遮断され、一時期、陸の孤島になることすらあったのである。



山を削り、谷を埋めて整備され、時間も距離も大幅に短縮



通信網が急速に整備された。アンテナが2本セットで立つ

さらに新農村建設の政策が実行され、山奥の村まで道路がコンクリート舗装された。

北京と大同を結ぶ高速道路、大同と太原、そして山西省の最南部の运城とを結ぶ高速道路も完成した。

都市ではビル建設が始まった。2008年の北京オリンピックを目指して、北

京では大改造が続いていたが、その波が大同にも及んだのである。

鉄もセメントも足りない。値段が急騰するだけでなく、絶対量が足りない。霊丘県の南山区は太行山の中にあり、そこには鉄鉱石を初め 42 種類もの地下資源が存在することが以前から知られていた。しかし分散していて規模が小さく、交通が不便で、開発資金もないために手つかずだった。

ところが価格が高騰し、絶対量が不足するとなると、規模が小さくても採算ベースに乗ってくる。主に南方の資本が開発に乗り出し、労働者も四川省や陝西省など外部の人々が出稼ぎにやって来た。



残土で谷を埋め、その上にキャンプ。豪雨があれば大事に

霊丘県城のすぐ南に太白維山 (2,234 m) がある。植生調査のためこの山を歩いて驚いた。いくつもの谷筋に急傾斜の道路が作られ、鉱山用の大型ダンプが行き来している。山の斜面にマンガン採掘の坑道が掘られ、その残滓で谷を埋め、その上にコンテナハウスやレンガ建ての宿舎、テントなどが建ち、キャンプができています。そこで働く人の言葉は、地元の人には理解できないようだ。

そのような現場には決まって赤旗が立てられている。赤旗は乱開発のシンボルとなった。1本の谷筋にそのような現場が3~4段もある。1時間70mmの雨は珍しくないのだが、ここに降ったら、谷筋を埋める残土は一直線に流れ下り、麓の村を埋めてしまう。

ほかの山でも植生調査に入って重機の音を聞かない日はなかった。鉄、マンガン、モリブデン、そして各種のレアアース。全国クラスの貧困県であった霊丘県で、急速な経済発展が進み、県城も拡張された。この県が大同で一番経済成長が速いと言われた原動力は、地下資源開発だったのである。

地元の人が行うなら、ここまでの無茶はやらないだろう。長期的な計画であるなら、いくらかの安全対策がとられただろう。外からやって来て、儲けられる間に儲けられるだけ儲け、後は逃げ出すのだ。

この県はやがて北京の水源になった。渾源県南部に源をもつ唐河は、霊丘盆地を流れて県内に降る雨水を集め、唐河溪谷をくぐって河北省に流れ出る。そして唐県で西大洋ダムに注ぎ込むのだ。

北京は水不足が深刻である。南水北調が計画され、長江水系の水が延々 1200 km 余りも運ばれ、北京と天津の水道水になる。最大の難関は黄河を越えることで、黄河の河床の下に2本のトンネルを掘って水を越させるが、その工事が遅れている。2010年の完成予定が5年遅れて、2014年为目标になっている。ところが北京はそれを待てない。

南水北調・中ルートの最終段、河北省の石家荘と北京との間の水路を完成させ、石家荘市と保定市にある4基のダムを水路で結び、その水を北京に運ぶことにしたのだ。西大洋ダムもその一つであり、霊丘県で乱開発があれば、当然、その水は汚染される。鉄鉱石にはマンガンが同居しており、マンガンを長期に摂取すると脳を冒されるという。

このように無秩序な資源開発は数年で禁止された。しかし、原状回復はなされていないし、非法の開発も完全になくなってはいない。

【マツは小苗の方が活着率がいい】

ここでこれまで実施してきた緑化植林を振り返ってみたい。

最初に取り組んだのは、黄土丘陵や山の上部に防護林をつくることである。1992年、渾源县西留郷の龍首山プロジェクトに苗木を贈ったのを皮切りに、2013年春までに4,806 ha、1,785万本を植えてきた。初期には失敗することが多かったが、経験と技術を蓄積することで成功率を高めてきた。

主な目的は、水土流失の防止であり、それを通じて砂漠化防止にも役立つ。風砂の防止にも役立ち、さらに炭素固定を通じて地球温暖化防止に効果がある。

植えているのは、アブラマツ、モンゴリマツ、カラマツなどのマツが中心である。それに加え、グミ科のヤナギハグミ、マメ科のムレスズメ属などの灌木を混植している。

2002年ごろまでは、アブラマツは2年生、モンゴリマツは3年生の小さな裸根苗を植えてきた。地上部は10～15 cmほどで、日本から参加するボランティアからは「草のように頼りない、こんな苗でいいんですか？」と不安がられたが、マツは小苗のほうが活着率がよかった。そしてコストパフォーマンスが抜群で、1 haあたり3,300本のマツと同数の灌木を混植して、日本円で2万円ほどだった。



初期には小さな小さな苗を植えた

【雨期整地—優れた草の根の技術】

次に具体的な植林方法について説明する。

まずは苗を植えるための整地作業を行う。防護林建設に取り組んだのは、その大半が南向きの日向斜面なので、それに則して記述する。計画地の斜面に、等高線に沿って、3 m 間隔に幅 60 cm 深さ 30 cm ほどの溝を掘り、掘り出した土を溝の下手に積み上げて土手をつくる。溝の底もスコップで掘り込んで土を柔らかくしておく。これらの作業はすべて人力で行う。大規模なプロジェクトでは連日、数百人が出て作業を続ける。まさに人海戦術である。

この作業はできるかぎり植栽の前年の7～9月に実施する。この時期はこの地方の雨期にあたるので、雨期整地と呼ばれているが、この時期を選ぶの



雨のある前年の夏に整地作業。活着率が飛躍的に向上する

には大きな意味がある。前述したように、黄土は乾燥しているときは非常に固く、スコップの刃が立たないくらいである。水を含んでいる時期だと、土が柔らかくて作業がはかどる。

植栽は翌年の春、3月末から4月中旬までに実施する。このころはまだマツ苗は休眠中で、芽が動いていない。そして、種蒔きなどの農作業はまだ始まっておらず、農民もそう忙しくない。これより時期が遅れると農繁期に入ると、苗の芽が動きだしてから移植すると、活着率が低下する。困るのは、年によって春の訪れが遅れることがあり、その場合は4月に入っても土が凍結したままで、苗を植えることができない。その後、気温が急上昇すると、農作業が始まり、苗の芽が動き出して、植樹の適期が極端に短くなってしまうのである。

前年に整地した溝の底に、溝と土手とがつくる壁に添うようにして、マツ苗を1 m 間隔で植える。このように植えれば、1 haあたりの苗の数は3,300本になる。灌木の混植はマツの列の間に小苗で植えたり、種子の直播によって行う。

このように等高線に沿って3 m 間隔で溝と土手が作られていれば、その3 m の範囲に降った雨は溝と土手とで他と分断、コントロールされて、水土流失を起こすことがない。雨水は溝に集まり、土中に浸透する。8月も後半になれば気温が下がり、蒸発量が抑えられる。10月下旬になると氷点下を記録するようになり、土中の水は凍結して、そのまま春まで保存される。春になって苗を植えるころに、気温・地温の上昇とともに凍結が融け、苗木に水を供給するのである。苗を植える時期は、「春の雨は油より貴重だ」と言われるくらい雨が少ないが、それを前年の雨水で補うのである。

また、大同のような乾燥地では、北向きの日陰斜面（陰坡）は樹木が育ちやすいが、南向きの日向斜面（陽坡）は草も育ちにくい。その理由は後述するが、大同でマツを植えるような丘陵、山はその大部分が南斜面である。地元で「陰坡的松樹、陽坡的柏」（陰坡のマツ、陽坡のコノテガシワ）という言い伝えがあるくらい、マツが適するのは日陰斜面である。本来なら日向斜面には植えたくないのだが、利用価値が高く、ほかに適する樹種がないから仕方がない。そこで先ほどの整地方法が生きるのである。あのような溝と土手とがつくる土の壁が、人工的な北向きの斜面になるのである。小さなものだが、マツ苗も小さいので、それで大きな効果を発揮する。

植えた直後に必ず1回は灌水する。条件があれば、雨のないときさらに1～2回の灌水をするが、飲み水に困る村も少なくないので、それができるとは限らない。



溝の底にマツを植える。地元で工夫された草の根の技術だ

【苗を土伏せして寒風から守る】

植えた後の日常的管理で重要なのは、放牧の家畜から守ることである。造林地での放牧は固く禁止されているが、必ず守られるとは限らないので、管理人（護林員）を配置することも必要になる。日本の造林で重要な下草刈りはまず必要ない。雨が少なく、土地もやせているので、草は生えても

そう大きくなる。

11月に入り、マツ苗が休眠に入るころ越冬準備を行う。重要なのは苗の土伏せ。土を盛って、苗を埋めてしまうのである。厳寒期には零下30℃近くになる上に、北西の乾いた風が強く、地上に出たままだと、苗は水分を飛ばされてしまう。特にモンゴリマツの場合は重要で、それをやらないと大半が枯死する。

土伏せは、ノウサギの食害から守る役割もある。冬の間、すべての草は枯れ、青いものはまったくなくなる。そこに青い葉のマツがあると、ノウサギは苗をかみ切る。しかし、そんなものは食べられたものではない。そこでやめればいいのだが、ノウサギはそうはしないで、次々とマツの苗をかみ切って回る。防護措置をとっていなかったために、広い面積の造林が全滅させられた例も見ている。

4月上旬になって、気温が上昇し、草が芽吹き始めるころ、土を取り除く。日に当たっていなかったため、掘り出したばかりのマツ苗は黄色っぽくなっているが、1～2週間のうちにはもとの緑色を取り戻す。それを2年ほど続ける。

2003年ごろから、マツの造林に4～5年生の大苗を使うようになった。地上部が30～50cmほどある。これくらいの苗になると、裸根では活着しにくいので、ポリ袋に培養土を詰めたもので、2年ほど育てたものを植える。育苗や苗の運搬に手間と費用がかかるし、植える際も大きな穴を掘らないといけないし、必要な水の量も増える。その上労賃も上がってきたので、1haあたりの植栽経費は以前の10倍以上になってしまった。

大苗を使うようになった最大の理由はノウサギの食害を避けるためである。大きめの苗を植えておけば、ノウサギの口が苗の先端に届かなくなる。

大きめの袋苗を植えるようになったおかげで、活着率は向上した。その分、1haあたりの苗木の数を半数に減らすことができた。私たちの1年あたりの植栽量は2003年から急減しているが、それにはそのような理由があった。大苗は寒さに強いので、越冬のための土伏せ作業も必要なくなった。



ノウサギ。果樹やマツの苗をかじって全滅させたことがある

【北から導入されたモンゴリマツ】

造林に用いる主なマツの特徴について述べる。

アブラマツはこの地方に自生する樹種で、仏教のお寺、道教の廟などに古木が見られるし、渾源県の北岳恒山には樹齢数百年、胸高直径が1mを超える巨木も存在している。大同市の全域で緑化に用いられる。

モンゴリマツに比べて、樹形は曲がりやすく、また風の強いところでは、主幹が上に伸びないで、横への枝張り



最初の数年は伸びが遅いが、5年目あたりから生長が速まる

が勝ってしまう。長くこの地にあった樹種なので、安心して植えることができる。

モンゴリマツはユーラシア大陸に広く自生するオウシュウアカマツの変種で、緯度にして10度ほど北の原生地から大同地区へは1970年代に導入され、その後、大面積に植えられるようになった。北部の大同県、陽高県、新榮区などではよく植えられるが、南の靈丘県、広靈県などではあまり植えていない。南の県ではアブラマツが大部分である。



標高 1,800 m より上では、トウヒの立派な森林ができています

アブラマツに比べ、種子の大きさがずっと小さく、発芽後の生育も遅い。アブラマツは2年で出荷、もしくは床替えするのに、モンゴリマツはそれが3年になるのはそのためである。植栽後5年（大苗の場合は3年）までは、1年に6～15 cm くらいしか伸びない。その後、だんだん伸長量が大きくなり、毎年20～40 cm も伸びるようになる。アブラマツに比べ、5年後以降の生長が速く、樹形が真っ直ぐであることが現地で多く植えられる理由である。

カラムツは標高 1,500 m 以上の高地ではよく育つが、それより低いところでは育ちが悪く、まったく伸びないこともある。暑さをきらうようだ。上の2種に比べ、植栽面積はずっと少ない。カラムツの植栽後、間にシラカンバが入り込み、カラムツを追い越して育っているところもある。それはそれで悪くない。

マツ科の樹種ではほかにトウヒが存在するが、公園や庭園などの景観樹、または街路樹として植えられることが多く、山の緑化に用いられることは少ない。この地方では標高 1,800 m 以上の山地に自生しており、みごとな純林をつくって、自然保護区に指定されているところもある。景観樹として植えられたトウヒは、若木のうちは見事な樹形をしているが、大きくなるに従って樹形が崩れ、やがて弱って枯れてしまうこともある。低いところでは暑さに耐えられないようだ。

一般的に、寒いところ（緯度、標高の高いところ）の植物を、暖かいところ（緯度、標高の低いところ）に移すと、その気象条件の違いが小さければ、もとの土地よりよく育つことがあるようだ。気象条件が違いすぎると、小さい間は育ちがよくても、大きくなってだんだん弱り、病虫害が発生して枯死することが多い。夜間の気温が高いために、昼間に光合成で蓄えた以上のものを、夜の呼吸作用で消費してしまうのが原因だと言われている。

それとは逆に、暖かいところのものを寒いところに移す場合は、寒さによってすぐに枯れることが多い。しかし、大きくなると耐寒性が強まることが多いので、何らかの保護策で小さい間を乗り切ることで、そこに定着させることも可能になる。温暖化が進む今、こうしたことも知っておく必要があると思う。

【過酷な条件でマツが大きく育つ】

初期には失敗することも多かったマツの造林だが、成功するプロジェクトも出てきた。現場の事情からすると、侯喜というベテラン技術者が加わったことの意味が大きい。

一番大きく育っているのは霊丘県の鍋帽山プロジェクトで、1993年春に植えたものだ。アブラマツとモンゴリマツを植えており、すでに7mを超えるものが出てきている。渾源-霊丘の道路脇にあったのだが、その後、この省道は付け替えになり、旧来の峠道は補修がなされていないために、容易には現場に行けなくなった。



采涼山プロジェクトの起工式。1本の木もなかった

緑化の成功モデルとして知られるようになったものもいくつかある。代表的なのが大同県聚楽郷の采涼山プロジェクトである。1999年春に最初の植栽を行い、その後、2004年まで6年をかけて230haまで広げてきた。最大のもは5m弱になり、少なくとも25万本ほどが育っている。

計画を立てる際、ここを調査した大同市林業局の技術者はみな、「非常に困難なところで、成功の見込みはないから、ここは避けた方がいい」とアドバイスしたそう。第1に植物が育ちにくい南斜面の典型であること、第2に長く水土流失が続いて土がやせきっていること、第3に周囲の村が貧しすぎて植林後の管理が保障されないこと、そして第4に以前に植林したことがあるがみごとに失敗していること。

ここで取り組むことになったのは、勇敢だったからでも、難しいことに挑戦したかったからでもない。初期にはあったそのような気持ちは、日本側でもとっくに消えていた。

大同の山はほとんど例外なく北側が急峻で、南側がなだらかな丘陵状になっている。緑化がたやすい北側の斜面は面積がわずかで、どこも緑化が終わっている。この采涼山も、北側には1960年代から大同市林業局の長城山林場がおかれ、カラマツの植林がなされ、すでに胸高直径30cmを超える森林になっている。

これから緑化を進めるには、緑化されずに残っている困難の多い南斜面に取り組む以外になかったのである。結果として、この植林は今までのところ成功している。

北京天津風砂源治理工程は2002年から開始された国家プロジェクトである。2000年前後に北京、天津で激しい風砂が吹き荒れ、北京空港が閉鎖されることまであった。大同でもそのころは真昼でも太陽が風砂に隠れて、夕闇のようになることがあった。そのような状態を改善するために、風砂の通過点で大規模な緑化プロジェクトが建設されることになったのである。それに関係する北京、天津、山西、河北、内蒙古の副市長、副省長等が出席する会議が2006年に大同で開催された際に、成功モデルとしてこの采涼山プロジェクトが見学先に選ばれたのである。その後もたくさんの見学者が訪れている。

そして、それが呼び水となって、その周囲に670haもある国家プロジェクトがやって来た。先述

したように、采涼山プロジェクトの地続きに、私たちは実験林場「カササギの森」をつくり、ここでも 540 ha の造林を行っており、それらをあわせると 1,500 ha 以上の造林地が広がることになった。

【植林は 1 分、管理は 9 分】

困難な条件での植林が成功することには、いくつかの要因があった。一つはすでに紹介した雨期整地である。当初、小さなマツ苗を植えるのに、あれほどの土木工事を実施する理由がわからず、現場でこっそりほかのやり方を試してみた。活着率その他を比べてみると、現地で実際にやられている整地方法がはるかによかったのである。その原因を探ったところ、先に述べたようなことがわかった。



2000 年ごろは激しい風砂が吹き荒れた。視界がきかない

もう一つは植栽した苗木に秘密があった。すでに述べたように、日本の専門家に来てもらって、菌根菌を利用した育苗方法を指導してもらったのが 1997 年 4 月で、その翌年からその方法を実用化して、100 万本の育苗体制をとった。その最初の苗木を 2000 年春から出荷できるようになり、采涼山では 2 年目からその苗木を植え始めたのである。

第 3 の理由は、これも采涼山プロジェクトの 2 年目から、このプロジェクトを実施する大同県聚楽郷に張春という新しい党書記が着任したのである。中国には緑化の困難さを表す標語として「植樹 3 分管理 7 分」がある。植えるところまでは全体の 3 分で、後の管理のほうがずっと重要だというのである。ところがこの張春書記は「植樹 1 分管理 9 分」と言って、後の管理の重要性を常に強調し、自分でもその先頭に立って、現場を見回った。たとえば、モンゴリマツの越冬を保護するための土伏せを、ほかのプロジェクトでは 1 年しかしないが、ここでは 2 年にわたって実施した。張春書記の努力なくして、このプロジェクトの成功はなかったと思う。

【緑化の歴史のある村と協力】

防護林の成功例としてもう一つ陽高県大泉山村をあげておこう。この村の緑化は長い歴史をもっている。1938 年のある日、一人の男が流亡の果てにこの村にやって来て、荒れ寺に住み着いた。荒れ地を耕して生活を始めたが、畑を洪水や風砂から守るために、自分で山に木を植え始めた。1945 年にも一人の男が来て、二人は協力して木を植え始めた。ヨモギも生えなかった山がポプラなどの緑に変わっていった。

中華人民共和国の成立後、二人は村人を率いて緑化に励むようになった。その成果を当時の県のリーダーが「見よ、大泉山が変わった様子を」という報告書にまとめたところ、毛沢東がそれを目にとめ、「このような典型的な例を得たからには、広く華北・西北及び水土流失問題をかかえるあら

ゆる地方がこれを見習って自らの問題を解決できる（以下略）」というコメントをつけた。それが全国に宣伝されて、この村は緑化のモデルとして知られるようになった。そして、文化大革命の期間には大学生、高校生などが村に住み着き、村人と一緒になってマツを植え、大面積の松林を作り出した。

緑の地球ネットワークは1996年からこの村で緑化協力を開始し、毎年10～20 ha ずつマツの造林地を増やしてきた。その年の降水量などによって、活着率には差があるが、おおむね良好に生育している。

この村には今でも見学者が多い。緑化の歴史を知って訪ねる人もいれば、この地方には珍しい森林を楽しむために来る人もいる。その人たちの便宜を図って、村の中心部に小さな記念館がつくられ、植林地の立体模型、以前の植林道具、写真などが展示されている。その最新部分のコーナーでは、緑の地球ネットワークの協力が多数の写真などで展示されている。



大泉山村は長い緑化の歴史があり、一面に松林が広がる

【緑化の成功で大きく変貌した村】

小学校付属果樹園も、初期は失敗が続いたのだが、成功する例も出始めた。靈丘県紅石楞郷上北泉村もその一つである。

最初にこの村を訪れたのは1994年秋のことで、下寨北村の新しい校舎を見るついでに立ち寄ったのだった。靈丘の県城から省道201号線を南下するとまもなく唐河の溪谷にはいる。両側に高さ数百メートルのほぼ垂直の崖が現れ、道路のすぐ東側を唐河が流れているのである。その道を20 kmほど走ると、東側の山並は後退し、いくらか平地が出てきて、道路は国道108号線と交わる。その地点の、唐河の東側にある小さな村が上北泉村だ。

その当時、村に行くためには、唐河を歩いて渡った。橋がなかったのである。幸か不幸か水は少なく、ズボンをからげれば、それで渡ることができた。村は貧しく、農家の壁は石を積み上げ、その石と石との間を土でつないでであった。靈丘県南山区の多くの村がそうだが、この一帯は山が多くて、平地が少ない。上北泉村も唐河のほとりにわずかな平地があるだけで、村の背後には山が迫っている。耕地が少ないため穀物生産はわずかなものだった。

村の幹部たちはまだ若く、一つの野心をもっていた。村を押しつぶすように迫る背後の山を果樹園にすることで、貧困からの脱却を図りたいというのだ。そしてその夢を桃源郷のような絵に描いて、自分たちの気持ちを奮い立たせていた。靈丘県は大同市の最南部にあるが、この上北泉村は靈丘県の中の最南部で、大同市の最南部に属する。そして、標高は800 m未満で、大同ではもっとも暖かく、目の前には唐河の水がある。

青年幹部たちは実験的に果樹栽培を始めていた。サンザシから始め、リンゴ、アンズ、ブドウなどをわずかな面積で試していたのだ。そのほかに、香辛料になる中国サンショウ、クルミなども見

られた。決定的な資金不足に悩んでいるときに、私たちが行きあわせたのだ。

私たちにとっても成功事例は喉から手が出るほどほしいところだったので、さっそくここでも小学校付属果樹園をつくることにした。翌1995年度の計画に組み入れ、1996年春から植栽を始めた。最初に植えたのはアンズだったが、ここではそのほかにリンゴ、ナシ、スモモ、クルミ、サンショウなど、多くの種類の果樹を植えた。十数年の協力を通じて、面積は100 haを超えた。



上北泉村では毎回、熱烈歓迎の光景が繰り広げられる

その間に村は急速に変わった。りっぱな橋がかけられ、村の中の道路も舗装された。少し豊かになると、新しい家に建て替えられるのは、どこの農村も同じである。若者の中には収入をため込み、トラックを購入して、運送の仕事をする者も出てきた。それがまた村の収入を増やす。この地方の農村では出稼ぎにでる人が多く、村の中で若者を見ることがないが、この村には若者が残っている。よその村から結婚相手を迎える例も増えている。新居に水洗便所をつくり、プロパンガスを入れたり、メタンガス発生装置を備える家も出てきた。

背後の山も、果樹園の上には、マツヤコノテガシワなどを植えて緑化を進めた。唐河のほとりの低い土地にはポプラを植えた。唐河の向こうの山も同じように緑化し、村から見える範囲はすべて緑になってきている。中央政府や山西省政府から、緑化の先進村として表彰を受けた。

数年前には北泉山荘という小さなゲストハウスを建てて、観光業も始めた。蓮池をつくり、スッポンの飼育も始めた。下流の下北泉村は山からの冷水を生かしてニジマスを飼っているのも、そことの連携も進んでいる。北京などの都会では、エコツアーが流行りつつあり、そうした客を引き込んでいる。ここは夏が涼しいので、避暑地としても成り立つのだ。行くたびに村の様子が変わっていくのには驚かされる。

【面積あたりの収入が10倍にも】

渾源县呉城村は今ではアンズの里として知られる。この村が最初にアンズを植えたのは1994年春で、私たちが小学校付属果樹園に取り組み始めたのと同じ年である。

呉城村はとなりの大同県との県境付近にあり、交通の不便な村だった。県境をはさんですぐ北側に、私たちが大きな失敗を体験した大同県徐疇郷があり、直線距離では10 kmも離れていない。呉城村の標高は1,300 m前後、水土流失がきわめて甚大で、深さ数十メートルの侵食谷が縦横に走っている。畑は典型的な三跑田で、水条件が悪く、土壌もやせていて、上のほうの畑ではアワ、キビ、ジャガイモなどを栽培していたが、さほどの収穫は得られなかった。

貧困脱却のためにここでも果樹栽培が検討され、乾燥に強いアンズが候補に上がった。呉城郷では女性の党書記のもとで周到な計画が練られ、アンズ栽培の先進地・河北省張家口市の3つの県に何度も代表を派遣して栽培方法などを学んだ。この村からも前後して50人がそれに参加した。さら



侵食谷の上に、300ha、25万本からのアンズの林が広がる

杏仁は、ナッツとして食べられるほかに、薬材としてたくさんの用途があり、さらに良質の保湿剤として化粧品の材料に欠かせない。果肉を取り除き、乾燥させればいいから、一次加工は簡単で、保存もきき、国際的な販売ルートもできていて、価格変動も小さい。呉城郷はこの仁用杏を選んだ。

1994年にアンズを植えたのは村内460戸のうちの220戸で、全体の面積は92haだった。1戸あたりの平均は0.42ha、345本ほどだった。アンズが結実するまでには4年かかるので、最初の収穫は1998年のはずだった。ところがこの年、4月末に寒波がやって来て、着いたばかりの幼果が落ちてしまった。栽培農家の落胆は大きかった。私たちがこの村と協力を始めたのはそのようなときだった。

その翌年、1999年はアンズが大豊作だった。この年は建国以来最悪と言われる大旱魃の年で、この村でも穀物栽培は大打撃を受けたが、アンズはそのような旱魃にも負けることはなかった。

【大学生を毎年送り出すようになった】

その経験から、いったん足踏みしていたアンズの栽培熱が再燃し、私たちの協力も積極的に受け入れられた。私たちの協力は1年に5～10haほどだったが、村は自分たちでさらに拡大し、最終的には300ha、25万本ほどになり、現在ではそのすべてで収穫期を迎えている。

この村でも徐疇郷と同じような問題が発生したが、そのたびに適切な対処がなされた。ノウサギの食害に対しては、忌避剤が用いられた。消石灰に豚の血や廃油などを混ぜて水に溶き、それを苗木に塗るのである。少しでも塗り残しがあると、ノウサギはそこをかじる。すると村人は塗り残しにインスタントラーメンの空き袋をくくりつけ



加藤登紀子が呉城村を訪れ、村の人たちと和やかに交流した

る。

接ぎ木に失敗し、台木の芽が伸びたニセ苗が、この村にもやってきた。見分け方についての事前の知識があったし、仮に混じり込んでも、活着したものに現場で接ぎ木する方法を知っていたので、問題はそれ以上にならなかった。

2004年7月、国連環境計画（UNEP）親善大使で歌手の加藤登紀子がこの村を訪れた。この年、アンズは大豊作で、王迎才書記の話では「穀物栽培では10 aあたり150元にしかならないが、アンズは1500元にもなる」とその優位性を説明した。

呉城村で起こった変化の中に教育の充実がある。2000年に初めて一人が大学に合格し、その後は毎年数人の大学生を送り出すようになった。初級、中級の教育もよくなり、中学生の成績は県内一で、中学卒業生27人のうち16人が高校に入学しており、それも県内一というのである。

そして彼は「このような成績をあげたのは日本のみなさんのおかげだ。アンズを植えるのを応援してくれただけでなく、それを小学校付属果樹園とすることで教育の大切さを伝えてくれたのだ」。「振り返って、貧乏は怖くない。慣れっこだった。本当に怖いのは、貧乏だから勉強なんかしてもしかたがないと、幼いころから諦めていたことだ。大学まで進むのはまだ少数だが、その可能性が出てきたことで、子供たちの学習への意欲も変わってきた」と話した。

【開花前後の寒波で実が落ちる未解決の問題】

しかし、すべてが順調なわけではない。この地方では以前は厳冬期に零下30℃になるのは珍しくなかったが、最近は冬がそれほど寒くないのだという。2000年のアンケートでは、56人中44人（89.8%）が「冬に以前のような寒い日がなくなった」と答えている。

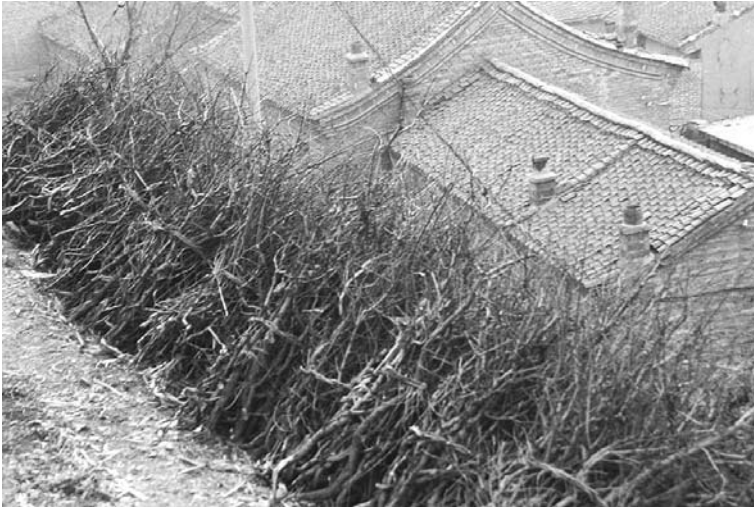
アンズは、サクラと同じように毎日の気温を積算して、それが一定温度に達したときに開花する。つぼみが固い間は低温に強いが、開花後あるいはつぼみが膨らんでから低温にあうと、落ちてしまう。冬が温暖化したせいで、アンズの開花時期が早まってきた。そのまま暖かくなれば問題ないが、開花前後に寒波がやってくると、困ったことになる。零下2℃なら問題ないが、零下4℃だと影響が大きい。2009年、2010年と、問題の年が続いた。

果肉を目的とするアンズのほうが、開花時期が遅く、この問題を回避できる可能性がある。私たちも協力して、試験的にそれらの品種を植えてみているところである。

2013年は大豊作だった。9月に訪れると、王迎才の家の中庭には麻袋に詰めた杏核（殻付きの杏仁）が山積みされていた。村全体では800 tになり、アンズの収入だけで400万円が約束されているという。これで3年続きの豊作だ。

もう一つの問題は出稼ぎに出る人が増え、管理に隙ができ始めたことだ。アンズはほかの作物に比べて、手間を省くことができる。主な作業は、剪定、施肥、農薬撒布、収穫とその後の処理くらいのもので、中耕や除草もいらぬ。手間を省ける分、出稼ぎも可能だと以前は話していたが、今は出稼ぎが増えて、管理が不足するというのである。中国の多くの農村が抱える問題である。

果樹の効果は収入だけではない。アンズが生長すると、水土流失が軽減される。降った雨は枝葉で受け止められ、幹を伝って地表におり、根に添って地中に入る。雨が直接、大地をたたくことがなくなり、土が流されることもなくなる。耕すことをしないから、風に土を巻き上げられることもなくなる。



果樹の剪定枝が燃料になると、村の周囲に森林がよみがえる

アンズはいい実をならすためには、毎年、剪定をしないといけない。その枝が生活燃料になる。その結果、周囲の山の木や灌木を伐採することがなくなる。森林が再生する条件ができるのである。また、それまで燃やされていたトウモロコシの茎、アワ、キビの藁などが堆肥になって畑に戻される。やせる一方だった畑の土が、ゆるやかに肥えていく。またアンズの落ち葉は、栄養価の高い家畜飼料として利用される。

アンズを植えることで、この地方の最大の問題であった水土流失が軽減され、人材の育成、農村の自立にもいい効果をもたらされたのである。

呉城村のアンズは、退耕還林の成功モデルとして多くのメディアで報道され、アンズの開花時期に開催される杏花節（アンズの花ウィーク）には遠方からの客を含め、たくさんの花見客でにぎわう。

そして晩秋は野外の活動は不向きなのでまだ見たことがないが、大同から送られてきた写真によるとアンズが美しく紅葉して村中が錦につつまれたようである。高見がFacebookでその写真を紹介したところ「涙が出る光景でしょうね」と感激された。緑化が地域の景観をやすらぎのあるものへと変化させ、それがまた人々を呼びよせる資源となる効果をもたらしたのである。

【成功のための3つの条件】

これまで延べ200余りのプロジェクトを実施し、失敗の苦痛、成功の喜びをさまざまに味わってきた。この地方は気象も不安定だし、土地条件もさまざま。少数のプロジェクトに集中して取り組むのも選択肢としてはあるが、リスクが大きすぎる。数多くのプロジェクトを同時並行で進めたのは、リスク分散が目的だったが、別のメリットも出てきた。さまざまなプロジェクトを比較・分析することで、理解が深まるのである。

緑化植林という生き物相手の活動で成功するには、三つの条件が考えられる。まず自然の条件が欠かせない。最終的にどのような森林が成立するか、しないかは、降水量を初めとする自然の条件に完全に規定される。水の不足するところに森林が成立することはありえない。何をやるにしても、第1に自然の条件をしっかりと検討しなければならない。

第2に重要なのは社会的な関係である。中国は政府の力と役割が大きいので、その支持が得られるかどうかで、成否は大きく分かれる。また、道路事情や市場性なども考えておかないと、最後のところでひっくり返される。

第3は、人的な要素である。特にリーダーの存在が重要である。たとえば果樹園をつくる場合、植えてから結実するまでに最低4年はかかる。その期間、施肥、農薬撒布、剪定など手間がかかるし、経費の負担も出てくる。にもかかわらずこの期間は収入は期待できない。果樹を植えたのが畑であれば、穀物などの収穫は確実に減る。そのような中で堅持するには、しっかりしたリーダーの存在

が欠かせない。

プロジェクトを成功させるにはこの三つの条件がそろわないといけない。ほかに経費も必要だが、それについては日本側が支援するのが、私たちの協力の出発点だった。

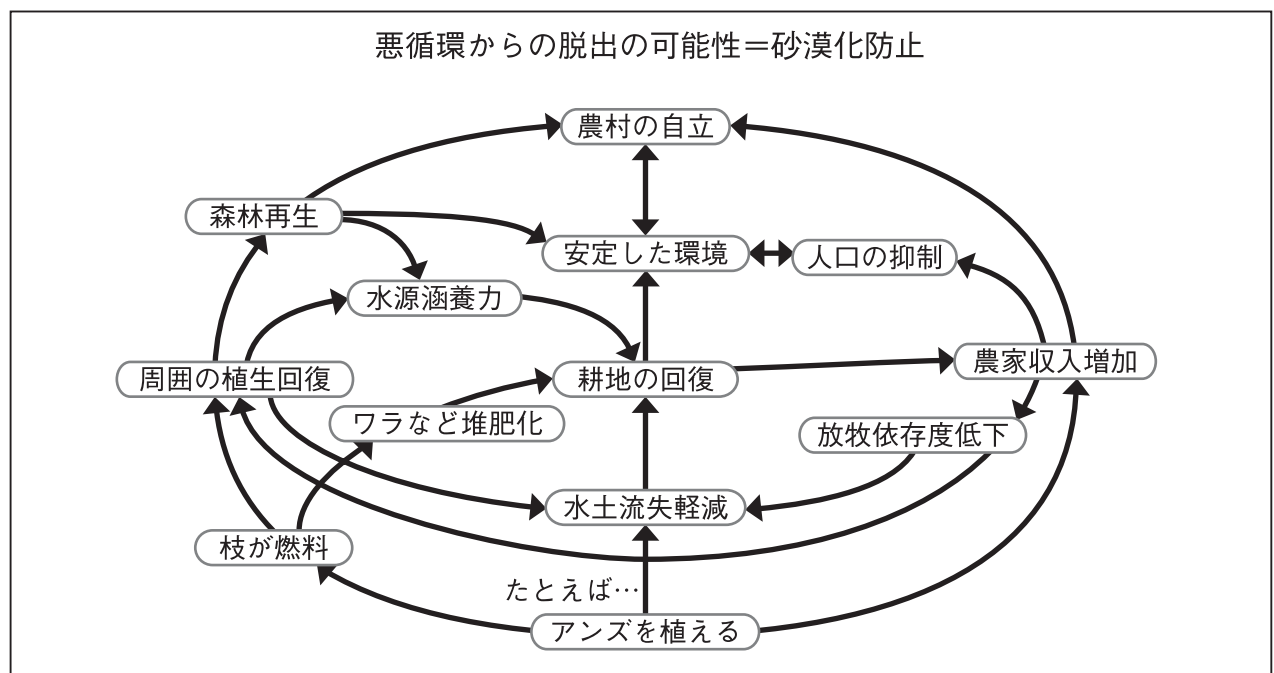
この三つの条件はそれぞれが独立してはいない。たとえば交通が不便で、水その他の条件にも恵まれない村がある。そのような村では、結婚したくても、相手がいない。村の娘たちは外に出たがるし、両親もそれを望む。そんな村に、外から嫁がやって来るわけがない。幸い結婚できて子供が生まれたとしても、子供に教育をつけることができない。そのために、向上心のある人からいなくなる。腕力・体力に恵まれ、才覚が働き、度胸もある、本来なら村のリーダーとなるべき人物が真っ先に村を出てしまうのだ。

3つとも条件の欠けている村は、どうやっても成功は覚束ない。3つともそろっている村は、たいていは自分たちでうまくやっているので、私たちの出番はない。だとすると、一つか二つの条件に欠けている村が対象ということになるが、その三つの中ではどれが大事だろうか。

やはり人的な要素だと思う。しっかりしたリーダーがいてくれれば、ほかの面で欠けるところがあったとしても、それを補ってくれる。たとえば、果樹園を成功させた霊丘県の上北泉村にしても、渾源県の呉城村にしても、それぞれしっかりしたリーダー群が存在していた。

たくさんの失敗を経た末のことだから自慢にならないが、気づいたことがある。村を訪れたら、まずその村の学校を見るといい。村の経済力に比して、学校がしっかりし、教員が情熱的な村は、必ずとは言えないが、成功の見込みが高い。逆に、レンガ建ての新しい住居なども建ちだしているのに、学校がぼろぼろで、教員が熱心でない村は、まず例外なく失敗する。学校がしっかりしている村は、その村のリーダーが、村の将来を考えていることの表れなのだ。中国の農村では、学校の建設や運営は村に任されていたので、その善し悪しが判断基準になったのである。

しかしここ5年ほどで、教育の環境は大きく異なり、小さな村の小学校は廃止されて、大きな村の学校に統合されることになった。小学校入学と同時に、大きな別の村の学校に寄宿して勉強するようになったのである。その結果がどう出るかはまだわからない。



【農村で井戸掘りに協力】

緑化以外の面でも協力した。一つは井戸掘りである。1994年春、祁学峰と最初に訪れた広霊県苑西庄村は気にかかる村だった。1995年には秋の長雨で、私たちが最初に訪れた老夫婦の家も倒壊していた。そのとき訪れた小学校の先生の家も半分が潰れていた。

この村には深さ30mほどの井戸が20ほども掘られていたが、次々に水が涸れ、水が出るのはたった3本で、1日にバケツ100杯を汲むのがやっとだった。その水を150人の住民と家畜とで分け合っていたのである。そんな水条件では、木を植えることは考えられない。

1997年になって、テレビ朝日が「素敵な宇宙船・地球号」シリーズで私たちの活動を取り上げることになり、農村での撮影が求められた。黄土高原の農村を番組にする以上、水問題を避けては通れない。対象としてこの村を選んだ。

そのことを大同に連絡すると、祁学峰は井戸を掘るつもりだな、とすぐに察したようだ。そして、村の老人たちが井戸掘りについて相談する場を設定していた。日本側にはまったくその相談はなかった。数年も一緒に農村で活動しているうちに、互いに暗黙のうちにも相手の考えていることがわかるようになっていたのだ。

農家の炕（オンドル）付きの部屋一つを借りて、撮影クルーの3人と高見が2泊した。その家の主は朝まだ暗いうちに水汲みに出る。順番を遅れると水が濁るし、汲めないことすらあるからだ。クルーはその場を撮影に行き、その後で洗面器の底にちょっとだけ水ももらって、交替で顔を洗った。残った水を庭に撒こうと考えて、洗面器を持って外に出ると、意図を察した主が手を振って止めた。止められなくてもわかったのは、庭で飼われているヒツジやニワトリが大騒ぎしたからである。洗い物をした最後の水は家畜の飲み水になる。

番組が放映されると、大きな反響があった。大阪の事務所の電話は鳴り続け、会員が増えた。そして井戸掘りに協力するといって寄付が寄せられ、農協中央会からの助成も決まった。

井戸を掘るのは初めての経験だったので、果たして水がでるのか、関係者はとても緊張した。祁学峰はほとんど毎日、広霊県の青年団に電話で問い合わせ、県の幹部は村まで走って、その



苑西庄村の女性の先生は教育熱心で子供たちに慕われている



井戸掘りに成功。老人は「長生きしてよかった」と話した

結果を伝えたのだという。

176 m も掘って、やっと水脈にたどり着いた。村にポンプが届いたのは夕方だったが、村中の人々が井戸に集まって帰ろうとしないので、夜通しで作業を続けたそうだ。水が出たのは翌朝だった。

1時間あたりの水量は15 m³ほどなので、灌漑には使えない。それでも自宅の中庭などに小さな菜園を作って、季節の野菜が栽培されるようになった。それまでは買うしかなかったのだ。水が出たとき村の子供は母親に「これ

からは毎日顔を洗ってもいいの?」と聞いたそうだ。そして、これ以上の節水の余地がないほど水は大事に使われている。苑西庄村の井戸の側には「喫水不忘打井人」（水を飲むときは井戸を掘った人のことを忘れるな）と彫った花崗岩の記念碑が建てられている。

同じように水に困っている霊丘県石瓮村でも井戸を掘った。こちらはさらに深く183 mだった。水が出るようになって、この井戸に他の二つの村から水汲みに通ってくるようになった。この井戸で3か村を養っているのだ。

井戸掘りが農村で大歓迎されることはわかったが、その反面、水を使えば地下水位が下がるのは避けられない。井戸掘りは緊急避難に過ぎないと考えて、その後は避けていた。2007年になって大同県の遇駕山村が取り残されているのを知り、この村の井戸掘りに協力することにした。私たちの2000年の調査で、この村の一人一日当たりの水使用量は15.6 lで、調査した21の村の中で最低だった。しかも村内の70%の人が、村の湧き水は減少していると答えていたのだ。村の人たちは遠くの村までもらい水に通っていた。

取りかかったものの、途中で一度、失敗した。砂の層が現れて次々に崩壊し、それ以上、掘り進めなくなったのである。少し場所を移動して掘り直し、128 m掘って水脈に達した。

村の人たちの喜びは大変なものだった。2008年4月、イオン労働組合とサントリー労働組合の共同のツアーが参加して、通水式が開かれた。BS朝日が開局8周年番組「よみがえれ! 緑の大地-中国・黄土植林プロジェクト17年目の挑戦」の取材で現場に来ており、番組でも放映された。全村の人がにこにこ顔で踊りの輪に加わったが、やがてどこからかすすり泣きが始まり、全体に広がっていった。

県の水務局の幹部から「あなたたちが門外漢だから、この井戸は掘れたのだ」と言われた。私たちが取り組む以前に、何度も試みられ、そのたびに失敗して、専門の人たちは匙を投げていたのだ。この村を最後に、飲み水に困る村はなくなった。



記念碑に「水を飲むときは井戸を掘った人を忘れるな」とある

【地震被災地の小学校建設に協力】

大同は自然災害の多いところだ。とくに大同県と陽高県の県境付近は活断層があるようで、1989年にマグニチュード6.8の直下型地震があり、被害は4県に広がった。さらに1991年にも余震があっ

て被害を出したが、この協力活動が始まる前のことだ。

1999年11月になって、また同じ地域で地震があった。10年で3度である。訪れた陽高県西団堡村は3年続きの旱魃の上に地震まで被災し、食糧にも困る状態だった。農家の軒下にジャガイモから澱粉を搾った搾りかすが干してあり、お粥に混ぜて食べるという話だった。

国の民生部から救援のテントが貸し出されていた。しかしテントでは零下30℃に耐えられないので、各家で倒壊

した家屋のレンガを使って、かがんでやっと入れるほどの小屋を建てて暮しており、小さなオンドルも付いていた。助けをただ待つだけでなく、自分で生き抜こうとする生命力の強さを感じた。

大型のテントを使って学校もすぐに再開されていた。子供たちは机の下で、足踏みをしながら勉強していた。火が使えない上に、テントの裾から雪が入り込んでいたのだ。

阪神淡路大震災を被災した私たちには他人事とは思えなかった。大同事務所の人たちと相談し、まず学校の再建に協力することを決めた。帰りの北京で日本大使館を訪ね、そのための資金面での協力を依頼した。時間を置かずに外務省草の根無償資金協力が決定され、大同県の許堡村と、陽高県西団堡村で小学校を建て直すことになった。西団堡村は断層の真上にあることから、村ごと新しいところに移って再建されることになり、名前も新団堡村と変わった。建設費の不足分を全国都市下水道対策連絡協議会からの寄付金が補ってくれた。

調印式に日本大使館の杉本信行公使（経済部長）が訪れた。夜行列車で来て、夜行列車で帰る強行日程だったが、残した印象は強烈で、大同の関係者は杉本のことをよく覚えている。

2008年3月に、産経新聞の山本勲編集委員がこの学校を訪れた。先生も児童もこの学校が日本の協力によって建てられたことをよく知っていた。山本は「やっぱりうれしいですよ」と話し、この学校のことを記事にした。

南天門自然植物園の入口の南庄村でも、イオン労働組合の協力で小学校校舎を建てた。1999年のこと。

さらに遇駕山村の井戸掘りと一緒に、2007年、大同県周土庄鎮三十里鋪村でも小学校を建てた。私たちの緑化協力プロジェクトが集中する地域である。

1998年1月、張家口市で地震が発生した際には、天鎮県にたまたまいて揺れを感じた高見が翌日、被災地を慰問



北京の日本大使館の杉本公使が農村を回り、大歓迎を受けた



張家口市の地震被災地を訪れ、小学校再建の資金を届けた

し、その模様を帰国後ラジオ番組で話したところ、阪神淡路大震災の記憶も新しい関西の人たちから寄付金が寄せられ、震源に近い張北県の爬胡不落村の小学校再建に協力することになった。

【数々の賞を両国で受賞】

大同における協力プロジェクトの成功によって、中国でも日本でも、評価が高まってきた。特に中国では、共青团中央の書記や、中華全国総工会の副主席など、幹部がたびたび現場を訪れ、「国際協力の貴重な成功例」と評価するようになった。中央電視台、人民日報、新華社など有力なメディアも繰り返し報道しており、綠色地球網絡大同事務所を初め関係者にとっては大きな励みになった。

2006年9月には、大同市人民代表大会常務委員会の決定で、高見が大同市榮譽市民に選ばれた。

2007年9月、北京の人民大会堂で開催された第2回日中省エネ環境保護フォーラムには、日中両国の政府と企業の関係者など1,000人が出席した。開幕式で挨拶に立った曾培炎副総理は、私たちの大同での協力事業を名指しし、「中国政府と中国人民は高く称賛し、心から感謝しています」と締めくくった。

2012年4月には、全国緑化委員会、国家林業局などが主催する「綠色中国年度焦点人物コンテスト」に高見がノミネートされ、インターネット上の投票で25.3万票を獲得し、唯一の外国人として国際貢献賞に選ばれている。

日本でも、緑の地球ネットワークは、2001年に「おおさか環境賞・大賞」（豊かな環境づくり大阪府民会議）、2003年に「明日への環境賞」（朝日新聞社）、2005年に「毎日国際交流賞」（毎日新聞社）などを受賞した。

2012年9月には日中国交正常化40周年に際して、高見が外務大臣表彰を受けている。

（7）荒れ山に植物園をつくる

【植物園—靈丘県南部に的を絞る】

協力拠点の環境林センターが軌道に乗り始め、農村で植えているマツや小学校付属果樹園のアンズも、すべて順調とはいえないが、成功するものが出てきた。ここらで立花との約束に着手しないといけない。植物園の建設である。

これまで大同市の4つの区、7つの県をすべて回って来た。たいていの区・県には協力プロジェクトがある。一つの市と言っても、面積は14,200 km²もあり、日本の関西地方に例えれば、大阪府、京都府に兵庫県を加えたくらいの広がりである。気候的にもかなりの違いがあり、山西省自然地図冊による



太行山は東西の幅が最大180km、南北は450kmもある大山脈

と、大同市のほぼ中央部を東西に横切る恒山山脈を境として、南は中温帯、北は寒温帯に区分されている。年間の平均気温にそう大きな違いはみられないのだが、春の訪れは南の靈丘県と北の県とでは2週間ほど違う。そして植物の種類は、南の靈丘県が圧倒的に多い。

人の面でも靈丘県に足がかりができた。1995年の夏のツアーが靈丘県紅石楞郷上北泉村を訪れたとき、唐河のほとりに造られている果樹園に案内された。



靈丘県南山区は一帯の中では植物種の多いところだった

そのとき立花が「この果樹園をつくった技術者はできるよ。植物のことがわかっている」と言い出した。それが李向東だった。立花は人には会っていないのに、その作品を見て、この男を建設を始めたばかりの環境林センターに引き抜くように提言した。それには祁学峰が反対だった。李向東は農民で、農村戸籍しかない。それが大同市の郊外に行っても、仕事はしにくいというのだ。彼はまた「魚を水から離してはいけない」と語った。

だが靈丘なら祁学峰にも異論はなかった。1997年から「環境林センター靈丘支所」の名のもとに小さな苗圃をつくり、李向東に任せた。いや、そうやって彼を繋ぎ止めておいた。

1998年4月、祁学峰と武春珍の二人に、立花がこの活動に参加するに当たっての約束を伝え、それへの同意を求めた。さらに李向東にも、「立花代表は植物園をつくるのが念願だ。それは観光のためなんかではなく、この地方の緑化の筋道を研究するためのものだ。植物園の候補地を探してほしい。そして周囲にどのような植物があるか、その調査をしてほしい」と頼んだ。

そのころ高見は日本にいる間は、毎週のように立花を勤務先の大阪市立咲くやこの花館、花園大学、そして自宅へ訪ね、植物園の構想についてイメージを膨らませた。

この植物園の目的を立花は4つにまとめた。1) 植物の遷移をしっかりと観察し緑化の道筋を見定める。2) 周辺や他地域からも植物種を導入し気候や土壌への馴化を進める。3) 多種類の植物を育てる経験を積み、技術の向上、人材の育成を図る。4) 持続可能で多様性のある森林再生のモデルをつくる。

地形その他の条件としては、1) 人や家畜の害を避けることが重要であり、守りやすい場所、地形を選ぶ。2) たくさんの種類の植物を栽培するためには、高低差があり、地形の複雑なところがいい。3) さまざまな作業や見学者を呼び込むことを考えると、ある程度は交通の便のいいところがいい。

【山の奥にあった広葉樹の自然林】

1998年7月、李向東は訪れた遠田と高見に「山の奥に自然林が見つかりました。そこにはこんな木があります」と言って、一抱え以上のポーズを取った。日本側には信じられることではなかった。大同の農村には「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし…」という民謡があるし、1992年以来ずっとこの地方を歩き回ってきたが、自然の森林らしいものはどこにもなかった。

「遠いのですか?」「いえ、2里ほどです」「これから行けますか?」「大丈夫です」といったやり取りの後、歩きだしたのだが、それらしきところには行き着けない。日本の1里は4 km だが、中国の1里は0.5 km で、2里は1 km のはずだが、その何倍も歩いても、目指す場所に着かない。途中で農民に出会って尋ねると、「2里だ。道はいい」といった返事が返ってくるが、やはり着かない。ついに諦めて、別の機会を待った。

2度目も行き着けなかった。かなり歩いたところで、小山のようなタキギを担いで急斜面を下って来る老人に出会った。尋ねると120斤=60 kg あるという。その中にナラ、シラカンバ、カラマツの枝が混じっているのがわかった。森林があるのは間違いない。伐ってきた場所を尋ねると、目の前の山を越えて、さらに奥の山だという。このときも諦めざるをえなかった。

等高線の入った地図は中国にもある。1万分の1の地図もある。しかしそれは厳重に管理されていて、一般の人はアクセスできない。行政区画と村名、主だった道路だけが記された県別の地図が市販されるようになったのも2000年前後からのことで、それ以前はそれすら手に入らなかった。そのために農村の人たちに地図は縁遠く、正確な方角や距離の感覚も身につけていないのである。

弁当を用意して、朝暗いうちに車で出発した。4度目の挑戦になる。一番近い村に車を止め、村の人に案内してもらうことになった。私たちの昼食と数本のビールまで背負子に入れている。ビールなんてなくていいと言うと、「ゆっくり歩くから大丈夫だ」と答える。そのうち先を歩いている案内人が見えなくなる。とっていると、何か問題があったのかもしれないと心配して、引き返して来る。背負子を背負ったままで。

河原のようなところを歩き、灌木の中を藪こぎし、山の稜線近くまで登ると、確かにそこに森林があった。ナラ、シナノキ、カエデ、カバノキなど落葉広葉樹の林で、樹種もけっこう多い。遠田が「種は異なりますけど、属のレベルでは日本の東北地方や北海道の森林と共通しています」と話す。驚いたのは、林床に大量の落ち葉が積もっていることで、くるぶしまで埋まってしまう。これほどの光景は日本でも見たことがない。

李向東や地元の人々は、「納士山」と呼んでいたが、地図によると碣寺山(1,768 m)で、河北省との境界まで5 km しかない。国道108号線から山頂まで直線距離では4 km なのだが、アップダウンが多く、道が曲がりくねり、藪こぎをしたりするために、片道4~5時間もかかってしまう。

山頂付近の森林は、後で年輪その他を調査した結果、およそ20年前に徹底的に荒らされたところがその後は放置され、自然に再生したことがわかった。さらに山頂から高低差で350 mほど下がった谷底には、一抱え以上の樹木が生い茂っていることも確かめられた。

このような森林はどのようにしてできたのか。現場とその周辺の調査で経緯がわかった。麓の村で1960年代にアブラマツを植えた。20年もたつと、その下枝が燃料として使えるようになる。村の近くで燃料がまかなえれば、



立花吉茂の植物園にかける執念が自然林の発見につながった

山の上に上がる人はなくなる。人が来なくなって、道は灌木に覆われてしまった。村の近くにマツを植えたことで、山の上に自然に森林が再生したのである。

どこでもとまでは言えないが、森林の成立する自然の条件は存在するのである。この森林を見たことで、この地方の緑化に対するイメージはすっかり変わった。

そして、立花の提唱する植物園の意義もより大きなものになった。これと同じような森林を、これほど不便でないところに再現できれば、それだけでも意味は大きい。大同の林業・緑化の関係者は、針葉樹はマツ、広葉樹はポプラ、果樹ではアンズくらいしか植えていない。ほかの樹種が育つことをたいていのは知らない。自然林を探し、植物園の候補地を見て回るのに、遠田も高見も疲れ果てていたが、気持ちは逆に高ぶっていた。

【最後に見つかった好条件の候補地】

李向東たちが探してきた植物園の候補地は7か所あった。それを一つ一つ見て回った。最初に見たのは、靈丘県上寨鎮劉庄村の背後の山だった。国道108号線のすぐそばにあり、村も近い。便利な反面、村の人や通りがかりの人に荒らされる危険性もある。この便利さと荒らされる危険は、常に背中あわせになっている。離れて見たときはそれほど感じなかったが、山に入ってみると、かなりの急斜面だ。地元の人には平気で柴を刈ったり、苗を植えたりするが、日本人にとってはきつい。

山を見た後、国道に通じる小さな脇道を下って来ると、道のまん中に白いボールが転がっていた。子供が遊んでいたのかなと思って、伸ばそうとした手が止まった。その白いボールには、穴があいており、人のしゃれこうべだった。そのときはまだ知らなかったが、この劉庄村は日中戦争に際して多くの犠牲者を出したところで、山西省では「劉庄惨案」として有名だった。

靈丘県のこの一帯は南山区と呼ばれ、山が多くて、平地はほとんどない。耕地の適地がないために、石垣を高く積み上げ、そこに土を運び込んで、小さな畑がつくられているのを見た。植物園には苗畑も必要だが、畑を含む敷地を確保するのは至難の業だろう。ちょっとでも農民の負担になるようだと、猛烈な反発を招くことを、それまでに何度も経験していた。自然の条件だけでなく、そのような方面も考慮して候補地を探さないといけない。

理想的なところはおろか、まずまずのところもなかった。中の一つは岩盤が見えるくらいで、表土が薄く、灌木は育っても喬木は無理だろう。別の一つは、道路の高さから垂直に20mも切り立った崖の上にあり、守るには都合がよくても、私たち自身がどうやって上がればいいのか。

暑い季節で、私たちは疲れ果ててきた。あと1か所を残した段階で、「もういいよ。どこもたいして変わらないから、最初のところに決めようよ」と口に出した。すると李向東は「あと1か所です。あの高いところまで行ったら現場が見えますから、あそこまで行きましょう」と前方を指さす。しかた



植物園と名づけたが、木も草も乏しい荒れ山だった

なしに、そこまで足を運んだ。するとポプラか何かの木が見える。「あの下に小さな池があります！」えっ！

何をやるにしても、まず水である。井戸を掘ることは覚悟していたが、水があるのならそれに越したことはない。どうしてそれを最初に言ってくれないのか。しかもここは最初にみた劉庄村のすぐ近くののだ。

ここが気に入った。4～5年前までは流黄水という名の4～5軒の集落があったそうだが、今は無人である。小さな畑の跡が何枚もあり、それは苗畑として使える。目当ての池は直径10 mほどで、土で半分埋まっているが、育苗や植栽時の水は足りるだろう。上の方に2か所の湧き口があり、その水が流れて来て池にたまっている。

その後、立花が見たが、彼も気に入った。高低差があり、しかも三つの稜線と沢筋があって地形が複雑なのがいいそうだ。

【使用権を確保し建設にとりかかる】

土地の使用権を取得するための交渉に入った。祁学峰が憤慨した。南庄村の言い値が荒れ山の相場としては高すぎる、共青团霊丘県委員会のメンバーも村の要求に同情的で、この協力事業の長期的な利益を理解していない、というのだ。土地取得にかかった費用は12,000元。当時のレートで15万円ほどだった。

すぐに測量をしてもらい、1,000分の1の地図を作った。敷地がすっぽり収まる衛星写真を借り出し、複写を取った。それからすると面積は86 ha、一番低いところは900 m、高いところは1,318 m、最大で400 mの高低差がある。

この図面をもとに、立花が11の区画に分け、それぞれにどの種類の樹木を植えるか、植栽計画を立てた。そして敷地内に植える植物のすべてについて、記録を残すように求めた。

その年の12月、村の人たちと話し合いをもった。ここに作られるプロジェクトはこの協力事業にとっても特別のものになる。しかし、その成果を日本側が持ち帰ることはない。この土地に作られ、この土地のものとなる。立派に成果を上げるには、放牧や柴刈りを絶対に避けなければならない。それに協力してほしいと要請した。

その一方で李向東たちと家畜の侵入防止策を相談した。有刺鉄線を提案したら、すぐに盗まれるとあって却下された。彼らは土を突き固める版築工法で壁を作るのがいいという。さすがは万里の長城を作った民族の子孫だ。最終的には、野生のナツメ、ヤナギハグミ、ニセアカシアなど、鋭い刺を持つ植物を境界線上に植えることにした。

1999年3月、現場で起工式を開催した。日本からのワーキングツアーと李向東たちスタッフ、近くの村の人たちなど、60人ほどが出席した。簡単な式の後、山肌に取りついてマツの苗を植



日本からのツアーと関係者が集まって起工式をもった

えた。植物園を名乗る以上、たくさんの種類の苗を植えたかったが、それは急には準備できない。できあいのマツ苗しかなかったのだ。

ちょうどこのとき、NHKの番組制作のためにクルーが来ており、その様子取材した。その年の5月、BS2の「地球に好奇心」シリーズの「中国黄土高原－失われた森の文化を求めて」（75分）として放映された。ラストシーン



一番高いところは1,318 m。その下に小さなナラが生えていた

に出てくる森林が李向東たちが見つけた自然林である。柴田昌平ディレクターは「NHKの担当プロデューサーから、あの森林の場面があったから番組になったよ、と言われました」と後で語っていた。

この年7月、小渕恵三首相が中国訪問に当たって中国での植林をサポートする基金（日中緑化交流基金）を作ることになり、中国で緑化協力を続ける団体の代表者が首相官邸に集められた。出席した高見に対して、小渕首相は「先日の番組を見ましたよ。大変なご活躍です」と語りかけた。

この山は一帯のどこにでもある荒れ山だった。樹木らしい樹木は、池の周りのポプラと、村の人が栽培していた果樹くらいだが、果樹は数年のうちに消えてしまった。

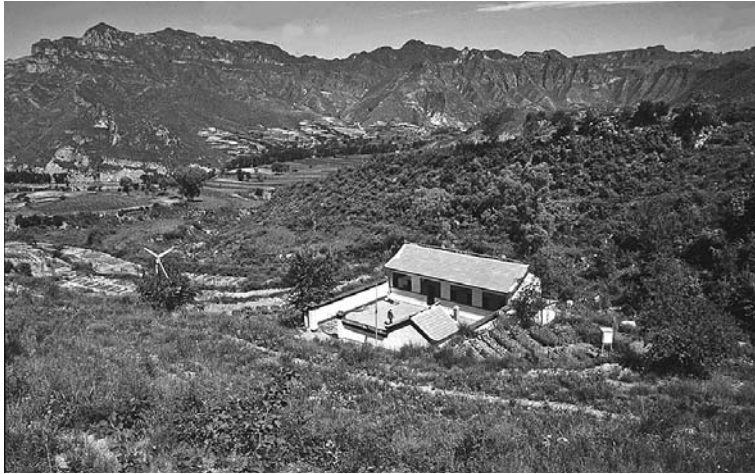
灌木は主にバラ科シモツケ属のものと、小さな実のハシバミが多かったが、放牧のヒツジやヤギにかじられて、70～80 cmほどの背丈しかなかった。その他の灌木は刺によって自分を守っているものばかりだった。草は毒のあるキンポウゲ科のものが目立った。イネ科やマメ科のものも存在したが、放牧のダメージを受けて小さかった。

【荒れ山に植物園と名づける】

標高1,100 mより高いところにナラなどが存在した。冬になってもナラは茶色に枯れた葉が残るので、それとわかった。最大のものでも2 mほどで、そのまま育つのか、育ち損なってこの大きさなのか、判断がつかなかった。そのころは放牧の踏み分け道しがなく、専門家にそこまで登ってみてもらうことはできなかった。しかし、立花、遠田は、植生の回復に自信を持っていた。

そんな山に「植物園」の名を冠するのは気が引けた。いくらかでもそれを和らげるために、「自然」の二文字を加えたのだ。日本側では霊丘自然植物園と称し、現地では南庄自然植物園と呼んでいたが、現地のスタッフの提案で、南天門自然植物園に統一することになった。南天門は敷地内の高所の地名で、地図にも記載されている。河北省との境界から2 kmのところ、碣寺山の自然林とよく似た環境にある。

2000年にレンガ建て平屋の管理棟を建て、4～5名の管理人を配置した。ヤギ・ヒツジなどの放牧や、柴刈りを防ぐのが、最大の任務だった。そして碣寺山の自然林などから、ナラなどの種子を集めて、育苗作業を開始した。最初のうち、その作業は容易でなかった。自然林までは彼らの脚でも片道数時間はかかる。ナラの実が熟する時期はわかっていない。青いものでは発芽しないし、落ちて時間が経てば動物に食べられるし、乾燥すれば発芽能力を失う。何度も通って様子を見るしかなかった。



管理棟を建てて常駐者を置いた。人間の圧力を排除する

李向東はこの県の山深い農村に生まれた。小学校に上がるころに文化大革命がはじまり、学校で勉強する機会はなかった。形の上だけ卒業し、その後、果樹・養蚕の技術者養成学校で学び、大学卒の技術者と組んで、靈丘県の南部で果樹栽培の指導にあたるようになった。農民技術者である。彼が上北泉村で栽培指導した果樹園が、訪れた立花の目に止まったのである。

植物園の他のメンバーは、李向東が選び、誘い込んだ。そろいもそろって植物好きだ。周金は植物園の向かいの劉庄村の出身だ。虐殺事件のあった村で、彼の親族もそのとき犠牲になっている。彼がこの植物園で働こうとしたとき、親類や友人から猛反対を受けたそうだ。

こんな話を彼から聞いたことがある。中学校を卒業した後、製薬会社で働き、中国の各地を転々とした。海南島で働いているころ、両親が老いたので、故郷の村に帰ることになった。農民として朽ちることを決意していたのに、こうやって植物園で働けることになった。自分が植えた木が自分が死んだ後も生きると思うと楽しくてしかたがない。そう言って彼は涙ぐむのだった。

孟令元はすぐ近くの南庄村の人で、彼の妻は、南天門の裏手の南降村からロバの背に乗って嫁入りした。その村まで山道を徒歩で1時間だが、車だと大回りをしないといけないのでやはり1時間だ。植物園のスタッフは園内の植物の標本づくりを自発的に始めたが、『中国高等植物図鑑』を引いて名前を確かめていくのは孟令元の役割だ。



李向東（右端）たちが種を集めて苗を育て、敷地内に植える

それでも最初の年、200 kgものドングリを彼らは集めた。

種子の貯蔵が大変だった。乾燥を防ぐために、二重にした大きなポリ袋にしまい、大同市内の環境林センターの地下室に貯蔵した。ところがその年は秋の気温が下がらず、12月に貯蔵状態を確かめると、アルコール発酵が始まっていた。それでもかなりの数の種子が発芽し、植物園と環境林センターの2か所で育苗を開始した。

【種子や小苗を集めて植物種を増やす】

碣寺山の自然林などから種子を集め、育苗に取り組んだ。そうやって導入する植物の種類は、最初のうちどんどん増える。彼らは1,000種を目指すと言い、それは難しくないと考えていた。しか



日本の専門家もたびたび訪れて、アドバイスを重ねた

を持つよう勧めたが、彼らは使いた柄の長い普通のスコップを担いだ。種子を集めるだけでなく、ほしい苗があるとそのスコップで掘り上げた。自然保護区の中だから、当然、そのようなことは禁止されているはずだ。ところがその関係者は「あの人たちは本当に熱心だ。どこに行っても土を掘って土質を調査している」と話していたのだ。こちらが心配しすぎているようだ。

集めてくる中には栽培方法や正体のわからないものが出てくる。そのような種子が手に入ると、彼らはメンバー全員で等分し、各々が自分でも数通りの方法を試すのである。お互いにライバル心もあるから、人のやり方を盗み見しながら自分のやり方を検討しなおす。1年のうちに幾通りもの栽培方法が試されるのである。

柴刈りと放牧を排除したところ、目覚ましい変化が起こった。まず目についたのは、草や灌木の背丈が伸び、種類も増えてきたことだ。膝や腰の高さだったものが、胸や肩の高さまで伸びた。毒のあるもの、刺のあるものだけが目立っていたのに、イネ科やマメ科の植物がどんどん増えた。「最初の数年はハギ（胡枝子）の苗を大量につくって、それを植えたらいい」というのが立花の意見で、それに従ったのだが、植えたもの以外にもハギの仲間がたくさん育ってきた。放牧がどれだけ深刻な影響を与えていたかが、それによってわかった。

標高 1,000 m のラインから上で、ナラを初めとする落葉広葉樹の森林が育ってきた。スタート当時に、最大 2 m くらいであったものが、伸び始めたのだ。ところがそこに近寄ることができない。尾根筋には放牧のヒツジやヤギがつけた踏み分け道があり、そこを歩いて最高部まで行くことができるのだが、そのルートで観察できる範囲は限られていた。沢筋を登ると植物の種類は多いのだが、途中で岩壁が遮っており、そこから上には登れない。

【調査区を設定して生育調査を実施】

2007 年に国際協力機構（JICA）の草の根技術協力事業を受託できたので、国道から植物園の道路を補修し、さらに園内の作業道・観察道の整備を始めた。管理棟から最高部の南天門まで、コンクリートによる階段が完成した。日本の遊歩道などに使われる 2 本の木杭と横木を組み合わせた丸太階段にしたかったが、樹木のない大同ではそれが高くつくので、一番安いコンクリートにしたのだ。材料のセメント、砂利、水をロバの背に乗せて運び上げ、現場でコンクリートに練って造ったのである。

し手持ちの種類が増えるに従って、新しい種類の発見が難しくなるのは当たり前のことだ。

彼らの活動範囲も最初は霊丘県内だったものが、大同市の他の県、山西省全域から隣の河北省、北京市、内蒙古自治区へと広がっていった。

河北省の野三坡自然保護区へ種子と苗の採集に行くのに同行したことがある。太行山脈と燕山山脈の交点にあり、地質も珍しいが植物種も多いところであった。折り畳み式の小さなスコップ

そして標高 1,100 m 前後のところ、森林の再生が進む日陰斜面（陰坡）への水平道と、日向斜面（陽坡）への水平道を 1 本ずつ造った。これによって森林の再生が進む様子をつぶさに観察できるようになったのである。日本の専門家からは「この道は値打ちですねえ。1 億くらいはかかるでしょう」と言われたが、その 10 分の 1 をずっと下回った。その後、賃金や物価が急上昇したので、あの機会を逃せばもう無理だったろう。



右下の日陰斜面には樹木が育つが、日向斜面は難しかった

園内の樹木の生長ぶりを調査するためのプロットを二つ作った。日陰斜面と日向斜面とでは、植生の回復ぶりがまったく異なるので、最低でも 2 か所は必要だった。日陰斜面では喬木が育って、なんとか森林が成立するのに対し、日向斜面で灌木や草も育ちにくいのである。このような乾燥地では、日向斜面は蒸発量が多く、水条件が悪い。その上、温度の日較差が大きいことも植物の育ちにくい原因だと言われる。特に冬期、零下 30℃ にもなると植物の細胞は凍ってしまう。そこに朝日が当たって急に融けると細胞が破壊されるのだ。そして植物がないと、夏の強雨によって土が流され、岩盤がむき出しになって、植物はいっそう育たなくなる。悪循環である。

調査区はそれぞれ 20 m 四方とし、外周をロープで囲った。区域内の樹木すべてにプラスチック製の番号札をつけ、地際から 1.2 m のところに白ペンキで印をつけた。毎回同じ位置で胸高直径を測定するためである。

南天門自然植物園のスタート時、別の 2 か所で毎木調査に 1 度だけ取り組んだことがある。植物園のスタッフはその 2 か所で独自に調査を続けている。

彼らはまた自発的に標本づくりを始めた。日本の専門家がやり方などについてアドバイスをを行った。2012 年までに彼らが作った標本は 500 葉を超えた。重複もあるだろうが、かなりの植物種が存在することは間違いない。

（8）20 年続いたのは奇跡のようなもの

【共青团から総工会にパートナーを変更】

祁学峰が共青团を去る日がやって来た。2001 年の夏の日、共産党大同市委員会の梁鳳書副書記がわざわざ訪ねて来て、「あなたの気持ちはわかるけど、祁学峰にとっては最後のチャンスだから、どうか理解してください」と話した。南郊区の副書記のポストが待っているというのである。

祁学峰はこの日のための準備として、1998 年の年初から武春珍を大同事務所に呼び込み、しばらくしてから彼女を所長に据え、自分は共青团の書記としてこの協力事業を大所高所から支えていた。その彼が、別の部署に移るのだ。

武春珍所長、魏生学副所長のコンビで、実際の仕事は十分に回っていた。どちらも十分な経験を

積んで、実際的な仕事は祁学峰が所長のときより進んでいるくらいだった。その面ではさほど心配することはなかった。

問題は、新しく共青团大同市委員会の書記になった男だった。長く共青团の幹部を務め、共青团の全国規模の会議でも堂々と自分たちの経験を発表する祁学峰と、すぐに比べるわけにはいかないのはわかっていた。しかし、この協力事業のことをまったく理解していないにもかかわらず、指図しようとするのは困ったことだった。

2002年3月、大同に着いた高見を困惑させたのは、武春珍も、魏生学もいつもとは様子が異なっていたことだ。新しい書記から、大同事務所の仕事を続けるのなら共青团の籍から外れろ、共青团にそのままいるなら大同事務所の仕事は他の人に代われと、無理な選択を迫られているのだという。まもなく日本からワーキングツアーがやって来るのに、ホテルやバスの予約もなされていない。あわてて新しい書記に面会し、経験のない人が取り組んで、事故でも起こったら取り返しがつかないから、今は人事を動かさないよう頼んだ。

そのときは日本側の意見どおり、従来の体制が維持された。しかし、大同事務所のメンバーを入れ替えようとする彼の考えは変わらなかった。一年後にまた同じような動きがあったのだ。

こんなことが続けば、この協力事業は空中分解してしまう。共産党大同市委員会の秘書長を訪ね、率直に実情を話した。彼は日本側の言い分を理解し、大同におけるカウンターパートを大同市総工会に移すことを決定したのである。総工会は労働組合の連合体ということだが、実際は労働行政の政府機関と共済会の結合体のようなもので、幹部はみな公務員である。この変更に伴って、緑色地球ネットワーク大同事務所は大同市総工会に移管された。事務所の所長、副所長は公務員だったので、それを受け入れるために大同市総工会の公務員枠が二人増やされたのである。

【新たな発展の条件を生み出す】

大同市総工会の主席は李世傑という女性だった。彼女はこの協力事業の意義を高く評価し、それまでも増して、この協力事業に力を入れてくれた。

総工会の中でこの事業を担当したのが柴京雲副主席である。この人が、市長を知らない人があっても、柴京雲を知らない人はいないという、大変な有名人だった。弟と二人で大同数来宝という漫才のようなことをやり、テレビにもしばしば出演していた。大同博物館には、彼ら兄弟の写真が何枚も展示され、「大同には三つの宝がある。一つは雲崗石窟、二つは石炭、三つは柴氏兄弟の大同数来宝だ」と紹介されている。

上部団体の中華全国総工会からも、徐錫澄副主席を初め国際部の幹部7名が、大同の協力プロジェクトを4日間にわたって視察した。この協力事業を中央も支持していることを示してくれたのである。

大同での事業も滞りなく進むようになった。2004年、第2の苗圃、白登苗圃の建設に取り組んだ。南郊区の環境林センターは土の粒子が小さく、汚水による灌漑が長く続いたために富栄養化が進んでいて、ポプラやアンズなど広葉樹の育苗には適するが、マツなど針葉樹の育苗はうまくいかない。川砂を運んで土壌改良を図ったこともあるが、ダンプカーで運ぶくらいでは効果が出ない。針葉樹中心の苗圃を新しく造った方がコスト面でも有利だと考えた。

李世傑、柴京雲など大同市総工会の幹部たちも起工式に勢ぞろいして、この出発を祝ってくれた。

環境林センターを建設運営する経験があったし、侯喜とその後任の馬占山の奮闘もあって、苗圃の建設はスムーズに進んだ。中国ではよく「2本脚で歩く」というけれども、その意味がよくわかった。安心感がまったく違う。二つが助け合うことによって、大きなプラスアルファを生むのであった。

2007年には、その隣接地に実験林場「かけはしの森」を建設することになった。自前の果樹園を持っていれば、いくらかの収入を得て、大同における経済的な基礎を固めることができる、そう考えたのだ。

そして、果樹の新品種を試し、この地に適するものが見つければ、これまで各地に建設してきた小学校付属果樹園などにもそれを普及することができる。その意味を込めて、実験果樹園「かけはしの森」と名づけたのだ。自治労大阪府本部が、そのための最初の資金を協力してくれ、5年間にわたって協力ツアーを派遣してくれた。三井物産環境基金もこの事業を支えてくれた。

アンズとスモモは順調に育ったが、ブドウはうまくいかなかった。やはり冬が寒すぎるのだ。ブドウは蔓を地中に埋めて、越冬させようとしたが、それでも枯れてしまった。小さいときの保護策をもっと丁寧に行なえばならなかったと思う。

【3年で30年以上の変化】

内陸の地方都市・大同にも変化の大波が押し寄せて来た。それを象徴する人物が2008年2月に大同にやって来た耿彦波市長だ。2013年春に太原市の市長に転出するまでの5年間に思い切り辣腕を奮い、たくさんの伝説を残した。

大同の友人たちはしばしば「この3年の大同の変化はそれ以前の30年の変化より大きい」と口にした。街中の大改造が行われたのだ。まず道路の建設である。市街地から郊外にかけて広い道路を縦横に巡らせた。また、目につくのは城壁の復元である。古代の大同は「呂」の字のように、二つの城壁で囲まれていた。北側の小さなほうは操場と呼ばれる軍隊の演習場で、その1辺はおよそ1 km。

南の大きい城壁が一般の市街で、1辺が1.8 kmあり、城壁の高さは14 mほど。明代に完成し、灰色の大きなレンガが張りめぐらされていたが、中華



白登苗圃ではマツ、トウヒ（写真）など針葉樹を育てた



城壁の復元を初め、大同の市内に大きな変化が現れた

人民共和国の建国直後に、住宅の建設などのためにレンガが持ち去られ、黄土の土台も風化するに任されていた。それを整備し、復元するというのである。2009年の着工で、最初に東の城壁が整備され、その後、南、北と1年に1辺のペースで進み、今は西側の工事にとりかかっている。西側の城壁の線上に、今やこれも歴史的建造物となった大同市博物館が建っていたため、西側の城壁は手間取っている。



城壁の外には20階以上の超高層住宅が次々に建てられた

城壁の外側には部分的に堀が巡らされ、幅50～200mが公園として整備されている。内側も幅50mほどの小公園になり、芝生が張られ、大きな樹木が植えられている。

城壁の中では、華嚴寺、文廟（孔子廟）、関帝廟、清真大寺（ムスリム寺院）、法華寺、王府などの巨大建造物の復元工事が進んでいる。しかし、改造はそれに止まらない。城壁の内部1.8km四方では、既存の大部分の建物をなくし、中国の伝統的な住居に似せた低層の建物を建て、明代の大同城を模した「倣古街」にするのだという。

城内に暮らし、土地・建物の使用权を有する者には、同面積プラス15m²の住宅が提供されることになった。そのために城壁の外では20階以上の超高層住宅が急ピッチで建設された。

この大改造の目的は観光産業の振興である。大同市郊外の雲崗石窟は2001年にユネスコの世界文化遺産に登録され、それを目当てにくる観光客は多い。しかしそれだけで観光客を足止めできるのは1泊であり、それを2泊以上に延ばさせ、観光収入を増加させるのが狙いだらう。

【農村に大工業団地がやって来る】

大同の市街地の東の境界は御河だった。流れが消えて久しいが、この河の東西は橋によって結ばれるだけで、東側は農村だったのである。この御河から文瀾湖と呼ばれるダム湖までの広大な地域で開発が進んでいる。市政府を初め多くの政府機関が新区に移ることになり、大学、病院、さまざまな文化施設も建造が進んでいる。

大同は中国有数の石炭産地であり、その利を生かして大型の火力発電所を動かしてきた。南郊外にある大同第2発電所は1988年の1期工事完成時の発電能力は120万kW、年間発電量70



第2発電所。720万kWの半電能力を持ち、北京に電気を送る

億 kWh だったが、数次の増強をへて、2009 年には 372 万 kW、200 億 kWh を超えるまでになった。

山西省全体の産業が地下資源頼みで、石炭、コークス、発電、冶金の 4 つで全産業の 80% 以上を占めていたそうだ。最大のものが石炭だが、建国以来の産出量は 100 億 t を超え、すでに枯渇した炭砒の面積は 2 万 km² 以上で、全省の面積の 8 分の 1 にも達するという。

資源はやがて枯渇するし、環境破壊もひどいので、中央政府は 2010 年の暮れ、山西省の全体を「国家資源型経済転換総合改革試験区」に指定した。産業の多角化に向けて、中央政府としても最大限の支援を行う。

大同では、先にみたような観光産業の振興とあわせて、工業団地の建設が決定された。面積は 3,700 ha にも及び、大阪でいえば豊中市の面積よりも広い。世界的な電子製品メーカー、鴻海集団の富士康 (Foxconn) もやってくるそうだ。

【大同に青空が出てくるとは…】

1992 年に緑化協力を開始したとき、大同の大気汚染がきわめて深刻なものであることに少し触れた。当時は煮炊きや暖房に石炭を生焚きしており、その煙が深刻だったのだ。

ただ、そのころ自動車はほとんど走っておらず、車の排気ガスによる汚染はあまりなかった。2000 年代に入ると、市街地の車の量は急速に増え、通勤時はもちろん日中でも車の渋滞が起こった。大同市はそれまでせいぜい片側 1 車線だった道路を、多くのところで片側 3 車線まで拡幅することで対応した。

大気汚染はきわめて深刻なものになった。山西省のいくつもの都市が中国のワーストテンに名を連ねた。農村部を回って、大同の市街地に近づくと、まっ黒なドームがかかったように見えたものだ。

ところが 2010 年代に入ると大同の大気は明らかに改善された。2013 年春に現地で撮影した写真を見ると、写っているのはみな青空である。このころ北京では PM2.5 が大問題になり、日本への越境汚染まで取り沙汰された。以前は大同のほうが北京よりはるかに大気汚染は深刻だったのである。

大同の人々は、このような改善は耿彦波市長のおかげだ、と話す。実際は大同市内の燃料が天然ガスに変わり、石炭の生焚きが全面的に禁止されたことが大きな理由である。姉妹都市の大牟田市の環境面での協力も効果をもたらしたと言われている。

大同の中心部の大気は改善されたが、郊外や周辺の県の県城では却って悪化している。特に冬期は、暖房のために大量の石炭を燃やすし、地表付近の気温が上空に比べて低くなる逆転層ができて、煙が拡散しない。まるで煙突の中のような状態になる。



以前は石炭の生焚きによる煙で、大気汚染がひどかった

【風力発電とメガソーラー】

大同では昔から「大同は年に一度だけ風が吹く。春に吹き始めて冬まで連続して吹く」と言われてきた。年中風が強く、しかもその風は西北の一方から吹くのである。これは風力発電にはもってこいだろう。私たちの植林地、実験林場カササギの森、采涼山といったところは、風の抜ける道筋にあたり、中国では風口と呼ばれる。木を植えるよりは風力発電でも建てたほうがずっといい、と冗談を言い合っていたくらいだ。



カササギの森の奥の風力発電。飛行機の窓から 30 基を数えた

ところが、大同の主力産業は石炭で、それを使った大規模な火力発電が基幹産業になっている。となると、風力発電の出る幕はないだろうと考えていた。

2010 年ごろから突然、あちこちに風力発電の風車が見られるようになった。大同市内のホテルに泊まって、上の階の窓から北の方の山を眺めると、稜線に数十基の風車を見ることができる。県と県の境界の多くは 2,000 m クラスの山だが、その稜線近くには例外なしに風車が設置されている。

中国の風力発電は、2000 年に一気にアメリカを抜き去り、世界一になった。全国で同じような動きがあったことだろう。

風力発電が設置されているのは高い山の稜線で、村や人家からは遠い。野生動物や鳥などに与える影響は無視できないだろうが、人間への低周波被害などは軽くてすむだろう。工事のための道路建設やメンテナンスは困難だろうが、今の中国はこういうことをとにかくやってしまう。

大同県の党留庄郷から杜庄郷にかけて塩害地が広がっている。大同盆地の中でもここが一番低いところで、大昔は大同湖という湖だったと言われている。雨が降ると水はここに集まるが、流れ出る河川はなく、水はここで蒸発する。すると水の中に含まれていた塩分が地表に堆積し、乾燥するとまっ白になる。塩といっても塩化ナトリウムではなく、カルシウム、マグネシウム、ナトリウム、カリウムなどの炭酸塩で、口に含むといやな味がある。

pH は普通の畑の土でも 8.5 以上だが、塩害地では 10 を超すことがある。そのためにたいていの作物は栽培できない。草もまばらである。ポプラより塩害に強いヤナギが街路樹として何度も植えられたが、根付くことはなかった。JICA などの協力で土壤改良の試みもなされたようだが、思うような成果は出なかったようだ。農業用地としては役に立たない。

地面の下には伏流水があり、この一帯では道路もよく壊れた。地盤が軟弱だから工業用地にも適さない。

2013 年春、ここを通りかかると、たくさんのソーラーパネルが並んでいた。保利集団（軍と関係が深く、不動産、輸出入などに強い企業集団）と協鑫集団（香港に本社を置くソーラーパネルの世界的メーカー）が共同で設置したもので、1 期工事の面積は 56.6 ha で、発電能力は 2 万 kW、年間 2678 万 kWh の発電をめざす。そして 5 期までの計画があり 50 万 kW かそれ以上を目指すのだという。

パネルを製造して売るメーカーがどうして自分で設置するのか。発電した電気で多結晶シリコンを製造し、それでまたソーラーパネルを生産するのだという。循環型産業という表現もあった。その計画には鴻海集団の Foxconn も加わる。



塩害地に設置されたメガソーラー。これから急速に拡大する

乾燥地で、標高も高い大同は、雨が少なく、日差しが強くて、日照時間が長い。太陽光発電にはもってこいの立地だと言えるだろう。塩害地や砂漠化地域のような荒廃地をたくさん持っていることが、これからの中国にとっては伸び代なのかもしれない。

2013年8月には大同で、国際ソーラー・デカスロン（十種競技）が開催された。アメリカエネルギー省が呼びかけ、これまでに5回、アメリカとヨーロッパで開催されていたものが、初めてアジアで開催されたのだ。太陽光発電にさらに力を入れようとする表れなのだろう。

太陽熱温水器もたくさん普及している。新しく建てられる中高層の住宅の屋上にはびっしりと並んでおり、1世帯あたり1台に近いだろう。

このように見てくると、経済のために環境など一顧だにしない動きと、なんとか環境を守ろうとする動きが、それこそあざなえる縄のごとくに表れているように思われる。

【協力拠点が生態公園用地に収用される】

大同市の大規模な開発計画が私たちの協力プロジェクトを連続して直撃することになった。第一波は私たちの協力拠点、環境林センターを、大同飛行場と大同市磁務局とを結ぶ幅員 56 m の道路が横切ったことだ。

2009年4月27日、耿彦波市長が現場にやって来て、3日以内に地上物件を取り除くよう指示した。苗木の移植などを大急ぎで進めたが、実際に4日後には重機が入って工事が始まった。驚いたことにその年の8月末には自動車が走っていた。幅員 56 m で、片側 4 車線、側道 1 車線、それに緑化帯を備えた、延長 36 km もの道路がたった4か月で完成するのである。



環境林センターの跡地に大同市が建設中の生態公園

日本側が二つに分かれて使いにくくなるのを心配するのに対し、大同事務所の面々は「大きな道路の両側に土地がもてる。野菜などの直売所を自分で建ててもいいし、他に貸してもいい。

自立への足がかりになる」と言って喜んだ。

しかし、おいしい話にはならなかった。その翌年、私たちの環境林センター、隣接の砒区苗圃、そして一部の農地をまとめて、大同市が67 haの生態公園を建設することになったのだ。私たちは1995年から20年の年限でこの土地を借りてきた。努力して土地を肥やし、樹木を育ててきたから、その後は市民に開かれた公園になるのが理想的だと考えていた。それからすれば望む結果だったが、予定より5年も早かった。

大同事務所は、このまま拠点がなくなれば、日本側が苦境に陥り、この協力は続かなくなると考えたようだ。どこか便利なところに代替地を入手したい。関係方面と交渉を続けた結果、最終的には市長本人の決定によるしかないと判断した武春珍所長は、市長の出席する会議が太原であると知ると、太原まで追いかけて、会議室の外で市長を待ち構える、といった努力を重ねた。

大同にかぎらず、今日の中国の急速な経済発展は、土地・不動産の開発によって実現されている。大面積のまとまった土地は大同でも多くは残っていないし、使用権の価格は高騰している。簡単な交渉ではなかった。

【市長の即断で代替地の提供を受ける】

大同市総工会の柴京雲副主席の骨折りで、日本側と市長との会見の席が設けられ、遠田、前中、高見が出席し、協力事業の経緯とこれまでの成果を報告し、協力拠点がなくなると日本では「大同市政府がとりあげた」という話になり、大同市政府にとっても名誉な話ではない、と話した。

市長は「日本側の協力に感謝し、感動している」と述べ、大同県周土庄鎮にある国营林場の一面を、30年間、無償で提供することをその場で決定し、短い文章を書いて、それに署名した。それで決定なのである。そこは大同市林業局の長城山林場が管理する土地だが、市長の決定はすべてに優先する。

長城山林場にとっては寝耳に水である。林場には広い土地があるが、大部分が山地で平坦な土地は少ない。しかも問題の土地は大同市が大々的に開発している文瀾湖周辺に近く、交通も至便である。話し合いは難航したが、2010年7月までに契約がまとまり、およそ17 haの代替地が得られることになった。

しかし、交渉はそれで終わらなかった。大同事務所の魏生学は境界をさらに押し込み、25 haの



市長にもらった代替地には小老樹とたくさんのお墓があった

土地を確保したのだ。さすがにそれには長城山林場の抵抗が強く、副市長の斡旋によって23 haほどで落ち着いた。

提供された土地は水不足その他の原因で伸び悩んだポプラの林で、地元では小老樹と呼ばれている。私たちの計画は時間をかけて小面積ずつ開発することだった。伐採したポプラを利用して、キノコを栽培したり、木炭に焼いて土壌改良に役立てたりしたかった。そのための実験も進んでいた。このようにすれば一時に大きな資金を準備し



凍結が融けるのを待たずに、ブルドーザによる整地が始まる

なくてもすむ。

ところが引き渡しまでの混乱の中で、このポプラが長城山林場によって伐採され、根まで引き抜かれてしまった。伐られたポプラは近くの農民たちが燃料用に持ち去った。日本側の落胆は大きかった。

このように立ち木のない状態になると、すぐさま全体を開発しなければならない。周辺の農民に入り込まれ、勝手に耕されたりすると、やっかいな問題に発展するからだ。資金の調達を初

め、多くの問題を背負い込んでしまった。

さらに2011年3月、第2の拠点、白登苗圃を訪れた際に、管理棟などに奇妙な符号がペンキで書かれているのを、前中が見つけた。あちこちに問い合わせているうちに、重大な事実がわかった。先ほど書いたように、中央政府が山西省の産業構造の大改革を支援することになり、そのための大工業団地がそこにできるというのである。工事の開始まで半月もない慌ただしさだ。

収用対象になるのは、白登苗圃とそれに隣接する実験果樹園「かけはしの森」の大部分である。そこにはたくさんの苗木が植わっており、それを移転させないといけない。市長から提供された新しい土地は、幸いここから直線距離で2 kmしか離れていない。

【緑の地球環境センター建設に着手】

新しい拠点の名称を「緑の地球環境センター」に決めた。まずは基盤整備を進めなければならない。敷地には最大で8 mの高低差があった。それを1枚にならすと、工事量が大きくなりすぎる。10数枚の圃場に分け、それぞれの中で灌漑がしやすいようにゆるやかな勾配をつけることにした。2011年3月、まだ土壌の凍結が完全に融ける前から、ブルドーザ3台とパワーショベル1台がフルに働くことになった。このショベルは日立建機の中国法人から提供されたもので、多くの仕事がこれなしには進まなくなっている。

敷地内には50を超えるお墓があった。この一帯の最高峰・采涼山(2,145 m)と文瀾湖を結ぶ直線のちょうど中間にこの敷地があり、大同市内でももっとも風水に恵まれた場所だということで、お墓が集まったのだ。農民たちは自分たちの暮らしに劣らず先祖の墓を大事にする。そして墓参りには火がつきものであり、火事の恐れも大きい。この時点での最大の悩みであった。

ところが、大同の農村部に読者の多い「大同晩報」に、この国営林場の中の墓を即刻改葬するという公告が掲載され、現場にも同様の張り紙がなされた。4月10日以後も残るものは無主の墓として、規定に従って処理すると書かれていた。耿彦波市長の辣腕ぶりは農村でも知られており、敷地内の墓は次々に移されたのである。

作業道がつけられた。苗圃などの運営には苗木、肥料、その他の運搬が欠かせない。効率的に動かすには最適な位置に作業道がなければならない。雨のときにもぬかるまないように砂礫が加えら

れた。幅員 4 m 以上の道路だけでも延べ 4.6 km 以上になった。

井戸を掘った。育苗にも、植栽にも、水を必要とする。大同市では地下水の利用に厳格な制限があり、掘削の前に許可を得なければならないが、それには時間がかかる。交渉して最優先で審査してもらい、なんとか間に合わせた。およそ 140 m の深さで、1 時間あたり 40 m³ の水を確保できることになった。しかし、敷地の全体を運営するためには、それでは水が足りないため、翌春にもう 1 本追加して掘り、こちらでは 1 時間あたり 50 m³ の水を使えることになった。



井戸を掘る。深さ 140m で 1 時間 40m³ の水が確保された

管理棟を建設した。レンガ建て平屋だが、以前の環境林センターより一回り大きくした。トイレ、シャワーなどもずっと改善された。以前の環境林センターで管理部の責任者だった趙利祥と妻の屈勝英が新しいセンターに残っており、訪れる日本人に大好評の食事そのまま提供されている。

緑の地球環境センターの基盤整備とあわせて、白登苗圃と実験林場から、苗木の移植が進められた。どれ一つをとっても大変な作業なのに、それを同時並行で進めなければならない。時間との競争になった。白登苗圃のそばでは工業団地造成のための重機がすでに待機している。苗木は春、芽が動き出す前に移植すれば、少々手荒な作業でも大丈夫だが、芽が動いてからだと活着率が下がる。アズノの大きなものは植栽後 4 年目になり、大きくなっている。人手で掘るのは困難なので、パワーショベルで大胆に掘り上げた。

移植作業の第 1 日を、日本からのワーキングツアーが担った。このときほどよく働いたツアーはそれ以前もそれ以後もない。日本の感覚では余りにも手荒なため、「これで着くんでしょうか？」という不安の声が出たが、大丈夫、果樹は 90% 以上が活着した。

大同事務所の活躍ぶりはすごかった。毎朝 7 時には現場に集合し、暗くなるまで働いた。果樹のほか、トウヒ、トショウ、アブラマツ、モンゴリマツなど、大苗だけでも 2 万本をわずか 10 日間で移したのである。果樹以外の苗木は平均で 95% 以上が活着した。



大きく育った果樹苗を移植する。これほど働いたツアーはない

それにしても、この移植作業が可能になったのは、あそこに生えていた小老樹が伐られ、根まで抜いてあったからだ。残っていたら、とても間に合わなかった。一時は長城山林場を罵っていたけれども、結果的には感謝すべきことだったのだ。

あるとき、前中代表が「ここの基本設計は誰がやったの？」と尋ねた。答えがない。「いやあ、ほんとうによくできてるよ」と続けると、武春珍所長が

「私たちが自分でやりました。叱られるかと思って、さっきは黙っていました」と言って笑った。

専門に学んだ者がいるわけではないのに、測量や工程管理もすべて自分たちで行った。運転手の郭宝青は自分でブルドーザやショベルの運転ができるので、その指揮をとった。毎日、広い敷地内を歩き通すうちに、体重が10kgも減ったと言って喜んでた。

建設が軌道に乗り始めた2011年7月、駐中国日本大使館の丹羽宇一郎大使が、山西省公式訪問の忙しい日程を割いて大同の私たちの協力プロジェクトを視察し、激励して



丹羽宇一郎大使が記念植樹。この協力事業を強く激励した

くれた。その日の夜は共産党大同市委員会の豊立祥書記との会見があり、前中が同席した。

【いつもなぜ焼け太り？】

新しいセンターの敷地内の2haを使って、生態植林見本園と有用植物見本園の建設を始めた。中国は大緑化運動を展開中で、以前に比べるとずっと緑が濃くなったが、緑化に使われている樹種があまりにも少ない。持続可能で多様性を備えた森林の再生が求められており、霊丘県の南天門自然植物園はそのモデルとなりうるが、残念なことに大同からは遠く、交通が不便で、多くの人に見てもらえない。南天門自然植物園の代表的な樹種をここに移し、大同で生育可能な樹種を多くの人に知ってもらいたいというのがその目的である。

また中国は本草学の伝統をもち、植物などをさまざまに利用してきた。薬用植物を中心に有用植物を集めて、生物多様性の重要さを認識し、緑化に生かしてもらおう。それが有用植物見本園のねらいだ。

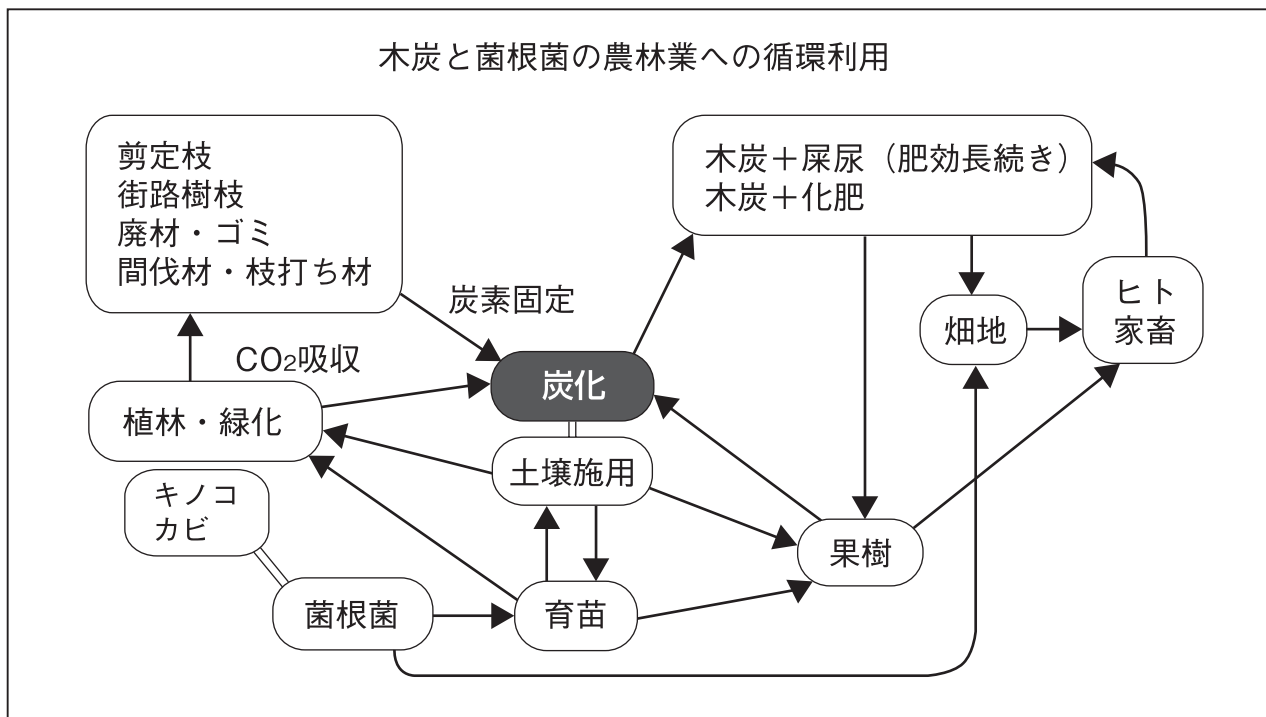
JICAの草の根技術協力事業を受託して実施した南天門自然植物園の建設が高く評価され、フォローアップ事業を受託することができた。それによって二つの見本園を建設し、緑の地球環境センターの建設にも役立てることができたのだ。

大同の農村部で集めた薬草などは問題なく活着したが、河北省国安市の薬材市場で調達したものの中には越冬に失敗し、消えてしまったものもある。今後も数年をかけて、少しずつ充実させていかなければならない。

2010年4月から2年間、JICA草の根技術協力事業を受託して、「環境保



有用植物園に薬草を集めるために山奥へ。こんな経験はめったにできない



全と農村生活向上のための循環型農林業の追求」プロジェクトを小川眞をリーダーに実施し、たくさんの専門家を現地に派遣して成果を上げることができた。

菌根菌の活用は1997年から取り組んできたが、このプロジェクトを通じて、より詳細な実験を繰り返し、大同の実際に適した技術を確立することができた。

また木炭を利用することで土壌微生物の活性化をはかり、多くの種類の作物の生育を促進し、収穫量を増大することができた。

緑化が進んだ結果、大同でも剪定枝や間伐材など、木炭の原料は増えていく。それを炭化することで、炭素の固定をはかり、地球温暖化の防止に役立てることもできる。できた木炭を使って、より効率的な緑化を進めることができれば、良性の循環を作り出すことができる。

私たちの新たな協力拠点、緑の地球環境センターは大波をかぶって出発した。そして、わずか2年余りでその骨格を完成し、以前の環境林センターよりはずっと立派な拠点へと発展しつつある。

その過程をずっと見守ってきた会員の中からは、「どうしてここのプロジェクトはいつも焼け太りになるの?」と言われたが、途中の苦労はともかく、得られた結果は悪いものではなかった。

【20周年記念の盛大なイベント】

2012年8月24日、完成したばかりの緑の地球環境センターで、この協力事業の20周年を祝うイベントが盛大に開催された。管理棟の中庭に舞台が置かれ、大同市の幹部、総工会の労働者、付近の農民、小学生など220名と、日本側から30名のツアー参加者が参列した。長くこの事業に協力してきたイオンリテールワーカーズユニオンとサントリー労働組合からも代表が出席した。

主催者を代表して大同市総工会の張志偉主席が、協力事業の発展と成果を具体的な数字をあげながら詳細に基調報告した。共産党大同市委員会の柴樹彬副書記は、この協力事業があげた成果に心からの感謝と感動を表明した。日本側を代表して前中久行が挨拶し、20年余りの協力を通じて大きな成果を上げていることを確認した。



20周年記念イベント。大同市の幹部たちがそろって参加した

それくらい、みなさん芸達者だった。

大同の一角にはそのような光景があったが、このころ日中関係は国交正常化後最悪といわれるほど緊張が高まっていた。尖閣諸島の国有化決定をきっかけに両国で排外的なナショナリズムが勢いを得て、中国では日本企業が暴徒に襲撃される事態も現れた。

日本でも週刊誌やインターネットなどには開戦前夜であるかのようなショッキングな見出しが躍っているし、前向きな外交交渉を求める声には弱腰、売国といった罵声が浴びせられる始末である。それは中国でも同じである。

しかし、両国は一衣帯水の隣国であり、このような関係は両国にとって利益にはならない。領土問題を解決するには、以前のように棚上げするか、譲るか、戦争するしかないのではないか。棚上げが日本にとっても一番有利であるのは明らかである。

国境を巡って争うよりも、国境を越えた協力を実現するのがいいに決まっている。緑の地球ネットワークは出発のときから、「環境に国境はない」と主張し、環境協力の実現のために努力してきた。そして、20年余りの努力を通じて、これまでに見てきたような協力関係を築いてきた。

だが、中国を嫌いな日本人が90%を超え、日本が嫌いな中国人が92%を超えるという数字が躍る中で、協力事業を継続するのは困難であるのも事実である。緑の地球ネットワークに対する寄付金は、2012年度は前年に比べてほぼ半分に落ち込んだ。会員数は、減ってはいるが、寄付金の落ち込みほど大きくはない。このような局面だからこそ、このような民間協力が重要だという信念が会を支えているのだと思う。

【大同事務所とそのメンバー】

大同における緑化協力は、中国でも「国際協力の貴重な成功例」と評価されるようになった。その原動力は、言うまでもなく緑色地球ネットワーク大同事務所の活躍である。

小渕恵三首相の中国訪問を機に生まれた日中民間緑化協力委員会資金の中国側の有力な受け入れ先の一つが中国共産主義青年団である。この基金を有効に生かすために2001年4月、共青团の全国的な会議が開かれた際、祁学峰が2回も突然指名され、経験と教訓を発表することを求められた。彼は自分たちの経験を次の4点にまとめ、それを実現できれば協力は成功する、と述べたそうだ。

- 1 誠実(真誠)につきあう。自分の本心でつき合わないといけない。形式的なつきあいでは相互の理解が生まれない。誠実につきあうことは、協力関係全体の基礎である。
- 2 バランスをとる。協力の双方は車の両輪の関係である。置かれている立場が違うから、当然、自分の主張はすべきである。しかし最後には相手の立場を理解しあい、バランスをとる必要がある。いい関係をつくるカギはバランスにある。
- 3 まじめに仕事をする。仕事はまじめにするべきで、^{マーマーフーフー}馬馬虎虎(いいかげん)ではいけない。これは態度の問題である。
- 4 苦勞を厭わない。苦勞を厭わず、農村の現場に行く必要がある。机の上、紙の上だけで仕事をしてはいけない。これは精神の問題である。

この4項目は大同事務所の活動に定着し、その後も貫かれたと思う。主要なメンバーについて、簡単に紹介しておきたい。

武春珍は1998年から大同事務所で働くようになり、最初に手がけたのが采涼山の緑化プロジェクトだった。彼女がそのときのことを現場で紹介すると話が長くなる。共青团の書記になった祁学峰が大同事務所の所長を兼務できなくなった1999年から、所長になった。「能説」(話ができる)のは中国では評価の対象であり、彼女のように疲れを知らずにしゃべり続け、粘り強く交渉し、最終的には必ず相手を納得させるのは貴重な戦力である。

魏生学は祁学峰と同じ時期からこの事業を担当するようになり、事務所の成立とともにそのメンバーとなって、一貫して副所長である。事務所のなかでは唯一の農村出身者であり、農村についての理解も深い。誠実な人柄で交友関係が広く、大同事務所の活動が順調に進むのにそれが大いに役立っている。

王萍は1995年からボランティアで通訳を買ってでている。本職は大同市第四人民病院の看護師で、1990年頃に1年間、埼玉医科大学に研修で派遣されたことがあり、日本語はそのときに学んだ。後に看護師長、院長助理と昇進し、現在は従業員700人の病院の副院長である。おだやかな人柄で笑いが絶えず、彼女が通訳をするとどんなに難問であっても本格的なケンカにはならないですむ。

運転手の郭宝青は以前は石炭トラックの運転手をしており、技術が確かで安心できる。車や道具を大切に扱い、事務所の車はいつもピカピカである。農村を回ることが多く、朝早くから夜遅くまでの仕事になることが多いが、どんなときにも嫌な顔ひとつしたことがない。ブルドーザ、パワーショベルなど重機の運転もでき、カメラやビデオカメラを扱うこともできる。

李海静が一番新しいメンバーだが、それでも12年目になる。看護学校を卒業しているが、環境保護の仕事がしたいとあって、自分で事務所に売り込みにきた。ワーキングツアーが来るときはいつも一緒に農村を回っており、日本の皆さんの人気者だ。日本語の会話を勉強したこともあるが、続かなかった。若いのだから、もう一度やり直してほしい。



大同事務所のメンバー。彼らの奮闘でこの事業は成功した

楊淑英は大同事務所で経理を担当している。裏方さんで、日本人と接触する機会は少ないが、いつも確実に仕事をこなしている。

そのチームワークの良さは、ほんの短期間、大同を訪れる日本人にもすぐわかり、感心させている。彼らが管理している建物や資材はいつも整理され、使いやすい状態が保たれている。臨時に雇われている作業員まで、おおらかでありながら、仕事ぶりはてきぱきしている。経済的な待遇は今の大同では恵まれているとは言えないのだが、皆がほがらかに、長く継続して働いているのはうれしいことだ。

日本側と大同事務所との信頼関係は、順調な発展の中でできたものではない。多くの困難や危機を共に乗り越える中で築かれたものであり、それだけ強固だと考えている。

【南天門自然植物園の発展の道】

これまで見たように私たちは数々の緑化プロジェクトを建設し、立派に成功するものも出てきた。中でも私たちが誇っているのが南天門自然植物園だと思う。起工した当時、ここは草もまばらな荒れ山で、その名称に植物園と冠するのが恥ずかしいくらいだった。

着工当時の写真を見てもらってから、現場を見てもらうと、たいいていの人々が信じられないという。最大で樹高 13 m、胸高直径 25 cm ほどのナラを初めとする落葉広葉樹の森林が育ってきたのだ。

森林らしくなっていくのは北向きの日陰斜面だが、南向きの日向斜面もだんだん緑が濃くなっている。喬木は少なく、灌木主体だが、植物の種類は南斜面のほうが多い。南斜面をこれだけ植物が覆っているところは、この地方ではほかにない。

中国林業科学研究院の陳幸良副院長と、北京林業大学の趙廷寧、張建軍両教授が、2013年3月、この南天門自然植物園を訪れた。陳幸良副院長は2日間をかけて、日陰斜面と日向斜面の様子を丁寧に視察し、「柴刈りや放牧を排除して森林を育てる封山育林プロジェクトは、全国に無数にあるが、このように見事な森林が再生している例はきわめて少ない。また、中国の北方で、これほど多くの植物種が集まっているところは稀であり、きわめて貴重だ」とこのプロジェクトを高く評価した。

植物が育ってくると、新たに難しい問題が出てくる。二十四節気の清明節は4月5日前後で、



南天門を訪れた陳幸良副院長（左1）。右端は桜井尚武顧問

中国では先祖の墓参りをする日だ。「春の雨は油より貴重」というくらい雨は降らず、風も強い。何もかもからからに乾ききっている。そして、墓参りには火が使われる。「冥国銀行券」などと書かれた紙銭を燃やして煙にし、先祖のところに送り届けるのだ。その火が飛んで山火事になる危険性が高く、この時期、林業関係者は極度に緊張する。

植林した山の入口には「厳禁上墳焼紙！」（墓参りで紙銭を燃やすことを厳禁する）といった横断幕がかけられ、

郷政府の職員は双眼鏡を持って見張りに立つ。政府関係者ならそれを制止することもできるが、私たちのような民間の活動ではそこまでのことはできない。植物園も昔の荒れ山なら心配はなかったが、これほど繁ってくると、山火事の心配がつのるばかりである。この時期、ほかの仕事は何もしないで、ただ墓参りの見張りだけをしている。

将来的には地元の政府に管理をまかせるしかないと思う。それには、南天門自然植物園の価値と将来の可能性を理解できる人たちに参加してもらうことが必須である。

陳幸良副院長は、1) 管理に地元政府の参加を得る、2) 地元にしっかりした管理グループを作る、3) 林業科学研究院などで研究者グループを作ってしばしば現地に派遣する、4) 国家プロジェクトの中に位置づけ、可能なら予算措置をとる。その中のどれか一つでも確実に実現できれば心配はなくなる、と話している。

中国林業科学研究院などが管理に加わってくれば、私たちがこれまで育て上げてきた南天門自然植物園はもっと広く全国的な価値を持つものになるだろう。

【持続可能で多様性を備えた森林のモデル】

大同に限らず中国の全土で大緑化運動が展開されており、森林被覆率は確実に上昇しつつある。問題はその大部分がごく少ない樹種による大面積の一斉造林であることだ。たとえば大同のあたりでは、ほとんどがマツかポプラによっている。ポプラは村に近い比較的低いところに植えられ、そう長い年月をおかないで、用材として伐採されるので、そのように割り切れば問題は大きくないかもしれない。

マツの場合は相当に遠い山の急斜面まで植えられている。やがて枝打ちや間伐が必要になるだろうが、それは植えるのに比べ、はるかに多くの人手を要するし、作業も複雑である。かつては農村に過剰な労働力が存在したが、今では出稼ぎや都市部への移住が増え、過疎化の進む村も少なくない。将来、その傾向はますます強まるだろう。そのときにどうするのか。

マツは先駆樹種の特徴を備えている。乾燥や痩せ地に強く、広葉樹などが育ちにくいところでもよく生長する。そのかわりに落ち葉その他によって土が肥えてくると、問題を起すことが多いし、大気汚染などに弱いことも知られている。密植されたマツが長い寿命を持つことは考えられない。

日本は第二次世界大戦後の拡大造林の時期に、ひたすらヒノキとスギを植えてきた。枝打ちや間伐ができないうえに、日本の森林は過剰な緑によって荒廃してきた。花粉症などの副作用も存在している。その上、輸入材に押されて、国産材の使用は極端に減っている。針葉樹が嫌われ、その反動で広葉樹が評価されることが多いが、それは国産の木材が材として利用されることが少ないという事情を忘れてはならない。



樹高 13 m、胸高直径 25cm ほどに育ったモンゴリナラ

人工的な植栽によるもの以外でも、森林の再生が広がっている。何らかの原因で村がなくなったり、過疎化して、生活燃料のための伐採が少なくなったりしたためだ。政府によって、放牧が禁止または制限された効果もある。農村にも経済発展の成果が及び、石炭やプロパンガスなど化石燃料が使用されるようになり、その結果として森林の再生が進んでいる例もあり、経済的な離陸が早かった河北省側でそれは顕著である。

そこで再生する森林の主体は、シラカンバを中心とするカバノキ科やヤマナラシであることが多い。原因としては、村がなくなったり、過疎化するのとは標高の高いところ、具体的には1,500 m以上のところが多く、そこに適する樹木として先にあげた樹木があるからである。さらに、カバノキやヤマナラシの種子は小さくて軽く、風に乗って遠くまで運ばれ、そこで発芽する。これらは植物遷移におけるこの地方の先駆樹種であり、早くから一斉に広がるが、その寿命は長くない。

ナラはそれとは異なる。この地方の標高1,200～1,600 mあたりの極相林を構成する、つまりは主人公となる樹種だと考えられ、生育のスピードは速くはないが、寿命は長い。そして種子は大きくて重く、動物に運ばれるくらいしか移動手段をもたず、遠くまで一挙に広がることは考えにくい。

南天門自然植物園で育ちつつある森林の主要な部分は、自然の再生に任せてきたものである。人工的に植えた森林は、いつまでも人手をかけて管理しなければならないが、自然に再生する森林はそうではない。そして多様性も備えている。ナラだけでも少なくとも4種類はあるし、シナノキなども複数種が存在する。

残念なことに立花吉茂前代表は2011年9月にこの世を去った。私たちは2012年8月、管理棟の門前に記念碑を立てた。自然石に「持続可能で多様性を備えた森林 南天門自然植物園の提唱者・立花吉茂」と刻まれている。

【終わりに】

最初は、失敗の例、成功の例と、二つに分けて書く計画だった。書き始めてすぐ、それが不可能なことがわかった。失敗と成功は分かちがたく結びついている。失敗を経験することで問題の所在がわかり、新たな工夫をして失敗を乗り越えることができた。

成功したと思うと、それが新しい問題の始まりであることも少なくない。たとえば私たちがもっとも重要なプロジェクトだと考えている南天門自然植物園では、今もっとも怖いのは山火事である。十数年をかけてあそこまで樹木が育ってきているのに、火を出せば、あっというまに灰になってしまう。木が育てば育つほど山火事の危険は大きくなってしまふのだ。

さまざまな経験やプロジェクトが入り組んでおり、また時間的に前後することもあって、読みにくいこともあったに違いない。しかしそれも行きつ戻



管理棟の門前に建てられた立花吉茂の記念碑

りつした実際の事業の進行ぶりの反映だと考えて、許していただきたい。

「20年も続いてきたのは奇跡のようなものだ」と日本側で話し合っていると、誰の通訳でそれを聞いたか、武春珍が「高見はいつも、自分たちは奇跡を作ってきたと話している」と言って、日本の専門家に紹介したことがある。

意味は違うと思うが、現場の仕事を担ってきた彼女たちにとっては、「奇跡を作ってきた」というのが実感なのかもしれない。

現場で付き合ってみると、日本人も中国人も、同じ人間だとしか思えない。当たり前のことだけど。日本と中国の関係が今をどん底にして、ゆっくりとでも改善されることを願ってやまない。

日本と中国とで、この協力事業のために尽力されたみなさんに感謝と敬意をささげます。

(展望) 環境協力はこれからも欠かせない

【山積する困難な課題】

2013年の秋、大きくて強い台風が立て続けに日本列島を襲い、伊豆大島を初め各地に大きな犠牲と深刻な被害をもたらした。そして今、台風30号がフィリピンに襲いかかり、重大な被害をもたらしている。この100年になかった規模だと言われる。

アメリカやヨーロッパでも時ならぬ酷暑や極寒が現れ、暴風雨なども続発している。全世界で異常気象が続くのだが、地球温暖化の進行とともに常態化しつつあるように思える。世界中が協力して対処しなければ、手遅れになりかねない。

日本も大きな困難に直面している。2011年3月11日の東日本大震災・大津波によって、日本は未曾有の被害を受けた。東北の広大な地域が、復興とは縁遠い状態に今も置かれている。

さらに東京電力福島第一発電所の事故が追い打ちをかけている。今でも10万人以上の人たちが避難を余儀なくされ、帰還できない人も出てくる。事故は収束にはほど遠く、汚染水問題、燃料の取り出し、そして廃炉までには気の遠くなるような困難な過程が待ち構えている。わずかな過ちでも、大惨事になりかねない。

さらに長期的には、少子高齢化の問題がある。労働年齢人口は減り続けており、経済規模の縮小は避けられず、年金その他の制度もそれに適応しなければならない。

本来なら、国をあげて、それらの課題に取り組まなければならないはずだ。ところが、それができていない。

日本と近隣諸国との間で、対立が深まり、国民の耳目は、東北よりはそちらに向けられざるのみなのである。中国との間では尖閣諸島問題を巡って、緊張が続いている。日本が困難な状態に陥っているのを狙って、中国が背後から襲いかかったのなら、非が百パーセント中国にあるのは異論はないだろう。

しかし、そうではなかった。なにを考えたか、石原慎太郎知事が東京都による買い取りを画策し、それに驚いた当時の民主党政権が土地の国有地化を決めた。そして、棚上げするという暗黙の了解は存在しないと否定した。

領土問題の解決は、大胆な譲歩・妥協か、棚上げか、戦争しかないと言われる。

無人の島を巡って戦争するなどということがあっていいはずがない。それは中国側も同じである。

今のように、排外的なナショナリズムが煽られると、双方とも冷静な対処ができなくなる。

【力のバランスが変わりつつあるときに】

日中関係がここまで悪化した根底には、アジアにおける力のバランスの変化があるだろう。中国は30年余りの改革開放を通じて、経済力を発展させた。そして2010年にはGDPにおいて日本を追い越し、世界2位になった。それに伴って、驕り昂ぶりが生じているのも否定できない。「中国が今ほど自信を持ったのは大唐帝国以来のことだ」という会話を聞いたこともある。

国は豊かになっても、庶民の暮らしが楽になったとは言えない。環境は悪化し、格差は拡大し、社会のさまざまな所で競争が激化し、拝金主義が強まり、気持ちのやすまることがない。多民族国家である中国では、地方の先住民族と漢族との対立も存在している。ストレスが各所にたまっている。

しかし、中国の発展を支えた条件もこれからは変わってくる。労働年齢人口はすでに減少に転じてしまった。長期にわたって、いわゆる一人っ子の人口政策を採り続けた結果、これからの少子高齢化は急速に進む。

中国の人口は日本の10倍以上もあるのだから、GDPの逆転はあって当たり前のことなのに、日本人の気持ちの中には、どこか割り切れないものが淀んでいる。

力のバランスが大きく変わるとき、以前だと必ずと言っていいほど衝突と戦争が起きた。今だって、その危険性の存在を否定できない。

このような局面だからこそ、慎重な対応が求められるのだと思う。

【挑発的な言動が逆効果を招く】

隣の国どおしで、このような対立を続けていても、いいことは何もない。経済面における損失も決して小さくないはずだ。

相互理解と信頼関係を努力して作りなおさないといけない。少なくとも、これ以上悪化させることは絶対に避けるべきだ。

中国は一党独裁の国で、国民の考え方も共産党や政府の思い通りになると思っている日本人は少なくない。そして、日本に嫌悪感を持つ中国人が92%もいるのは、反日教育の結果だと考えている。しかし、それほど単純なものではない。

国交正常化直後のように中国人の対日感情が良好だった時期もあり、いろんな人たちがさまざまな思いを抱えている。日本の自動車や電機製品に魅力を感じる人もいるし、アニメその他にはまっている青少年もいる。

影響力のある日本の政治家や文化人が、歴史や領土の問題で乱暴な議論をすると、それは逆効果になってしまう。反日感情を持つ人たちが元気づき、いっそう多くの国民を自分たちの周りに引きつける。日本がもっとも大事にすべき友好的な人たちを孤立させ、その活動を封じてしまうことになる。それは、中国で反日の活動が強まれば強まるほど、日本国内で中国を理解しようとしている日本人を孤立させることと対応している。

政府関係者や政府機関についても同じことが言える。軍などの中に、日本との関係悪化を望む人がいないわけではないだろう。その方が仕事にプラスだし、予算もくる。それはどこの国も同じだ

ろう。逆に日本との良好な関係を望んでいる人もいる。その人たちの立場を強くし、動きやすくするような環境を作らなければならない。

【環境協力から相互理解と信頼を築こう】

北京など中国の大都市で、PM2.5 などによる大気汚染が大問題になっている。長く続けば、日本への影響も無視できない。ただ非難したり、なんとかしろと言うだけでは、これも逆効果だ。中国国内の汚染は日本の比ではなく、その重大性は彼らの方が実感しているのだから。

改善のために有効な協力ができるのなら、進んでそれをやるべきだと思う。中国の環境がこれ以上悪化するなら、日本の環境も無事ではすまない。

そして、その協力関係を通じて、相互の理解と信頼関係を再構築すべきだと思う。

この節の冒頭の問題に戻る。地球温暖化の問題は、気温がなだらかに上昇することを意味しない。気候の全体が大きく攪乱されるのだ。そして、その影響をもっとも大きく受けている国の一つが中国である。

地球温暖化の進行に伴って、従来雨の多かった所はいつそう雨が増え、雨の少なかった所は乾燥化が進むと言われている。中国ではその通りに、雨の多い南部では洪水の危険が増し、雨の少ない北部では旱魃が増えている。中国自身が温暖化の影響に苦しんでいるのだ。

手近な環境面での協力を通じて、地球温暖化を防止するための協力の気運が高まるようなら、大いに歓迎すべきことである。中国が環境問題に対してどういう態度をとるかは、世界にとって非常に大きな意味を持つ。

緑の地球ネットワークの環境協力は、一地方のことで、その規模は小さなものだったが、ちゃんと成果を上げてきたと思う。こうした流れが広がっていくことを願ってやまない。

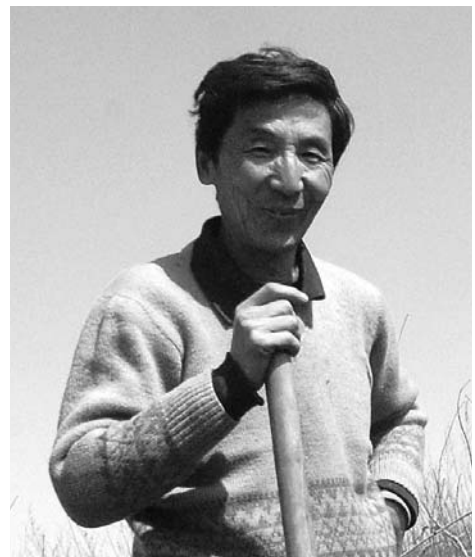
付録1 ナラの生育がいいのは植物園の一带です

南天門自然植物園責任者・李向東のインタビュー

霊丘県の“南天門”自然植物園のヌシが李向東だ。私の目には、とても変わった人物にみえる。どういう生き立ちで、このような人間ができたのか、興味しんしんだ。2009年12月、大同を訪れたとき、李向東が訪ねてきてくれたので、突然のインタビューをはじめた。通訳は王萍に頼んだ。(高見)

私が生まれたのは1953年、農曆(旧暦)の12月6日です。陽暦の何月何日になるか、私は知りません。(換算表で調べると1954年1月10日だった)。霊丘県下関郷楊庄村の生まれです。遠田先生、高見さんとナラを探しにいったことがあるでしょ、あの村です。

両親は農民で、私は5人兄弟姉妹の長男です。弟は霊丘の



県城で教師をしています。妹が3人いて、上の妹は大同の燕子山炭鉱にいます。主婦です。2番目の妹は県城で教師をしています。高見さんにあげたあの詩集を出した妹です。下の妹も県城にいて自営業です。

8歳のときに小学校に入り、小学校を卒業するまでずっと村にいました。そのころの小学校は4年まででした。小学校の卒業がプロレタリア文化大革命の始まった年で、その4年間だけが勉強らしい勉強をしたときです。国語と数学だけを勉強しました。ですから、いまの仕事をするうえで困難を感じています。やんちゃだったと思います。でもそれほど極端じゃなかった。

郷政府のある下関村で初級中学に進みましたが、文革のために授業はありませんでした。3年で卒業し、その後、高級中学に進みました。入学試験はありましたが形ばかりです。同級生のなかには大学に進学したものもいますけど、私はあまり勉強をしませんでした。学校は教科書を配っただけで教えてはくれません。教科書を自習しました。物理、歴史、地理、数学、漢語などです。2年間ですから、1974年に卒業したことになります。

その後2年ほど、蚕の関係のアルバイトをしました。霊丘県には解放後、優良品種の蚕の種（卵）を生産する工場があり、養蚕の歴史は長かったのです。でもやり方はよくありませんでした。リョウトウナラなんかの木を1メートルほどの高さで切り、そこから若い枝を萌芽させ、その葉を蚕のエサにしました。こういうやり方が木にとっていいわけがありません。長続きはしませんでした。このときが私の樹木との最初の出会いです。

1976年に霊丘、大同、陽高の各県で果樹技術者養成の制度ができ、それぞれ10名の募集がありました。私もその試験を受け、霊丘県蚕桑果樹工作ステーションに採用されました。賃金は月に36円で、高くはありません。大卒の専門の技術者と組んで、現場で勉強しながら果樹農家を指導する農民技術者です。

そのころの霊丘県には19の郷があり、農民技術者は10人ですから、1人が2つの郷を担当しました。私が受け持ったのは紅石楞と上寨です。農民技術者はそのように郷に固定されますが、専門の技術者はときどき交替していました。

私の上の娘は29歳ですから、結婚して30年以上になります。その仕事に就いたときはもう結婚していました。相手は同じ村の幼なじみで1歳年下です。結婚してからも生まれ故郷の楊庄村に家がありました。

農民技術者になったあと、私には理想がありました。モデルになる村をつくることです。最初にいった村は上寨鎮の劉庄村です。村の幹部とうまくいかなかったので、ここは諦めました。次に行ったのが紅石楞郷の上北泉村です。1978年よりあとです。農家に泊り込んで果樹の指導をするわけですね。各家を転々として。農民と同じものを食べ、同じ家に住んでいました。妻は楊庄村で暮らしており、私は1か月に1回くらい帰っていました。自転車です。「環球」という自転車を買ったんですね。（地図で距離を調べると、片道40km前後になる）

その当時、この一帯でクルミを栽培できるのは霊丘県の南山区だけでした。クルミを栽培するために上北泉村を選んだわけです。クルミは生育が速く、3年目には実がなりますので、みんな積極的にとりくみました。その後、種類をふやし、最終的には14種類になりました。クルミ、モモ、リンゴ、ナシ、カキ、アンズ、スモモ、サンザシ、ナツメ、ブドウ、サンショウなどです。いちばん成功したのはモモでしょう。リンゴは腐乱病が発生してだめでした。この地方ではこの病気を抑えられませんので、農民の積極性もなくなります。

上北泉村に鄭海水という党書記がいました。彼はいまも党書記です。年齢が同じくらいで仲良くなりました。親しい関係になったので、「奥さん呼び寄せ、自分たちの村に住んだらどうか、戸籍も移せ」と言ってくれました。家は自分で設計し、上北泉村に建てました。そして1998年に住居を上寨に移すまで、上北泉村で暮らしたのです。

村の青年たちで林業科技小組がつくられました。最初に果樹を植えたのは今はポプラが植わっているところで、唐河の川岸です。それからあの村には水力発電用の水路がありますが、水路の後ろの谷に少しかサザシを植えました。水路の手前には平らな台地が2つあります。西側の台地は主にモモです。東の台地にはナシ、ナツメ、スモモ、リンゴなどを植えました。村の指導者や私なんかがいい成績をあげたので、郷の人たち、県の人たちから高い評価を受けました。

私の戸籍は農村戸籍です。都市戸籍を買わないかという話もあったのですが、そうしませんでした。上北泉村に戸籍を移したので、5畝(33 a)の畑をもらいました。そこでブドウ、ナシ、リンゴ、モモなどを栽培して、収入を得るようになりました。1年に2万元を超えたので、国からもらう賃金を大幅に上回ったのです。村からはもらっていません。県城の市場で売ったり、道路のわきで売ったりしました。私は栽培するだけで、販売の任務は妻が負いました。割と上手に売ったのです。美人だから？ 関係ないとは言えないでしょうけど(笑い)。

ほかの村も回っていたんですよ。上寨鎮では24か所の果樹園を担当していました。大きな村にはたいがい果樹園があります。自転車で回っていました。環境林センターの技術者、王君祥とは、そのころ知り合ったのです。彼は上寨から2里(1 km)ほどの新建村の出身です。

8年前に私は内部退職になりました。農民技術者はみなそうだったのです。組織の人数が多すぎるので、一部の人が早めに退職し、そのかわりに賃金は保障されるのです。最初は36元でしたが、その後だんだんと昇給し、いまでは2000元近くになっています。定年になるまでそれは続きます。

緑の地球ネットワークと関係を持つようになったのは、共青团の活動を通じてです。そのころ私もまだ若かったので共青团に参加していました。霊丘県の共青团書記に葛徳軍がいました。彼が緑の地球ネットワークの活動に関係していたんですね。

高見さんに最初に会ったのは1994年の秋だったでしょうか。ブドウのなる季節だったのを覚えています。葛徳軍に呼ばれて上北泉村に行ったのです。高見さんともう1人の日本人がきました。葛徳軍が私を呼んだのはみなさんに紹介するためでした。

思い出したのですが、1994年春にみなさんが下寨北村で最初に果樹園をつくる時、あそこに私もいました。ですから会ったのはそのときが最初ですね。その翌年でしたか、三山村でも果樹園をつくることになったとき、手伝ってくれと葛徳軍に言われました。協力団の人たちもきており、植え方などを指導したのです。この活動に実質的に参加したのはそのときが最初です。

祁学峰書記ともそのときに知り合いました。彼はみなさんといっしょに毎回きていたので、親しくなりました。1997年だったと思いますが、祁書記が植物園をつくりたいので、あなたがそれをやってくれと私に話しました。

(1996年夏に立花吉茂代表がワーキングツアーに参加して、霊丘県にもやってきた。上北泉村の果樹園をみて、高見に「これをやっている男はできるよ。植物のことをわかっている」と言われた。人物をみないで、その作品をみて、判断されたのだ)

それから候補地探しをはじめたのです。十数か所を探し、7か所に絞り込みました。その7か所は遠田先生、高見さんも一緒に見ました。そのうちの数か所には立花先生も行きました。

碣寺山の自然林もそのときに見つけたのです。この山の麓には行ったことがありますが、高いところは行ったことがありません。関心もなかったのです。麓に寺があり、水もあります。ここに植物園をつくれれば、水をつかって灌水できるので、いいんじゃないかと思ったのです。アブラマツ、カラムツ、そしていくつかの灌木が生えていました。でも、その山の上にあのようにいい森林があるとは思っていませんでした。

山の中ほどに農家があります。そこで話をしていたら、上のほうにもっといい森林があると教えられたのです。1998年の夏、高見さんが来たとき、その話をしました。一緒に行くことにしたのですが、あの道に行くのは私も初めてで、距離がわからなかったのです。

私たちの南天門自然植物園も、遠くない将来、あの碣寺山に追いつきますよ。あそこのものより、ずっと成長が速いのです。植物園にたいする感情はだんだん深まっています。木を植えて育てるのは子供を育てるのと一緒ですよ。夏は緑に覆われて上のほうは見えませんが、いまの時期は葉がないので木の姿がはっきり見えます。下から見えるのは高さ1 m以上の木です。あるものは4 mを超えています。アブラマツ、リョウトウナラ、シラカンバなど、いろいろです。

4 mというのは自分で苗をつくって植えたものことです。そりゃあ、やっぱり自分で植えたものが可愛いですね。

面積は1,300 ムー (86 ha) ですが、ちょっと小さかったですね。そのなかでも利用できる土地が少ない。とくに苗を育てる場所が足りない。たくさんの苗をつくりたいんだけど、それだけの面積がありません。なんとか、1,000種類を育てたいと思います。努力すれば絶対に増やせると思います。今年は60種類、去年は115種類の種を集めました。去年は北京、内蒙古、河北省などで種を集めました。今年は赤峰と承德に行きました。赤峰には小さいけど植物園がありました。ここにはシナノキの種類が多く、自分たちの所にはないシナノキを7種類集めました。承德はあまりありませんでした。

今年の秋、日本の専門家が来て、植物園でキノコを集めました。あとき38種類がみつかりました。その後、私は7種類の新しいものを見つけました。丁寧に調べると、50種類を超えると思います。キノコから孢子液をつくり、苗にかけました。

樹木に名前をつけるなど、これからの仕事もたくさんあります。あるものは植え終わりました。灌木性のトネリコ（小葉白蠟樹）、野生のモモ（山桃）などはこれ以上要りません。ナラの苗は6～7千本ありますが、これはみんな植えます。ナラは10種類以上になりました。イチヨウもありますけど、生育はよくありません。直径5 cmほどです。周金の家に1本植えましたし、上北泉の党書記の家にも1本植えたんですけど、それらは直径10 cmくらいになっています。彼らの家は海拔が低いので、その分、気温が高くて、育ちがいいのでしょう。

ナラの生育がいいのは靈丘県の南山区ですね。植物園のあたりが中心です。私たちが回った中では、内蒙古の赤峰市の南にナラの林がありました。海拔は1,000 m以上の所で、リョウトウナラが多い。ナラの太いものは多くないですね。靈丘県の下関郷には太いカシワがあります。去年の夏、専門家のみなさんに見てもらいました。あれは、個人のお墓のものです。そうでなかったら伐られてしまってますよ。カシワはいい木ですから、名のある人やお金持ちがお墓に植えたのです。牛帮口村の入口に大きなカシワがありますが、あれを植えたのは地元の名家です。下関郷の岸底村からは李冠洋という閻錫山の秘書が出ていますしね。高見さんといっしょにカシワの林をみたことがありますね。あれも墓地をつくる時に最初に植えたものだと思います。お墓だと伐りにいく人がいませんから、そのまま残ります。

付録2 出世もお金もほしいとは思わない。

緑色地球ネットワーク大同事務所副所長・魏生学のインタビュー

2011年12月に大同を訪れたとき、緑色地球ネットワーク大同事務所の魏生学副所長をインタビューしました。ずいぶん苦労した時代があったんですね。日ごろの彼から受ける印象とは、ずいぶん違います。(高見)

ぼくが生まれたのは1964年12月27日で、新栄区の農村。農村のことだから農曆(陰曆)だと思うよ。陽曆でいつになるかは知らない。(調べると、1965年1月29日だった)

小さな村で50戸くらいかな、人口は300人ほど。貧しい村なんだけど、そのなかにとびきり貧乏な家が2軒あった。1軒は子供が8人いて、もう1軒は7人。7人の家がぼくの家で、ぼくはその7番目。末っ子だった。

父親が病気で寝込んだからね。ぼくが8歳のときに床につき、13歳のときに亡くなった。最後の3年は寝たきりだったんだ。で、ぼくはその5年間、食事を食べさせたり、便所に連れて行ったり、父親の面倒をみる係だった。

病気といっても気管支炎だったんだよ。抗生物質を使えたら死ぬことはなかったと思うんだけど、食べるものもないんだから、とても買えなかった。ただ鎮痛剤を飲ませただけ。

いちばん上の兄がぼくより20歳上だから、父親代わりになって、弟、妹を育てたんだ。その兄？ 小学校に2~3年は通ったと思う。そのあとは働きづくめだよ。建築の仕事に就いて、最初は使い走りだったけど、やがて隊長になり、幹部になった。大同市内で仕事をしているときに結婚し、市内に住むようになったんだ。

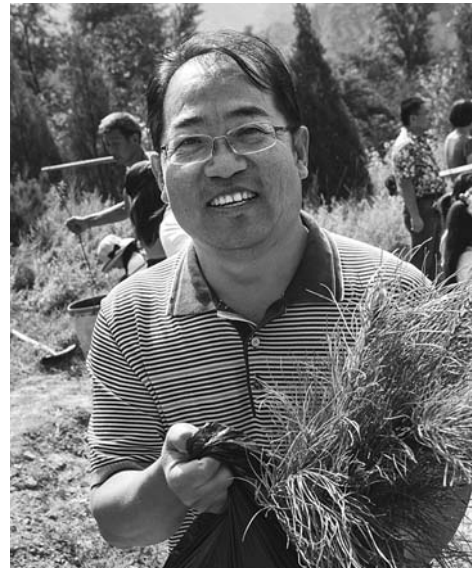
ぼくが小学校に入ったのは7歳のとき、数え年だよ。1970年のこと。ちっちゃいときはそうじゃなかったけど、3年くらいになると、勉強はしないで労働ばかり。文化大革命だったからね。農村は集団労働で、生産大隊とかがあったので、そこに行って、大人に交じって働いたんだ。

1976年に文革が終了し、77年ごろから落ち着いてきた。勉強を始めたのはそのころから。農村の小学校は1年生から5年生まで。初級中学は2年までだった。

で、さっき話した兄に引き取られて、大同市内の中学校に通うことになったんだ。中学3年のときだね。そりゃあ、大変だったよ。レベルがまったく違うから。農村の先生は水準が低いし、教科書も違う。農村のものは簡単で、内容も薄っぺら。都市の中学校は3年までだけど、農村は2年だからね。そして農村の学校は労働が多くて、何日も働くなんてこともあって、勉強の時間がずっと短い。

そもそも農村の中学校には英語なんてなかったんだから。それまでまったく勉強していない英語を途中から勉強しないといけなかった。

差が大きいことは自分でもよくわかったから、懸命に勉強した。中学校を卒業するときは1番に



なったんだよ。好きな教科は、物理、化学、数学で、成績もよかった。高校1年のときの数学の全国コンテストでは大同市全体で3番だった。

数学はそれほどおもしろいとは思わなかったけど、物理はおもしろかった。ふだんの教室では1番じゃなかったんだよ。宿題なんかもできないことがあったし。それなのに本番の試験になると、なぜか成績がいい。

逆にあまりよくなかったのは地理と歴史。なにより英語がひどかった。勉強はしたんだけど、どうにもならない。大学入学のための統一試験の成績が37点だからね。化学なんか96点で、山西省でも5番以内。もし英語で70点を取っていれば、清華大学、北京大学を初め北京の有名大学に入れた、と先生に言われたよ。

高等教育を受けたのは兄弟の中では自分だけだよ。いちばん上の兄は、さっき言ったように小学校を2～3年だけ。いちばん上の姉とか小学校に1日も行っていないのが2人。すぐ上の姉は小学校に通ったんだけど、その上の姉はほくら弟、妹の面倒をみるために学校に行けなかったんだ。

実際に進学したのは大同で一番いい学校。正式には山西省師範大学大同市師範専門学校と言った。そこで3年間、数学の勉強をした。高等代数、高等幾何、数学分析、微分積分。それから先生になって学生を教えるための教育学、教育心理学といったこと。

成績はよかったんだ。だから3年間ずーっと奨学金をもらっていた。そして共産党に入党した。師範学校2年のときで18歳。学生の黨員は少なく、クラスで2～3人。入党できるのは18歳以上だからね。党歴が仕事歴より長いことになる。

最初に就いた仕事は出身地の新栄区の中学校の先生。あのころは自分で仕事を選ばず、上から配分されたんだ。数学の先生になるはずだったんだけど、数学の先生は足りてて、物理の先生がいなかったから、物理を教えることにした。2年間、そこで働いたんだ。

いま振り返っても、子供のころは貧乏だったね。村のなかでも飛び抜けて。でも、今じゃあ、あの村出身でもっともいい部類かも。兄弟姉妹みんな市内に住み、ちゃんと仕事があるからね。

学校を出てからはほくは新栄区で中学の先生をしていたんだけど、家族がみんな大同市内に引っ越したので、ほくも市内に住むことになった。いまと違って、教員になるのは難しかったからね。市内で教員になれないので、大同市蔬菜公司という野菜流通の会社に入った。そのころは自由市場はなくて、その会社が農村の野菜を統一的に買いつけ、それを市内に流通させていた。

ほくが配属されたのは基建科というところで、建物を建てたり、その修繕をしたりする部門。やったのは管理の仕事。自分としては実際の仕事をしたかったのに、それができない。けっきょく1年だけここにいる、つぎにいったのが共青团大同市委員会。

どうやって入ったかって？ 高見が以前、李世傑副市長にあったとき、彼女が「小魏は自分が採用した」と話した。その当時、彼女が共青团大同市委員会の書記だったんだ。そして副書記に陳〇〇がいた。その陳さんと、ほくの兄が友だちだったんだね。

で、共青团に紹介してくれたんだけど、簡単じゃなかったんだ。蔬菜公司に人が派遣され、魏生学というのはどういう人間か、徹底的に調査された。それから共産党の組織部長の面接を受けて、共青团で働くことになった。でも配属されたのは組織部で、やはり机の仕事だった。1989年7月のこと。

賃金は64元だった。それまではもうちょっとよかったんだよ。新卒で中学校の先生になったときは賃金が64元、それにプラスして、新栄区は山区ということで山区手当が7元、教育手当が5

元で、計 76 元。それが 64 元に減ったけど、1 年後にはまた 76 元になった。

緑色地球ネットワーク大同事務所に来ることになった経緯はこういうことなんだ。もともとこの協力事業は雁北地区で始まったでしょ。大同周辺の農村部が雁北地区だった。1993 年に大同市と雁北地区が合併して今の大同市になった。両方の共青团も一緒になって共青团大同市委員会になり、この協力事業を以前の雁北地区委員会から引き継いだ。そして副書記だった祁学峰が担当することになったんだ。祁学峰も自分 1 人ではできないから、共青团の中を見渡してぼくを選んだわけ。真面目に仕事をする人間がほしかったんだと思う。

うん、言われる通り友だちは多い。仕事はできるほうじゃないんだけど、友だちは多い。性格なんだらうね。師範学校の同級生が 40 人いるんだけど、26 人くらいは今でも集まる。40 人のうち男は 18 人で、いまでも先生をしているのは 4～5 人かな。女性はほとんど先生だけだね。

義兄弟のこと？ あれは親戚関係じゃなくて、もともとは同級生の関係。同級生の同級生とか。規則を決めてて、家庭内、兄弟のなかの順番と、一致しないといけないんだよ。ぼくは 7 人兄弟の 7 人目だから、義兄弟のなかでもラオチー（老七）。ほら、石炭管理会社の幹部の彼がラオター（老大・長男）なんだけど、老大は荷が重いといって逃げてるんだよ。

実の兄弟以上に助け合うんだよ。誰かが何かで困っていると、何を置いても助け合う。老大は石炭会社のトップだったから、ぼくが「どどこでどれだけの石炭がいる」と連絡すると、すぐにそれを届けてくれる。お金は 1 年後でもいい（笑い）。ほかにもラオジュウ（老九）までいろいろいる。

この仕事、1994 年からだからもう 18 年だ。いま農村を回って感じるのは、水がなくなったことだ。ぼくらが小さいころは水が多かったんだよ。市内に移り住んだころも河にはずいぶん水があった。だから急になくなったんだね。どういう原因なのかわからない。

もともと春は雨がなかったんだけど、農曆の 7 月には雨が降った。立秋（8 月 8 日前後）が過ぎたらしばらくは連雨といって雨が続いたものだ。日本の梅雨のようなものかな。秋雨連綿とも言った。高見が来だしてから 1995 年には降っただろ。でもあれからは降らない。だから雨は減ってると思う。それにしてもいまの水の減少はそれだけが原因とは思えない。

高見とも長くなったねえ。いまでも思い出すよ。2002 年のことだけど、太原に学習に行くよう指示されて、ほかにもいろいろとあって、高見と大同賓館で会ったとき、「もうこの仕事を続けることはできないと思う」と言ったら、高見は涙ぐんでしまったんだ。あのときのことは忘れられないよ。

友だちとも話すんだ。自分は出世したいと思わないし、お金がほしいとも思わない。高見が苦労しているのを知っているからね。自分で役に立てることは、したいと思っているんだ。

植林ツアー日誌に見る緑化活動 20 年

緑の地球ネットワーク（GEN）が最初のワーキングツアーを大同に送り出したのは、1992年5月でした。今年（2013年）でツアーは21年ということになります。

最近是企业から研修のために社員を派遣するというような事例も出てきましたが、旅費は原則参加者の自前です。20万円近いお金を出して、あまり現地の戦力にもならないことをするよりは、その分のお金を寄付してもらって、それを現地に回した方が、よほどたくさん仕事ができるのではないかと、よく聞かれます。

しかし、お金を届けるだけでは、緑化という運動は進まないのです。言葉は悪いですが、ただお金を届けるだけでは、果たしてそのお金が、きちんと緑化に使われるかどうかわかりません。この活動をはじめたころは、中国はまだとても貧しい時代でしたから、お金の使い道はいくらでもあります。そのお金がごく上の幹部のところまで止まってしまうことだってあるかもしれません。

緑化をするためには、まず現地の人たちに、緑化についての意識を高めてもらうことが必要なのです。わざわざ日本からお金を自分でだして木を植えに来る人がいる、その人たちと現地の人たちが一緒に作業をすることによって、交流も生まれ、また緑化についての意識も高まっていくだろうと考えたわけです。

植林ツアーはだいたい春と夏、年2回実施しており、SARS騒ぎや北京オリンピックの混雑を避けて春、秋いずれかを中止のやむなきにいたったこともありましたが、まる1年ツアーを欠かしたことはありません。2012年末までに実施したツアーはGENが主催したもの46回、参加者は延べ1,000人を超え、全ジャスコ労働組合など外部団体が主催したものを含めると、大小250件、延べ3,500人が大同を訪れています。

1994年のツアー以来、GEN主催のツアーに参加した人たちにはリレー方式でツアー日記を書ってもらっています。この団員の日記や会報から20年のこれまでを振り返ってみます。（中村英編集）

1992年

最初の緑化協力団（当時はこのツアーをこう呼んでいました）を派遣したのは、GENがまだ準備会だった1992年5月です。12日間の日程で費用は26万円。上海、太原、五台山をへて、渾源県で行われている植樹活動に参加するとともに、今後の協力をより有効にすすめるための協議をおこない、あわせて地区の青年達がすすめている桑干河プロジェクトの見学もしようというものでした。

その前の1月にGENの「民間緑化考察団」5人が山西省渾源県を訪問して植林候補地を見学し、緑化協力についての合意書を取りかわしました。

第1回植林団は5月11日、渾源県恒山で、現地渾源県委員会の書記に赤いふくさに包まれた資金を手渡し、覚え書きの署名を行いました。翌日、龍首山西留郷の植林場所に着いたら、驚いたことにそこには、幅5m、高さ3mの「中日友好交流青年友誼林」と大書された巨大な記念碑が建てられていました。このプロジェクトは結局、失敗に終わるのですが、最初からこのような大げさなことをやると、たいてい結果はよくありません。

団員たちは初めて見る、草木1本も生えていない黄土高原の深い亀裂の入った土壤に驚き、子どもたちの目に、日本では失われてしまったきらりと輝くものを見て心を打たれました。

5月29日に開いた「帰国報告会」には沙漠に緑を取り戻す運動の先鞭をつけた遠山正瑛氏も参加してくれました。そのとき遠山さんは「素人は勇敢だな。自分ももともと黄土高原に誘われたけど、あそこの難しさがわかっていたから、さらに奥の砂漠に行った。もし君たちが成功するようだったら、君たちがいちばんだよ。だけど黄土高原は困難だよ」とおっしゃったのですが、素人の悲しさ、それがどういう意味を持つものかしばらくはわかりませんでした。

ツアーを計画するうえで、いつも頭を悩ませられたのは、どこで、どのくらい植樹の作業をしてもらうかということでした。なにしろ自費で20万円近いお金を払って参加してきている人たちです。当然、やる気まんまんなのです。

ところが当初の私たちの体制は貧弱なもので、植樹のノウハウもまったくないし、植える場所も現地任せ、苗木の準備も宿泊場所も現地におんぶにだっこという状態だったのです。

1992年は2回ツアーを派遣しました。2回目は8月1日から12日までの12日間、船便を使い、49歳から19歳まで、12人の参加でした。「植樹に関してはみんな素人で、緑化協力の訪中も初めて」という人たちばかりでした。

ですから「緑化協力に関しては、技術援助はまったくできず、実際の植樹作業もわずか5～6時間程度、資金援助でも今回の訪中記念に500元、今年1年全部で10万元。私たちのやったこと、やれることは本当にわずかしかない。それにひきかえ、現地の人たちに多大の迷惑をかけたようで、大変心苦しい。私たちの役割は何なのだろう、と考えさせられる毎日であった」と第2次緑化協力団長だった武田繁典さんは回想しています。

「全体として見た感じは『天と地』、空がパッと広くて畑はずっと遠くまであって、森はほとんどないというのが印象ですね」（加茂わかな）

「正直言ったら実働時間が少なかった。移動して植えたりしたんで、移動の時間と休憩の時間が多くてそんなに働いた気がしなかったですよ。行く前は朝から晩までまる一日働く気でいましたので」（20歳 学生・男）という感想もありました。

1993年

1993年4月11日、緑の地球ネットワーク（GEN）は大阪市で結成会員総会を開き、正式に発足しました。

春の緑化協力の旅は、4月27日から5月7日まで大同・渾源県を中心に山西省雁北地区で行いました。参加したのは男性ばかり10人でしたが、環境問題と農業の技術者、ジャーナリストなども含まれ、多彩な顔ぶれとなり、4カ所で合計5～6百本の植樹をして帰国しました。

「黄砂と乾燥、大気汚染など、想像以上に厳しい黄土高原の環境に驚きました。植樹事業は中国の政策であり、国民の意識も高揚し、悪環境のもとでも計画的な植樹がすすめられている。この努力が成功するよう期待するが、水不足で枯れ死する苗も多く、その解決が先決だと私は思う」（元農協営農指導員）。

「わたしは今度の黄土高原緑化協力団の一員に加わるに当たって、『はげ山に木を植え、単に緑を増やすこと』と、漠然と考えていた。しかし、年間降雨量約400mmの少雨地帯で生活し、夏の水土流失で大地をえぐり取られてしまう人口の8割を占める農民たちにとって、緑の復活は自らの暮

らしを守り、向上させるための切実な願いなのだった。

緑の地球ネットワークに期待し、日本の協力を求める各地指導者の発言が相次いだ。灌漑技術を含む多様な援助で絆を強めよう」(新聞記者)などの感想が寄せられました。

この年の夏のツアーは、7月29日から8月11日までの日程で、船便を使ってコストの削減を図りました。

山西省雁北地区の渾源县・懷仁県・大同県の黄土大地で植林や苗畑の仕事をやり、地元の人たちとの交流。恒山(懸空寺)、雲崗の石窟、万里の長城などの観光も組み込みました。参加申込みが締め切り前に20名の定員に達しました。20歳前後の若い人が多いのと、東京、新潟、愛知など遠方からの参加があったのがこのツアーの特徴でした。

台風で船が1日遅れ、現地でも雨も降ったため、作業に関しては不完全燃焼の感じが強かったようです。

「地元の人といっしょに作業できなかったのは拍子抜け。僕らのところだけ区切ってあって。作業時間のズレでしょうけど。草引きだけでもいいから、地元の人といっしょにやりたかった」(植田澄)

「とにかく大事にされすぎた。ごちそうづくめで。たまには屋台で食べたかったけど。そうしないとふだんなにを食べているかわからないし」(角井大亮)

「まだ日が浅いから、お客さんにしかなれない。農家でお昼をごちそうになったとき、女の子と一緒に食べようって誘ったけど、お客の席には座らない。そう教えられているんでしょうね。その垣根がとれるときが楽しみですけど」(吉川真弓)

「農村のトイレには抵抗なかったです。むしろ有料トイレに違和感があった」(23歳 学生・男)

「生活がきびしいでしょう。観光気分で行くのはよくないと思った。町で会った人とは身振り手振りだけ、通訳を通して聞いたのは幹部の話だけだったから、農民が僕らをどう思っているか、昔のことをどう思ってるか、もっと聞きたかった。(糸望)

この年の夏、中国山西省で機構改革があり、緑化協力を続けてきた雁北地区の各県は大同市に合併されました。担当者がころころ変わり、誰がいったい窓口なのかもわからない、日本から電話しても通じないということがしばらく続き、活動はいったん停滞を余儀なくされました。

1993年5月のツアー団長として現地を訪れた清田祐一郎さんが「こういう厳しいところでの活動は何度も何度も波がくる。技術的にも必ず壁に当たるから、日本でいい専門家を探しておいたほうがいい」とアドバイスしたことがありました。

その予言どおりに問題は起こったのでした。93年の秋にプロジェクトを実施したところに行ってみると、活着している苗はほとんどなかったのです。

黄土高原の大同では、雨量は平均が400mmで、ときには250mmくらいになることがあります。大同では最低気温が零下20℃以下になり、最高気温は38℃にもなります。このような温度変化に耐える植物はどのくらいあるものなのか皆目見当がつきません。

さらに土壌の問題がありました。黄土高原の土は粒子が小さいうえに、有機質の含有量が少なく、団粒構造になりにくく、作物や植物が育ちにくいのです。

頼りになる専門家を探す必要がありました。その年の秋、北岳恒山の北面で「恒山国家森林公园」の計画が持ち上がりました。その中に「引種園」というのがあり、その目的は、新しい植物をここ

に導入することでした。

この森林公園の実務責任者でもある温増玉渾源県林業局長に、「日本の専門家あてに協力を求める手紙を書いてほしい」と頼みました。計画そのものに意味があると思ったし、日本の専門家の協力が得られるようになればいいな、と思ったのでした。

日本に帰ってから、植物園協会加盟の園長あてに依頼状を送りました。反応のあったのは3人でした。のちにGEN代表となる立花吉茂氏（大阪市立咲くやこの花館技術顧問）と、東北大学理学部附属植物園園長の遠田宏氏です。

3人目は環境庁新宿御苑管理事務所の所長で、イチヨウ、ヒマラヤスギなどの種子をたくさん送ってくれましたが、関係がそれ以上に発展することはありませんでした。それだけのことを頼りに、翌94年に専門家の訪中団を派遣することになるのです。

その中で多少の前進もありました。西留郷村というところにヤオトン（窯洞＝土づくりの家）を建て、この村にツアーが泊まれるようにしたいと持ちかけたところ、即座にOKが出て、郷政府の敷地の一部を借りることになりました。冬がくる前に整地をし、翌年3月末の協力団は「ヤオトン建てる旅」にもなり、8月のワーキングツアーからここに泊まることのできる予定でした。

●困難地区の小学校に果樹園を計画

この年の秋、渾源県の隣にある霊丘県の山地、上寨鎮下寨北村に初めて行きました。このあたりは石山ばかりで、耕地が1戸あたりわずか3.8a（115坪）、1人あたり年収も170元しかありません。村の人の話では「120元だとまあまあ水準」ということですが、食べるのがやっとなでしょう。家のなかにも、家具など見当たりません。

小学校を見ましたが、ほんとにオンボロ。「危険だから建て替えたのだが……」とのこと。この日は停電で、薄暗い1つの教室で、5年制のすべての児童がいっしょに勉強していました。就学率は76%、5年まで通学し卒業するのは56%。あとの子は親のあとについて仕事をしています。通学している子は服装もまあまあですが、働いている子たちの様子にはびっくりしました。

いろいろ考えたうえで、「あんな村に果樹の苗を贈り、子どもに植えてもらうことにして、その労賃を就学費用にあてたらどうだろう？」と提案しました。共青团を中心にすすめている困難地域の就学保障活動＝「希望プロジェクト」がありますから、それと連動させることを考えたのです。

彼らは「感謝する。ほんとにいい考えだ」とすぐ賛同してくれたのです。しかし、これは村の長老達に「なぜ日本人の助けを得なければならないのだ」と反発がでて、すぐには進展しませんでした。

渾源県と霊丘県の山地は、日中戦争にさいし「三光政策」（殺しつくし、焼きつくし、奪いつくす）が激しく展開されたところで、たくさんの犠牲者をだしているところなのです。

しかし、青年達がお年寄りを説得し、貧しいそれらの小学校に果樹園をつくることになりました。リンゴ、アンズ、クルミ、サンショウなどを植え、収益があがれば、教育条件の改善、就学保障などに使い、管理する農家の取り分も保障します。

1994年

1994年春のワーキングツアーは、やはり船便を使い3月24日から4月6日までの15日間でした。今回は小学校付属果樹園など数か所で共同の植林作業に参加するとともに、渾源県西留郷にGEN

の宿泊所を建設するのが目玉でした。現地の伝統的な建築様式であるヤオトンで宿舎を建て（4室・約80 m²）、夏のワーキングツアーからここに宿泊します。大同県徐町郷では郷政府に泊まり、初めて農村の1日を体験しました。

この回のメンバーにはツアーコンダクターや中国語講師の人もいて、多彩な顔ぶれでした。

最初の仕事はGENの宿泊所のヤオトンづくり。4室の予定でしたが、渾源県から予算が追加され、計7室の大がかりなものに。爆竹をならし、地元の風習にしたがって天の神・地の神に祈ったあと、村人の見守る中でレンガ積みがはじまりました。1日ではとても完成には至らず、基礎のところだけで、精一杯でした。

植樹の仕事も合計5か所でやりました。通り過ぎるだけではわからないことが、いっしょに働くなかで見えてきます。小学校付属果樹園で、子どもといっしょに労働したのがとくに印象的でした。

霊丘県上寨鎮下寨北村は太行山脈のなかにある、1人あたり年収200元（1元＝12円）以下の貧しい村です。小学校付属果樹園づくりの最初のケースで、村の人たちといっしょにリンゴを植えました。小学校校舎は屋根が波うち、零下20℃以下に下がるのに、窓の障子は破れ放題でした。

果樹園づくりの労賃をプールし、大同市の人たちが集めた「希望工程」の寄付金とあわせて、校舎を新築するとの話だったのですが、9月に行ってみると、タイル貼りのすてきな校舎ができあがっていました。窓もガラスで、子どもたちは、今度の冬は明るく温かい教室で勉強できると大喜びです。

リンゴ苗に水をやるときは、小さな子どもが、お湯飲み、洗面器、やかん、おなべ……、いろいろなものをもってきていました。先生に言われて、家にあるものをもってきたんだろうと思ったことです。

渾源県長条村では、仕事を終えたあと、子どもたちが一行の乗ってきたバスを覗きこんで離れませんでした。どの子も車に乗ったことがないのだそうです。超満員にバスに乗せて、学校まで走らせてもらったら、大喜びされました。

前年植えた松の苗には、寒さと乾燥から守るため、土がかぶせてありました。掘ってごらんといわれて、土をのけたら、ほんとに緑の松があり、いとしく思いました。思わずよく生きてくれたね、はやく大きくなってねって話しかけました。

「木を1本育てるのにすごく手間がかかるんですね。最初に穴を掘ったとき、土が凍結してた。で、30～40 cmも掘ったら、よく掘れた、いいよ、いいよとほめられたのに、次にいったら直径も深さも70 cmは掘ってある。またちょっと掘って、肥料をいれて、かきまぜて、植えつけて、踏み固めて、水をやって、乾燥防止のために地面にビニールを張って、土で押さえる。そのあと何度も見回って、それでも枯れるものがでる。これまで無造作に木を切ったりしてたけど、簡単には切れないと思いました」（小沢千代子）

「子どもといっしょに穴を掘ったでしょ。ずっと同じ子と組んだけど、汗だくになってすごくがんばる。うれしかったな」（富沢隆思）

「きょうのアンズは、80 haに3万本以上植えるんですよ。去年の秋に穴を掘ってあったけど、機械もなく、全部人がスコップで掘ってる。あれはすごい！」（中井美和子）

「学校で勉強もできなくて、せまい村で一生暮して、そこで死んでいくというのは、いまの私にはすごくこわいことです。こんど中国にきて疑問ばかりがふくらんでますよ。わからないことばかり」（桶田美保）

中には「いくらもらってきてるんだ」って聞かれた団員もいました。いや、自分で旅費をだして

きてると答えたら、信じられないって顔をしていたそうです。

5月29日から6日間、国際ソロプチミスト奈良クラブのメンバー約20人が大同を訪問、渾源県荊庄郷長条村でリングの苗を植樹し、学童達と交流しました。これは初の外部団体独自ツアーでした。国際ソロプチミスト奈良4クラブは、最初にGENに助成をしてくれた民間団体です。

夏のツアーは7月25日から8月1日まで28名の参加でした。経費を切り詰めるため安い航空会社を使い成田からの出発となりました。大同周辺に広がるGENの緑化協力プロジェクトを訪ね、小学校付属果樹園や苗畑などで汗を流しました。春のワーキングツアーが起工した渾源県西留郷のヤオトンに泊まって農村の一日をまるごと体験し、村の人たちとの交流を深めました。18歳から59歳までの年齢層で、女性の方が多く、男子学生はゼロでした。

北京からは夜行列車で大同へ向かったのですが、まだ北京西駅は完成しておらず、北京駅の人の多さにまずびっくりしました。

▼7月25日

「北京駅の人の多さにまずは驚き！ 人いきれがするという表現にぴったり。とにかく暑い。むっとする湿度の高さ。人々は、上半身裸。何やら異様な臭い。やっと列車に乗り込むことになった。改札前に人・人・人。人の集団。みんなどこに行くのだろう。こんなに多くの人々が列車で移動するのはなぜ？」(小白方信雄)

▼7月26日

「最初に泊まった天鎮県の宿泊所は、水洗ではなく、(床に穴がありそこから下へ落とす)中国式でした。翌日の広霊県の宿では水の流れる音で目が覚める。一晩中、水道と水洗トイレから水が流れているけどものすごくもったいないと思う。中国ではよく水道の水が漏れているみたいだけど、修理したら結構水不足が減るかもしれない」(中西あかね)

▼7月28日

「龍首山に向かう。途中バスが通れずジープに分乗したが、ゆれること、ゆれること。到着した龍首山の植林地は、去年に植えた苗が早ばつで一畝に2～3本残っているかどうかの惨状。

かんじんの宿泊所、ヤオトンは未完成。工事中ながらも、ほぼ出来上がってる部屋に急遽ベッド、ふとんを運び込み、宿泊の準備をしてくれた。セメントくさく、少々湿気ているが、明日の朝は早いことだし、もう寝ます」(東川貴子)

▼7月30日

「ジープに共産党の赤い旗がくくりつけられているところに中国の人たち(渾源)の熱烈歓迎ぶりを感じた。後で聞いたら、郷には1台しかジープがなく、近在のあちこちの郷から調達したジープだそうだ」(中原由美)

▼7月31日

「ホテルに帰って青年団渾源県委員会の書記からこの県の緑化事情の説明を聞いた。彼には悪いが、はっきりいって力量不足。この県でやってきたことも、その中での苦勞も何分の一も伝わってこない。温増玉局長が参加できなかったことが悔やまれる。

午後1時半すぎ、もう一度バスに乗って、大同県徐町郷へ。途中、バスの車底が擦りそうになって何度も下車。3時間ぐらいかけてつく。

徐町郷は急速に変わっていく。並木のポプラの成長に合わせるかのように。村も、いつ来ても清潔さを感じさせる。李子明（書記）のハキハキした、情熱的な歓迎ぶりは今回もみんなにいい印象を与えている。村の幹部たちのまとまりも、最初の時よりずっと良くなっていると思う。

夕食の後、2手に分かれて、家庭訪問。私たちは2軒の農家を訪問した。地震後、立て直されたこともあって、家が綺麗な上に、活気と希望が感じられる。あー、いいなあ。どこの村も、この水準に早く達することができればなあと思う。

徐町郷の宿舎に泊まる。前回同様、軍から借りてきてくれたのだろうか、清潔な寝具が用意されていた」（高見邦雄）

徐町郷は当初、この植林事業の希望の星でした。幹部も有能で、村がどんどん変化していくのがわかりました。しかし、幹部が交代して、植林に熱意のない書記が着任すると、すべてがダメになってしまいました。大量に植えたアンズ畑が全滅したのです。ここから撤退するのは翌々年のことです。

このころは薬草の麻黄をまだ採ることができました。「いっぺんにハイになりました。食事が美味しくなりました。まずいビールも美味しくなりました。出されるもののすべてが美味しくなりました」（小白方信雄）。「中国の酒のすすめ方がまたすごい。『カンペーイ』、呑む、盃の底を見せる。これを繰り返す。これまでに、53度の酒でこの洗礼を受け、ダウン続出。A氏は絶食する羽目になり、B氏は一行の持つ薬の被実験者になり、C氏は麻黄なる薬草に救われる幸運を得た。私もやられた」（平川進）。

このツアーにはもう一つおまけがつかしました。

▼8月4日

「17時15分発のパキスタン航空機（北京は経由地）の出発が遅れ、成田空港の門限に間に合わないため、飛ばなくなってしまったのです。パキスタン航空の手配によって、北京のホテルにもう1泊することになる」（中野紀子）。

「これが結構立派なホテルで私はこの旅で初めてシャワーが出るところに泊まった。快適快適。今回の旅は緑化協力などという大げさな名より、農村体験ツアーだと思った。観光だけじゃ絶対分からない中国が見れた。満足。体調崩す人はやっぱり多かった。私は生理的に釜洞のトイレは受け付けなかったが、あそこで毎日すごすことを考えると慣れの問題だろうか」（三宅文子）。

8月1日からは立花吉茂花園大学教授・大阪市立咲くやこの花館技術顧問を団長にした専門家調査団11人が黄土高原に出発しました。黄土高原の状況をいろんな立場からじっくりとみてもらい、今後の緑化協力をどのように進めたらいいか、さまざまな意見を出してもらったのが目的でした。

●緑色地球ネットワーク大同事務所の成立

雁北地区の再編でゴタゴタしていた緑化協力を立て直すために、94年春、カウンターパートの山西省青年連合会・大同市青年連合会は専門の事務所をつくって、この協力活動を支えてくれることになりました。

7月に山西省の省都・太原に「緑色地球ネットワーク山西合作弁事処」（主任＝席小軍・山西省青年連合会秘書長）、現地・大同に「緑色地球ネットワーク大同事務所」（所長＝祁学峰・大同市青年連合会副主席）がおかれ、大同事務所では所長はじめ数人の専従者が活動し、技術顧問も参加することになったのです。

事務所の成立で、日本側との連絡もずっと円滑になり、夏のワーキングツアー、専門家の考察団

派遣にさいしてもその力が大きく発揮されました。

とくに大同事務所の所長になった祁学峰はそれまでと違うタイプでした。例えば新しいプロジェクトを提案すると、それまでの幹部には、ほとんど反射的に「^{メイウエンテイ}没问题！」(ノープロブレム)と答えます。しかし、実際はそういかないことが多かったのです。

祁学峰は、すぐにOKをだしませんでした。考えに考えて、「この問題とこの問題を解決できれば、実現が可能だと思う」というふうに答えてくるのです。座標軸がやっと定まったという感じです。

実は1994年は緑の地球ネットワークにとって苦難の時期でした。パートナーに祁学峰を迎え、緑色地球ネットワーク大同事務所設立と、一見したところ順調な歩みを遂げたようにも見えますが、実際のところは「大同での事業はあまりうまくいきませんでした、というより、失敗に終わったことが多かった」のです。内部的には路線の違いから佐野茂樹代表が辞任し、組織は崩壊寸前でした。世間的には死に体と見られ、助成を受けていた財団からも、そのように見られたことがありました。切羽つまって代表就任を頼みこんだのが、大同への専門家派遣で知り合ったばかりの立花吉茂さんでした。詳しい事情もきかずに引き受けてもらい、帰り道に思わず涙があふれてしまいました。

1995年

1995年の春のツアーは2つの団を派遣する予定でした。1つは学校の春休みにあわせて、3月末から4月初めに実施、もう一つは4月、少し暖かくなってからの予定でした。

そこにあの1月17日の阪神淡路大震災がおこったのでした。GENの事務局員もほとんどが大きな被害をうけましたが、救援のボランティア活動に奔走しました。

2月18日の第2回会員総会はなんとか予定通り開くことができ、春のツアーもぜひともやってほしいという声に押されて、決行することになりました。

第1団10名、第2団9名の参加がありました。

第1団は3月末から渾源县、靈丘県、広靈県を回りました。各県の指導者、村民、子どもたちといっしょに汗を流し、そのあとの歓迎交流会も大きく盛り上がりました。

今回は2つの団とも、2回目、3回目の参加者が多く、行く先々に「老朋友」がいて、積極性を発揮したことが全体にとってもいい作用を果たしました。

「去年に比べて地元との信頼度、密着度が高まっていました。これは日本で誇って話せることです。地元の物産品(ジュース、石材、そば)を検討し、経済を底上げして収入のめどをつけることで、環境問題の見方も変わるんじゃないかと思います」(竹中隆 世話人・団長)

「昨日穴掘りをしている時、地元のおじさんが僕の掘った穴を掘り直していた。何度も何度も掘り直すんです。このような意気込みがこの運動の成否のキーポイントではないかと思います」(新妻健治)

「ここへ来てみて、すごいところだと感じています。ただ、ワーキングツアーと銘打っているのに、ちょっと作業時間が短い気がしました。食事の用意でずいぶん待たされたのが残念です。また、毎日昼も夜も乾杯せめて、お客さんなのが残念でした。昼くらいは村の人と同じもので、と思う」(石田和久)

4月7日に出発した第2団は、これまでの参加者のなかでも最高齢の副島文枝さん(74歳)が参加、

好奇心にあふれた若々しさにはみんなが脱帽しました。8日から大同市南郊区での「地球環境林センター」起工式に参加したのをはじめ、陽高県、天鎮県、渾源県と駆け足で回りました。列車の遅れや天候不順などで作業を十分できなかつたのがいささか心残りでした。

「いい出会いをしました。黄土高原が見たいという気持ちがほとんどで来たけれど、土沙漠と聞いて、遠山先生が砂沙漠、土沙漠、塩沙漠とおっしゃった、これが土沙漠かと勉強しました。あんずの花の咲くころ、また来たいですね」(副島文枝)

「想像を超えるツアーでした。意義のあることをしているということをおぼつかの労働の間に感じました。これはみんなに広げないといけない。ライフワークにするということをおぼつかに書いてしまったし、実行しないとはいけませんね」(有元幹明)

●地球環境林センター起工式

4月8日、春のワーキングツアーの第2団を迎えて、大同市南郊区平旺村の地球環境林センターの起工式がおこなわれました。実験区、育苗区などをそなえ、今後の緑化協力の中心となる場所です。中国側からは大同市の副市長をはじめ、行政、林業の関係者が多数出席、関心と期待の高さをうかがわせました。在中国日本大使館は村山首相の訪中準備のために多忙で、出席はしてもらえませんでした。下荒地公使から祝詞をファックスでもらいました。

これができたいきさつは、昨年、中国側カウンターパートの祁学峰大同事務所長から「各県のプロジェクトがバラバラでは困る。それらを統括して牽引する場がないとやっていけない」という意見が出ました。新しく参加した専門家の立花吉茂さん(のちにGEN代表)からも、「このような国際協力を続けるには『モデルとなる拠点が必要だ』」という提案がありました。この2つをドッキングさせて、環境林センターの原型ができたのです。

いまから考えると、その後の事業の発展に環境林センターが果たした役割は、欠かすことのできないものでした。黄土高原のように環境の厳しいところで、植樹を成功させるために大事なものは良質の苗木です。それまではバラバラに購入していたために、品質にバラツキがあり、ときには接ぎ木に失敗した「ニセ苗」をつかまされることまであったのです。自分でつくった苗なら、そんな心配はいりません。

各地のプロジェクトではつぎつぎ問題が発生しましたが、それをセンターに持ち帰り、解決の道を探っては、また現場に返していきました。さまざまな新しい技術をここで試し、いいものを他に広げていきました。

1995年夏のワーキングツアーは、7月25日～8月4日までの日程で19歳から70歳まで、14人が参加し、北京から中国人の画家、華奎さんも加わるというユニークな団でした。

▼7月26日

「それにしても道中はとてもでこぼこだった。雨の後で通れない道もあり、川底の部分を行く。スリリングなドライブを楽しみました」(稲井由美)。

▼7月27日

「いよいよ(天鎮県)趙家溝村へ3時出発…。途中いきなりアクシデント。前から来た車が段差で動かない。急遽道を変え、村へ。ようやく村につき即、学校づくりを手伝う。レンガをせつせとみんな運び、村の人たちはセメントを挟み積み上げる。体を使っての汗はとても心地がいい」(山永

ユカリ)

▼7月28日

この日はとくに条件の悪い天鎮県の李二烟村へいく予定でしたが、天気予報が大雨の予報で、雨に降られると道路が寸断され通行不能になる恐れがあるので、やむなく計画を変更し、水のわき出る水神堂というところに行きました。

「毎朝の儀式、トイレを済ませようと思って、トイレトーパーをこわきに抱えて、トイレに向かう。トイレのドアをあけて広がる景色はいつも同じ、便器にてんこ盛りである。これは、断水していてもしてなくても同じ光景で、もう慣れてしまった自分がちょっと怖かった」(日高基)

▼7月30日

「まずは小学校に。そこに1987年に描かれた上北泉村建設示図がある。山には樹木、村のまわりには果樹という一つの理想がそこに示されている。

17時30分、共青团の資金づくりのためのリンゴ園と苗木園を参観。専門の技術を持つ人が立花さんも納得のいく管理をしている」(上田信)

この「納得のいく管理をしている」人物が、のちに南天門自然植物園の管理をまかされることになる李向東です。

4月に着工した地球環境林センターも訪問しましたが、とうもろこし、花、野菜が順調に育っており、大根は花を咲かせていました。

当初からGENの活動に興味をもち、いまでは強力なサポートメンバーである上田信・立教大学教授は、このときこんな感想を述べています。

「8月3日。今回の旅はひとつの転機としたい。ネットワーク(GEN)が成立した頃は『海のものとも山のものとも』つかないものだったが、昨日訪れた地球環境林センターを生み出す力を持つまでに『森のもの』となっていることに驚き、これからは学生や知人に自信を持って参加をすすめられるようになった。緑化に取り組むNGOは多い。オイスカとか遠山氏の沙漠緑化のプロジェクトなどの噂も耳に入るが、GENほど住民の中に入った活動をしているものはない。中国という、民間レベルの交流は難しい国で、よくここまでもって来れたものだ。『中国ではCBO(住民の結びつきに根ざした活動組織)は育たない。もし成功するとすればその果実はすぐに国家につみとられてしまう』と私は初めからあきらめ気分だった。しかし今回の旅を通じて、大変骨がおれ、とぎすまされたバランス感覚がなければできないことだが、やってやれないことではないということが納得できた」

1996年

大同事務所の春はワーキングツアーの受け入れ準備で始まります。まだ寒い各県のなかから、どこで植樹が可能か、宿泊や農家での昼食の手配は、などの条件を調べ、GENからの要望と照らし合わせて調整します。まだ寒いのに北の方の万里の長城へ行きたいなどといわれると、大同事務所は直前まで調整に走り回らなければなりません。

一方、大阪のGENの本部ではメンバーの募集から事前準備を始めます。今回、初めて申し込みを一部お断りするという事態になりました。飛行機の座席を20人確保していたところ、足りなくなってキャンセル待ちになってしまったのです。

春のツアーは3月26日から4月5日まで。メンバーは17歳から78歳までと年齢層が広く、事務局を除いて27人、うち2回目のリピーターが6人いました。

▼3月27日

「さらにどこどこ行きますと、陽高県に到着。お昼まで町の見物です。町に入ると道の人が残らず振り返っていきます。バスで乗り込んでくる団体さんが珍しいのかもしれませんが、私が町の様子を見物しているというより、町の人に珍獣のように見られているという意識が強かったです」(栗林佳雅)

▼3月29日

「(大泉山村での作業) 杏の苗木を1人1本ずつ植えつける。自分のは大丈夫と思いつつ、もしみんなのが根づいて自分だけだめだったらと不安がよぎるが、ままよ、なんとかなるさと、勝手に解釈することにした。それにしても直径60cm、深さ60cmの円筒形に穴を掘るのは辛い。何か機械があればはかどるのにと考えた。11時50分、全員集合して作業を終わり、各班に分かれて、それぞれの家に昼食をごちそうになりに行く。われわれ『マツ組』は、銭さんという人の家だった。オンドルのよく利いたところで食べる昼食は最高だった。銭さん夫婦と奥さんの妹さん、それに息子さんまで来て、『食べる、飲む』とすすめられ、みんなで必死に食べた。それにしても最高のもてなしだった」(前田俊雄)

▼3月31日

「(天鎮県の油房窩村) 外国人なんて来ないし、日本人も日本軍が来て以来だと言われ、とにかくめずらしいものが来たといわんばかりに村中の人?が家から出てきて見物に来るようなさわぎである。人が集まれば、歌を歌いあったり、おり紙をつくって子どもと遊んだり、筆談したり、庭のあちこちで中国と日本の人と人との交流が始まった。不思議なことに、中国の人たちに混じって中国側からこのお祭りさわぎを見ていても、ちっとも違和感がないし、言葉が通じなくて適当に雰囲気やりとりをしてもなんとなくホッとするのは、やはりどこか同じ血が通うような本質的な共通点があるからかなあ、同じモウ古斑をもって生まれた者同士なんだなあ、等と考えたりした」(東美千代)

▼4月1日

「(天鎮県楊家庄村で) 今日、植えた木はアンズの木だった。植えた畑は村のなかでも比較的土壌条件のよい畑だった。自分の家の食べるものも少なく、中国全体での食糧不足だということに、穀物畑をつぶしてよいものなのか、ちょっと矛盾も感じたが、先日の県長とのシンポジウムで、県長が、『植林は緑化運動であるが、それと共に、建築材の生成でもあるし、果物を植えるのは農民たちの現金収入のためでもある』と現実的な観点での話があり、私もとても共感できた」(橋本紘二)

▼4月4日

「やっぱり、自分の身をもって体験しないとわからない貴重な経験ばかりだった。何の知識もなく、役にも立たない私でも、このツアーに参加することによって、現実の農村を見れたし、少しでも現状を知ることができた。そして農村の人々の笑顔にふれることができた。そのことがとても嬉しかった。最初の方で『50年、100年後のために木を植えるんだ』という話をきいた。気の遠くなる話。すぐに成果を追い求める私にとって、頭をガツーンとやられるような話だった。地球規模で考えていることもGENのスケールのでかさを感じた。(中略)。かなりの覚悟をしてきた旅だったけれど、大変快適な旅でした。トイレもちゃんと囲いがあつたし、泊まる場所はきれいかつたし、ごはん

はおいしかったし。絶対またこのツアーに参加したいです」(仲埜亜紀子)

4月8日から13日まで第1回全ジャスコ労働組合黄土高原ワーキングツアーが29人の参加者で実施されました。95年春から1年の準備期間をへて実行にこぎつけたものです。

「何かやってみたいやつはないか」という呼びかけに対し、中国に行ってみたい、何か変わったことをやってみたいという人たちが参加しました。

個人負担5万円で参加者を募り、論文を書かせてそれを審査して参加者を選出しました。お金を出して論文を書いてでも行きたいという積極的な人に行ってもらったということが、参加者の満足度を高めることになったようだ、団長の高橋省吾さんは語っています。

「9時30分、陳庄村にて植樹。現地の方々が畝を作り、水が流れていかないように準備してくださっているところに1m間隔にスコップで穴を掘り、小さな苗を1本ずつ植えていく。根が真っすぐに、曲がらないように注意して植えた。どうか、げんきにたくましく育てほしいと祈りながら植えた。村の人たちといっしょに、言葉は通じないが、笑顔と笑顔で心が通じる楽しい作業であった(塩見明子)

「最後に、私がこの6日間で一番考えさせられたことは『心の豊かさ』です。本当の心の豊かさとはなんでしょう。われわれ先進国のように物質的な豊かさが、心の豊かさにつながるとは思えません。みなさんも思い出してください。あの大同市の農民たちの笑顔を…。彼らは決して裕福ではないし、子どもたちも全員が小学校に行けるわけではないという経済状態です。にもかかわらず、われわれを迎え入れてくれるあの盛大な演奏、あの気持ちのこもった家庭料理。そしてあの笑顔。いま思い出しても涙があふれそうです」(田中琢己)

夏のワーキングツアーは日程8日間のA班と11日間のB班、総勢23名が参加して7月25日から8月4日まで(A班は8月1日まで)の日程で行われました。全ジャスコ労働組合からも5人が参加しました。

北京から大同へは夜行列車で向かいましたが、「北京駅は大混雑。人また人。改札口をぬけるまでになんと40分、日本では考えられない」(今村雅人)。「北京は自転車だらけ。やはりみんな自転車に乗っている。だけど自転車に乗ってる人たちはなぜか涼しげに見えました。北京駅で私は人の多さに驚くが、『今年は少ないね』と隣の人声」(森満博子)。

▼7月29日

「10時30分頃、バスで山を登っていくときに、なんと落石に遭遇する。あと15～20秒早かったら、私は今この日誌を書いていなかったであろう。その後、道路の修復で全員で『道路工事』、なんとかその場をしのぐことができた。

トラブルはまだまだ続く。11時40分、昨日よりたまった川の水で道路がふさがってしまい、全員バスから下車、全員で坂道を歩く。12時、急な上り坂で道路も悪く再度バスを下車する。以降、15分間坂道を歩くことになった(きつかった)。

次の目的地は銀廠郷というところ。昼食はここで弁当の予定。13時ごろ、大型トラックの後部に全員で乗り込み、上に下にとゆられながらどうにかこうにか現地に到着する。14時30分、銀廠郷を出発。トラックの後方から、去り行く村を眺めながら心がとても熱くなる。

17時15分、アクシデントが重なってスケジュールが大幅に遅れているが、午前中皆で作った落

石の工事現場でまたトラックを下車する。ウォーキングの再開（15分間）。17時30分、再びバスに乗車する。

18時、下寨北小学校下車。

敷地 6.7 ha。在校生 45 人、人口は 515 人の小さな村だが、小学校は緑の地球ネットワークが建てたということで感激する。地域の人との交流の深さを教えられた一日でした」（柳啓史）

▼8月2日

「渾源を抜けてちょっと走ったところに下韓郷の地球環境林があり、アンズが植えられている。これまで見る機会がなかったので、車を停めて、みた。活着はなかなかいい。しかしアブラムシがついていて、枝先はちぢれてしまっている。でもこれくらいならそう影響は大きくないだろう。

中に2列、ずーっと枯れているところがあった。どうも不自然な枯れかただ。枯れたものを引っ張ってみると何の抵抗もなしに抜けてくる。株元にはスコップか何かで掘り返したあとがある。誰かが引き抜いて、また差し込んだのだ。

ここでのしごとは一筋縄ではいかない。枯れているのは、比較的よく育ったものばかりだ。くやしくてしかたがない。1本を車に積み込んで、大同まで持ちかえることにした。ホテルで待っていた祁学峰（大同事務所長）に見せると瞬時に、破壊か、他媽的（こんちくしょう！）とののしった」（高見邦雄）

この年はいろんな矛盾が噴きだした年でもありました。大同県の徐町郷は早くから協力をはじめた拠点で、94年春に植えたアンズが昨年夏まで順調に生育し、花までつけていたのに、この夏は全滅に近い状態でした。トップの書記が交代し、引き継いだ書記の指導・管理が不十分で、野ウサギや虫の害が多発したためでした。しかも生き残った苗のかなりの部分が、接ぎ穂が枯れ、台木の芽が伸びたニセ苗でした。経験がないので、にせものをつかまされていたのです。この郷はいわばプロジェクトの優等生で、大規模にアンズ栽培を試みていたところだっただけに、打撃も大きくショックでした。その場でこのプロジェクトからは手を引くことを決断しました。

霊丘県・鍋帽山のモンゴリマツも、山の下の方はいいのですが、上のほうで枯れるものがでてきました。ネズミの害もありますが、原因不明のものもあります。この人たちは管理に熱心で、枯れたもの、枯れかけたものはしっかり補植してあります。

植えた場所の地形や土壌、その年の雨量など、自然条件によって差がでますが、それ以上に人間の要素、管理の善し悪しに大きく左右されるのです。

管理の改善強化にはカウンターパート「緑色地球ネットワーク大同事務所」の役割が重要です。専従6人の定員が95年夏、市政府に承認されたのですが、市全体の行政改革にまきこまれ、臨時のメンバーで動かしていました。その弱点がでてしまったのです。この秋までに技術者を含め数名を新規採用することを決め、独立の事務所も確保しました。

1997年

1997年の春、日本から大同の黄土高原を訪れた人たちは75名にもなりました。まとまったツアーだけでも神戸大 AIESEC（12名）、緑の地球ネットワーク（32名）、全ジャスコ労組（22名）と3つもあり、そのほかに専門家、取材班などが入れ替わりで訪問しました。

この緑化協力活動を強化し広げていくうえでの最大のポイントは、現地の実情を知る人が1人でも増えることです。大同事務所の苦労はたいへんなものでしたが、これを乗り越えた自信は大きなものでした。

GENの春のワーキングツアーに、テレビ朝日の取材班4人が同行しました。このときの取材は、後の補足取材とあわせて9月7日にテレビ朝日系列の「素敵な宇宙船地球号」で紹介されました。そのあと全国農村映画協会のビデオ取材班と写真家の橋本紘二さんが、天鎮県、広霊県の農村を訪れました。

1997年GENの春のツアーは3月27日から4月6日まで実施され31名が参加しました。

混雑が激しかった北京駅は北京西駅が完成し、移動がずいぶん楽になりました。

▼3月27日

「北京空港で、北京・大同からの出迎えの人たちと、東京からのメンバー、テレビ朝日の取材陣と合流し、万寿賓館にて夕食。21時45分まで貴賓室にて休憩後、北京駅へ。西駅ができたためか、思ったほどの人ごみではなく、トランクを下げての移動に助かる」(石田和久)

▼3月28日

「18時30分から、大同市政府主催の歓迎の宴会。一番奥のテーブルに大同市側の代表と高見さんら。やはり始まる白酒の乾杯。高見さんはそれを受けるとともに、酒での約束を趙さん(大同市共産党委員会主席?)と結ぶ。緑化協力も6年目に入り、成果を上げていかなければならない時期に来た。そのためには、大同事務所を大きくしっかりしたものにしなければならない。日本語がしっかりとできる者を1人、技術を持っている者1人、を必ず増やしてほしい。乾杯するから、決して忘れてはいけない。と何度も何度も念を押す。緑化の仕事、これは本当に大変なことだ」(上田信)

▼3月30日

「本日より本格的な作業が始まった。去年の夏訪れた上北泉村に行った。去年の夏は三輪のバイクの荷台に乗って河を渡ったが、今はなんと橋がかかっていた。そして労働を始めたが、私は体をめったに動かさないのとにかくキツイ!! 穴を掘り、あんずの木を植える。なんでも3年目で花が咲き、4年目で実がなるそうです。昨年会った人たちが、私のことを忘れずにしてくれたことは最高にうれしい」(加藤大)

▼3月31日

「今日はツアーに来て2日目の労働。石家田郷下北羅村に行き、地球環境林の建設をしました。穴を掘り、土をかけ、苗木を入れ、水と土をかけて出来上がり。とても大変で疲れる仕事でした。しかも“モチ”と穴を掘っていると、中国のおじさんがもっと深くほれとってメジャーまでだし、70cmだとかいいました。なのに植林するときに深すぎて埋められてちょっとショック…」(富沢勇武)

▼4月2日

「一通り校舎をまわると、南側にももう一つ校舎が見えた。どうやらそちらの校舎へは人があまり行っていないらしい。歩いてゆくと、先生がわれわれを手招きしている。いつ来るのかと待っているようであった。全部で1時間半程度の見学時間であったろうに、このような未開放地区の農村に外国人が集団でやってくるなど他にまずないであろう。あちこちに熱烈歓迎の文字があり、先生も生徒もかなり緊張の様子である。もし奥の教室に、誰も見学しに行かなかつたら、我々の到来

を待っていた彼らの期待を裏切ってしまう気がし、結局5つの教室すべてをまわり、あいさつをし、歌を歌うことになった。教室から去る時、生徒らは叔叔再見、阿姨再見、と見送ってくれるのだった。

最後に植樹作業についてなのだが、この植樹方法がどうもはっきりしない。掘る深さ、苗を植える時の向き、植えた後踏みつけるのか、囲いの山をつけるのか、人によって違う。われわれがその時言われた通りにしても、中国側の人に、それは違うと直されたりもする。このツアーの根元的な問題部分にふれるので、中国側（特に農民たち）と確認の上、マニュアルを作してほしい」（堀木健太郎）

「農家に行って昼食をごちそうになった。きょうもまた1軒の家に全員がはいったから、ギューギューづめだ。結果として日本人だけで食卓を囲むことになり、農家の人たちとの交流はなくなる。テレビの人たちが『この主人と交流するところを撮影したい、その横にいてほしい』というからそうしたのだが、1杯乾杯しただけでそれ以上に交流は発展しなかった。

きのうもきょうも、この県の人たちは私たちがせいいっぱい歓迎したいと考えたのだ。で、専門のコックを町から連れてきて、結婚式の時にだすとかいう伝統的な料理を作らせた。そういう好意はありがたいが、こちらの意図とはまったくすれ違ったものになってしまう。いつものとおりにしてくれるといいのに、テレビの取材があるということで、そのような歓迎体制がとられてしまった。取材班も困り切っている」（高見邦雄）

▼4月4日

「今日は寒くて目が覚めた。ここの宿泊所（大同県宿泊所）は、トイレの水がずっと流れっぱなしで、しかも水道の水も時々止まらなくなり、なんだか、乾いた土地ばかり見てきた私には、もったいなくて、少し矛盾しているような感じがした。

朝食後、作業する予定の地球環境林へ行く。武装部と書かれたところで昼食をいただく。そこでトイレに行くと、私が行く前に想像していた中国式だった。ドアはなく、低い仕切りで区切られていた。やっぱり恥ずかしいような感じがした。

今日で作業はすべて終了し、ほとんどの日程を終えた。最初の3日間は長かったけど、今日まで、本当、あつという間だった。色々考えるまもなく、直感とか見たままの情景とかが頭の中に詰まっているという感じである。これを日本に帰ってゆっくりかみくだいて、少しずつ自分の考え方をもち、言葉で発信できるようになりたいと思う。いろんな種類の人に会え、楽しめ、また自分の今までに自信が（ほんの少しだけど）ついただけでも、このツアーの意味は大きいと思う」（島谷繭子）

夏のワーキングツアーは7月24日から8月3日までの日程で、19歳から80歳までの35名が参加しました。雨が多く、あまり作業はできなかったツアーでした。

北京から大同への夜行列車は寝台車が確保できず、座席での旅となりました。

▼7月26日

「『信じられない……』これが今日の感想です。午前中、暑いなかアズズの作業もしました。昼食後、懸空寺も参観しました。みんなそろってバスに乗り、さんざんひやかしたお土産屋さんにも再見と手をふりながら元気に霊丘県に向かう…はずだったのです。発車して5分たったかという時に、突然、車が止まりました。止まったまま…動かない。クーラーのないバスの中よりは良いというので、大勢の人が外に出てタバコを喫ったり、化石を見つけ（る努力をし）たりして時間をつぶしていました。そのうちやっと車が動き出し、トンネルに入りました。ひどい排気ガスのため、窓はしめなくては

なりません。バスはがんばって前へ進みます。のろのろのろ……びた。とうとう最悪の事態が起きました。トンネルの中で車が止まってしまったのです。(中略)『そろそろヤバイな…』誰もがそう思い始めたとき、動いた！ 車がゆっくりと前進しはじめたのです！ それからしばらく暗闇の中を走ると、ぼやけた視界の向こうに白い光が見えました。外です。待ちかまえていたみんなが窓を大きくあけました。それでも女性数人は体調を悪くし、車を止めてしばらく休んでからもう一度出発しました」(倉持幸恵)

▼7月27日

「ぬかるんだ道に苦しみながら何とか目的地に近づいたバスが、あと2キロのところであついにぬかるみにはまりこみ、立ち往生。おまけに右に傾く、危険な状態。みんなは、バスから降り、歩くことを決心するが、中国の人はねばり強い。われわれも数名でバスを押すのに協力する。

そのかいあってバスはなんとかぬかるみから脱出して、目的地に到着。本日の作業は、春に植えたアブラマツの補植。作業的には意外と簡単で、めいめいがスコップを持ち、この松が大きく育つことを期待し、300本の苗木は土に植えられた」(小栗誠二)

▼7月28日

「今日の日程は午前中にキノコ採集、昼食は採集地近くの村でとった。キノコ採集ははっきりいって採集どころではなかった。バスで3時間近くゆられて到着した山の名は東崗嶺。高さにして1,700m くらいの山だそうだ。山頂近くまでバスで登ったが、そこからキノコの生えるアブラマツの林は丘を2、3こえていかなければならなかった。それが結構急な坂ばかりで、キノコ採集というよりは、ほとんど山登りのようだった。アブラマツの林に到着しても、もはや下りることばかりに気がいってしまって、キノコを探すのも忘れて必死に下山した。その状況は皆同じだったらしく、山のあちこちから悲鳴が聞こえていた」(木村智充)

▼7月29日

「この県(霊丘県)の招待所はどこに比べても最低レベルである事は承知していたが、それにしてもひどすぎる。これでお別れかと思うとホッとするが、これも中国を理解するうえでは重要な経験であることにはちがいない(と思うことにしよう)。

7時30分、県の書記が来訪。二、三のせひやっていたきたいことを伝えるが、あまり芳しい反応はない。植林地のアフターケアのための管理人をおけないか、との話には管理人が盗伐するかもしれないので問題があるとの返事には返す言葉もない」(遠田宏)。

▼7月31日

「本当に今回のツアーはついていない。1週間早く大同に来て、毎日晴天。仕事ははかどったが、7月25日ツアー到来とともに曇天続き。ときに雨。はじめての方々には申しわけないような気がする。こんな天候が黄土地帯ではないのだが！」(立花吉茂)

▼8月3日

「個人的にはすごくいい体験をさせてもらったし、非常に楽しい時間を過ごさせてもらった。猛湿の北京、極寒の夜行列車、暗熱地獄のトンネル内バス、視界数mの山上散策、足元不安な岩にへばりついた寺、荒海に小舟に乗っているようなバス、落石寸前の山道、心臓が飛び出す思いで登った山寺の階段、等々ものすごい体験はすべて、私に楽しくハッピーな思いをさせてくれた」(中村欣司)

●菌根菌を育苗に活用

小川真さんの指導で、97年春、「地球環境林センター」ではじめた菌根菌活用の育苗実験は、わずか4か月で顕著な効果が現れました。一般の苗にくらべ、地上部にも差がでていますが、かんじんなのは地下の根です。ずいぶん力づよいうえに、これから伸びる新しい根がたくさんついています。来年の春ごろには、決定的な差がつくでしょう。もう1年実験したうえで、周囲の苗圃などにも普及させていく考えです。

去年（1996年）の夏以来、遇駕山をはじめ大同県のいくつかの造林地で、植栽後12年ほどたったモンゴリマツが枯れはじめるということがありました。GENの協力地に隣接した、中国の国家プロジェクト「三北防護林＝緑の長城計画」のモデル地域であり、このまま被害が広がれば、たいへんなこととなります。

いつも現地を訪れる専門家のほかに、病虫害の専門家の現地調査を依頼して回りました。

幸いなことに悪質な病虫害は発見されず、95年の異常気象によるストレスが原因である可能性が強いとのことでした。このまま拡大する恐れは少なく、良好な苗を選ぶ、他樹種との混植をすすめる、管理を強化するといったことで、成林の可能性は十分あるとの結果がでました。新しい調査地・九梁窪では70年代末に植えられた同じ松が4.5 mほどにりっぱに育っているのを見ることができました。

また調査の過程を通じて、中国では、中国林業部、山西省林業庁、大同市林業局の今後のバックアップを約束してもらい、日本の諸組織との関係が深まりました。

課題であった緑色地球ネットワーク大同事務所の強化についても、大同市林業局から現場に強いベテラン幹部を顧問に推薦してもらい、来春の予定地の再調査、混植と管理強化を織りこんだ計画の再検討が進みました。

1998年

GENのカウンターパート＝緑色地球ネットワーク大同事務所は、1997秋から飛躍的に強化されました。技術部が今年の計画地23か所を少なくとも2回は点検し、春の植樹に備えています。

自然環境と社会的な条件を考慮したうえで、大半のプロジェクトで、複数樹種の混植をすすめることになりました。そのために、地球環境林センターと、新しく建設する霊丘県支所で、有望樹種の見本園をスタートさせ、育苗を開始します。

98年春はGENが独自に派遣した2つのツアーと、全ジャスコ労働組合・富士ゼロックス端数倶楽部のツアーあわせて90人余りが大同の緑化協力地を訪れ、地元の人たちといっしょに植林作業にとりくみ、ツアーとしては初めて農村でのホームステイを実施しました。

1998年春のツアーは2班にわけて実施し、第1班(3月26日～4月4日)には33名が参加、第2班(4月16日～23日)には12名が参加しました。

▼3月28日

「(養豚場の)参観が終わったところで、いよいよ(楊窰村の)長期ステイ組は別れをつけることとなる。紙谷さんもステイするというので、村の側が女の子1人では危険だと言い出した。私が

出て行って1人で歩き回らないようにするし、本人もちゃんと自分の安全に気をつけると言っていると説得し、ようやく許可が出た。

みなを乗せた車が去るのを見送ったのちに、書記の案内でまずつれていかれたのが、村の党支部の事務所。門をくぐったところに、まず大きな共産党の旗。ここでしばらく待ったあと、長期ステイ組の松本、中田、加藤、紙谷と散歩に出かけることにした。村の子どもたちがはじめはおそろおそろ、やがて大胆に顔を出す。紙谷さんは子どもたちとすぐ友達になってしまう。散歩に出ても子どもたちに引っぱられて村を歩くことになる。

あたりが暗くなったころ、お昼をたべた家で夕食。公安の人が来ている。

結局、農家でホームステイはだめと言う。書記に頼んで明日の昼食と夕食は5人をバラバラにして1人ずつ農家で食べられるように手配してもらおう。書記たちはちょっと困ったという顔をしていたが、農家の生活を知ることが目的なのだと言葉をつくして話したところ、ようやく「好、好」ということになった。書記には本当に大変な迷惑をかけてしまうが、こうしたホームステイの経験のなかで、次の中国緑化協力の担い手が育てば、と念じて、心のいたみを忘れることにする。明日は農作業の現場を見せてもらいたいともお願いした」(上田信)

「朝起きてトイレ行ったら水が止まらなくなった。20分ほどたってやっと止まったようだ。ホテル自体は新しくきれいなのだが水回りは全くダメ。わかってはいたが現実になると驚いてしまう。

作業がはじまる。ここちよい汗が流れだす。いままでの仕事の悩みが吹き飛ぶ！ 子どもたちの声、表情、動き、とても自然でなつかしい。こんな何もない黄色い大地で、日本のようにおもちゃもないのに、本当に楽しそう。なにか日本人は「大きなもの」を過去に忘れてきていないか、ものすごく不安になる。自分の子もこんな子どもたちのように「きれいな瞳」した子になれるのか？ 親として、日本人としての不安がつる」(佐藤潤)

▼3月30日

「(楊窰村で)今朝、食事をしているときに子どもたちが部屋に入ってきた。なに、って感じしていると、なんと先生までやってきた。何かかと思っていると、私たちの座った椅子が教室のものだった。子どもたちとみんなで椅子を学校まではこんでいった。小学校で授業を参観しようとしたら、先生方の写真撮影となって、授業を妨害することになってしまった」(松本正之)

「今夜は劉さんという人を紹介され、その人の家に加藤チャと泊まることになる。「仕事はなにか」と問えば「村長」と聞こえた。その家ではアルバムを中心に話題が弾んだ。息子は彫刻師で、北京のどこかに作品が展示されているという。「息子さんはどこに住んでいるのか」と尋ねると、『近所だ』といって家の人が呼びにいった。今度はわが家の話を写真入りで紹介した。やがて、息子さんがやってきてしばしの交流をし、加藤チャに寝酒を取りに行ってもらい、お休みした。でも民宿は中国側に大きな迷惑をかけているような気がする」(松本正之)

▼3月31日

この日は地球環境林センター霊丘支所の除幕式に参加し、12時半過ぎ帰路に。ところが積雪と車両事故のため、大同の雲崗賓館へ帰着したのは午前1時半となりました。

「霊丘支所では雪のため、松を3本だけ記念植樹する。1時すぎに大同に出発。積雪、約5、6cm。霊丘から渾源に抜ける峠が、心配していたとおり、積雪のために峠にかかったところでストップ。結局、午後3時半からやっと峠を越えた10時半まで、7時間の一大冒険となった。

一時はバスの中で朝をまつと覚悟したときもあった。

自己紹介をして車内を楽しく和気あいあいと。カイロ、菓子、酒等を皆で分け合い、現地の人の商売上手もさることながら、栗餅、ゆで卵を手配した武さん、崔さんの機転に感心し、またさわりでもどうにもならない時には静かにじっと待つ中国式の考え方に学んだこと、等、思いがけない体験をすることができた。

大同着、午前1時半。12時間の大ドライブであった。ホテルの風呂のなんと光り輝いて見えたことか」(樋口美瑣男)

(第2班)

▼4月18日

「ホームステイを農家です。大同県陳庄郷陳庄村。民宿で分かれて泊まる。AM 8:00 集合。全員健康で楽しいホームステイを終えて集まる。一人一人笑顔で!! 大同県中高庄郷金山寺で植樹作業。郷政府にて昼食」(紙谷周三郎)

▼4月19日

「白舎科村でアンズを植えた。ここでは500 ムーの果樹園を造成中だが、そのうち私たちが協力する小学校果樹園は100 ムーだ。ことしは春の訪れが早かったから、たいていのところはすでに植えおわっていて、私たちのために一角だけが残されており、穴も掘ってある。

一般的な黄土高原とここがまったくちがうのは、河川敷のような砂地であることだ。山が近く、そこから流れてきた砂や小石がたくさん混じっている。最初にバケツ1杯の水を入れてどぶづけにし、それから土をかけて、さらに水1杯を注ぐ。それらの点も行き届いている。もし苗木さえよかつたら、活着はまちがいないだろう。

しかし肝心の苗木がよくなかった。ほかのところに3日前に植えたときは、元気でよかったというのだが、それからあとずっと放り出してあった。いつまでも平気で日向においてある。それを補うためだろうか、1つの穴に2本、ないし3本を植えていく。

アンズの木はとても乾燥に強く、信じがたいほどの力をもっているから、ある程度は活着するかもしれない。小楊が「高見、この苗木をどう思うか?」とききにくる。彼も不安なのだろう。山西農業大学で林業を専攻したとはいっても、現場の体験はほとんどない。『まあ、なんとかなるだろう』と答えながら、『どうして苗木を生き物として扱ってくれないのだろう』という怒りがいっそう強まってくる」(高見邦雄)

▼4月20日

「(張西河郷で) きょう植林するのは山の上だという。私たちが乗ってきたマイクロバスはとうてい上がれないから、途中で県や郷のジープ何台かに乗り換えた。私はずっと歩いて登った。

そうしたことで収穫があった。去年植えたと思われるアンズが全滅している。1本として着いていない。枯れた苗を手で引っ張ると、まったく抵抗なしに抜けてくる。枯れてから時間がたっているから正確なことはわからないが、芽が伸びた形跡もないようだ。植えてすぐに枯れてしまったようだ。

ことし植える場所はさらに条件が悪い。私たちが植えたのは小面積だが、その周囲には地元の人たちの手でもっとアンズが植えられている。

最初に除幕式があった。めずらしく私もあいさつした。『これまでで最悪の場所だ。ここでアンズが育つのはとても困難だろう。でも人の管理さえよければ活着する可能性がないとはいえない。こ

れまでの協力活動のなかでも、自然の条件は良くないのに、人の努力によって立派に成功させた実例がある。さっき郷の党書記はしっかり管理すると挨拶したのだから、最低でも月に1回は見にきてほしい。郷のトップがそういう対応してくれたら、きつとうるところがあるだろう』と話した。こういう式にふさわしい内容だとは私も思っていないが、いべきことはちゃんとしておく必要がある。

そのあとで、郷の林業技術ステーションの男が植え方について注意事項を話した。いったいだれがこんな場所を選定したのか、ききたかった。彼の答えは、『場所は県と郷政府で決めた。自分はこの場所にどんな樹種が適するかを考えた』ということだった。

山の頂上で水の供給が少ないし、植物の育ちにくい陽当たり斜面（陽坡）ばかりを選んで植えている。溝を切り、土手をつくって、一定区画ごとに四角く囲んでいるのだが、本来の目的を考えれば、そのなかでいちばん水の集まるところに苗を植えるべきだろうに、そうはしないで、真ん中に植えている。これだけの整地作業をしたのだから、村の人たちの労苦はたいへんなものだっただろうが、肝心の植える位置がこのようなであったら、なんの意味もないといっているだろう。腹立たしい気持ちがおさまらない

農民が耕している畑はできるだけつぶさないで、荒れ地を開墾して、そこに木を植えることを、最初にいい出したのは私だった。農民は自分たちの食料の問題を第一に考えるのは当然だし、健全な考え方だといっている。それは尊重すべきだと思うし、今回植えたここの条件が悪すぎるといって文句をいっているのではない。

ここに上がってくる途中でも、そういう荒れ地はたくさんあり、ここより条件のいいところがあるのに、わざわざこの山の上を選び、しかも陽坡ばかりを選んで植え付けている。それがあまりにデタラメすぎると文句をいったのだが、そのいっている意味すら、ここの人たちにはわからないようだ。

天鎮県林業局の指導で今年の春に植えた李二烟村も全く同じようにして植えられており、みごとに全滅していた。そして今回のこれだ。こんなことがつづくのでは、天鎮県でのプロジェクトは打ち切ったほうがいいのかもわからないが、しかし、農村の条件はここが一番厳しい。しかも農民は、ここでもみるように、本当に苦労してきちんとした整地作業している。どうしたらいいのだろうか」(高見邦雄)

●広霊県苑西庄村で井戸通水式

テレビ朝日の「素敵な宇宙船地球号」で97年に紹介された、GENの黄土高原での緑化活動の舞台となった広霊県苑西庄村で、井戸掘りに取り組み、地下176mで1時間15トンの水脈にあたりました。ポンプ据えつけのさいは、夕方6時から翌朝4時の出水まで、全村の人が井戸の周りに集まって見守りつづけたそうです。

7月にあった井戸の通水式には、農協観光主催ツアーの一行が参加しました。村の人みんなが大喜びです。参加した全員が水を回し飲みしました。村の老人が私たちを取り囲み、「夢のようだ。こんなきれいな水はみたことがない。よその村に水をもらいに通った長い歴史に終止符が打たれた」といって泣きました。テレビ朝日のビデオを村の人たち全員にみてもらって、喜びを新たにしました。

夏のワーキングツアーは7月30日から8月7日の日程で実施しました。21人の参加者のうち、中学・

高校・大学生が半分を占めた若さあふれるものでした。

▼8月1日

「男女それぞれが3つのグループに別れて農家で夕食をご馳走になり、そのあと農家にホームステイすることになった。その夕食を食べる家と宿泊する家が別々になっている。どうしてそんなことをするのかと聞くと、『夕食を作った家はオンドルが熱くなっていて、眠ることができない』という。いろいろ気を使ってくれているようだ。

今回は中国語を話せる人が多いのだが、それがすべて女性だ。男の子たちがしょんぼりしているようにみえたのは気のせいだろうか。

この春に、遠田さんと私とで植物園の候補地を4つ視察したのだが、立花さんにいわれたいくつかの条件をすべて満たすものはみつからなかった。こちらから見て条件のいいところは、とくに村ができ、耕地になっている。残っていて私たちが使えそうなところは、みな帯に短し、襷に長しといったところだ。しかし、いつまでも探しているわけにはいかないから、そのなかでいちばんマシな劉庄村に決めた。

ところが李向東はそのあと候補地を探し続けており、『前回のところよりもっといいところが見つかった』という。

このツアーは『植物園の建設』も目的の1つにしている。あしたの朝、遠田さんと私とで、李向東の探した新しい候補地を視察し、そのあいだ、ツアーの人たちにはニジマスの養殖場をみておいてもらうことにしよう。もしその候補地がいいところなら、そこに決めたことをツアーの人たちにも報告することにしよう。

私と一緒に泊まっている若い男たちはもう眠りにについているだろうから、同行している霊丘県青年団の小劉に誘われて、小学校に向かった。教室の後ろに事務室があり、そこにオンドルがついている。となりの部屋には関係者が集まって、なにごとか話し合っている。ひとつのツアーを村で受け入れるのはなかなかのおおごとなのだ」（高見邦雄）

▼8月2日

「バスで“ひん館”と名のつくホテルのようなところ着いたら“泊られません”とききました。飛行機のオーバースタッキングは聞いていたけれどもホテルは初めて聞いたし、初めて体験しました。代わりに招待所に泊まったけど、これも中国って感じでよかったです」（辻田茉莉）

▼8月4日

「昨日の山歩きには正直のところマイツタ。行けども行けども現れぬ目的地と、そこまでの距離ははじめは2キロ、途中で3キロ、あとは案内の李向東の坎で聞くたびに変わる不思議さ。とうとう目的地には行けなかった。その疲れは起きても残っていて、若いときには一晩寝れば疲れは消えたのに……などと65歳の年齢をあらためて実感する。」（遠田宏）

1999年

最近のこの事業の変化・発展はめざましいものがあります。土地の人たちはこれまで、苗木を植えたあと、水をやって足で踏み固めてきました。単なる習慣ではなく、技術マニュアルとして要求されていたのです。立花吉茂代表が「黄土は粒子が小さいから、そんなことをしたら根が窒息して

枯れてしまう。砂・軽石など通気性材料を加え、踏まないようにしないといけない」とたびたび指摘したのですが、水不足を恐れる地元の技術者はなかなか受け入れませんでした。

97年夏からの比較実験を通じて、やっとそのことを理解してもらえました。99年春の植栽にむけ、大同事務所はそのことを技術要領に記載し、全面的に実施することになりました。

多様性のある森づくりをめざして、98年春からは、協力プロジェクトでは最大6種類の混植がはじまりました。

小川眞さんに指導してもらった菌根菌を活用しての育苗はすでに実用化しており、大同県国営苗圃の一角、1.5 haで100万本以上のマツ苗が育ちつつあります。

霊丘県上寨鎮での植物園建設は、急テンポで進んでいます。最終的に86 haの土地の100年間の使用権を大同事務所の名義で購入しました。のちに霊丘植物園、南天門植物園とよばれるようになったものです。アクセス道路がすでに完成し、電力・水利・管理棟などの工事もまもなく始まります。

1999年春のツアーは3月25日から4月1日までの日程で32名が参加しました。

▼3月25日

北京から夜行列車で大同へ。「驚いたことに着いたところは北京西駅。北京駅と違って軟座待合室はよく空いていてゆっくりできて嬉しかった。今回も全員軟臥車に乗れず、男子若い順に硬臥車に乗る」(松本忠雄)

▼3月27日

霊丘県上寨鎮南庄村で植物園起工式と植樹作業に参加。

「9時20分、植物園起工式がはじまる。寒風の吹くなか、次々の挨拶がありながら30分足らずで終わる。引き続きアブラマツの植林のため現場に向かう。われわれと南庄村の人約60人と子どもたちは苗と25リットルのタンクを背負って1列になって沢をのぼる。現場は池(標高924 m)から標高100 m登った旧畠地跡上面の、標高1,000 ~ 1,025 mの斜面。イネ科、スゲ科の草の定着した斜面を掘りアブラマツの苗を植える。この植林方法に私は少々ギモンがあり、夕食時に老侯と意見の交換をした」(遠田宏)

「今日はお待ちかねの植樹活動だった。会員の皆さんそれぞれにこれから起こるできごとにさまざまな思いを秘めつつ、張り切って出発。

自然植物園起工式の後、スコップを片手に山登り開始。ちょっとでも気を緩めたら転げ落ちてしまいそうな、道すら出来上がっていないような斜面をおそろおそろ進んでいく。

大同の緑化を支援する者の1人として、この活動に参加したはずなのに、自分の体力不足にもどかしさを感じる。一人前の労働も出来ないこの私を見て、農民のみなさんはどう思ったのだろうか。『日本のおなごが遊びに来とる』といった感じなのだろうか。同時に、改めて思い知らされたのが“知識不足”。中途半端な知識のまま中途半端に植樹をすれば、育つはずの樹木も中途半端にしか育たない。それでは何の意味もない。この黄土高原に根がつくかどうか“やってみる”以前のことだ。ああ、私ったら情けない…」(平井優美)

▼3月28日

「9時54分 石瓮村に着く。今日の目的地。井戸の起工式に参加。「熱烈歓迎黄土高原緑化協力団」の横断幕の下、日中双方のあいさつで起工式が行われた。

この村に元来あった井戸はほとんど水が出ないので、下の北水泉村まで片道4キロの道を3時間

かけて水汲みをしている。

そのあと各グループに分かれて家庭訪問し、昼食をいただいた。私たち6人のグループは王清さんの家をたずね、炕の上にあがって昼食をいただいた。旧正月にも食べないというごちそうを出してもらったのに、「今日は仕事をしていないのであまり食がすすまず、ずいぶん残して、申し訳なかった」(池本和夫)

▼3月31日

「今回の旅はまさに驚きの連続でした。都市部と農村部の全く違う世界のようなギャップや、農村のまずしさ。そして何よりも、いま自分が大学で学んでいることと、現状にある厳しさとの根本的な誤りを知った。私は緑化するというのに、そこに住む人々の概念や習慣、歴史的な背景というものが強く影響しているということを全く考えていなかった。なぜ考えなかったのか不思議に思うほどに頭になかったのだ。考えてみればまさにそこに緑がなくなってしまったことや、なくなった後、ここまで侵食が進むまで緑化できず、また、他からの協力があってもなかなかうまくいかない原因があったのではないか。それらを少しでも多く理解していかなければこの活動は成功することはできないように思う。私がこれまで考えていたほど、緑化するということは甘くはなく、甘くないどころか、厳しくて厳しくて、何年も何十年もかけてやっと土台を築くことができるものである、というもののようだ。今回はそれを見事につきつけられた。それを認識できたというだけでも大変に大きな勉強になったと思う」(三戸久佳)

GENのツアーと一部平行して、サントリー労働組合(3月31日～4月6日)、そして全ジャスコ労働組合(4月9日～14日、20人)が続きました。

後に、緑化事業のモデルケースとしてたびたび引き合いに出される、大同県聚楽郷の采涼山地球環境林プロジェクトの起工式に立ち会ったのは、サントリー労働組合のツアーでした。

●石瓮村の井戸で水が出ました！

GENは、1998年秋から、霊丘県史庄郷石瓮村で井戸掘りに協力していましたが、5月になって、地下183mのところまで1時間あたり40トンの水脈に到達しました。もともとこの村は1880年に掘られた深さ40m弱の井戸に頼って生活していましたが、その水が10年余り前から涸れてしまいました。その後、片道4キロの北水泉村までもらい水に通っていましたが、北水泉村の湧き水も激減し、村の存続が危ぶまれていました

ことし3月のワーキングツアーもこの村を訪れて、水の無い生活の厳しさを痛感していましたので、昨年の広霊県苑西庄村に続いて、この村でも水がでたのは、とてもうれしいことでした。6月に、全国私塾情報センターのツアーがこの村を訪れたとき、通水式をもって、喜びをともにしました。さしあたり4つの村の生活用水を解決することに使われることになっています。

●はっきりでてきた菌根菌の効果

菌根菌の育苗への活用は、小川眞さん(関西総合環境センター生物環境研究所長)の指導で、1997年春からはじまっています。当初の成果が大きかったため、98年春から、大同県国営苗圃の一角1.5haを借りて、マツの育苗に実用化しました。この苗圃は長くマツの育苗をつづけていたため、もともと菌根菌が存在していましたが、そこに木炭クズを加えることにより、顕著な効果が表

れました。通常の方法で育てたものに比べ、1年間で1.5～2倍に育っています。苗圃の技術者は「20年以上、ここで育苗しているが、これほどいい苗はこれまでつくったことがない。これからは苗圃の全体にこの方法を採用したい」と語っています。

夏のワーキングツアーは7月29日から8月5日まで、大学生から73歳まで31人が参加しました。北京西駅では一足先に中国に来ていて合流するはずだった参加予定者とうまく接触できず、体調を崩していた参加予定者は合流をあきらめ帰国するというハプニングがありました。

▼7月31日

「到着2日目。植物園予定地に向かう。かなりのロングランである。例によって遠田さんの車内説明がある。私も少しだけ植物の話をした。李向東氏と苗圃の視察で半日を終わる。

午後から南側尾根の途中まで登って、植栽計画の地形を頭に入れる。ビデオも廻した。

家畜の侵入を防ぐと、雑草がものすごく繁茂していたのには驚いた。グレージング（家畜が草を食べること）は恐ろしいものである。いつの日かここに樹木が茂ることだろう。それまで生きていたいものである」（立花吉茂）

▼8月1日

「午後に予定されていた石瓮村への訪問とステイは村への道路が先日の雨で不通となり、復旧できないとのことで中止になり、午後は応県の本塔を見学し、夜はセンター宿泊と予定を変更する。このため朝の出発は30分繰り上げ7時となる」（遠田宏）

▼8月2日

「8時40分頃バス到着。采涼山へ向かう。采涼山の試験地では、土地の書記以下多数の人が、赤い旗を何本も立てて迎えてくれた。土地の代表者からの挨拶があった後、現地の人と共同で、昨年植栽した松の補植を行う。昨年の植栽苗のかなりは枯死していた。皆が補植している間、枯死した苗、健全に育った苗を丹念に見て歩く。道をはさんだ向かい側には、同じ時に現地の人が植栽した場所があり、ここでは苗の活着率が良い。活着率の良否の原因を知る手がかりでも得られないかと思っただが、見当がつかなかった。

午後は遇駕山の15年生マツ林を見た後、この山裾のマツ林でキノコ狩り（アマタケ？）をおこなう。採集したアマタケは国営苗圃内でのマツ苗育苗地に持参し、菌を使った育苗試験のための菌の胞子を含んだ水づくりを見学する。この試験地では、木炭および山土を使った苗づくりの試みが大々的になされていた。試験成績は予想以上に成功のように見受けられた。この成功が続くことを望む」（小川房人）

「とにかくおじさんはすごい！ 私は昨年とあわせて2か月中国を旅行したけれど、そのうち中国人にまけた、と思った事はほとんどないけど、でも日本のおやじパワーには負けました。でもこんなにバイタリティーと創造力（想像力）、そしてGoodな頭と心を持ったオヤジにははじめて会いました。文通でもしようかな。それともオヤジ会に入るか？

私は2回目にして中国好！と叫びたい。黄土高原のやさしさときびしさ、悲しさ、けなげさが好きです。こんな旅はなかなかできないでしょう。いい経験になりました」（家田真奈美）

組合結成30周年を迎えた全ジャスコ労働組合は記念事業として霊丘県南庄村の小学校新校舎建設に資金協力をしてきました。4月には春のツアーで起工式に参加しましたが、9月2日から8日まで

の秋のツアーで開校式に24人のメンバーが参加しました。

2000年

2000年春に黄土高原を訪れた人は、日本からのツアーや北京からの視察など全部で130名を超えました。全ジャスコ労組、東北電力総連、OFS（東京ディズニーランドの労組）のほか、GENのツアーでは上田みづかちゃん（1歳半）が両親とともに参加し、最年少参加記録となりました。

GENの春のツアーは3月26日から4月2日の日程で行われ、44名が参加しました。

▼3月27日

「工商銀行大同分行培训中心で休憩と食事。われわれ男子の入った410号室、例に漏れず便器の水が流れない。食後、エレベーター横の便所を使うがトイレット紙の準備がない（いつものこと）。

最近、天然ガスパイプラインが大同市を通過して北京まで開通したことにより、大同の炭鉱がさびれて大量の失業者が出たとか。どおりで昨年より石炭輸送トラックの数が極端に少ないと思った。北京～大同間の高速道路が、山西省部分は完成したが河北省内がもう少し残っていて開通見通しが立たず、この道路が完成すれば北京まで4時間で行けるとのこと」（松本忠雄）

▼3月28日 2班に分かれ、霊丘班は霊丘自然植物園で作業

「今回子連れで中国に来て思い知ったこと。中国では3歳以下の子どもは家の外にださない。みづかをだっこして立っていたら、何人かの人に多少非難の口調で、『それくらいの子どもは家の外に出さないものだ』と言われた。だから、小さな子どもを見かけることは、とてもむづかしい。そこで、今回みづかはどこへ行っても注目のまともになってしまう。円さん（妻）が中国人の攻勢に負けてみづかを守り切れないことに後悔しつつ、しみじみと『中国人は誰もかれも子ども好きなんだ、だから人口がどんどん増えてきたのかも。戦後、多くの残留孤児が中国人の家庭でちゃんと育てられたのも、中国人の心が子ども好きだからかも』と語っている（上田信）

▼3月29日

「民泊した家で朝食をいただいてから、小学校の果樹園まで歩いて行ってアンズを植える。僕らが植えたアンズは、この日計30本くらいといったところか。GEN事務局長らとは異なり、僕らがやっているのは全くの単純作業である。これら労働力は村ではさほど必要としていないだろう。それなのにあの歓迎ぶりはどうしたことか。僕らがやっていることは何か意味があるのかどうか…。事務局長や先人の努力の上ののっかって、会費等金銭と引き換えにオイシイ思いをしているのかな。などと考えたりした日もあったのですが、そんな否定的に考えることもないのでしょうか。事務局長らの村々のことを真剣に考えている人がいて、それらのある意味で支えているわれわれがいる。そういうわれわれを、村の人は客人として善意でもてなしてくれる。という、とても良い関係であるのでしょうか。僕らは“木を植える”ということは、ある種儀礼的なものであるのでしょうか。と、考え始めた今日このごろであります」（半田隆志）

▼3月30日

「樹を植える場所にたくさんのビニールなどゴミが落ちていた。そのゴミは、以前に植えた樹の根にまかれていたものであるという。根のまわりにビニールをまいてしまってはどうてい根も育たないし、木が枯れる原因となってしまう。それなのに、ある女の子は、そのビニールが栄養になると言い、

中国の側では300本ぐらい植えても10本ぐらい育てばいいやという悠長な姿勢も見られるので、そのような根本の部分での意識を見なおしていく必要があるのではないか」(近藤春菜)

●環境林センターの拡大

3月17日、協力拠点の環境林センターに着くと、とんでもないニュースが待っていました。センター周囲の果樹園で買収計画があり、コークス工場ができそうだ、きょうの午前中に契約の運びだ、というのです。センターは入口をふさがれますし、環境も悪化するでしょう。5年間の積み上げが崩れてしまいます。

遠田宏顧問と相談し、立花吉茂代表にも電話をかけて、20年の使用権を買うことにしました。20haの1等地が26.5万元(350万円弱)で、分割払いも可能ですから、金銭的な負担はそれほどでもありません。5年前のスタート時点が3.5ha、手狭になって去年から6.5haに拡張したものが、一挙に3倍です。

夏のワーキングツアーは7月27日から8月3日までの日程で実施し、33名が参加しました。

▼7月29日

「午前中、大同県の肖家窑子頭村で地震被災の小学校再建の起工式に参加した。この村は、この10年で8回の自然災害に遭遇したが、うち3回は地震だった。昨年11月の地震は、規模はそう大きくなく、全体の被害も、この村では深刻なものではなかったはずなのに、小学校のレンガ建て校舎は使用不能に陥った。要するに基礎と屋根の部分が貧弱で、もう一回揺さぶられると倒壊する可能性が高いために、使用に耐えないのだ。見た目の被害は大きくないし、子どもたちが勉強していたテントの教室も、夏休みのため、1張を除いて別の場所で使われているから、ツアーの人たちには、地震の印象は薄いことだろう

外務省草の根無償資金の助成は日本円400万円である。これをこの小学校と陽高県のもう一つの小学校の再建にあてる。最低43万元ぐらいかかるが、助成は30万元に足りなかった。差額を集めないといけない。こういう活動はタイミングがとても重要だと思う。被災からできるだけ時間をおかない方がいいのだ。1年以上たってからだと、地元の人々の受ける印象もずいぶん薄くなる。400万円以内だと、大使館に決済がゆだねられていると以前に聞いていたので、時間を優先して金額を押しさえなければならなかった。そのツケをこれから解決しないとイケない」(高見邦雄)

▼7月30日

「念願だった300年物の麻黄を見ることが出来てとてもうれしかった。考えていたような『木』ではなかったが赤い実をたくさんつけていた。甘い実はいくらでも食べられそうだが『使用上の注意=5粒未満』は厳守のこと。未開放区でなければ、恐らく日本人が入ってきて根こそぎ持ち出してしまうだろう。このままずーっと麻黄が400年、500年と年を重ねて行けるような環境を守って欲しい」(佐々木陽子)

▼7月31日

「昨夜は張家屯郷董庄村でのホームステイ。4人ずつのグループに分かれての分宿となる。夕食は郷長さん宅での涼風を楽しみながらの食事の後、歌合戦もあって盛り上がったが、星がきれいなことに一同感激した」(遠田宏)

▼8月3日

「今回のツアー 33名の参加者は集まり方も関空を中心に成田、北京合流、大同合流と多様であった。解散の仕方もまた然り。参加者も年齢、職業、参加動機もじつに多様であった。今までに経験した事もないニュータイプも見られた。多様であるがゆえに豊かな会話や連日にわたる夜の反省会もできた。我々が植えた木も実に多様であった。アブラマツ、ブンカンカ、リョウトウナラ、トネリコ、アンズ、クコ、サーディーバイ。また植え方も砂を加えるだけでなく、大泉山村での植樹では腐葉土をできるだけ加えた。この多様性の中からその自然に適応するものが出てくるだろうし、多様性そのものが互いの生存をもたらすかもしれない。環境林センターの圃場を見て、その思いを更に深くした」(藤原國雄)

● “カササギの森” 始動

いままでの植林プロジェクトは現地(村)が主体で、ワーキングツアーで訪ねてもどこか「お客さん」で物足りない、という会員の声があり、大同事務所からは、自分たちで実験的な植林方法を試せる林場がほしいという要望がでていました。その両者をドッキングしたのが2000年秋に始動した“カササギの森”です。1haあたり5万円の植林費用(管理費等をふくむ)を1口として寄付を募り、集まったお金はこのプロジェクトに限定して使います。寄付者には、現地の記念碑に名前をきざみ、協力者証や写真報告を送ります(5年間)。またここでは、先に草を茂らせて土壌改良をしてから木を植える、といったような植林方法を試したりします。

交通の便利な大同県聚楽郷の谷筋を中心に、600haの土地を50年間借りました。実際に植林できるのは500haほどですが、ポプラ、シンジュ、マツ、アンズ、サージ、などさまざまな樹種をいろいろなやり方で育てて、カササギやリスが遊ぶ豊かな森をつくっていく計画です。

2001年

1992年に始めたワーキングツアーは、毎年春と夏のGENのツアーに加えて、協力団体が派遣する独自の団もあり、2000年までに大同を訪ねた人は1歳半から82歳までのべ980人になりました。

春のツアーは早くから申し込みが届いて、締め切りの20日以上前にいっぱいになってしまいました。この春は5つの団体が大同を訪れました。

先頭をきってGENのワーキングツアーが3月25日から4月1日まで。さらに4月6日から11日まで全ジャスコ労組、8日から14日まで全国都市下水協、15日から20日までOFS(東京ディズニーランドの労組)、20日から27日まで東北電力総連と続きました。

2001年春のワーキングツアーは3月25日から4月1日までの日程で総勢38名が参加しました。

▼3月27日

「小1時間かかり、霊丘県南庄村自然植物園へ。大型バス組はホロ付きの1トン平ボディトラックに18~19名乗り込む。ものすごい体験。決して日本では体験できないもの。

植林作業へ。クワの数が少なく、思う様に穴掘りできず。300~500本の苗木を植えたか。

昼は村へ4班に分かれて昼食へ。村民には大ゴチソウもの、オンドルの暖かい床の上でのひととき。子どもたちとも親しく交わる。パクパクと食が進む。

午後、再び山へ植林。剣スコも4ツ登場し、活躍する。岩のない場所ではスコスコ掘れる。マツ

と果樹の苗を多数植えることができた。本数は不明」(林克之)

▼3月28日

「(上北泉村の)小学校で子どもたちの学ぶ姿と楽しそうにはしゃぐ姿には日本の子どもたちには見られない純朴さ、すなおさ、清々しさが感じられ、全ての子どもたちの目が生き活きとして輝いている。

5~7年前に日本人が植樹した、ナシ、リンゴ、モモなどの樹木は生長して、村人および子どもたちの役に立っていることを聞くと、日本人も少しは世の中のためになることをしているのだなという思いを強くした。

呂さんの自宅で夜と朝食をいただく。料理がおいしく、酒をくみかわしながら会話をする。素朴な心を持った家族の人たちのもてなしに心がなごみ、つい度をすごしてしまう」(松岡正記)

▼3月29日

「今日のカササギの森でのにぎやかでおいしく楽しい歓迎に、私がこの恩恵にあずかって良いのだろうか?と。

凍った土を掘って、砂を少しかたよせて入れ、モンゴル松を植えました。子どもたちが洗面器で大事に水を運んでくれました。どこでも子どもたちは一生懸命働いて、とてもいい笑顔です。帰る道すがら、遠田先生の生活、植樹、水、雨のつながりのお話は私の心のもやもやになりそうです。いつかまた、カササギの森の夏を見に来れたらいいなと心から思います」(藤井恵子)

▼3月30日

「都市計画の分野においては、近年、public involvement (PI) 直訳すれば「大衆を巻きこむ」ということになりませんが、公共事業やその地域での事業をおこなう時に、住民や行政などその事業に利害が生じる関係者を巻きこんで計画を練りあげるとい手法がとられようとしています

この手法を頭において考えると、GENがおこなっている緑化活動はまさにこのPI手法のお手本で、地元の方々をうまく巻きこんで事業を進めているというものだと感じています。

地元の方々の意見や、歴史的な背景をしっかりと受け止め、関係者みんなが進むべき進路を練りあげていく姿勢は、高見事務局長をはじめとして、現地大同の関係者やGEN会員がPIということが無意識のうちに実践している状況を、私自身、少し客観的な見方をしていますが、事業を進めていく素晴らしいお手本を見させてもらえてよかったなと感じているところであります」(伊藤雅記)

夏のツアーは7月26日から8月2日の日程で行い6歳から70歳まで27名の参加でした。

▼7月27日

「朝食のあと、ツアーとしては初めての左雲県楊千堡郷の造林地に行く。ごくゆるやかな丘の上に今春植えたあとがうかがえるが、1~2割しか活着していないようだ。

地元の小学生や村人と協力してアブラマツのポット苗を植えていく。すでに1度植えたところだから保水のためのうね、溝は作ってあるので、穴を掘るのも楽だ。

午後は常家場郷大西梁および西溝村の造林地を見学した。うまくいっている所を見せてくれたということもあるだろうが、喬木(アブラマツ、モンゴリマツ)と灌木(サージ、ムレスズメなど)が混植してあり、なかなか、智恵を出しているように見うけた。

今年は「百年に1度の大旱魃」ということだが、畑には「緑色」はまばらではあるが見られるので、予備知識がなかったり、農業を知らなかったりすると、ポプラやマツはよく育っているし、畑には

大きくはないが作物が育っているので何が早魃だと不思議に思うのではなからうか。

畑一面に枯れた農作物が横たわっているといた光景が広がっていけば、絵にかいた大早魃だろう。早魃を知らない私には、腰のあたりまでしか伸びないままに実っている高粱が今日見た光景ではもっとも印象に残っている。

高粱はよく育つと、畑の中に人が入るとまったく見つけられないというから、2 m 以上になるのだろう。それが腰のあたりまでしかないのだ」(池本和夫)

▼7月30日

「昨晚から大同県聚楽郷・張学珍さんの家にホームステイ。張さんは郷婦人連合会の副主任で、だんなさんと農業を営んでいる。3 ムーの畑にコーリャン、ジャガイモ、トウモロコシ等を育てているという。

朝食後、張さんと隣の家の女の子と町を散歩。通りで出会ったおばあさんは UFO にでも遭遇したかのようにアングリ口を開けて、茫然と私たちを見つめる。一面の褐色の世界。静かで小さな町。彼らはおそらく生まれてこの方、ずっと当たり前のこととして、この閉鎖的な環境の中で暮らしているのだろう。北京、上海といった大都市、大同でさえもはるか遠いところにある。

午前は聚楽郷采涼山の“地球環境林”、午後は“カササギの森”で作業。けっこう働いた。といってもそれぞれのプロジェクトのほんの爪の先くらいである。しかしそれでも良いと思う。今回の私たちの旅は GEN の活動の一種象徴だろうから。共に手を携えて樹を植えたことを、日中双方がそれぞれ記憶に残せば良い。そしてそれを友人なり知人なりに伝えていけば良いと思います」(辻直美)

2002年

春は4つのツアーが大同を訪れました。3月24日～31日の GEN のツアー (31人)、4月3日～9日の OFS (オリエンタルランド労組) のツアー (24人)、4月16日～23日の東北電力総連のツアー (24人)、4月24日～29日の (株) リコー社会環境本部ツアー (8人) でした。

【春のツアー日誌から】

▼3月25日

「覚山寺では記念植樹をした。でも、私は実際にはあまりやっていない。私がスコップを持ってもたついていると、地元のおじさんが、見てられんとばかりに、私のスコップをとり、作業をしてくれた。とっても情けなかった。明日からの作業は絶対にかんばってやると心に誓った」(原田佳苗)

▼3月27日

「呂さん一家のもてなしに大感激。日本では考えられない。前夜の食事時、入れ替わり立ち替わり老若男女が日本人を見物にやってきた。一緒に食事をする人もいる。日本ではありえない。でもこれが中国なのだ。話には聞いていたので納得」(西村厚子)

▼3月31日

「昨年3月、小雪の舞った中で震えながら起工式をした「カササギの森」は立派な管理棟もできており、この1年で目に見えて環境が整備され、想像以上に植樹も進んでおり将来が楽しみだ」(石田和久)

夏のツアーは7月26日から8月2日の日程で実施しましたが、参加者は総勢25人といつもより少なく、期間中雨が多かったこともあって作業が中止になったりもしました。

▼7月28日

「昼食を東沙河村ですませ長城見学に行く途中、眠りこけてしまった。起こされてみるとバスは悪路に進みかね、道路修理のために石を運ぶことになった。石を運べどバスは立ち往生。長城まで歩くことになったものの、地元の人には2華里（1キロ）だという。はるかに見える長城まで少なくとも2キロはあると思ったけれど、バスにとどまる人はいない。途中で道に迷いながらも長城にたどりついた」（後藤和夫）

▼7月29日

「聚楽郷での作業は補植。マツのほかに檜条、遼東櫟（リョウトウナラ）を植える。GEN地球環境林センター or 霊丘自然植物園からの苗。30 cm くらいの穴を掘り、2握りほどの砂を穴の片側にかためておいてから苗を入れる。広葉樹の植林、砂を入れること、いずれも立花先生や遠田先生は以前から言い続けて、なかなか現実に受け入れられなかったこと。感動。協力が根付いてきたことを実感」（上田信）

▼7月30日

「“カササギの森” 開設から1年。どんどん青さが広がってゆく。昨年夏はただ荒涼たる砂地が広がる黄土高原の大地の典型的な姿の広がる“森”？だった。本格的に緑化を拡大させたのは今年からだそうだ。でも去年と違う事は一見してわかる。徐々にではあるが私たちの“夢の森”は広がっているようだ」（村松弘一）

2003年

2003年はイラク攻撃、SARS問題などで、思うようにツアーを開催できませんでした。春における唯一のツアーは3月24日～31日、29人の参加で行われました。

▼3月26日

「3年前の2000年春に比べて、霊丘県の自然植物園の小鳥の書類が何種類かふえていました。特に注目したいのはカラチメドリとダルマエナガです。ともに群れをつくり、灌木や下草の中で活動する鳥です。

どちらにもぎやかな声を出すので、前回いけば見落とすことはないと思います。だから、この3年間でどこかから来たのでしょうか。

植物園では1999年の開園以来、封山育林の効果で下草や灌木が目立って増えてきたので、この環境変化に対応したかたちで、前述の2種の鳥が出現したのではないかと思います。

鳥は植物の実を食べた後、糞とともにタネを少し離れたところに落とします。鳥の種類や数が増えれば、遠くへ散布してくれるタネの種類も量も増えます。人間が苗を植えて森を育てると同時に、鳥が種を運んで木が広がるのを助けてくれます」（池本和夫）

「高見さんと植物園の李園長からのお話を伺った後、皆でスコップか苗をもって管理所の向かい側の山に行き、稜線近くの斜面にアブラマツ、リョウトウナラ、コノテガシワ、白樺の4種類の苗を250本ぐらい増えました。寒風が強すぎて、寒くて鼻水が絶えず垂れながら、作業してとても辛かつ

たのです」(王惠懿)

▼3月28日

「途中、聚楽郷の植林地を見学した。99年から始めたマツの植林は150haになった。順調に育っていけば、大きな林になる。郷の幹部の人たちも熱心で、これからを楽しみにしている。(中略)カササギの森に到着。はるばると関東ランチから届いた協力者の寄せ書きに今回の参加者が書き加えて記念撮影をした。

モンゴリマツの苗を植えた。私たちの植林もだんだん段取りがよくなって、アブラがのってきたのに、あしたで終わりとは、ちょっともったいない」(太田房子)

「大同から霊丘県に行く途中の橋が数日前に落下して、西側から大きく回り込むコースに変更された。しかしお陰様にて、途中応県の世界最古の木塔を遠望できた事は喜ばしい。

今日の行程の途中、北京～大同間の新設された高速道路の途中、ガソリンスタンドでトイレ休憩のところ、トイレに鍵がかかっていたため道路を越えた所まで行かなければならなかった。そこもまた鍵がかかっていた」(那須芳麿)

「午後カササギの森に到着。森というから林らしきものが少しはあるかと勝手に想像していたが、何もない黄土高原。しかしGENの方々の戦いとしかいいようのないひたむきな植林のための苗木造り試行がそこにある。いつの日か本当の森にならんことを夢見て」(楨哲)

この年の夏のツアーはSARSのためすべて中止となりました。

●カウンターパートの交替

この年、緑化協力事業に理解のない新任の大同市青年連合会主席と折り合いをつけようと1年以上がんばりましたが、とうとう断念。共産党大同市委員会との協議で、労働組合の連合体である大同市総工会が新しいカウンターパートになりました。大同事務所、環境林センターなどのメンバーや資産をそのまま総工会に移管して、気分も新たに再出発です。

2004年

昨年春以来1年ぶりのワーキングツアーは3月24日～31日、24名の参加で実施しました。ツアーがストップしていたあいだも、霊丘自然植物園では山に作業道がつくられ、環境林センターでは簡易污水处理施設の運転が始まりました。

またGENのツアーのほかにOFS(オリエンタルランド労組・4月6日～12日、23名)、イオン労働組合(4月8日～13日、15名)、東北電力総連(4月14日～21日、15人)の3つのワーキングツアーが大同を訪問。さらに中華全国総工会、日中水フォーラムユースの訪問などがありました。

【春のツアー日誌から】

▼3月24日

「北京西駅へ向かった。片道4車線プラス2車線とすごく広く、立体交差にしている。オリンピックに向かって整えているのだと思われた。

北京西駅も工事中であった。夜の11時を過ぎても重機がうなりを上げている。

今回は全員が1等寝台車で行くことができる。列車は11時半に放送も音楽も振動さえなく静かに動き出した。昔の騒々しさとは天地の違いである」(前川宏)

▼3月25日

「北水泉村を通過する際、近隣数か所村の水をまかなっていたという泉を見学。その泉は3年前に涸れてしまったという。

目的地の石瓮村はここから4キロさらにさかのぼるところ。16時20分到着。GENの支援で掘られた井戸からはこんこんと水が供給されていた。まさに地域の命の水。それでも地下水位が低下傾向とのこと。この井戸までが、と考えるとぞっとする」(町田良太)

▼3月26日

「霊丘県のホテルは寒い上にシャワーが使えず困った。シャワーの元栓をひねると途中で水が飛び出て、止めても止まらない。頭からパジャマ代わりのスウェットスーツに水を浴び、寒い上にさらに寒い。どういうわけかシャワーカーテンがないので、シャワーを浴びると便器もベチョベチョ、床もベチョベチョ。う〜ん」(吉房睦美)

「昨日通った大同から霊丘への道は、2年間の通行止め以来初めて通ったのであるが、きれいに整備されていて驚いた。しかし渾源への峠にある名所『のろし台のある村』三嶺村はその西に大きく迂回するバイパスが作られたため、峠からの絶景を見ることができなくなったのは残念である。確かに時間は1時間以上短縮されたのであるが、主要な観光ルートから名所を捨ててよいものであろうか。また土産物などを売って細々と生計を立てていた三嶺村のあのおばちゃんや子どもたちはどうしているのかと思う。

石瓮村を訪れたのは99年以來のことであった。当時まだチョロチョロとでていた泉は完全に涸れており、もし我々が井戸掘りに協力していなかったら、あの道路沿いの数か村は離村し、現在はゴーストタウンになっていたに違いない。しかし似たような村がこの地域には数多くあることを思うと背筋が冷たくなる」(遠田宏)

▼3月27日

「希望果樹園に上り、村の人たちと共同であんずの苗を植え始めた。リーダーの説明通りにことが運んだのは穴掘りまで。その後の水やり、苗の植え方(風向きに対しての方向)のころになると、村の人たちのやり方がてんでんばらばらになりだし、どうしていいかわからなくなりだした。ぼう然としながら疲れた体を休めているうちにむなしさを覚え、遠田先生にうったえる。遠田先生いわく『現地は現地流でやるべし。成果を急ぐな』とのこと。長年の体験から出た貴重な言葉と納得する」(稲葉忠次)

▼3月28日

「カササギの森に着いたのは昼食を終えた午後1時過ぎ。車中から見るその景色は広大な丘陵地帯。砂埃が舞い上がり、空気は乾燥しきっている。およそ植物が育つ環境には思えなかった。

バスから降りてみると、そこにはモンゴリマツというマツが辺り一面に植えられていた。マツの高さはおよそ50cmほど。数年かけて順調に育ったようだ。

この森の広さはおよそ600ha。南北4キロ、東西2キロに及ぶ。植えられた樹木の種類も30種類ほどあるらしく、2000年～2003年の2年間には、およそ40万本の植林が行われたとの説明を受けた」(田中一彦)

▼3月29日

「昼食は環境林センターでとり、午後はここで作業をする予定だったが強風のため中止となり、高見さんの案内で苗圃内の苗木の発育状況の説明があった。

どの樹種も良く成長していたが、これまでどれだけ苦労されたか、私も同じ仕事をしてきたのでよくわかります。

環境林センターには汚水を浄化する設備も完備されて、これから苗木もすくすくと大きくなってゆくことと思います」(富内毅)

▼3月31日

「2003年はイラク戦争とSARSのために、ほとんどのツアーは中止になり、今回のツアーはちょうど1年ぶり。その後も4つのツアーと1つの視察団が続き、2004年春は緑色地球ネットワーク大同事務所の人たちも、私たち緑の地球ネットワークのスタッフも大忙しでした。

多くの人たちを大同に迎えられたのは、ほんとうによかったのですが、緑化ということからいうと2004年の春も大変困難でした。

ことは土の凍結が融けたと思ったら、すぐに芽が動き出したんですよ。どんなに頑張っても、こんな短いあいだに計画通りの植林をやるのはムリなんです。苗木の生理からいうと遅いけど、それでも植えないわけにはいかない。苗畑にあと1年置いとけば、苗は大きくなりすぎますし、計画はズタズタになりますからね。

2004年春の植林は成績はさんざんでしょう。これほど悪条件の春は、これまで13回経験したなかにはありません」(高見邦雄)

●大同緑化プロジェクト見学会

北京を中心に、中国在住の人にも気軽に大同に来てもらおうと、滞在期間の短い見学会をはじめました。第1回目は、7月17日、18日の2日間。現地集合・解散のキャンプに10名が参加しました。

●UNEP親善大使加藤登紀子さん大同訪問

国連環境計画(UNEP)親善大使の加藤登紀子さんが、中国訪問の一環として、7月20日、21日に大同を訪れました。呉城郷はちょうどアンズ収穫の真っ最中でした。

加藤さんは呉城郷で2軒の農家を訪問したあと、村の小学校、生徒達と交流、歌唱指導までするサービスぶり子どもたちにもみくちゃにされました。

市内に帰って雲崗石窟をみたあと、環境林センターをみてもらいました。最後に、職員や臨時工の前で、何曲かうたってもらいました。

夏のツアーは8月23日～30日、フル参加者30人に加えて、途中一部参加3人が現地で合流するなどにぎやかなツアーでした。今回は北京から大同へは夜行列車ではなく、初めて開通した高速道路を利用しました。

▼8月23日

「北京から大同まで、高速を使ってバスで移動。初めてのことで楽しみにしていたが、やはり中国というべきか、日記のネタを用意してくれていたようだった。

八達嶺に向かうバスの速度が遅く、まるで札幌から釧路に向かう特急のように、「ギア、ちゃんと

入ってない？」という感じだった。

そして出口を間違えて、戻ろうとして八達嶺の料金所でバスが止まってしまった。それからドライバーさんは2時間ほど頑張っただけで無事に出発できたが、不安は感じつつもなぜかのんびりとしていた。日本だったら、多分、あせっているはず。それは予定通りに行かないためだろうが、中国では『予定は未定、決定にあらず』そのまま、心配しつつも、せっぱつまっていなかったと思う」(佐々木陽子) = 結局3~4時間のところを7時間半かかって大同にたどり着きました。

▼8月25日

「昨夕からの小雨が残っている。作業はできるのか、午後からのバスは大丈夫かと不安になる。(呉城村の小学校で作業)。9時半、アンズの植林作業を始める。昨日からの雨のため土は適量の水を含み、きわめて掘りやすい。もし雨の量が多かったらドロドロになって作業どころではなくなっていたはずだし、少なかったら土は固く苦勞するところだった。村の人々も子どもたちをはじめ総出で作業を進め、400本のアンズ苗を植え終わったのは11時40分。昨夜お世話になったホームステイ先の苑さんの家に行き昼食をとる」(遠田宏)

「人生史上初の植樹。藤原さんに教わりながらなんとか1株目完成。『このために来たんだ…』としみじみ。これまで高見さんはじめ遠田先生、石原先生…皆さんのお話をうかがって、その後の作業。自分の中の大きな渦巻きがぐるぐるとまわっている感じ。緑と私たちと、地球に住む人たち、みんなつながって大きなサイクルを作っているのだと実感しました」(市川麻美)

▼8月28日

「今回のツアーは始まって以来の腹痛者続出の回らしく、その数30人中21人、なんと7割近くの方が腹痛に倒れた。何度も中国を訪れたことのある歴戦の猛者までもが、討ち死にする始末」(永尾大作)

「ツアー中に私が植えた木の本数はほんの少しだけど、日本から参加することが中国の人たちにとっていい刺激になるのなら、どんなに少数でも木を植えることそれ自体に意味があるんだと思います。

ツアー全体を通して私は数えきれないぐらいたくさんの方に感動し、たくさんの方に驚かされました。普段日本で生活している中では体験できないようなことをさせてもらって、いろいろなことを考えました。もうすぐツアーは終わるけど、ここで考えた事はずっと忘れたくないし、この旅行だけで終わらせずに自分で何か行動を起こしてみたいな、と思っています」(杉山晶子)

9月1日~8日、撰南大学黄土高原ワーキングツアー7名、9月4日~9日、サントリー労働組合黄土高原ワーキングセミナー10名が大同を訪ねました。

●白登苗圃の建設始まる

9月、大同市周土庄鎮牛家堡村に7haの土地を確保し、新しい圃場の整地作業を始めました。国際協力機構(JICA)の草の根技術協力の受託事業です。白登苗圃と名付けました。

これまで緑化協力の中心になってきた環境林センターは、20haの面積をフルにつかっていますが、すでに手狭になってきました。そのうえ環境林センターの土は粒子が小さすぎ、富栄養化していて、広葉樹の育苗には適していますが、針葉樹の育苗には問題がありました。そこで新しい苗圃の建設が、ここ数年の課題として浮かび上がってきていました。

新しい圃場は大同市内から10 km ちょっとなら、実験林場カササギの森に行く途中。正面に白登山が見えます。もとは小老樹の林でした。土には砂が含まれており、針葉樹の育苗に適しています。

来年の春から菌根菌の活用などさまざまな技術を駆使して、育苗を開始する予定です。

2005年

春の黄土高原へのツアーは3組。GEN(3月27日～4月3日、27名)、イオン労組(4月1日～6日、19名)、OFS(オリエンタルランド労組、4月5日～11日、23名)。GENとイオンのツアーでは体調を崩す人が多く出たり、OFSのツアーでは遅い降雪にあたり、ハプニングとは縁が切れませんでした。大同の人々といっしょに木を植えるなかで、反日デモの影響もなく、交流を深めました。

【春のツアー日誌から】

▼3月28日

「黄土高原の原風景はやっぱり夏より冬に決まっている。黄土が剥き出しになった畑が脳裏に焼き付いて離れない。遠田先生によると世界で1か所とのこと。アフリカでもアメリカでも砂漠化しかかった畑はたくさんあるが、黄土はここでしか見ることができない。

今年は好天に恵まれ特に色彩鮮やかである。よく imprint しておきたい」(石原努)

▼3月29日

「何年か前に1度来たさりの黄土高原。大同の町の石炭の臭いは以前と少しも変わらない。

車の量と大きな建物が増え、さらに立派な道路ができているのに驚いた。

朝食をすませ自然植物園に向かう。

おにごるみ、松、山桃などの苗木を植樹。久しぶりのスコップに力が入る。12時まで快い汗をながした。昼食後は1,300 mの山まで植樹状況を視察にいくが、私は途中でやめにする。頂上まで登った人がいて拍手で迎える。

夕方、ホームステイの上北泉村へ。村の入口では村の人たちが総出で迎えてくれた。道の両側にも着飾った子どもたち、それを見守る親たちの列の中を「好」「謝謝」と言いながらいつのまにか踊りの輪の中に入っていく。この日のために皆さん全員が練習を重ねてきたのだと思うと、ありがたく、嬉しく思った。(甲斐紘子)

▼3月30日

「約4時間の走行で大同の新しいホテルに到着。大同市のホテルとか。ここで2日間は多少ゆっくり出来そう。ホテル到着後は、9人の団員が病院に直行する。昨夜はあちらこちらで中毒症状が発生したとか。軽症者を含めて19人とは、集団中毒の疑いあり」(那須芳麿)

「帰りに管理棟の上まで登り返して、1996年からこれまで植えたところを一望する。これまで70～80 haにアンズのほかリングゴ、ナシ、モモ、サンショウ、ブドウ、クルミなども。アンズはやっと蕾がわかる程度。この村には果樹栽培の実績があり、受け入れやすかったこと、小規模に毎年植えていくのは、大規模に抜けてとり返しのつかない失敗を避けるとともに、モデル園を成功させれば、付近の農民も自らリスクをとりやすいからとの説明。生活がかかっている農民を相手に実験をさせる事は出来ない。環境林センターや植物園の存在感が大きくなる所以である」(小寺範生)

▼3月31日

「まず白登苗圃の開所式に参加したが、寒くて寒くて、体のしんまで冷え切った…。

開所式は盛大なものであった。大同市の錚々たる幹部が集まった。去年の夏に来たときは、一面小老樹だったが、広～い面積が耕され、管理棟もでき上がっていた。

『よくここまで準備できたなあ』と高見さんも感慨深げだった。

皆で街路樹のしだれニレを植えた。グルーと一回り、たぶん100本は植えただろう。病み上がりの人も多かったのに、皆楽しみながら夢中になって、黙々と木を植えた。労働すると体が温まった。楽しかった！ 植えても植えても次々と苗木が現れて、いったいいつまで…と思ったが、昼食前に作業終わり。白登苗圃、夏に来たら一面の苗畑になっているだろう」(会田伸子)

●緑の地球ネットワークが認定NPO法人に

緑の地球ネットワークが国税庁長官の認定を受け、税制上の優遇を受ける「認定特定非営利活動法人」になりました。有効期間は2005年6月1日から2年間です。

最大のメリットは、緑の地球ネットワークへ寄付された方に税の優遇措置があることです。

夏のワーキングツアーは26名が参加して7月30日～8月6日に実施されました。今回は社会貢献の一環として黄土高原緑化協力活動への参加を検討する企業数社からの参加があり、普段とはすこし違った年齢構成になりました。

▼7月30日

「14時50分 チャーターバスで一行20数名北京を出発。(中略)。バスは順調に長い坂道を大同に向け走っていましたが、大同方面から龍が立ち昇るように黒い雲といなづまが発生すると同時にバスまでエンジンから黒雲をはき出し、高速道路のすみに待機するはめになりました。大同市約50km手前とか。18時5分から風雷雨の中、待機続行。19時10分、高見局長さんたち一行が出迎えに来てくれました。20時15分、ようやく代替の迎いのバス到来。21時25分、大同の雲崗国際酒店にたどりつき、夕食会にのぞみ、思い出多き1日を過ごしました」(開本孝昭)

▼8月1日

「(天鎮県新坪鎮の地球環境林で)遠田先生たちのご指導により、アブラマツの苗木を増えましたが、とても残念なことに、今年4月に植林した苗木がほとんど枯れている現状を目の当たりにしました。原因は苗木の根のビニール袋の底をほとんど破かずに植林していたことだそうです。せっかくの労働と苗木が台無しとなり残念ですが、それより残念なことは、村民の方々が苗木(植林)の性質を理解してくれていないことでした。どうか協力して森を育てるということの大切さを、もっとわかってほしいと願います」(福井喜久子)

▼8月3日

「桑干河は昨年('04)より流水が少ない。一昨日、昨日と雨が降ったのに何故か？ 橋の下流域では、河床からメタンが発生している。よほどのO₂不足なのか？ 流水でなくドブ川の様である。昼食後、聚楽郷采涼山の地球環境林に移動。ここは99年から緑化に取り組んだ所。小生も99年からGENのワーキングツアーに参加しており、2000年、2002年、2004年と今回が5回目の采涼山。その生態系の変化と木々の成長に驚く。成長のよい松を見ると一昨年は25cm、今年は40～60cmも成長している。また、サージヤその繁茂にも驚く。99年には草はわずかで、ほとんど黄土であっ

たのが、遠目には黄土を見ることもできないほど草が繁茂している。リピーターのメンバーで参加し続けてよかったネと若干感動する」(藤原國雄)

2006年

この春も大同は GEN のワーキングツアーが3月25日～4月1日(28人)、東北電力総連の協力隊が4月11日～18日(14人)、国際ソロプチミスト奈良6倶楽部が4月25日～29日(16人)、そのほか、GEN のツアーの航空券を手配している旅行社・国際交流サービスの仏教美術を訪ねるツアーに大同で記念植樹というスケジュールが入ったり、夏にツアーを予定している団体の下見、テレビやラジオの取材など大忙しでした。

【春のツアー日誌から】

▼3月26日

「大同駅に降りると、私たちが雪が歓迎してくれる。細かな雪が薄っすらと屋根に積もり、ホームをぬらしていた。この時期ではめずらしいか。めぐみのおしめりといったところのようだ。風もなく、思った程の寒さではないので一安心。

はじめての黄土高原、まだ木の芽ぶき前で、オード色一色である。私は小学校の頃よくクレヨンで使ったオード色が、ここの世界の色であることは、今回はじめて知ったのだが、ほんとうに今日1日、いくら走っても見わたす限り、この色ばかりであるのが当然のことであるが、驚きであった。

バスは大同市近郊桑干河に立ち寄る。どちらに流れているかわからないほど平らな地形の中流れる川は、黒く濁った臭いのする川だった。

そして呉城村の見事に成長した杏畑を見学。岡山でも10年以上たたなければ育たないくらいりっぱに成長し、これまでの雑穀を育てていたよりも10倍もの収益を得られるようになるまでの曲折をお聞きして高見さんたちの努力というか、執念に敬服した」(大森紀六)

▼3月29日

「今日は白登苗圃、カササギの森で植樹。大同名物しゃぶしゃぶで昨日までとも違う中国の一面を見ました。

白登苗圃は、JICA 草の根技術協力の支援で、3年前からのプロジェクトだそうで、小さなクロマツ、トウヒ、シダレニレ、そしてシンキョウポプラ、80 m もの地下から井戸水をくみ上げて、灌漑によって苗木が育っています。大変な労力と知恵が隠されていることを知りました。マツの実生苗を土の中に埋めて、寒さ、乾燥を防ぐことには驚きましたが、道路脇の小老樹が、この土地の過酷さを物語っています。

カササギの森では、南斜面の植物の知恵を知りました。モンゴリマツの根元を日陰にして、少ない水を溜める工夫、アブラマツの植樹はいかに乾燥を防ぐかに重点が置かれている。カササギも飛び、ニワトリ、名犬ナッシーの活躍に今後も期待して、数年後植樹した木を見てみたいと思います」(稲垣文拓)

▼3月31日

「今回、霊丘自然植物園で別行動をとらせてもらい、2001年3月に植樹した場所を訪れてみた。その時一緒に参加した大学生(今は会社員)から「自分が植えた苗が活着したか、どのくらい成長

したか VTR に撮ってきて欲しい」と今年の年賀状で頼まれていたこともあった。

その植樹は急斜面で石ころの多い山だった。それはほとんど禿げ山に近かったのに今は山全体がブッシュに覆われていた。2001 年植樹地点は中腹の小高い丘周辺だった。麓からそこまで新たに補植したらしいマツが植えられていたが、それは見る影もないほどウサギに噛み切られていた。

前回の植樹地点は VTR に記録していたため間違いなく確認できた。コノテカシワの小さい苗を 2 本ずつ植えたこともしっかり憶えている。そのコノテガシワは成長にばらつきはあるものの高率に活着していた。

自然植物園開設から数年というのに放牧禁止と薪採集禁止さらに人工的な植林によってかくも大きな成果が得られるものかと驚嘆した」(石原努)

夏の大同は休む間もない大忙しでした。自治労大阪府本部(7月13日―19日、20名)を皮切りに、GEN(7月29日～8月5日、31名)、明星大学(8月4日～13日、10名)、サントリー労働組合(8月19日～26日、12名)、イオン労働組合(8月23日～28日、20名+他企業から参加2名)、摂南大学(8月28日～9月4日、8名)のツアーを受け入れました。また ODA 民間モニター(8月23日、15名)、日中友好沙漠緑化協会(8月26日、72名)、宝塚グリーンライオンズ倶楽部(9月2日～3日、5名)が大同を訪問、それぞれに GEN のプロジェクト見学、大同市幹部との懇談会や植樹をおこないました。

【夏のツアー日誌から】

▼7月29日

「河北省から大同市との境界が道路工事中のため大同市を目前にして U ターンさせられ、河川路面の凸凹道を迂回させられたのはとんだハプニングであった。

第1日の宿泊場所、天鎮県招待所に到着する。招待所は鴻雁温泉度假村といい、なんと温泉とプールつきの最近できたばかりの保養施設であった。

当初、招待所が大変な施設と聞いていたが、実際はホテル形式に近代化されており、しかもカードで部屋の開閉を行うようになっており、バス・トイレも仕切りカーテンはないものの日本のホテルと全くかわらない」(大森東亜)

▼7月30日

「新坪鎮の地球環境林にむかう。昨年、植樹したところは、バスを降りて30分程度登ったところであった。根鉢のビニール袋をやぶいてなく、春に植えたアブラマツが枯死して補植であった。その反省が生かされて、あいさつの中で『ビニール袋は必ずやぶいてください』との説明があった。その後の説明の中で『灌水後は、よく踏んで下さい』との説明があり、『この地域では乾燥しているので必要です』との説明があり、技術の定着には時間がかかると実感した。昨日の雨で湿度が高く、強烈な日ざしの下で、汗をかきながら、植栽をした。子どもたちも洗面器で、水を運んでくれた。中国の植林は11回目であるが、これだけ汗をかいたのは、初めての体験であった」(藤原國雄)

▼8月2日

「植樹日和だった。ホテル周辺を少し散歩した。『招工』(従業員募集)の貼り紙がかなり多く景気がいいようだ。店の様子には特に地方色はないようだ。『兔頭』というナゾの食べ物が食堂のガラスに記されている。ウサギの頭を食べるのだろうか?」(山口修)

『白登苗圃』は昨春、開所式が行われ、春のツアーに初めて参加した私も同席した印象深い所。式典後、施設の敷地の一部をコの字型に囲むように『シダレニレ』を皆で植えた。そこはどうか。今回のツアーの楽しみの一つだった

『感動した!』。緑いっぱいになっていた。シダレニレは本数が増え若々しい葉をいっぱいにつけ、松の苗が一面に植えられ、それらの中には大豆などが植えられ、全体が緑に被われている。これ以上、緑化活動などする必要はないと錯覚させられるほど。

自前の苗圃を持つことは、数年来の強い願望であったと聞く。GENがやがてこの地を去る時が来ても、継続的な緑化活動の収入源となり、さらに良質の苗を大同で広める役割を担うものとして。同様の趣旨で、この苗圃のまわりに果樹園を作ることも計画されているとのこと。

外国で活動しているNGOは、できるだけ早く、その活動を現地の人々に委ね撤収することが望ましいと言われている。

その意味で、GENが将来を見据えて活動していることを確認でき、当然のこととは言え、安堵し改めて信頼感を増すことになった。

似たようなことをGENの組織活動のあり方についても考えさせられた。たとえば、事務局長が、沢山の団体のツアーに終始同行することは参加者にとって嬉しいことだが、これから先のことを考えるとそれで良いのだろうか。もっと別のやり方があるはないか。

『白登苗圃』での作業は、マツの苗木の間の草取り。『カササギの森』では、マツの苗木の植林。今日は、観光旅行的でない一日を過ごすことができ、自責の念から少しだけ解放された」(米森文嗣)

2007年

この春は初めてツアーを派遣する団体が2つありました。植樹作業も早くはじまって、ツアーの受け入れと植樹の同時進行に大同事務所は大忙しでした。GENのワーキングツアーは4月17日～24日、17名で実施し、ほかに(株)東芝中国黄土高原ワーキングツアー(4月5日～11日、15名)、ローソン緑の募金中国黄土高原ボランティアワーキングツアー(4月8日～13日、16名)、イオン労働組合黄土高原ワーキングツアー(4月13日～18日、21名)、東北電力総連(5月15日～22日、21名)の4団体のツアーがありました。

【春のツアー日誌から】

▼4月18日

「宿泊した(天鎮県東沙河村)李さん宅では新しいバイクが庭にどんと置かれ、16歳の三女と13歳の長男は少林寺拳法で韓国の国際大会に出て優勝しているとのこと。家の中も広くて、清潔だったのが印象に残った。夜は近所の人たちが何人もやって来て、私たちにビールを何回もすすめ、終始にこやかに対応してくれた。この親密なつきあいほど、日中友好にとって大切なものはないだろう。植樹がとり持つ縁で中国の現地の人たちが優しく接してくれる事に感謝しなければならないと思った」(草陽一)

▼4月21日

「今回のツアーのお楽しみは何と言っても黄土高原に白く輝く満開のアンズの花だったので、バスの中で高見事務局長から、アンズの開花は3月の雪と4月の寒波で1週間先になりそうだと聞いて

はいたものの、いざ呉城村にきてみるとアンズはまだ紅く大きくふくらんだ蕾のままだった」(原瀬ふみ子)

「あんずの村、呉城郷で見たものは、広大なあんず畑。残念ながら花はまだほとんど咲いていなかったが、ただただその広さに圧倒された。村に着くと小学生たちを含め村人から“熱烈歓迎”。あんずのおかげで大変裕福になった村であったが、その明るさとは対照的に、今年のアんずからの収入は期待できないとのこと。原因は、暖冬の終わりに急におそってきた寒波。遠田先生によると、葉になるはずの芽が落ちてしまい、その影響は数年続くかもしれない、このような現象は初めてとのこと。ポロポロ落ちていく葉芽が黒い涙に見えた」(山下真)

▼4月22日

『環境林センター』へ向う。入り口の近くで高速のインターチェンジの工事がされていて、その支柱の下をバスが頻繁に走っている。日本では考えられない。これが普通なのだろう。

エンジュ、新疆ポプラ、スモモの白い花が咲き、レンギョウも咲いている。今回のツアーの目玉であった杏の満開が見られなかった替りにとって「オヒョウモモ」を見せてくれた。杏より花の色は濃くキレイだ。でも呉城村のアンズは開花はまだで農民は喜んでいる話で、まあ、それで良いかと思っていたが、葉芽が凍死してしまって全滅のようだ。この美しい花を見るにつけ、そのことを思い出す。

それにしても、呉城小学校で一行の若い女性が悪童どもに教室にとじ込められ、「ばかやろう」と日本語ではやし立てられたというショッキングな話。ことしの杏が凶作となりそうで大人たちの暗さが反映されたものなのだろうか。そして、高見さんも一部で悪意を投げかけられることがありながら、粘り強く16年もやってこられたことに改めて敬意」(蔵野妙子)

【ローソン緑の募金中国黄土高原ボランティアワーキングツアー参加者の感想】

「中国は隣国であり経済面では輸入相手国1位でありながら、あまり興味がなかったせいか、今回のワーキングツアーは驚きの連続で、日本に戻った翌朝は、あまりのギャップにタイムスリップしていたような感じでした。

マスコミ等で報じられる中国都市部と地方の格差、そして砂漠化は知っていましたが、実態を見るとやはりショックでした。しかし、人々とのふれあいや人間の強さや粘っこさ(特に高見さん)を知り、楽しく、学ぶことも多く、充実した日々でした。

緑の地球ネットワーク(以下、GEN)が拠点としている大同市内は、北京を縮小した地方都市という感じでしたが、わずか20分ほど車を走らせると、塩害により耕作されなくなった畑や水の流れの細くなった川があり、環境破壊が現在進行形で進んでいるのを目の当たりにしました。

我々が訪れた呉城村や苑西庄村も砂漠化した厳しい環境の農村部には変わりはないですが、GENの活動により、果樹園があり子どもたちの明るい笑顔があり、豊かさを感じました。子どもたちとは、会話を超え、延々と『アッチ向いてホイ』をして、忘れてしまった遊び心も湧いてきました。また、苑西庄村の井戸からジャブジャブ出る水を見て愛おしさを感じたり、日本では味わえない気持ちになり、貴重な体験をしました。今回かぎりでは終わることなく、今後も継続して活動に参加していこうと思います」(伊能美佐子)

●ワーキングツアーを旅行社の企画旅行に変更

2007年夏から黄土高原ワーキングツアーは旅行社の企画旅行という方法に変更しました。

内容は変わりありませんが、主に危機管理の問題からです。安全とはいえぬ中国の道路事情、SARSや鳥インフルエンザなど感染症の不安もぬぐえません。万一の場合を考え、経験豊かな旅行社の協力を得ることにしました。

この夏は自治労大阪府本部（7月24日～29日、20名）、GEN（8月1日～8日、34名）、サントリー労働組合（8月18日～22日、15名+荏原製作所1名）の3つのツアーと、専門家調査団（8月11日～17日、7名）が大同を訪れました。

【夏のツアー日誌から】

▼8月3日

「8時30分出発。本日の活動地である霊丘自然植物園に向かった。途中までは順調だったが、植物園入り口までバスがたどり着くことができず、植物園のかなり離れたところから徒歩で向かうことになった。1時間半以上歩いてようやく11時に植物園着。

植物園は2006年以来、私は1年半ぶりだったが、植生の回復ぶりに目を見張った。植物園に到着するまでの周囲の山々の緑の濃さにも驚いたが、植物園はそれ以上だった。2005年春に私の胸の高さまでにまでしかなかったシラカンバは、いまや4mほどの高さにまで成長している。2000年のツアーで植えたアブラマツも3mを超えている。上へ進むとリョウトウナラがたくさん出てきた。本来あったもの、植えたものが大きく成長し、それが自然更新して、小さな苗がどんどんでてきている。一部では落ち葉がつもって腐葉土もできていた。

今晚ホームステイする上北泉村に向かう。途中、石炭輸送トラックの大群。この近くに過積載の検問所があり、検問を待つトラックで溢れている。そのトラックを公安がうまく誘導してくれ、私たちのバスを通してくれた。あんなに頑張っている公安を見るのは初めて!」（会田伸子）

「昼食後、本格的な植樹作業だ。…と思っていたのだが、山はすでに緑なのだ。しかも木を植える時期でもないのに、記念植樹をした。穴は掘ってあり、苗木を入れて土をかぶせるだけで終わった。5本程植えた。私はかなりかん違いをしていたようだ。『木のはえていない山や砂地に植樹する』ツアーだと思いこんでいたのだ。実際は『木の生えていない山や砂地に植樹して緑化したところを見学する』ツアーだった」（松山啓志）

▼8月7日

「我々一行が呉城村を訪れた時（8月3日）聞いたのでは（アンズは）例年の1～2割程度の収穫しかなかったそうです。葉芽もかなり落ちていましたが、枝先近くの芽がその補償作用でしょうか元気に伸びており、全体として1割程度の葉量の減少ですんだようです。開花前後の遅霜の被害は経験していることですが、この種の冷害は初めてのことだったようです」（遠田宏）

2008年

この年の大同は雨が多く、気温の上下が激しいという植樹には忙しい気候で、春の作業とツアー受け入れに大同事務所はフル回転。夏は北京五輪の混雑を避けるためツアーは派遣しないため、その分が春に集中しました。

GENのワーキングツアー（3月29日～4月8日、30人）、イオン労働組合とサントリー労働組合の合同ツアー（4月12日～17日、27人+11人）、ローソン（4月14日～19日、16人）、東北電力総連（4月15日～22日、20人）、自治労大阪府本部（4月24日～28日、20人）と続きました。

大同事務所の負担が大きくなるので、ホームステイは中止せざるを得ませんでした。

【春のツアー日誌から】

▼3月31日

「今日のスケジュールは上北泉村で植林をした後、小学校を見学し交流会を行うという流れです。

朝8時半出発、9時半到着の予定で、バスは上北泉村に向かいました。しかし、昨日の夜から道路に渋滞が発生し、まだ道路が混んでいるという情報が入りました。

『でも、渋滞はなくなるだろう』と考えていましたが、私の甘い考えとは裏腹に渋滞はいつまでも続いて、公安に調整してもらったにもかかわらず、上北泉村に着いたのは11時過ぎでした。

村の入り口で2列に並び歓迎してくれた小学生たちを見てとても嬉しかったのですが、2時間も立ったまま待っていてくれたことを聞いた瞬間、自分のせいでもないのに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。予定通り行事を進めるため、植林も30分くらいしかできませんでした。苗木は2～3mぐらいまで成長したポプラです。

農家で準備してくれたおいしい料理を食べた後、小学校に集まり交流会に参加しました。小学生たちは、今まで練習してきた踊りや歌を披露してくれました。子どもたちの無邪気な笑顔に癒やされ、一瞬足の筋肉痛も忘れてしまいました」（金賢淑）

※この村を訪問中、民家の飼い犬に足を咬まれた団員が発生し、ワクチンを打つため県総工会の役員の車に同乗させてもらって、ワクチンのある県城まで緊急搬送するというハプニングがありました。

▼4月1日

「呉城村は聞きしに勝る黄土地形。深さ100mもある浸食谷があちこちにあり、とても農耕に向いているとは思えなかったが、苦心の末、一面杏畑に。4月下旬の開花期には1万人近くの花見客が押し寄せるそうだ。

トウモロコシなどを栽培していた以前に比べ、1ムーあたりの収入は100元から1000元以上になったそうで、これも高見先生のおかげと感謝していた。

一面のはるか向こうまで続くアンズ畑が満開になったときそれはすばらしい光景だろう」（中村英）

▼4月5日

「2002年8月、カチカチに固まった采涼山にスコップで穴を掘り、何本かの小さな頼りないマツ苗を植えた。日本では経験したことのない小さな苗だった。

プロジェクトの推進者、張春書記は断言した。『機械も金もない。人だ。人こそが何でもできる』と。私は、彼の日焼けした豪快な顔にみなぎった心意気を今も忘れない。あの200haのカチカチに固まった黄土を農民がスコップ1本で畝立てして、苗を植え付け、事後の厳しい管理を果たし、ここまで育てあげた。かれらは山の北側斜面に植物が育ち、森を作ることを熟知していて、植林に当たって東西に高畝を立て、北側の日陰に小さい苗を植え付け活着させることに成功したのだ」（石原努）

2009年

この春の大同は、GENのツアーの時は土が凍っていましたが、あっという間に暖かくなって、ツアーシーズンの後半は気温の上昇と植樹の競争になりました。樹木医調査団（3月21日～27日、11名）、GENのワーキングツアー（3月28日～4月4日、20名）、イオンリテール労組・サントリー労組合同ツアー（4月14日～19日、18名+11名）、東北電力総連（4月14日～21日、20名）、自治労大阪府本部（4月25日～29日、26名）のほか、三洋電機、（株）チュチュアテナの視察など、多くの人が黄土高原を訪れました。人手が足りない白登苗圃、かけはしの森、環境林センターでは、どのツアーもしっかり働きました。

【GEN春のツアー日誌から】

▼3月29日

「歩いた！登った！木も植えた！ 南天門への階段は感謝、感謝です。吃水不忘打井人です。

昼食 BIGカップラーメン。りんごも Good！

上北泉村へ。

寒い中、橋の上から多数の子どもたちが並びビックリです。こんな多数の子どもは7年前には見えていない。この村に対する貢献の大きさがわかります。

ショーアップされた演出、構成。いや～すごい！ 豊かな村です。モノもさることながら、心が豊かです。

ホームステイ 潭さん宅。メインディッシュはうどん。これがなかなかのもの。お腹満タン絶好調！」（石井修一）

▼3月30日

今日は桃の植林をしました。地元の子どもたちも一緒でした。ホースから水がもれているところがあったのでバケツにその水を入れてあげたりいっしょにかついで桃に水をかけたりしました。

この子どもたちは公立の学校の子だと気づいたのは、お昼からの小学校の交流の時でした。

この村では私立の小学生が圧倒的に多く、他の地域からも寄宿しているとのこと。そして子どもたちの踊る衣装や化粧、そしてBGMと、私立の子どもたちのプログラムと公立の子どもたちの差がすごすぎました。

こんな村も格差社会が…と見ていて辛いものがありました。この村はここ10年で大きく変わり、『前にはこんな建物がなかった』と他の方が言われるくらい豊かになったそうです。

豊かになれば必ずそうでない層が出現するのは世の習いですが、急変する流れに村の人々はどうか順応していくのでしょうか」（藤田京子）

▼4月1日

「午前中は白登苗圃で見学と作業。針葉樹苗の栽培が中心ということで、トウヒ、アブラマツ、モンゴリマツそれにニレ達が植栽されていました。ウサギの食害が深刻になっていて、樹幹に布を巻いたり、苗の段階でより大きく育てる必要が出てきたりと大変になったそうです。被害が人工林に集中するという点は日本も中国も共通だということでした。なんだか不思議です」（大原一晃）

「昨日の出来事を少し振り返ります。印象的だったのは“中国名物”の大渋滞。霊丘県城から渾源県呉城村に向かう途中の峠道で発生。高見さんいわく『昔は渋滞解消に5日ぐらにかかることがあっ

て、物売りや屋台が出る。運転手はその間、その場でじっと待っていた。今は長くても半日くらいで解消』。結局、この渋滞は2時間程で抜けることができたが、峠の向こうでトラックがひっくり返っていた。その横を車が何事もなかったように通り過ぎていく。ああこれが中国かあと納得。

今日の行程は午前が白登苗圃での見学とトウヒの植樹。午後がカササギの森での見学と松の植樹。白登苗圃での植樹は土が凍っていて、スコップがほとんど役に立たず。改めて大同の厳しい環境を実感した。

カササギの森では全員で松の苗木500本を植えた。この作業はこれまでに無かった作業量の多さで、ちょっとくたびれた」(大川常吉)

▼4月2日

「雲崗石窟見学のあと、バスに乗り環境林センターに行き、昼食を食べた後、枝垂れニレの移植作業に入ったが、4時半ごろまで続き、大変きつい労働作業だった」(土屋峯雄)

「2番目に来た所、果樹園にて食事を取り、午後に農作業に入り、大変よいことを学びうれしい思い、よい思い出です。シダレニレを道路が広がる関係でみなで植え替えをしました。大変でしたが、よい思い出として、また来ることができることを楽しみにしています」(森住六郎)

●環境林センターを横切る道路

大同の市街地の改造が続いており、その重要な一環が道路建設です。GENの環境林センター(大同市南郊区平旺村)の南端付近を幅56m(片側4車線・側道・緑化帯)の道路が東西に横切ることになりました。

面積としては0.6haほどで全体の約3%。塩害のひどいところなので、影響は大きくないのですが、15×105mほどが南に切り離されます。

この道路が完成すると、大同市内からの交通が便利になり、所要時間が半減し、また白登苗圃と直線で結ばれます。道路の完成はことし(2009年)の10月とされています。

夏のツアーは新型インフルエンザ発生のため中止となりました。

2010年

日本も中国も天候不順の春 5つの団が大同を訪れました。GENのワーキングツアー(4月3日～9日、29名)、イオンリテール労組・サントリー労組合同ツアー(4月6日～11日、26名)、東北電力総連(4月13日～20日、22名)、自治労大阪府本部(4月17日～21日、26名)、専門家派遣(4月22日～30日、8名)です。

【春のツアー日誌から】

▼4月4日

「今日からいよいよ本格的に行動開始。途中“太行山脈”を通ったが、TVでしか見たことのない中国の象徴とも言える景色を見ることができ、感動。

バスをおりてから少し(15分程)歩き、早速、植樹作業の開始。話ではかなり寒いと聞いていたが、日差しが強いと感じるほどの天気と無風のため、非常に暖かい気候での作業であった。

午前中いっぱい皆で協力しておこなった植樹作業。初対面とは思えないほどのチームワークとバランスで、工程は順調に進んだ。女性も男性も、若者もベテラン勢も皆が全員がんばっていたと思う。私も精一杯取り組み、非常に気持ちの良い汗をかいた。

午後は山登り。まさかそこまで…という所まで登った。というより頂上？

南天門からの景色は感動の一言。疲れもふき飛び、気持ちよかった。登る途中の“木”のお話はとても面白かった。お年をめした方も、なんなく頂上まで行ったのはびっくり!! 夕方前に皆下山。少し休憩のあと、バスにてホテルへ」(石橋保昭)

▼4月5日

「環境林センターを見学。昼食後は炭焼きの予定であったが、強風のため中止。無煙炭化器の説明を受けた」(西村祥子)

▼4月6日

「大同中心部の開発も凄まじい限り。関係者によると、3年後には四辺の城壁の改修工事が終わり平城のような城壁都市が再建されるのだという。割り切れない思いの一方、中国にとっては今後100年、200年の方がきっと重要なんだろうなという思いもする」(石部俊)

「午前は白登苗圃における作業。モンゴリマツ苗圃の整備。すでに耕起され植え付け区画が定められた苗床で苗の成長を阻害する石コロや雑草の根を取り除く作業。

日頃使い慣れぬシャベルを使って盛り上げられた畝状の土を掘り返し交雑物を取り除く作業は意外に力の要る作業だった。

午後は大同市の都市計画の進展に伴い、接収されることになった環境林センターの代替地の見学。新たな構想で代替地が活用され、GENの発展に寄与することが期待される」(松園讓)

▼4月7日

「今朝からはイオン・サントリー労組グループと合流し、人数が倍になりバスが2台になった。陽高県大泉山村に10時30分頃着。耕作地を山林に戻す計画で村は廃村化している。傾斜地にアブラマツの植樹。穴掘り、植樹、水やりまで300本くらい植えた」(高田直俊)

▼4月8日

「(天鎮県三十里鋪郷孫家店村で小学校付属果樹園の起工式)村につくと、子どもたちの太鼓の演奏と子どもたちが道の両側に並んで迎えてくれた。一同大いに感激。生徒が381人いるということだから、両側の列も長く、みんなで『歓迎、歓迎』と拍手してくれた。団員も手を振り答えた。

まず模範。タテ、ヨコ、深さ60cmの植え穴を掘る。表土(畑の表面に近い地)を別にしておき、掘った穴に戻す。次にアズの接木苗の接木部分が地表面と同じくらいのところにおいて心土(表土の下から出た土)をかぶせる。その時、接木部分の新しく出た芽を北西方向に向けると冬のきびしい北西風や雪に耐えることができる。その後60cmの植穴のまわりに土手をつくり、水をたっぷりかけておく。

子どもたちも手伝って順調に約200本の苗が植付けられた。中には中学生がスコップをとってどンドン植え付けていく姿があった。中学生はいちばん年上で15歳。7月に卒業」(西島文敬)

「今回のツアーの感想。南天門自然植物園の重要性がよくわかりました。これをいかに後世に残すのか、地球環境林センターが地方政府によって接収される経緯を考えると、しっかりした戦略が必要であるように思います。一つの方策として、現在は植物園の設計から調査・研究まで日本側の研究者が行っていますが、ここに中国の若手研究者を加えて、彼らの主体性を引き出しながら、日中

共同のフィールドとすることが考えられます。将来的には中国科学院（アカデミー）に所属する研究センターを置いてもらえるように、各方面に働きかけたらいいのではないのでしょうか」（上田信）

●環境林センターが移転へ

1995年4月の着工以来、15年間にわたってGENの協力拠点であった環境林センター（大同市南郊区平旺郷平旺村）は、4月18日で閉鎖となりました。

このあたりは従来は郊外でしたが、市街地化がすすみ、東南に1km弱のところから10万人が暮らす改良炭鉱住宅が立ち並び、2年後には30万人の大団地になります。都市住民の憩いの場として、70ha近い生態公園が建設されることになり、環境林センターの敷地もすっぱりそのなかに組み込まれてしまいました。

もともと20年の期限付きの借地で、中心部の残りの期間は5年間でした。あそこで育てていた苗木はすべて新しい生態公園で育てるそうです。

また大同市はほぼ同面積の代替地を提供してくれました。場所は大同県周土庄鎮、GENの2つ日の苗圃、白登苗圃から2kmほどの交通のたいへん便利なところ。白登苗圃や実験果樹園「かけはしの森」との一体的な運営が可能になります。現状はポプラの林で、いわゆる小老樹ですが、土壌と水の条件がよさそうです。また地下水位も90mほどのようで、この地方としては浅い方です。4月に訪れた日本の専門家たちも気に入ってくれました。今後は条件のいちばんいいところに苗畑をつくり、そのほかに見本園、有用樹種園、薬草園などをつくる案もだされています。

2年ぶりの夏のワーキングツアーは8月21日～27日、28人の参加で実施しました。あちこちで大渋滞が発生しスケジュールの変更が相次ぎました。おかげで村での交流や植樹作業が減ってしまいました。農村でのホームステイは今回は見送りました。

▼8月22日

「（靈丘県の）ホテルの前は大型トラックが大渋滞で駐車場状態。少し走って上北泉村に行くのは難しいので空中草原へと向かいました。

途中の川（？）バスがストップ。道路が途切れていて、腹をこすりそうでだめ。皆で石を集めて歩いてなんとかOK。無事空中草原につきました」（中田裕）

「靈丘の変貌ぶりに驚くことばかり。特に靈丘の渋滞は日本では想像もできない。一体何を運ぶトラックなのか、片側車線が延々と続く。この有様から高見事務局長の判断も二転三転、小学校訪問に一時繰り上げた予定が最終的には空中草原と決定した。もっとも第一の予定変更は一昨夜の大雨というからこの地にあっては更なる驚きであった。雨の少ない大同で南天門植物園への道があぶなくて小学校交流に変更したものである」（稲葉忠次）

▼8月23日

「今日は渋滞がなさそうという情報があって、昨日行くはずだった南天門植物園へむかう。8時30分出発。ところが出発してしばらくして渋滞にはまり、やっと抜けたと思ったらまた渋滞という状況でやっと1時過ぎに到着。

帰りもおそくなるからと4時に園を出発。4時30分にバス発車。かなりスイスイ走れて。帰りは楽勝かと期待したけど、やっぱりアチコチで止まって、ホテル着7時45分でした。日本では考えら

れないような大型トラック、山のように荷物を積んだトラックが何時間も何日も列をなして止まっています、想像を絶するながめでした。植物園にいたのは3時間ほど。渋滞の印象の強い1日でした」(高田公代)

▼8月25日

「8時30分出発。市内は少し渋滞したが、予定どおり白登苗圃へ。高見さんの話によると大同市にやり手の市長が就任して以来、開発のスピードが倍増し、町中いたる所で中高層ビルの林立、新道の建設が相次ぎ、大同市民も迷子になるとか。その変貌ぶりに市民自身がついて行けないのだ。

施設の説明のあと、かけはしの森でアンズ畑の土地の掘りおこし作業。1時間足らずの短いものだったが、普段身体を動かしていない者の悲しさ、ずいぶん働いたような気がした。11時ごろ終わり、藤原さんの(無煙炭化器による)炭焼きの説明を受けた。下からの空気の流入を防ぐことによって蒸し焼きにして、約1時間でできるそうだ。実際結果はその通りだった。

午後1時30分、バスに乗り次の目的地へ。環境林センター閉鎖に伴い、代替地が用意されている。その代替地はポプラが植えられた18 haの土地で、私には明るく広々とした展望を持ってそうな“希望の地”という気がした。

2時30分、ここを出発し、聚楽郷の采涼山へ。高見さんたちがここで活動を始めた1999年では、草も育たない何もない土地だった。南斜面でもあり林を作るには不向きで、専門家は見向きもしない土地だった。しかし、成功すれば、あとのモデルになると思い決断した。溝を掘り南側に小さな山(15~20 cm)を作ったり、菌根菌の実用化をはかるなどの工夫をした。とくに地元の人でこれに全力を注ぐ人も現れて見事に成功した。通訳の呉さんは『これは地元の小学校や日本のボランティアの力の結集によってできた。これこそ日中友好の証拠物だ』というあたりで、感極まって涙を流された。また説明役の武春珍所長が、呉さんの体をしっかり支えられたのも印象的だった。

次の活動地カササギの森での記念植樹は、155本。アブラマツを植えるもの。夕日を浴びながらの作業だった。身体は疲れていたが楽しかった」(前田清實)

2011年

3.11の地震、津波、そして原発事故で、GEN事務所には春のワーキングツアーはどうか、という迷いが生じました。背中を押してくれたのは、関東の参加予定者の「やるんだったら行きますよ」という声でした。4月9日から15日、20人の参加で実施しました、そのほか3月26日~27日にJICA中国事務所、プレス、NGO等の視察(19名)、4月19日~28日には専門家派遣(7名)、4月24日には長春外国語学校第63届小学日本語班の同窓会(11名)が大同を訪れました。

【春のツアー日誌から】

▼4月9日

「いつも見る官庁ダムはほとんど水がなかったのに、今年は、たくさんの水が溜まっていました。これはどこから集めてきたのか不思議な気がしました。

大同市の城区の方へ入ってくるとすっかり景色が変わっていました。

昨年来たときにはまだ工事中で、一部しかできていなかった城壁や高樓が、東側の部分はすっかりでき上がっていて、その城壁の間から城区内へ入っていきましたが、城区の中心部は、ほとんど

取り壊されていて、新しい文化遺産となるはずのイスラム寺院とか華嚴寺のお寺などを修復というより再建といったほうがいいくらい、すっかり再開発をやっている最中でした」(橋谷勇治)

▼4月10日

「朝食後、天鎮県三十里鋪郷へバスで出発。街を通り過ぎると景色は一変して、道路は舗装されているがまわりは浸食谷の黄土地帯だ。

やがて自動車道を右折して細い道を行くと三十里鋪郷孫家店村に到着。色とりどりの旗を掲げる鼓笛隊の子どもにも熱烈歓迎を受ける。

小学校付属果樹園では村人がロバ車でアンズの苗木やシャベル類を運んでくれて、われわれは中国式シャベルを使って苗木を植えはじめる。まえもって村人が穴を掘ってくれていたから最初は楽だったが、苗木の数が多く途中から自分たちで穴を掘った。一見楽そうな穴掘りだが黄土が固く 60 cm 四方の深さ 40 cm の穴を掘るのはきつかった。

やがて仕事も終わり 2 班に分かれて農家で昼食。出されたゆで卵のおいしかったこと」(渡辺康)

▼4月12日

「今日は当初の予定を変更して白登苗圃での炭焼きが午前中の作業となった。行きのバスの中で高見さんから GEN が建設してきた拠点の直面している課題について説明を受ける。山西省全体が中国政府より改革試験区に指定され、従来の石炭や電力にかたよった経済から、よりバランスのとれた経済に改革するための施策が急ピッチで進められており、白登苗圃も工業開発区にひっかかってしまい、新しい場所への移転を余儀なくされている。かけはしの森しかり、環境林センターしかりである。幸いにしてカウンターパートナーの奮闘により、悪くない条件の代替地の提供があったが、移転の苦労は大変なものだと思う。

白登苗圃に到着して炭焼きを開始。日本から運んだ無煙炭化器が 4 台。1 台数万円ということだが、単純な構造で、これなら中国でつくれば安価にできると思うのだが、角度などに微妙なノウハウがあるのだそうだ。

予定では炭化器各々 3 杯ずつの炭をつくる予定が 1 回に 1 時間かかりはかどらない。結局 3 杯目の途中で後をスタッフにたくし聚楽郷と協同でおこなった松プロジェクトの現場に向かう」(城野宣臣)

▼4月13日

「今日は『新地』と名付けられた『緑の地球環境センター』の起工式をおこなう予定を変更して、道路建設のため閉鎖目前(?)の白登苗圃のアンズの幼樹を新地に移植する作業に専念することになった。

これまで春が遅かったところ、急に気温が 20℃ を超えるようになったので、アンズの芽が活動を始める前に移植する必要に迫られたため。

新地は 23 ha。おおむね平坦。地味は良いという。

すでに植え穴がドリルで掘られていた(直径 80 cm 位、深さ 1 m 弱、東西南北 4 m 間隔)。あとで白登苗圃から届けられる高さ 2 m 前後の苗をひたすら植え付けるだけ。

苗には、赤、黄、青の 3 色のペンキマーク。マークを南に向けて植える。

植穴に苗木を入れても、なかなか実際の作業が始まらない。船頭が多く、植え方、手順が決まらない。たまりかねて長谷川さんがマイクを持ち、現場監督に。結果として、車両方向の基準ラインの上の苗を、ロープの目印を基準に植え、そのあとそれぞれの基準を起点に南北 4 m 間隔で植えた。

午前中は几帳面にロープを張って土地を測量するようにキマジメにやっていたが、昼からは適当にやるようになった。

12時30分。昼休みに入る。約18列×13本約240本を植えた。14時から午後の作業開始。次の苗が到着するあい間は植え穴と植え穴の流れのための水路作り。中国式スコップに慣れてきたとはいえ今日の労働量は多く、キツイ。右肩、右腕が痛い。64歳の身には、明日の全身筋肉痛が心配だ。

17時30分。今日の作業終了。ウソ八百、言葉半分でも400本以上は植えた。1日の作業としては大したものだ」(大澤純二)

●緑の地球環境センターの計画

環境林センター(南郊区平旺郷)が大同市の生態公園に生まれ変わることになり、大同市の耿彦波市長はかわりに大同県周土庄鎮におよそ23haの土地を提供してくれました。

地元の人たちや日本の専門家と相談を重ね、建設計画を煮詰めてきました。いよいよこの春の着工です。名称は「緑の地球環境センター」に決めました。

まずは苗畑です。「苗半作」という言葉の意味は、苗のできしで半分は決まる、ということですが、黄土高原の厳しい環境で緑化を成功させるためには、苗木のよしあしが成否を決めます。菌根菌の活用など、これまでに蓄積した技術を全開します。

あわせて生態植林見本園をつくります。GENではこの20年間、現場での緑化活動とあわせて、この地方の環境にあったさまざまな森林再生の方法を検討し、その一部を実施してきました。喬木、灌木、草などを組み合わせてさまざまな具体的な方法を提案します。

それに有用植物見本園を加えます。薬草・薬木をふくめます。大同の周囲の農山村は薬草の産地として有名でした。それらを収集すると同時に、貴重種の保存をめざします。

施設としては、管理棟(実験室・作業室など)、電力導入、井戸と灌漑施設、ビニール温室、作業道などにとりかかります。

●GEN代表が交代

6月のGEN会員総会で1995年から代表をつとめた立花吉茂が代表が退いて名誉顧問になり、前中久行前大阪府立大学大学院教授が新代表に就任しました。

この夏はGENツアー他5つの団が大同を訪問し、緑化活動に参加しました。8月16日～26日の専門家派遣(8名)に始まり、GEN夏のスタディツアー(8月20日～26日、19名)、イオン・サントリー労働組合合同ツアー(8月27日～9月2日、19名)、専門家派遣(8月30日～9月7日、10名)、大阪市RR厚生会(9月8日～12日、8名)と続きました。

【夏のツアー日誌から】

▼8月21日

「今日の午前は、天鎮県三十里鋪郷の孫家店村で小学校希望果樹園にての植樹作業。夏休みの日曜日にもかかわらず、近くの子どもたちが十数名手伝ってくれた。参加者もスコップを持って穴を掘り、全員で30本ほどの杏の苗木を植えることができました。植樹といっても所詮は『まねごと』ですが、植えた苗木が大きく育つことを祈ります」(佐藤雅美)

▼8月22日

「ホテルを出発し、大泉山村へ。マツの植樹をした。今回は補植ということで、5、6本の苗木を植えた。この中で何本くらいが順調に育ってくれるだろうか。以前植えてあった苗を見て思った」(林田大和)

▼8月24日

「午後は環境林センターで見学、作業。昨日はカササギの森へ行く前に立ち寄った時にびっくり仰天しましたが、1年前に来たときは小老樹の林だったところが全く小老樹がなくなり、新しい管理棟、野菜畑に変わっていました。事前に説明は聞いていましたが、1年でこんなに変わるものか、実際には数ヶ月のうちに、予想外の移転という大仕事をやり遂げた、大同事務所の皆さんのがんばりにただただ感服するばかり」(中田裕)

●立花前代表死去

GEN 前代表で、名誉顧問の立花吉茂氏が9月20日死去。85歳。

2012年

この春は GEN ツアーのほか4つの団が大同を訪問し、緑化活動に参加しました。4月7日～4月13日の GEN ワーキングツアー (14名) から始まり、4月14日～4月19日の東北電力総連 (23名)、4月14日～4月19日のイオン・サントリー労働組合合同ツアー (27名)、4月19日～4月25日の専門家派遣 (6名) と続きました。

GEN のワーキングツアーは、参加者は14名と少なかったのですが、そのぶんゆとりをもってじっくり大同を見ることができました。

霊丘県の南天門植物園では植物展示区の植栽を行いました。清明節前後のこの時期、一番こわいのが山火事。どこの林場も入口に横断幕を掲げて火気厳禁を訴えていました。

上北泉村では観光開発が進み、駐車場や公園ができていました。ここでは、花も美しく実もおいしい大久保というモモを植えました。驚いたのは小学校が廃校になっていたことです。郷の中心の学校に統合されてしまったのです。果樹園のアンズのつぼみは固かったのですが、公園のアンズはちらほら咲き始めていました。

渾源県呉城村では小・中学校で子どもたちと交流しました。アンズはまだ咲いていませんでした。開花が遅いのは、霜・凍害にあう危険が少なくなるのでいいことなのです。

緑の地球環境センターでは急いで作業をしてきましたので、あちこちで植え直したり、修正をしました。

夏は GEN の黄土高原スタディツアー (8月19日～25日、24名)、(社) 大阪市 R R 厚生会 (8月23日～27日、5名) が大同を訪問し、緑化活動に参加しました。

8月24日、大同の GEN の新しい拠点、緑の地球環境センターで、黄土高原緑化事業20周年記念のイベントが開かれ、これに参加しました。

【夏のツアー日誌から】

▼8月20日

「南天門自然植物園へ出発。一昨年のツアーでは大渋滞で、5～6時間かかったように記憶しているが、今回は40分で到着した。新しい別の道路ができたのだろうか。

車中で魏生学大同事務所副所長が『GENの活動は緑化活動のほかに農民のために井戸を掘り、農民の師弟のために支援もした。高見さんは大同で有名人になっている。日中戦争で日本人のイメージは悪かったが、GENの活動で変わった』と大同側から見たGENの活動を高く評価するあいさつをした。

南天門自然植物園では、3人がハチに刺され、河本さんが山の中の道にできた穴に落ち、崖から落ちそうになった。

山の木々が大きく成長し、2年前と比べても見違えるよう。今年は雨が多いせいだろうか。花々の色が相変わらず鮮やか。コノテガシワの苗をみなで植樹したが、私は山登りのあとでへろへろ。スコップに力が入らなかった。みなが一応植えた後で、李向東さんがクワで地ならししてくれた」(藤田修二)

▼8月21日

「空中草原に行く。舗装道路の途切れた辺りで枯れ川。橋もなく、ロングボディのバスは渡れないという。地球大のトイレで用を足したあと、バスは引き返す。一段と高いところに亜麻の畑。薄紫の花が風になびいて美しい。『亜麻色の髪の乙女』の亜麻色とはこの色かと一同感動！」(干場革治)

▼8月22日

「聚楽郷へ。まずカササギの森でリンドウの花を見てから采涼山で孢子液用のキノコの採集をする予定だったが、大型バスが上まで上れないということで采涼山で折り返すことに。高見さんからプロジェクトの説明を受けたあと、キノコ採りに。天候のせいかな新しい発生はほとんど見つからず、大半はひからびたものとなった。わたしもひとつ見つけたが、いつの間にか袋から投げ出されてしまった。

夕食は総工会の幹部たちをはじめ、お偉方の出席を得て20周年の宴会」(小寺範生)

▼8月24日

「新しい環境林センターには9時20分ごろについた。20周年記念式典の歓迎の出迎えにはびっくりした。きれいに着かざった婦人の群れが道の両側に100人ほどいて、シンバルや腰太鼓などを打ちならし、その中をすすんだ。ほかに婦人の100人ほどの群はカラフルな服で、華やかな大きな扇子を手に軽快に踊りを披露してくれた。それを見るために近くの農民もやって来ていて、本当ににぎやかだった。

出迎えの行事が終わったあと、記念植樹を行った。穴を掘ってあり、樹も植えてあり、それに近くに盛ってある土を、スコップで入れるだけだった。

式典は9時50分ごろより始まった。司会は総工会副主席の柴京雲さんだった。最初にあいさつした大同市総工会の張志偉主席は、20年間に日本側から3,400万元以上の資金協力を受け、5,500 ha、2,000万本以上の植樹を実施し、その範囲が9つの区・県に及んでいること、日本から迎えたボランティアは3,000人以上、そして総工会や青年団中央の幹部、日本の大使、公使、著名人など多数の視察があったことなどを、具体的な数字をあげて詳細に報告した。

日本側は前中代表、サントリー労組の神吉さん、イオン労組の本間さん、高見さんがあいさつした。

高見さんのあいさつは、「これまでありがとう、これからもよろしく」のみで大変短かった。

その後、大同市労働コンクール委員会から大同事務所に「集体一等功」が授与された。高見さんは「記念すべき日に大同事務所の努力が評価されてこんなにうれしいことはない」と指名されてもいないのに発言していた。

第2部の演芸の部は10時40分ごろから始まった。歌手が日本語で「昴」を歌ってくれた。私はこのころより体調が悪くなり、部屋で横にならせてもらった。舞台では歌や踊り、漫才など行われたようだった。

みなさんは昼食後、新センター内を高見さんに案内されて巡った。その後、マツの育苗畑の草取りを行った。私は一緒にまわれなかったので、3時半ごろから一人で敷地内を歩いてみた。移植したアンズ、トネリコ、ヒバ、マツなど見事に活着していた。ナンキン、スイカ、トマト、ネギなどもよく育っていた。

境界を歩いていると、ロバに引かせた荷物から堆肥を畑に降ろしていた農夫が作業をやめて近づいてきてタバコを何度もすすめてくれた。GENの活動が地元で理解され受け入れられているのだと感じられた」（前川宏）

2013年

春はGENのワーキングツアー（4月6日～4月12日、16名）、イオンリテールワーカーズユニオン・サントリー労働組合合同ツアー（4月8日～4月13日、11名）が大同を訪れました。

8月、9月はGENのスタディツアー（8月24日～8月30日、21名）と学習院大学・学習院女子大学・立教大学ツアー（GENツアーと同日程、19名）、大阪市RR厚生会（8月30日～9月4日、4名）を派遣しました。

大同における緑化協力（略年表）

【1991年】

- 11月 協力事業の可能性について北京で下調べ。中国林業部、緑化基金会などで話を聞く。苗圃などを見学。中華全国青年連合会を訪ね、協力を依頼。
- 12 中華全国青年連合会から返事。山西省雁北地区渾源県を推薦するとのこと。

【1992年】

- 01 緑の地球ネットワーク準備会が発足。佐野茂樹を団長に5人を現地に派遣。北京の中華全国青年連合会、渾源県、太原市を訪れる。渾源県で協力開始を確認し、太原で山西省青年連合会と協力開始の協議書を交わす。
- 02 会報『緑の地球』第1号を発行。第53号（1997年1月）まで月刊。以後は隔月刊。
- 04 渾源県西留郷で中日友誼林の除幕式。佐野など2名が日本から参加。
- 05 石原忠一を団長に、第1次緑化協力団9名を派遣。太原、五台山、渾源、北京で活動。北岳恒山で記念植樹。
- 08 第2次協力団を渾源県に派遣。これ以後、毎年3月末～4月と7～8月に協力団を派遣。2013年8月までに46次、延べ1058名。
- 09 現地の事情を知るため、高見邦雄を現地に2か月間派遣。渾源県のほか、大同県、陽高県などを回る。翌年も。

【1993年】

- 04 緑の地球ネットワーク結成シンポジウム「国境を越える緑の風」開催。会則、結成アピールなどを採択。世話人20人を選出。
- 06 郵政省国際ボランティア貯金の寄付金の配分が決まる。
- 07 大同市と雁北地区が合併。カウンターパートは大同市青年連合会に（実質は共青团大同市委員会）。
- 09 霊丘県などの貧しい村の小学校に付属果樹園を造ることで合意。
- 11 日本全国の植物園の園長に恒山森林植物園への協力を求める手紙を発出。
- 11 発足したばかりの環境事業団地球環境基金の助成を受け、小学校付属果樹園建設を実現することに。

【1994年】

- 01 日本経済新聞の鹿兒島正樹記者が現地取材。大きな記事に。
- 02 川島和義、高見が立花吉茂を訪ねる。植物園建設を条件に立花の参加が決まる。
- 03 共青团大同市委員会の祁学峰副書記が協力事業を担当することになる。
- 03 春のワーキングツアー、西留郷で宿舎建設。霊丘県下寨北村で小学校付属果樹園の起工式、大同県徐町郷で果樹園の起工式などに参加。
- 05 国際ソロプチミスト奈良4クラブが緑化協力団を派遣。23名。2006年4月にも奈良6クラブが協力団を派遣。16名。
- 07 共青团大同市委員会が専門の組織「緑色地球ネットワーク大同事務所」の建設を決める。祁学峰が所長就任。大同市政府によって法人化を認められる。
- 08 立花吉茂を団長とする専門家調査団12名を大同に派遣。遠田宏、前中久行などが参加し、協力拠点の設置場所などを決める。以後、2012年4月までに13次、述べ117名。
- 09 霊丘県下寨北村で小学校校舎が建て替えられる。
- 09 共青团大同市委員会が各県の代表を集め、地球環境林会議を開催。大同市南郊区に協力拠点「環境林センター」の建設を決定。
- 11 ビデオの第1作「黄土高原に緑を！」（板坂靖彦編集）を制作。

【1995年】

- 01 阪神淡路大震災に際し、芦屋市民学生救援隊などと協力して救援活動に取り組む。
- 02 第2回会員総会。立花吉茂が代表に就任。
- 03 大同の看護師・王萍がボランティア通訳に。
- 04 南郊区平旺郷で環境林センターの起工式。有元幹明が挨拶。邢雁俐が新設のセンターの経理（所長）に就任。
- 04 全ジャスコ労働組合の新妻健治（次期書記長）がツアーに参加し、組合の協力が始まる。
- 08 大阪青年会議所が協力ツアーを派遣。42名。
- 09 大同市の農村部で水害。窖洞などが長雨で倒壊する。
- 10 郭健団長（共青团山西省委員会青農部長）など9人の訪日団を迎える。
- 10 天鎮県李二烟村で植林の労賃を生かして給水設備を建設。

【1996年】

- 04 全ジャスコ労働組合が第1回の協力団を派遣。以後、2007年4月までに11次、述べ237名。2008年以降はサントリー労働組合と合同のツアーを派遣。

- 04 カメラマンの橋本紘二が黄土高原の農村の撮影を開始（2000年まで）。
- 07 橋本紘二の作品を使って絵はがき「黄土高原の四季」を発行。
- 08 駐中国日本大使館の貞岡参事官らが大同を訪れ、環境林センターに対する外務省草の根無償資金協力事業の調印。
- 11 全ジャスコ労働組合がジャスコの店頭で黄土高原の写真展を開催。

【1997年】

- 03 アイセック神戸大学委員会 ACE 企画が協力ツアーを派遣。14名。
- 04 テレビ朝日の「素敵な宇宙船地球号」撮影クルーが取材。8月にも。9月に「黄色い大地に生きる - 緑の長城計画 7000 km」放映で大きな反響があった。
- 04 小川眞（関西総合環境センター生物環境研究所所長）が大同で菌根菌の育苗への活用を技術指導。大きな成果を上げる。
- 04 上田信（立教大学教授）が天鎮県の韓小屯村に滞在し、その経験を雑誌『ヘルメス』（岩波書店）掲載記事と合わせて『黄砂の村をゆく』として発行。
- 06 富士ゼロックス端数倶楽部がツアーを派遣。以後2001年8月までに3次、延べ43名。
- 07 ビデオ第2作「森よ、よみがえれ！」が完成。
- 08 鈴木和夫（東大教授）が大同県の遇駕山の松枯れについて調査。
- 09 小林一三（森林総合研究所前所長）が遇駕山の松枯れについて調査。2人の調査を通じて、大きな問題がないことを確認。

【1998年】

- 01 張家口で地震が発生。祁学峰、武春珍などと高見が被災地を見舞う。後に被災地の張北県爬胡不落村の小学校建設に協力。
- 04 大同県国営苗圃の一角1.5haで、菌根菌利用のマツの育苗を本格化。100万本の育苗体制をとった。
- 04 上田信ら5人が広靈県楊窰村の農家にホームステイ。農家にホームステイする前例を作る。
- 04 支樹平（共産党山西省委員会組織部長）が環境林センターを視察。大同市の党書記、市長など幹部が同行。支樹平は自分の出身の村にセンターを決めたことを説明。
- 04 中華全国青年連合会が環境林センターで国際ボランティアキャンプを開催。イギリス、ドイツ、トルコ、日本、中国などの青年がここで11泊。翌年も開催。
- 04 環境林センター霊丘支所を開設。植物園建設の候補地探しと植生調査を開始。
- 04 広靈県苑西庄村で井戸掘りに成功。176mで1時間15m³の水を得る。霊丘県石瓮村でも成功し、こちらは183m。
- 07 農協観光のツアーを大同に迎える。15名。苑西庄村の通水式に出席。
- 08 河北省との境界付近の碣寺山（1768m）を訪れ、ナラ、シナノキなどの自然林が成立していることを確認。7か所の植物園候補地をみて、最終的に霊丘県南庄村付近の山に決定。測量を実施し、それに基づいて立花吉茂が基本的な植栽計画を立案。
- 09 サントリー労働組合が第1回の協力団を派遣。以後2007年8月まで9次、延べ140名。2008年からはイオン労働組合と合同で派遣。
- 10 趙仁家（共産党大同市委員会副書記）を団長とする第2回訪日団11名を迎える。

【1999年】

- 04 霊丘県で自然植物園建設に着手（86ha）。現地スタッフの要請を受け、後に南天門自然植物園と改称。
- 04 NHKの取材を受け入れる。5月にBS2「地球に好奇心」シリーズの75分番組「中国黄土高原 - 失われた森の文化を求めて」の放映。
- 06 大阪府知事の認証を受け、特定非営利活動法人になる。
- 06 全国私塾会情報センターが大同の農村の教育事情視察。9名。石瓮村の通水式に参加。
- 07 中国訪問を前にした小淵恵三首相の求めで中国植林関係者が官邸に集められる。
- 08 環境庁の地球温暖化対策クリーンメカニズム調査事業に「中国黄土高原における緑化の可能性調査」が採用される。1年半の時間をかけ、2001年2月に報告書を提出。
- 08 全ジャスコ労働組合の協力で植物園の入口・南庄村の小学校を建設。
- 09 JFN（FMラジオのネットワーク）の取材。8名。ラジオ番組になる。
- 09 経団連主催の中国植林シンポジウム（東京）で、祁学峰と高見邦雄が報告。
- 10 武春珍を団長に技術者など5人を日本に招く。
- 11 大同県と陽高県の境界で地震が発生。高見が見舞い、帰途の日本大使館で報告する。

【2000年】

- 04 東北電力総連が緑の協力隊を派遣。以後、2012年まで、12次、延べ249名。
- 04 OFS（オリエンタルランド労働組合）が協力ツアーを派遣。2005年4月までに5次、延べ118名。
- 04 中国の環境NGO「自然の友」と協力し、北京林業大学の教学実験林場に「中日友誼林」を建設。国土緑化推進機構の依頼を受け実施。
- 07 環境林センターを20haまで拡大。利用計画を中国側と検討。
- 07 ダイハツハイキング倶楽部が協力団を派遣（12名）。
- 08 ワーキングツアーも参加して、地震被災地の大同県許堡村で小学校校舎の起工式。陽高県新団堡村でも建設が始まる。
- 08 ODA民間モニター10名、主催者等15名、計25名を大同に迎える。2006年8月にも15名と主催者等25名を迎える。
- 09 日中民間緑化協力委員会資金・日中緑化交流基金が発足し、緑の地球ネットワークへの助成が決まる。

【2001年】

- 03 橋本紘二の写真集『中国黄土高原－砂漠化する大地と人びと』（東方書店）を発刊。
- 04 橋本紘二の作品で写真展『中国黄土高原－砂漠化する大地と人びと』をJR京都駅で主催。その後、JR各社の協力を得て、大阪駅、広島駅、岡山駅、名古屋駅、東京駅で開催。
- 04 大同県聚楽郷で実験林場「カササギの森」の起工（約600ha）。大同市の冀明德副市長が出席して祝辞。
- 04 全国都市下水対策連絡協議会のツアー。2006年4月と2次、延べ34名。
- 09 1999年は「建国以来最悪」と言われる大旱魃だったが、2001年はそれよりひどく、「100年に1度」と言われる早魃だった。
- 09 高見が中国政府の友誼賞を受け、朱鎔基総理の会見。
- 11 祁学峰が共青团大同市委員会を離れ、南郊区の共産党副書記に。

【2002年】

- 02 10年の活動を記録したビデオ第3作「よみがえる森」が完成。
- 03 共青团の新任の書記のもとで、大同事務所が混乱に陥る。
- 04 (株)リコーが大同に緑化協力ツアーを派遣。8名。
- 04 共青团中央が主催する「中日環境保全協力論壇」で高見が意見発表。母なる河を守る行動国際協力賞を受賞し、胡錦濤国家副主席の会見。
- 06 ユニクトラベル派遣の植林最前線視察勉強隊を迎える。14名。
- 06 ジャスベル派遣のツアーを迎える。18名。
- 06 大阪府などによる豊かな環境づくり大阪府民会議から、おおさか環境賞・大賞を受賞。
- 09 大久保尚武会長を団長とする経団連自然保護協議会のミッションが大同を視察。13名。フジテレビが同行取材。
- 10 邢斌を団長とする訪日団9人を迎える。
- 10 日本の外務省、環境省、中国大使館などと中国環境保護総局が北京で共催した日中環境協力総合フォーラムで大同の協力事業を報告。
- 11 日中国交正常化30周年、JICA中国事務所成立20周年記念シンポジウム（北京、人民大会堂）で、パネリストとして報告。

【2003年】

- 03 共産党大同市委員会の決定で、カウンターパートが共青团大同市委員会から大同市総工会に交替。緑色地球ネットワーク大同事務所はその機構、メンバーごと総工会に移る。
- 04 朝日新聞社の「明日への環境賞」を受賞。
- 04 環境センターで「土壌浸透浄化法」による汚水処理施設が始動。日本大使館の目賀田周一郎公使が通水式に出席。高い効果に見学ラッシュが続く。その後、炭砒の坑道に溜まる地下水の浄化に取り組み、実用化寸前まで行ったが、炭砒が強制的に閉鎖されたため、中断せざるを得なかった。
- 05 協力事業の記録『はくらの村にアンズが実った』（高見邦雄著、日本経済新聞社）の刊行。
- 08 日本大使館が主催するプレスツアーが大同を訪れる。中国メディア7社、日本メディア3社が参加。15名。たくさんの記事になる。
- 10 橋本紘二作品による「黄土高原」写真展を東京駅で開催。
- 11 JICA中国事務所主宰の日中緑化協力ワークショップを迎える。57名。
- 11 炭砒の坑道汚水の浄化実験を開始。

【2004年】

- 04 共青团中央などが主催する「日中民間水論壇」に協力。大同の水事情について報告。

- 04 日中民間水論壇に参加した水ユースのメンバーを大同に迎える。19名。
- 04 中華全国総工会の徐錫澄副主席、総工会国際部の一行が大同を視察。
- 06 日立建機の中国法人からパワーショベルを贈られる。12人を大同に迎える。
- 06 第10回会員総会で吉良竜夫が記念講演。
- 07 加藤登紀子（国連環境計画親善大使）が大同を訪問。呉城村のアンズ園などを視察。環境林センターでミニコンサート。
- 09 摂南大学のワーキングツアー。7名。2006年8月までに2次、計15名。
- 11 鳥取大学乾燥地研究センターの視察団。10名を大同に迎える。
- 11 JICA 草の根技術協力事業を受託して第2の苗圃「白登苗圃」の着工。主に針葉樹の育苗を強化。

【2005年】

- 04 JICA 林業生態研修センターの視察団を迎える。7名。
- 04 『ぼくらの村にアンズが実った』の中国語版『雁棲塞北－来自黄土高原的报告』（李建華・王黎傑訳、中国国際文化出版社）の出版。北京で出版記念会。
- 06 国税庁長官の認定を受け、税制上の優遇を受ける認定特定非営利活動法人になる。その後2度の認定を受け、有効期間は2014年5月まで。
- 08 日中友好沙漠緑化協会（武村正義会長）の協力団を迎える。48名。2006年8月までに2次、計120名。
- 09 毎日国際交流賞（毎日新聞社）を受賞。

【2006年】

- 02 小川房人顧問が逝去。
- 04 国際交流サービス派遣のツアーを大同で迎える。24名。
- 04 大同事務所の侯喜顧問が逝去。
- 05 程永華（現駐日本中国大使）、許金平（現駐札幌総領事）など長春外国語学校の同級生が大同を訪れ、記念植樹。13名。2011年4月にも11名。
- 06 平山郁夫（日中友好協会会長）が大同の環境林センターを訪問。6名。
- 07 自治労大阪府本部の20人が大同を訪れ、実験果樹園「かけはしの森」の定礎式に参加。以後、2010年4月までに5次、延べ112名。
- 08 明星大学の植林ツアーを大同に迎える。10名。
- 08 大同の環境林センターで15周年記念式典。日本側はイオン労働組合の新妻健治委員長、日中友好沙漠緑化協会の武村正義会長など100名、中国側は豊立祥市長、馬福山副書記、李世傑総工会主席など400名が出席。高見邦雄に大同市栄誉市民の証書が手渡された。
- 09 宝塚グリーンライオンズクラブの協力団を大同に迎える。5名。

【2007年】

- 04 （株）東芝が中国黄土高原ツアーを派遣。15名。
- 07 JICA 草の根技術協力事業を受託し、南天門自然植物園の整備を本格化。
- 09 曾培炎副総理がこの協力事業について「中国政府と中国人民は高く称賛し心から感謝している」と、第2回日中省エネ環境保護フォーラム開幕の挨拶で述べる。
- 09 陳金宝（大同市総工会主席）を団長とする大同市総工会の訪日団9人を招く。

【2008年】

- 03 加藤千洋（朝日新聞編集委員）、山本勲（産経新聞編集委員）が相次いで大同を取材。大きな記事になる。
- 03 BS朝日が大同で開局8周年記念番組の取材に取り組む。宍戸開をナビゲーターに、計6回取材して、11月に2時間番組「よみがえれ！緑の大地－中国・黄土植林プロジェクト17年目の挑戦」を放映。
- 04 イオンワーカーズユニオン、サントリー労働組合が合同ツアーを派遣。2013年4月まで6次延べ149名を派遣。
- 04 （株）ローソンが緑の募金中国黄土高原ボランティアツアーを派遣（16名）。2008年4月とで2次、延べ32名。
- 09 専門家を派遣し南天門自然植物園で第1回の植生の継続調査を開始。
- 10 海外林業コンサルタンツ協会の視察。50名。
- 12 駐中国日本大使館の梅田邦夫公使の視察。2名。

【2009年】

- 03 樹木医の調査・交流ツアー。11名。
- 04 三洋電機労働組合が視察団を派遣。3名。
- 04 環境林センターの敷地を幅員56mの道路が分断。協力拠点に訪れた大同市の大変動の第一波。
- 10 JICA 草の根技術協力事業を受託して、「木炭と菌根菌の農林業への循環利用」を開始。
- 12 環境林センターが大同市の生態公園用地に含まれ、収用が決まる。大同事務所は代替地獲得のために懸命に

走り回る。

【2010年】

- 04 大同市の耿彦波市長と面会し、協力事業の経緯等を説明。市長はこの事業を高く評価して、代替地の無償提供を即断。
- 05 三洋電機労働組合が海外調査「中国・大同緑化プログラム」を派遣。21名。
- 05 ケイアイイーチャイナ西日本が派遣するツアーを受け入れ。40名。
- 07 大同市林業局・長城山林場と協議し、大同県周土庄鎮王千戸庄村の敷地を代替地として譲り受けることが決まる。伸び悩みのポプラ、小老樹の林だった。
- 12 代替地にあったポプラは全て伐られ、根も抜かれていた。

【2011年】

- 03 JICA 中国事務所主宰の NGO・有識者の視察を受け入れ。18名。
- 03 新拠点・緑の地球環境センターの建設に着工。整地、作業道、管理棟、井戸掘りなど基盤整備を開始。
- 04 第2の苗圃・白登苗圃と実験果樹園の一带に第工業団地が建設されることが判明。敷地内の苗等を2km離れた新設の緑の地球環境センターに移植する。
- 04 JICA 草の根技術協力事業のフォローアップが決まり、緑の地球環境センター内に生態植林見本園、有用植物見本園の建設に着手。
- 06 第17回会員総会で前中久行新代表を選出。立花吉茂は名誉顧問に。
- 07 駐中国日本大使館の丹羽宇一郎特命全権大使が大同のプロジェクトを訪れる。
- 09 大阪市 RR 厚生会ツアー。以後2013年9月まで3次延べ17名。
- 09 立花吉茂前代表が逝去。

【2012年】

- 01 20周年記念シンポジウム（東京）。パネリストに桜井尚武、松井孝典、高見邦雄。中国大使館の湯本淵公使参事官が挨拶。
- 04 高見が緑色中国年度焦点人物（全国緑化委員会・国家林業局など主催）にノミネートされ、ネット上の投票で25.3万票を獲得し、国際貢献賞に選ばれる。
- 06 国際造園研究センターのツアー受け入れ。4名。
- 08 大同の緑の地球環境センターで、20周年記念式典。前中代表とイオンリテールワーカーズユニオン、サントリ労働組合の代表が挨拶。大同市総工会の張志偉主席が大同での緑化協力があげてきた成果について数字をあげて詳細に基調報告。共産党大同市委員会の柴樹彬副書記が挨拶し感謝の意を表明。大同事務所に大同市労働コンクール委員会から「集体一等功」が贈られた。
- 09 日中国交正常化40年に際し、高見に外務大臣表彰。表彰式は尖閣諸島を巡る騒動で延期、2013年1月に駐中国日本大使館で単独で行われた。
- 10 トヨタ財団のアジア隣人プロジェクトの助成を受け、その一環として大同市での20年間の活動の振り返りと今後の方向を検討する。
- 11 20周年記念シンポジウム（大阪）を開催。パネリストは前中久行、高田直俊、只木良也。

【2013年】

- 03 20年の協力活動をまとめ、ビデオ『黄色い大地に広がる緑～草の根環境協力の20年』を制作。DVDで配布した。
- 03 駐中国日本大使館の尾池厚之公使（経済部長）の視察。2名。
- 03 中国林業科学研究所の陳幸良副院長、北京林業大学の趙廷寧、張建軍両教授が南天門自然植物園などを視察。高い評価を残し、陳幸良はその維持管理にいくつかの提案。
- 07 南天門自然植物園への入口に「国家級公益林保護区」の表示碑が靈丘县政府によって立てられる。

中国山西省における緑化協力事業の実績

年度	山林樹種		果 樹		苗圃など緑化拠点およびソフト面の協力		合 計			
	事業数	植栽数	面積 ha	事業数	植栽数	面積 ha	事業数	数量(本)	面積 (ha)	
1991				1	1,000	4.2		1	1,000	4.2
1992	2	250,700	70.8	1	20,000	85.0		3	270,700	155.8
1993	7	1,210,500	343.6	5	52,600	52.7	4 苗圃3か所への協力、宿泊所建設	12	1,263,100	396.3
1994	10	457,100	135.8	13	190,200	175.9	1 地球環境林センター	23	647,300	311.7
1995	15	1,118,800	489.3	8	84,000	95.7	4 地球環境林センター、生態観察区3か所	23	1,202,800	585.0
1996	12	1,325,800	466.6	10	69,900	98.5	1 地球環境林センター	22	1,395,700	565.1
1997	16	2,219,300	490.0	7	53,600	60.0	1 地球環境林センター	23	2,272,900	550.0
1998	7	957,000	191.0	7	47,850	47.0	5 センターと支所2か所、植物園、気象観測	14	1,004,850	238.0
1999	11	1,584,000	310.5	6	47,850	42.0	5 センターと支所3か所、植物園	17	1,631,850	352.5
2000	11	2,180,000	380.0	5	36,300	36.0	6 センターと苗圃、植物園など	16	2,216,300	416.0
2001	7	1,082,000	245.0	6	41,350	38.0	4 センターと苗圃、植物園、実験林場など	13	1,123,350	283.0
2002	7	1,169,000	275.0	7	35,475	43.0	4 センターと苗圃、植物園、実験林場など	14	1,204,475	318.0
2003	6	693,000	210.0	4	23,925	29.0	4 センターと苗圃、植物園、実験林場など	10	716,925	239.0
2004	7	776,200	290.0	6	52,800	64.0	5 センターと苗圃、植物園、実験林場など	12	829,000	354.0
2005	7	535,600	248.0	6	39,600	48.0	5 センターと苗圃、植物園、実験林場など	13	575,200	296.0
2006	4	290,350	132.5	6	27,225	33.0	5 センターと苗圃、植物園、実験林場など	10	317,575	165.5
2007	6	872,000	169.0	4	29,700	39.0	5 センターと苗圃、植物園、実験林場など	10	901,700	208.0
2008	7	319,600	88.0	5	18,560	25.5	5 センターと苗圃、植物園、実験林場など	12	338,160	113.5
2009	5	162,870	61.0	4	23,100	28.0	5 センターと苗圃、植物園、実験林場など	14	185,970	89.0
2010	4	167,000	63.0	3	18,150	22.0	4 植物園、白登苗圃、実験林場など	11	185,150	85.0
2011	6	260,700	79.0	1	6,600	8.0	3 環境センター、植物園、実験林場	10	267,300	87.0
2012	6	219,450	68.0	1	8,250	10.0	3 環境センター、植物園、実験林場	10	227,700	78.0
合計	163	17,850,970	4,806.1	116	928,035	1,084.5	79	293	18,779,005	5,890.6

山林樹種は、山地・丘陵など荒廃地の造林緑化に用いているもので、1. モンゴリマツ（樟子松）、2. アブラマツ（油松）が中心であり、そのほかに3. ポプラなどを使用している。ヤナギハグミ（沙棘ニグミ科の灌木）、ムレスズメ（榉ニグミ科の灌木）などを混植している。

果樹は、主として貧しい農村の教育条件の改善のために小学校付属果樹園を建設しているもので、主としてアンズを植えている。

注1) 現地に建設したプロジェクトが中心になっており、専門家・スタッフの派遣費用などは含まれていない。

注2) 表の右端の合計欄の事業数、数量、面積には、苗圃など緑化拠点およびソフト面の協力は含まれていない。

注3) 同じプロジェクトを数年間継続しているばあいもあり、事業数の合計はその延べ数になっている。

注4) 2001～2011年度は、実験林場「カササギの森」の植林本数と面積を「山林樹種」のなかに含んでいる。



発行者：認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク
大阪市港区市岡 1-4-24 住宅情報ビル 501 号 (〒 552-0012)
TEL. 06-6576-6181 FAX. 06-6576-6182
E-mail : gentree@s4.dion.ne.jp
URL <http://homepage3.nifty.com/gentree/>
http://www.k4.dion.ne.jp/~gentree/index_zh.html (中国語)

発行：2013 年 10 月

印刷：(株) 国際印刷出版研究所

この報告書はトヨタ財団 2012 年度アジア隣人プログラムの助成をうけて作成されました。